

京都府遺跡調査概報

第 27 冊

1. 橋爪遺跡第4次
2. 上中遺跡第5次
3. 丹波亀山城跡第2次
4. 興戸遺跡
5. 長岡京跡右京第281次
6. 長岡京跡右京第266次
7. 平安京左京北辺三坊五町

1988

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施し、その活用及び研究を行い、先人の遺した文化財を大切にすることを考え、普及育成に努めるべく、常に努力いたしております。当調査研究センターも発足して7年が過ぎ、年々事業量が増加していくなかで、常により精密な調査を心がけ、より正確な記録を作成し、これらを後世に伝えるように心がけています。そうした基本姿勢のもとで、昭和62年度に実施した発掘調査は、44件にのぼります。そのうち、本書に収めましたのは、橋爪遺跡第4次・上中遺跡第5次・丹波亀山城跡第2次・興戸遺跡・長岡京跡右京第281次・長岡京跡右京第266次・平安京左京北辺三坊五町、遺跡数にして7か所の発掘調査の概要です。その他の遺跡については、数冊の冊子にまとめています。

当調査研究センターでは、本書を含めて、「京都府遺跡調査報告書」・「京都府埋蔵文化財情報」も刊行しております。これらが関係各位の参考に供され、斯学向上の一助となれば幸いです。

なお、本書に掲載した調査の実施にあたりましては、発掘調査を委託された京都府教育委員会・郵政省近畿郵政局・京都府乙訓土木事務所・京都府企画管理部の方がたをはじめ、久美浜町教育委員会・京北町教育委員会・亀岡市教育委員会・田辺町教育委員会・長岡京市教育委員会・京都市埋蔵文化財調査センター・財団法人京都市埋蔵文化財研究所等の関係諸機関の御協力を受けただけでなく、酷暑・極寒の中で多くの方がたが熱心に作業に従事していただきましたことを明記して、これらの方がたに厚くお礼申し上げます。

昭和63年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長 福山敏男

凡 例

1. 本冊は、下記に係る発掘調査の概要報告書である。

1. 橋爪遺跡第4次
2. 上中遺跡第5次
3. 丹波亀山城跡第2次
4. 興戸遺跡
5. 長岡京跡右京第281次
6. 長岡京跡右京第266次
7. 平安京左京北辺三坊五町

2. 各遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は、下表のとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 間	経 費 負 担 者	執 筆 者
1. 橋爪遺跡第4次	熊野郡久美浜町橋爪	昭和162. 7. 29 } 昭和162. 9. 12	京都府教育委員会	細川 康晴
2. 上中遺跡第5次	北桑田郡京北町下弓削	昭和162. 8. 3 } 昭和162. 10. 5	京都府教育委員会	岡崎 研一
3. 丹波亀山城跡第2次	亀岡市荒塚町	昭和162. 8. 3 } 昭和162. 9. 28	京都府教育委員会	森下 衛
4. 興戸遺跡	綴喜郡田辺町興戸犬伏5-3	昭和162. 8. 10 } 昭和162. 10. 13	郵政省近畿郵政局	伊賀 高弘
5. 長岡京跡右京第281次	長岡京市友岡一丁目1-1	昭和162. 10. 9 } 昭和162. 11. 6	京都府教育委員会	石尾 政信
6. 長岡京跡右京第266次	長岡京市開田三丁目	昭和162. 6. 8 } 昭和162. 7. 23	京都府乙訓土木事務所	竹井 治雄
7. 平安京左京北辺三坊五町	京都市上京区烏丸通中立売通上ル龍前町590の1	昭和161. 10. 1 } 昭和162. 6. 6	京都府企画管理部	伊野 近富

3. 本冊の編集には、調査第1課資料係が当たった。

目 次

1. 橋爪遺跡第4次発掘調査概要	1
2. 上中遺跡第5次発掘調査概要	7
3. 丹波亀山城跡第2次発掘調査概要	19
4. 興戸遺跡発掘調査概要	41
5. 長岡京跡右京第281次発掘調査概要	57
6. 長岡京跡右京第266次発掘調査概要	61
7. 平安京左京北辺三坊五町発掘調査概要	75

挿 図 目 次

橋爪遺跡第4次

第 1 図	調査地位置図	2
第 2 図	トレンチ配置図	3
第 3 図	出土遺物実測図	4

上中遺跡第5次

第 4 図	周辺の遺跡分布図	8
第 5 図	調査地位置図	9
第 6 図	Bトレンチ平面図	11
第 7 図	S B 01実測図	12
第 8 図	S K 06実測図	14
第 9 図	出土遺物実測図	15

丹波亀山城跡第2次

第 10 図	調査地周辺遺跡分布図	20
第 11 図	丹波亀山城復元図	21
第 12 図	調査地位置図	23
第 13 図	土層断面模式図	24
第 14 図	調査地平面図(下層遺構面)	25
第 15 図	竪穴式住居跡(S H 30)・掘立柱建物跡(S B 28)平面図	26
第 16 図	竪穴式住居跡(S H 31)・掘立柱建物跡(S B 29)平面図	26
第 17 図	調査地平面図(上層遺構面)	28
第 18 図	出土遺物実測図(1)	31
第 19 図	出土遺物実測図(2)	32
第 20 図	出土遺物実測図(3)	33
第 21 図	出土遺物実測図(4)	35

興戸遺跡

第 22 図	興戸遺跡および周辺遺跡分布図	42
第 23 図	調査地位置図	43
第 24 図	トレンチ土層断面図	44

第 25 図	トレンチ配置図	47
第 26 図	遺構実測図(I トレンチ部分)	48
第 27 図	S K 8701 実測図	48
第 28 図	遺構実測図(Ⅲ トレンチ)	49
第 29 図	S K 8702 遺物出土状況図	49
第 30 図	S K 8702 断面図	49
第 31 図	出土遺物実測図	51
第 32 図	石庖丁実測図	53
第 33 図	興戸遺跡における花粉化石群集変遷図	54

長岡京跡右京第281次

第 34 図	調査地位置図	57
第 35 図	調査地平面図	59
第 36 図	南壁断面図	59

長岡京跡右京第266次

第 37 図	調査地位置図	61
第 38 図	トレンチ配置図	62
第 39 図	各トレンチ検出遺構実測図	63
第 40 図	埴輪実測図および拓影	66
第 41 図	家形埴輪実測図	68
第 42 図	各種形象埴輪実測図	70

平安京左京北辺三坊五町

第 43 図	調査地位置図	76
第 44 図	平安京条坊図	77
第 45 図	調査地平面図(主要遺構)	79
第 46 図	土層断面図	81
第 47 図	井戸 S E 45 実測図	83
第 48 図	井戸 S E 45 下部実測図	85
第 49 図	井戸 S E 45 出土石鈿帯	87
第 50 図	S D 353 出土製埴土器	88
第 51 図	S K 456・S E 45 出土遺物実測図	89
第 52 図	S E 45 出土遺物実測図	90
第 53 図	S E 45 出土遺物実測図	91

第 54 図	S K 672・S K 692・S D 353 出土遺物実測図	92
第 55 図	S D 215・S D 219・S K 757 出土遺物実測図	93
第 56 図	S K 852・S K 512・S K 599・S K 748・S E 52 出土遺物実測図	94
第 57 図	S E 52 出土遺物実測図	95
第 58 図	S K 400・S K 1012・S K 503 出土遺物実測図	96
第 59 図	S K 300 出土遺物実測図	97
第 60 図	S K 303 出土遺物実測図	98
第 61 図	S K 300・S E 39 出土遺物実測図	99
第 62 図	S D 215・4 トレンチ 荒掘中出土遺物実測図	100
第 63 図	S K 303・S D 590 出土信楽焼	101
第 64 図	S K 233 土器出土状態	102
第 65 図	弥生土器(1)	104
第 66 図	弥生土器(2)	105
第 67 図	弥生土器(3)	106
第 68 図	石器実測図	107
第 69 図	敲石・磨石実測図	109
第 70 図	石皿実測図	110
第 71 図	石皿・磨石分布状況図	111
第 72 図	S E 45 出土軒丸瓦実測図	113
第 73 図	各種軒瓦実測図	114
第 74 図	各種金箔瓦実測図	115
第 75 図	平瓦・丸瓦実測図	116
第 76 図	四行八門の制と調査地	118
第 77 図	遺構変遷図	120

図版目次

橋爪遺跡第4次

図版第1 (1)1 トレンチ全景(南から) (2)2 トレンチ全景(北から)

上中遺跡第5次

図版第2 (1)A・B トレンチ調査地全景(南西から)

(2)A トレンチ掘削状況(南東から)

図版第3 (1)B トレンチ遺構検出状況(南東から) (2)S B01全景(南西から)

図版第4 (1)C トレンチ調査地全景(北東から) (2)C トレンチ全景(北西から)

図版第5 (1)S K06炭層検出状況(北西から) (2)S K06完掘状況(北西から)

図版第6 出土遺物

丹波亀山城跡第2次

図版第7 (1)調査地調査前全景(西から) (2)調査地調査前全景(東から)

図版第8 (1)調査地全景(上層遺構面・東から)

(2)調査地西半部遺構検出状況(上層遺構面・東から)

図版第9 (1)調査地全景(下層遺構面・西から)

(2)調査地全景(下層遺構面・東から)

図版第10 (1)竪穴式住居跡(S H30)全景(北から)

(2)竪穴式住居跡(S H31)全景(北から)

図版第11 出土遺物

興戸遺跡

図版第12 (1)I トレンチ全景(北から) (2)I トレンチ遺構検出状況(東から)

図版第13 (1)S K8701全景(西から) (2)S K8701下層遺物出土状況(西から)

(3)S K8702全景(東から) (4)S K8702㊸層遺物出土状況

図版第14 出土遺物

図版第15 花粉顕微鏡写真

長岡京跡右京第281次

図版第16 (1)調査地全景(西方から) (2)南側壁断面

長岡京跡右京第266次

図版第17 (1)調査地全景(西から) (2)II トレンチS D01と埴輪出土状況(西から)

- 図版第18 (1)V トレンチ全景(東から)
(2)V トレンチ S D02と埴輪出土状況(西から)

図版第19 出土遺物(1)

図版第20 出土遺物(2)

平安京右京北辺三坊五町

図版第21 (1)第2 トレンチ調査前風景(西から)

(2)第1 トレンチ遺構検出状況(南から)

図版第22 (1)第2 トレンチ遺構検出状況(西から)

(2)第3 トレンチ遺構検出状況(西から)

図版第23 (1)第4 トレンチ遺構検出状況(南から)

(2)第4 トレンチ発掘状況(南東から)

図版第24 (1)S D35検出状況(南から) (2)S K169検出状況(南から)

図版第25 (1)S E45検出状況(東から) (2)S E81検出状況(西から)

図版第26 (1)第2 トレンチ西部検出状況(北から) (2)S D891検出状況(東から)

図版第27 (1)S X835検出状況(西から) (2)S X835遺物出土状況(西から)

図版第28 (1)S K456検出状況(南から) (2)S K503検出状況(南から)

図版第29 出土遺物(1)

図版第30 出土遺物(2)

付 表 目 次

丹波亀山城跡第2次

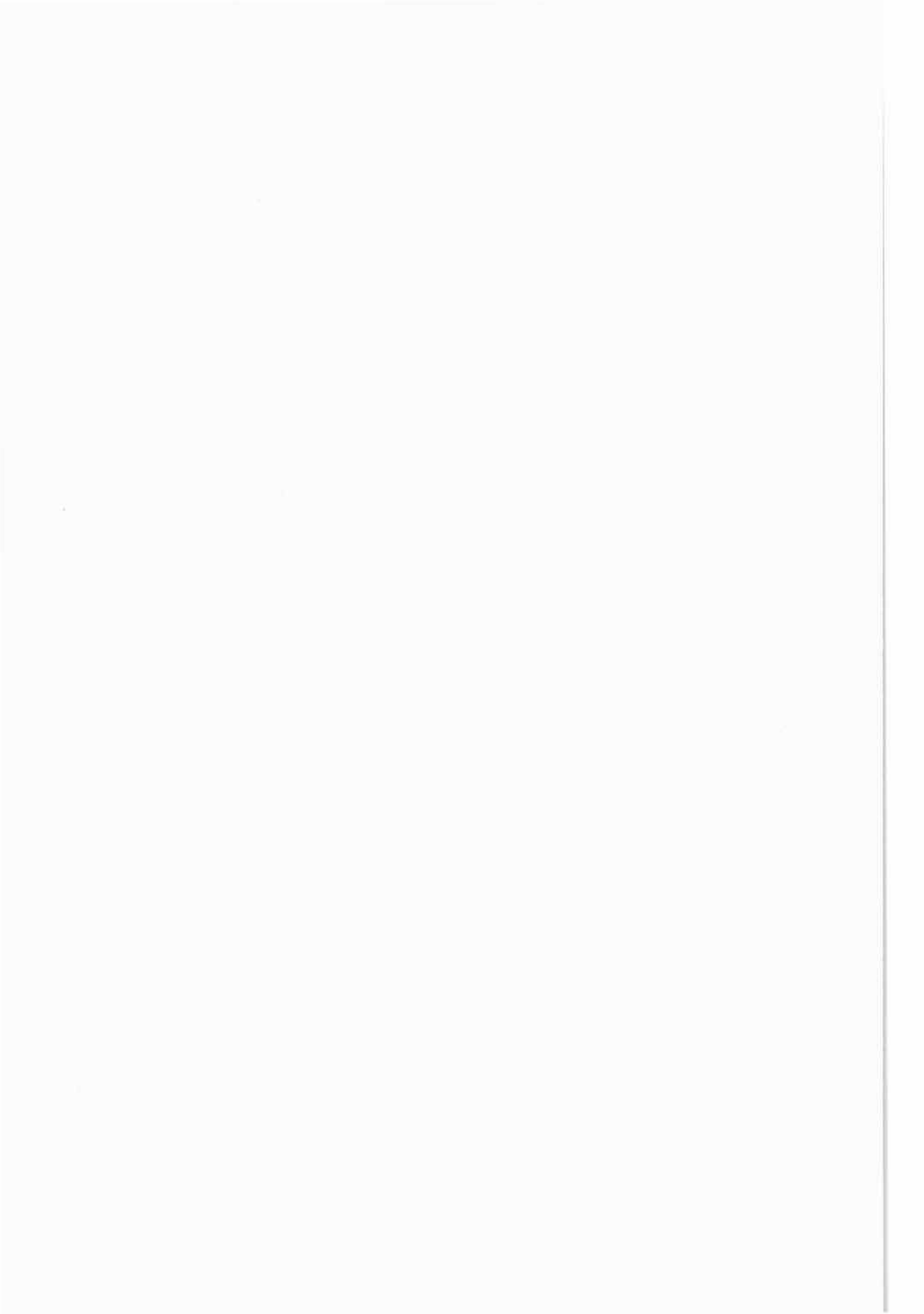
付表 1	竪穴式住居跡一覧表	27
付表 2	古墳時代掘立柱建物跡一覧表	27
付表 3	古墳時代土塚一覧表	27
付表 4	奈良時代掘立柱建物跡一覧表	29
付表 5	江戸時代土塚一覧表	30

長岡京跡右京第266次

付表 6	盾形埴輪観察表	71
付表 7	その他の形象埴輪観察表	71

平安京左京北辺三坊五町

付表 8	S E 45出土遺物集計表	88
付表 9	成分分析の結果	117
付表 10	遺物観察表	124



1. 橋爪遺跡第4次発掘調査概要

1. はじめに

この調査は、京都府熊野郡久美浜町橋爪^{はしづめ}小字矢須田^{やすだ}85番地に所在する京都府立久美浜高等学校の校舎改築工事に伴うものである。橋爪遺跡は、大正12年に遺物が採集されて以来、昭和42年の第1次調査に続く3次の調査により、弥生時代中期後半～古墳時代前期にかけての、川上谷川水系はもとより丹後地方を代表する拠点集落であると考えられている。昭和42年の第1次調査では、上下2層に分かれる遺物包含層から、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての遺物が多量に出土し、以後の調査に遺構の確認が期待された。続く第2次調査(昭和55年)では、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての3時期にわたる遺構を検出した。弥生時代中期後半～後期中頃の土器が、同一遺構内で層的に確認されるという良好な出土状況を示し、丹後地方における当該時期の土器編年の指標となっている。^(注1)
さらに、第3次調査(昭和56年)では、多量の木製品が出土した点が注目される。^(注2)
^(注3)

以上の調査結果を踏まえ、今回の第4次調査は、工事か所の管理棟部分と渡り廊下部分について、京都府教育庁管理課から文化財保護課に対して校舎建築工事計画に係わる埋蔵文化財の取り扱いについて事前協議がなされた。その結果、上記2か所について、工事に先立ち発掘調査を行い、その記録を作成し、合わせてその保存を図るための資料を作成することが決定された。発掘調査は、京都府教育委員会の依頼を受けて、昭和62年7月29日から9月12日までの約1か月半にわたり、調査第2課調査第1係長辻本和美、同調査員細川康晴が担当した。調査面積は約304m²である。なお調査にあたっては、久美浜町教育委員会、府立久美浜高等学校、京都府教育庁文化財保護課、地元各地区はじめ多くの方々の御協力を得た。特に、地元有志及び学生諸氏においては、それぞれ作業員、調査補助員として、炎天下の作業に従事していただいた。^(注4)また、このほか、直接現地に足を運ばれ、御教示、御指導をいただいた方々に対して、記して感謝の意を表する。^(注5)なお、発掘調査にかかる経費は、全額京都府教育委員会が負担した。

2. 位置と環境

橋爪遺跡の立地する地形については、前述の過去の調査及び地形観察から、次のようなことがわかっている。久美浜町には、佐濃谷川、川上谷川、久美谷川の3つの河川によって形成された3つの谷平野が存在する。橋爪遺跡は、このうち、最も安定し、町内最大の

谷平野である川上谷川流域に位置する。遺跡は、川上谷川が形成する段丘面上にあたり、海拔は約5～6mである。久美浜高校建築にあたって、1つの谷をはさみ、西へのびる2つの丘陵端部を切土、盛土により平坦面を造成しており、旧状は失われている。しかし、丘陵末端から段丘面縁辺に至るまで遺物の散布が認められ、範囲は、段丘面一帯に広がるものと推察されている。

ここで周辺の遺跡についてみると、川上谷川下流域では、右岸の橋爪遺跡が拠点集落であり、弥生時代後期になると、隣接する海士遺跡^(注6)など谷水田の開発を前提とした小規模集落が出現することは、一般的傾向であると言える。そして、古墳時代前期末葉～中期になると、河口付近に甲山岩ヶ鼻古墳が築造される。一方、中流域では、やはり弥生時代中期に右岸の芦原遺跡が営まれ始めるが、詳細は明らかではない^(注7)。しかし、隣接する島茶白山古墳→芦高神社古墳と続く首長墓の系譜は、下流域を上回る造墓基盤の安定性を示すものと見ることができよう^(注9)。一方、中流域左岸では、品田に弥生時代～古墳時代前期に権現山古墳が形成された。この墳墓は、近年調査され、周辺の住居域の再検討が必要となった。さらに、川上谷川の支流である伯耆谷川により形成された伯耆谷は、環刀大刀の出土で著名な湯舟坂2号墳^(注10)をはじめ、後期古墳の密集するところとして著名である^(注11)が、弥生時代後期にさかのぼる与一谷遺跡などの存在も知られ、独自に連続的に発展した谷平野であると捉えることもできる。他に、近年、遺跡の空白地であった伯耆谷に隣接する新庄地区で、古墳時代集落、墳墓の調査が相ついで^(注12)している。



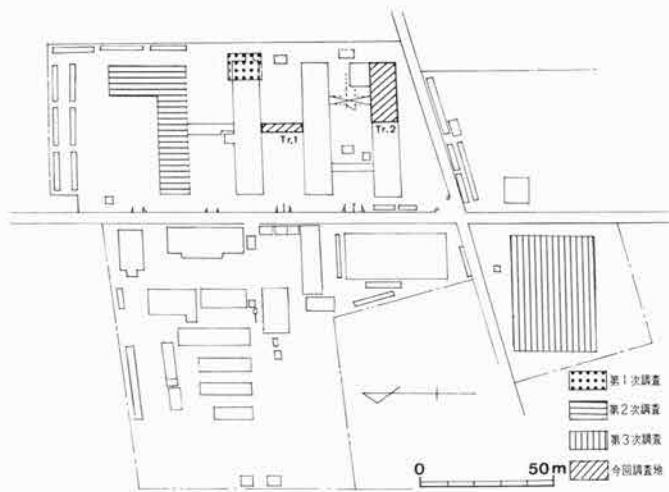
第1図 調査地位置図(1/50,000)

3. 調査の経過と概要

今回の調査は、前述のように、橋爪遺跡の第4次調査であり、校舍改築予定部分にトレンチを設定し調査を行った。調査地は、2か所にわたり、便宜上、第2棟と第3棟を接続する渡り廊下部分に設定したトレンチを第1トレンチ、第1棟東側に隣接する管理棟部分に設定したトレンチを第2トレンチと呼称した。以下、各トレンチの調査経過と概要について述べる。

調査は、上記2か所について、旧校舍解体後、重機による排土除去作業を行った。この際、両トレンチにおいて、灰色粘質土中から若干の遺物が出土したので、以下を人力によ

り掘削した。第1トレンチは、第1次調査地西16mに隣接するため、多量の遺物が出土するだけでなく、湧水のため、調査は、困難を極めるものと推察された。地表下0.5m付近から旧渡り廊下の廃材の撤去をするかたわら遺物の採集に務めたが、近・現代の遺物がすべて



第2図 トレンチ配置図

であり、攪乱は0.5m付近まで及んでいた。攪乱土、廃材の撤去を終え、前述の灰色粘質土の掘削にかかったが、この遺物包含層と思われた土層は、実は、近代攪乱土であり、下層から、大正時代のコンクリート床が出現し、旧校舎の攪乱は、予想外に深く及んでいることが確認された。このコンクリート床を破壊すると、暗灰色粘質土中から弥生時代中期後半の土器を中心とする遺物がややまとまって出土し、遺物包含層であることを確認したが、弥生時代後期、古墳時代中期の土器もごく少量ではあるが含まれ、一時期の単純文化層ではないことが明らかとなった。その下層を一部掘削したが、層は、ボーリングの結果によると、深さ5~6mの砂、シルトの互層である。一方、第2トレンチでは、第1トレンチの調査と併行して調査を行ったが、トレンチのほぼ全面に花崗岩風化土の地山が露出し、旧校舎建築時に、すでに著しい削平を受けていることが明らかとなった。

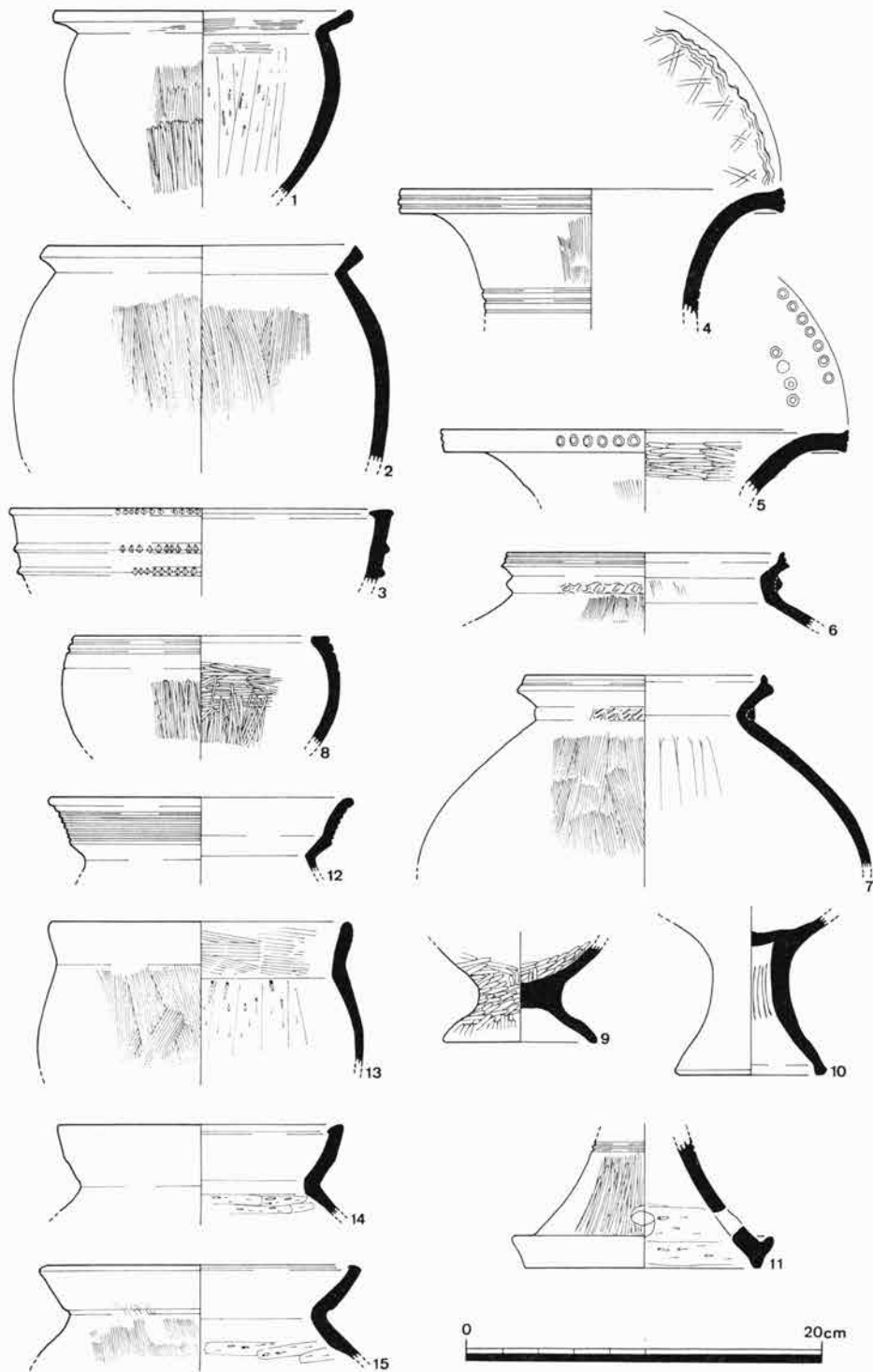
両トレンチとも、顕著な遺構は確認されず、ごく少量の遺物を採集したにとどまった。

4. 出土遺物

遺物の出土状況は、3項で記したように、同一時期の文化層に限定されるものではない。出土遺物は、整理箱約3箱であるが、その大半が第1トレンチの遺物である。今回は、これらのうち、最も出土量の多い第1トレンチの弥生土器を中心に報告する。

第1トレンチの弥生土器 第1トレンチの弥生土器のうち、数量的に多数を占めるのは凹線文を施すものである。これら一群の土器に相前後して、単純「く」の字口縁の甕(1・2)や擬凹線文を施すもの(12)などが混在している。

凹線文を施さない一群である単純「く」の字口縁の甕には、口縁端部を丸くおさめるも



第3図 出土遺物実測図

の(1)と端面をもつものがある。外面調整はハケであり、口縁部のみ横ナデする。1の体部内面下半にはヘラケズリが認められる。3は、刻み目突帯を有する鉢である。

次に、凹線文を施す一群には、器種として広口壺(4)、短頸壺(6・7)、鉢(8)、脚(16)などがある。広口壺は、口縁端面及び頸部に、短頸壺・鉢は、口縁部に、それぞれ1～3条の凹線文を施す。広口壺は、口縁部が外反し、端部を上下に拡張して端面をつくり、そこに凹線文を施すものである。頸部にも凹線文を施すが、口縁部のものに比べ、極めて細くて浅く、凹線文の退化傾向であるとも捉えられる。また、口縁部内面に、櫛描波状文と2条の直線文が交差する文様(格子状文)を連続的に施していることは注意される。また、頸部は欠損しているものの、口縁部に加飾する壺として5がある。口縁端面及び内面に竹管文を施す。

短頸壺には、短く外反する口縁端面に凹線1～2条を施し、頸部に貼り付け突帯を有するヘラ圧痕によるもの(7)と指頭圧によるもの(6)がある。

ほかに、鉢の脚部と思われるものに9・10がある。9は無文であり、10は、凹線を施す。

擬凹線を施すものには12があり、外反する口縁外面に6条の擬凹線を施す丹後の弥生時代後期後半に通有の甕である。11は鉢の脚部と思われるが、同一時期のものと考えられる。

古墳時代の土器としては、13・14・15がある。13は在地の甕で、内面は肩部までヘラケズリする。14・15は、布留式の甕である。口縁端部の処理については、内面上方に肥厚させるもの(15)、内面に強く内傾させるもの(15)がある。また、頸部の屈曲度も、端部の処理に対応し、15では、明瞭な頸部を有し、14では、「く」の字形である。

なお、土器の胎土、焼成、色調について一括して報告すると、弥生土器では、そのほとんどが、淡乳黄灰色の長石、石英、雲母粒を含み、焼成良好である。胎土が異なるものには12があり、淡褐色を呈する極めて胎土精良、焼成堅緻のものである。

古墳時代の土器は、量的に少ないが、13は、胎土が他のものと異なり、淡褐色を呈する。

5. ま と め

今回の調査は、橋爪遺跡の4度目の調査として、遺跡の範囲確認と、これまで確認された遺物包含層に対する生活面、遺構の検出を目的としたが、旧校舎建築時に著しい削平、攪乱を受けていることが明らかとなった。第1トレンチから出土した遺物は、そのほとんどが凹線文を主体としていることから、弥生時代中期後半の土器と考えられる。また、若干ではあるが、擬凹線を施す弥生時代後期後半の土器、布留式甕も出土しており、全体として、出土遺物の時期幅は、弥生時代中期後半から、古墳時代中期に及んでいる。しかし、これらの土器は、型的に連続性を示すものではなく、むしろ断絶している。包含層から

の土器の出土は、周辺に集落跡の存在を推定させるが、今後の調査では集落跡の確認とともに、この断絶性が集落内での住居域の変化なのか、集落自体の移動であるのか、あるいは、集落規模の変化であるのかなど、種々の問題が提起される。今後の調査に期待したい。

(細川康晴)

- 注1 高橋美久二「橋爪遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1968)』京都府教育委員会) 1968
- 注2 石井清司他「橋爪遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-2)』京都府教育委員会) 1980
- 注3 戸原和人「橋爪遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第4冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982
- 注4 調査参加者(敬称略・順不同)
作業員 井藤ふゆ・稲垣正男・今井勝治・岡田福蔵・小森勝吉・小森誠一郎・田中誠一・吉岡之郎
補助員 奥 博嗣・小比賀昭人・久乗まや・四野宮洋子・中野智章・古田麻美・穂積裕昌・山下恵里
- 注5 協力者 安藤信策・岩崎浩一・岡田晃治・久保哲正・林日佐子・安田 章
- 注6 梅原末治「海部村石器時代遺跡」(『京都府史蹟勝地調査會報告』2) 1920
- 注7 広瀬和雄他「丹後地域の古式古墳」(『同志社考古』10) 1973
- 注8 梅原末治「芦原ノ一古墳ト発見ノ石剣」(『京都府史蹟勝地調査會報告』4) 1922
- 注9 注7に同じ
- 注10 久保哲正他『権現山古墳発掘調査概報』(京都府久美浜町文化財調査報告第9集 久美浜町教育委員会) 1984
- 注11 奥村清一郎他『湯舟坂2号墳』(京都府久美浜町文化財調査報告第7集 久美浜町教育委員会) 1983
- 注12 アバ田古墳群, アサバラ遺跡(62年度当センター調査), 崩谷古墳群(62年度京都府教育委員会調査)

2. 上中遺跡第5次発掘調査概要

1. はじめに

京都府教育委員会は、府立北桑田高等学校校内に管理棟及び渡り廊下の建設を予定した。しかし、高等学校の周辺には弥生時代から鎌倉時代にかけての複合遺跡である上中遺跡が広がっているため、工事に先立ち調査を実施したものである。

上中遺跡は、京都府北桑田郡京北町下弓削から下中にかけて所在する集落遺跡である。当調査研究センターでは、昭和58年度から昨年度にかけて、高等学校校舎の増改築工事に伴う発掘調査を実施してきた。その結果、高等学校西側の丘陵裾部には、弥生時代末期から古墳時代前期にかけての川跡を、高台からは古墳時代前期の柱穴状遺構と土壇を検出した。また、この高台より一段低い所には、墓の可能性の高い土壇38基を検出している。

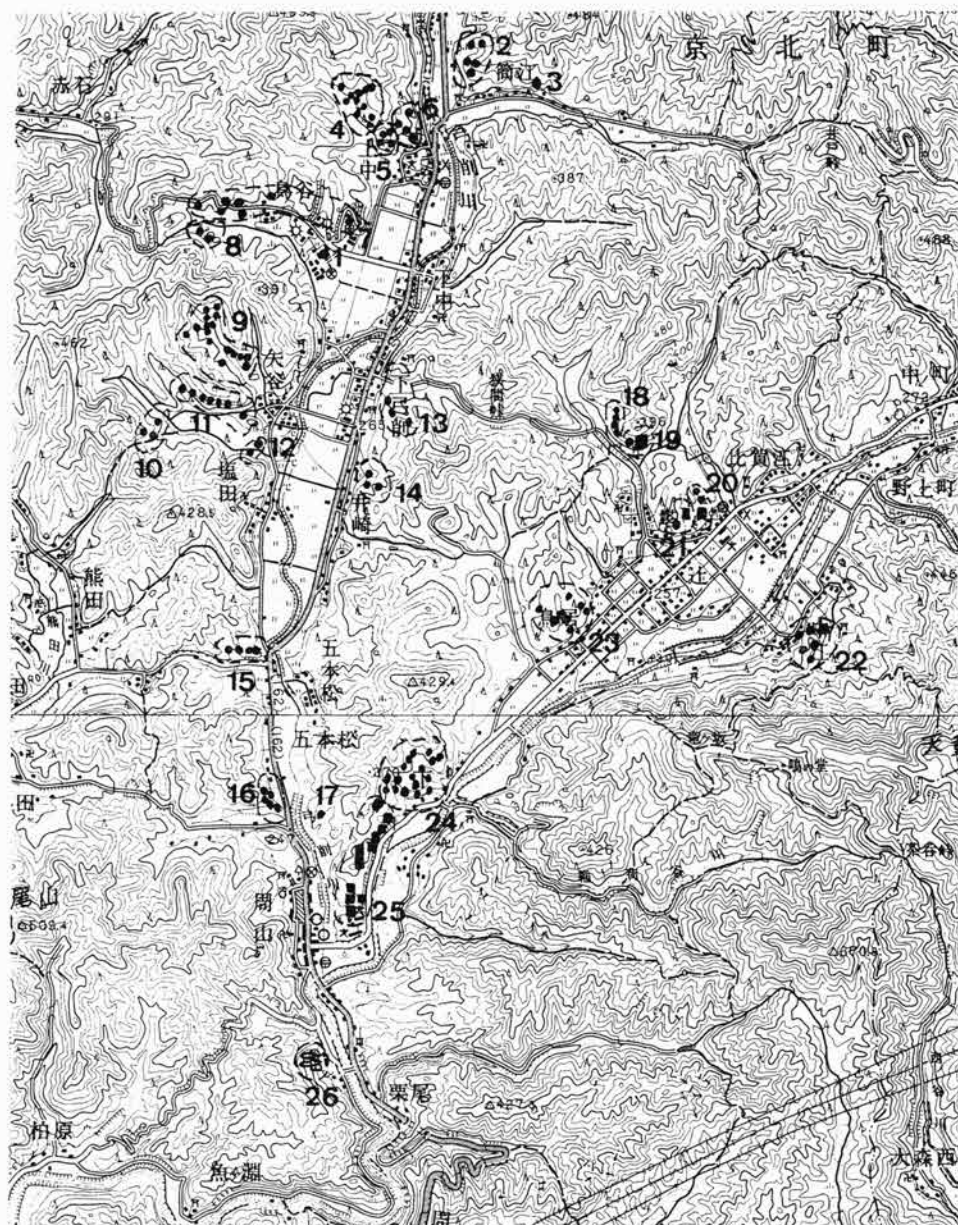
今回の調査地は、丘陵裾部を流れる川跡と墓の可能性のある土壇との間の高台である。この高台は、東南方向に開けており生活するにあたり最適の地と思われ、集落跡の検出が期待された。

調査は、京都府教育委員会から依頼を受け、昭和62年8月3日～10月5日まで行い、当調査研究センター調査第2課調査第2係長水谷寿克・調査員岡崎研一が担当した。その間、調査補助員・整理員として有志学生^(注1)の協力を受けた。また、調査にあたっては、京北町教育委員会・府立北桑田高等学校・地元各地区をはじめ多くの方々の協力を得た。記して感謝の意にかえたい。

なお、調査にかかる経費は、全額、京都府教育委員会が負担した。

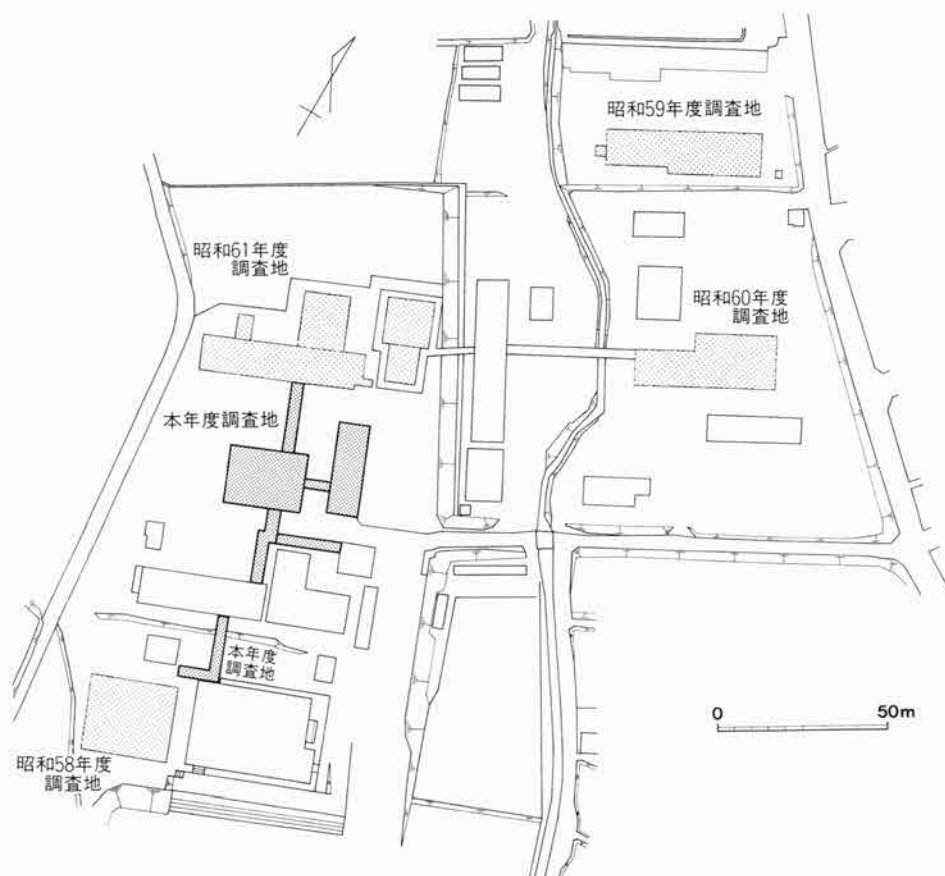
2. 位置と環境

京北町は、京都府のほぼ中央に位置する。大堰川の上流一帯に広がり、標高700m前後の山々に囲まれた山間の町である。町の中央を大堰川と弓削川が南流し、中心である周山で合流して、大堰川として亀岡盆地に向かって西流する。集落は、主に大堰川と弓削川沿いの狭小な平地にある。大堰川沿いに遡ると左京区花背に通じ、弓削川沿いに北上すると若狭小浜に至る。現在、弓削川沿いには周山街道が通じている。また、町域の約9割は山地で、森林資源に恵まれたところでもある。古代では、長岡京や平安京の造営に当地の材木が利用され、以後も重要視された。これらの運搬として行われた大堰川の筏流しが、後世まで隆盛をきわめることになる^(注3)。以下、京北町内の各遺跡について概観する。



第4図 周辺の遺跡分布図(1/50,000)

1. 調査地
2. 岩ヶ鼻古墳群
3. 筒江古墳
4. 宮の谷古墳群
5. 八幡宮裏山古墳群
6. 弾正古墳群
7. 鳥谷古墳群
8. ふくがなる古墳群
9. 矢谷古墳群
10. 塩田古墳群
11. 矢谷奥古墳群
12. 塩田口古墳群
13. 狭間谷古墳群
14. しが田古墳群
15. 出口古墳群
16. 大年古墳群
17. 大年古墳
18. 三宅谷古墳群
19. 塔村古墳群
20. 比賀江古墳群
21. 愛宕山古墳群
22. 中江古墳群
23. 鳥居古墳群
24. 折谷古墳群
25. 周山古墳群
26. 周山窯跡群



第5図 調査地位置図

京北町における最古の出土遺物は、周山瓦窯跡で発見された旧石器時代後期のスクレーパー・剥片などである。

縄文時代の遺跡は発見されていないが、弥生時代の遺跡は、京北町宇津・上中・殿橋で発見されている。また、文久元(1861)年に京北町下弓削で出土したと伝える銅鐸も知られている。

古墳時代になると、大塚川・弓削川沿いの丘陵部に多くの古墳が築造される。調査地周辺では、筒江に円墳5基の岩ヶ鼻古墳群と円墳4基の弾正古墳群が、上中に円墳4基の八幡宮裏山古墳群と円墳7基の鳥谷古墳群が、また、下弓削には円墳2基のふくがなる古墳群、円墳16基からなる矢谷古墳群と円墳7基からなる矢谷奥古墳群がある。これらの大半は、横穴式石室を主体部とし、径10~20mの古墳である。京北町域内には、現在円墳120基・方墳13基の総数133基の古墳が存在する。

古代寺院の遺跡には、昭和22年に石田茂作氏らによって調査された周山廃寺跡がある。^(注4)

出土した軒瓦から創建は7世紀中葉と推定され、平安初期まで存続したと考えられている。この瓦の供給地である周山瓦窯跡は、4基の窯跡と灰原を検出し、他に2基窯跡が存在すると推測されている。主として奈良時代の瓦類が出土したが、須恵器も出土しており、瓦陶兼業窯であることが判明している。^(注5)

なお、京北町の歴史時代の研究成果として次のことが判明している。

室町時代中期頃より美濃国土岐氏の一族宇津氏が勢力を振るい、弓削・山国・野々村・細川などの荘園を侵略するようになる。永禄12(1569)年織田信長は山国庄・細川庄などに対する宇津氏の「押妨」を停止するよう命ずるが、宇津氏はこれに应ぜず、信長の命を受けた明智光秀が天正7(1579)年に宇津氏を滅亡させることになる。以後、天正10年まで亀山城および周山城は、光秀の統治下に入る。^(注6)

3. 調査概要

上中遺跡の発掘調査は、昭和58年度から行っており、今年度で5年目になる。各年度の調査概要は、次のとおりである。

第1次調査(昭和58年度) 現在の格技場が調査地である。弥生時代末期～古墳時代前期にかけて流れていた川跡、古墳時代前期の柱穴状遺構と土塚を検出した。

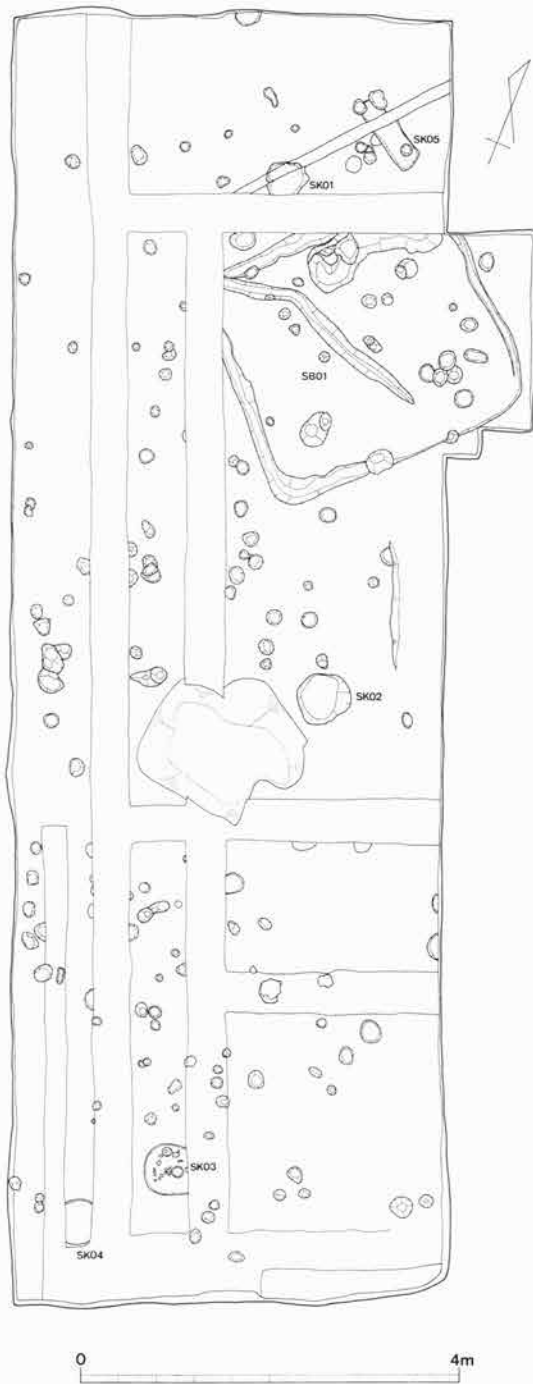
第2次調査(昭和59年度) 現在の林業科の校舎が調査地である。時期不明の自然流路と溝2条を検出した。この付近が上中遺跡の北端と考えられている。

第3次調査(昭和60年度) 現在の林業科実習棟が調査地である。古墳時代前期の土塚38基を検出した。これらの土塚の性格は明確ではないが、土塚墓の可能性はある。

第4次調査(昭和61年度) 現在の図書室と新校舎が調査地である。時期不明の土塚状遺構1基と柱穴状遺構を検出した。

今回の調査地は、管理棟建設予定地(第4次調査地南側)と、渡り廊下建設予定地(第1次調査地北側)である。第4次調査で高等学校は、丘陵先端部を削平し低いところを土盛りし、その上に建てられていたことが確認されている。特に、第4次調査地から今回の調査地である管理棟建設予定地にかけては、丘陵部を大きく削平しているところである。このことから、当初は、管理棟建設予定地東側に集落遺跡が存在するだけでなく、削平した丘陵には古墳が存在した可能性もあるため、古墳の痕跡が存在するかも知れないと考えられた。渡り廊下建設予定地では、第1次調査で検出した川跡の延長が見つかるのではないかと思われた。

調査は、管理棟建設予定地にA・Bトレンチを、渡り廊下建設予定地にCトレンチを設定し、A→B→Cトレンチの順で調査を行った。



第6図 Bトレンチ平面図

Aトレンチは、重機によるバラス層の除去から始めた。2～5cmのバラス層下は岩盤になり、遺構は存在しなかった。Aトレンチ東側で、断面観察のための深掘りを行ったところ、深掘り両側でわずかに黒色土が見られた。これは、Bトレンチに、当初の予想以上の遺構が存在すると思われた。

Bトレンチでは、重機でバラス層を除去したところ、トレンチ一面が遺物を包含した黒色土となり、黒色土を縦横に旧校舎の基礎が巡っていた。遺構面を知るため、基礎を掘り起こしその断面を観察した上で、黒色土を掘り下げた。黒色土からは古墳時代の須恵器片や土師器片が出土した。遺構面まで掘り下げたところ、竪穴式住居跡1基・土壇5基・柱穴多数・溝2条を検出した。これらの遺構は、高等学校西側から北方にのびる丘陵東側斜面の緩やかな高台に位置している。丘陵尾根筋は、第4次調査地付近をのびていた。

Cトレンチは、校舎からトイレまでの渡り廊下部に設定したトレンチである。バラス層を除去したところ、校舎側から土壇1基とトイレ側から東西にのびる溝と思われる遺構を検出した。土壇周辺および床面を精査すると、柱穴が見

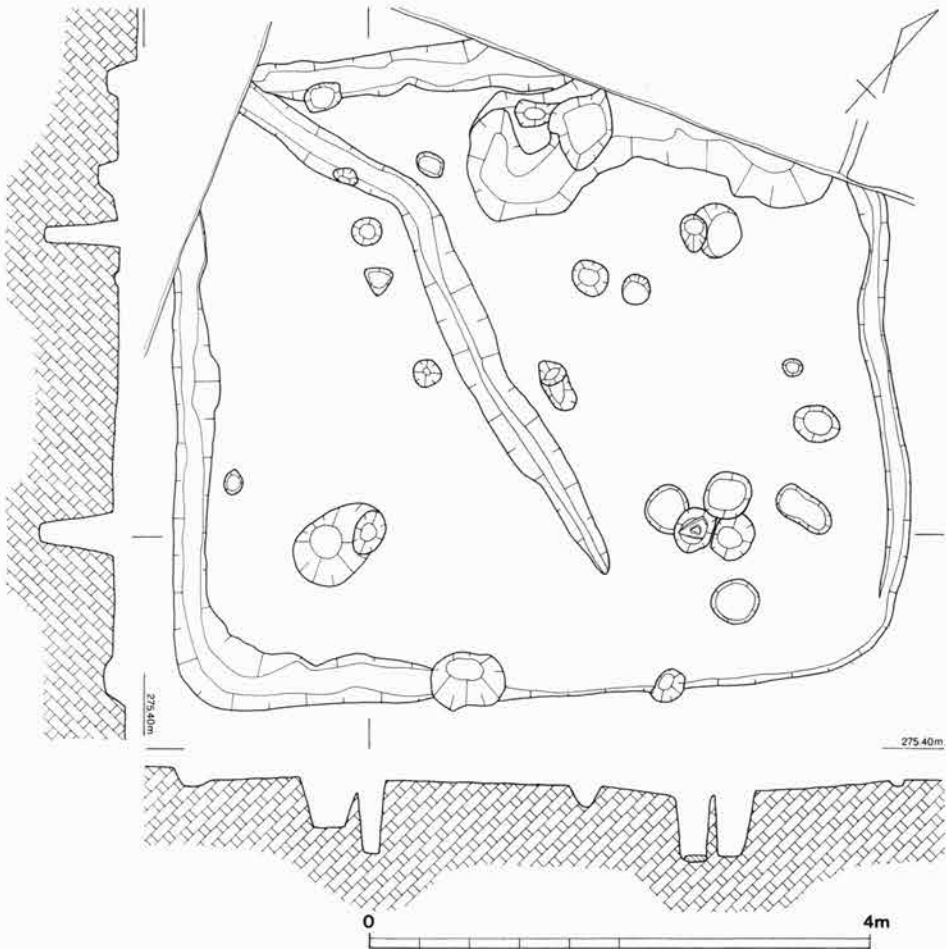
つかった。また、トイレ側で検出した遺構は、深さ10cmを測り、溝であるかを確認するため、格技場北側で断面観察したところ、同じ落ち込みが見られたため、東西にのびる溝と考えられた。

4. 検出遺構

今回の調査で検出した遺構を時代別に分けると、Bトレンチの竪穴式住居跡(SB01)・土壇(SK01・SK02・SK03・SK04)・溝(SD01)・柱穴と、Cトレンチの溝状遺構が古墳時代前期、Cトレンチの土壇(SK06)・柱穴が、奈良時代中頃である。

古墳時代前期の遺構

SB01 平面形はほぼ方形を呈しているが、二つのコーナーが旧校舎の基礎によって削



第7図 SB01 実測図

平されていた。遺存していた限りでの規模は、長辺5.8m・短辺5.1m・床面までの深さ約10cmを測る。四壁に沿って周溝が巡っており、深いところでは床面から約20cmあった。住居跡北端には不定形な落ち込みが見られ、その上層に焼土が堆積していた。焼土は、住居跡に伴うものでなく、後世に堆積したものであった。不定形な落ち込みの性格は不明であるが、貯蔵穴の可能性はある。深さは、約20cmであった。また、住居内から東西方向の溝を検出したが、竪穴式住居跡より後世の遺構であった。

SK01 竪穴式住居跡の北西隣より検出した円形の土坑である。旧校舎の基礎で一部削平を受けているが、直径約90cm・深さ25cmを測る。土坑埋没後、後世の溝(SD02)が巡っていた。土坑底面に焼土が見られ、炭が堆積していた。焼土の厚さは3cmで、炭は約5cm堆積していた。竪穴式住居跡に隣接し、火を使った痕跡があることから、住居跡に伴うと考えられる。

SK02 竪穴式住居跡南側で検出した土坑である。全体にかなり削平を受けており、その規模は、直径1.1m・深さ7cmを測る。土坑内から古墳時代前期の土器片が出土している。

SK03 Bトレンチ南側で検出した円形の土坑である。一部旧校舎の基礎で削平されていたが、直径約1.1m・深さ10cmを測る。土坑内から古墳時代前期の土器片が出土した。

SK04 Bトレンチ南側で検出した円形の土坑である。土坑の西側と東側が旧校舎の基礎で削平されていたが、遺存するかぎりでは直径約1.1m・深さ5cmを測る。土坑内から古墳時代前期の土器片が出土している。

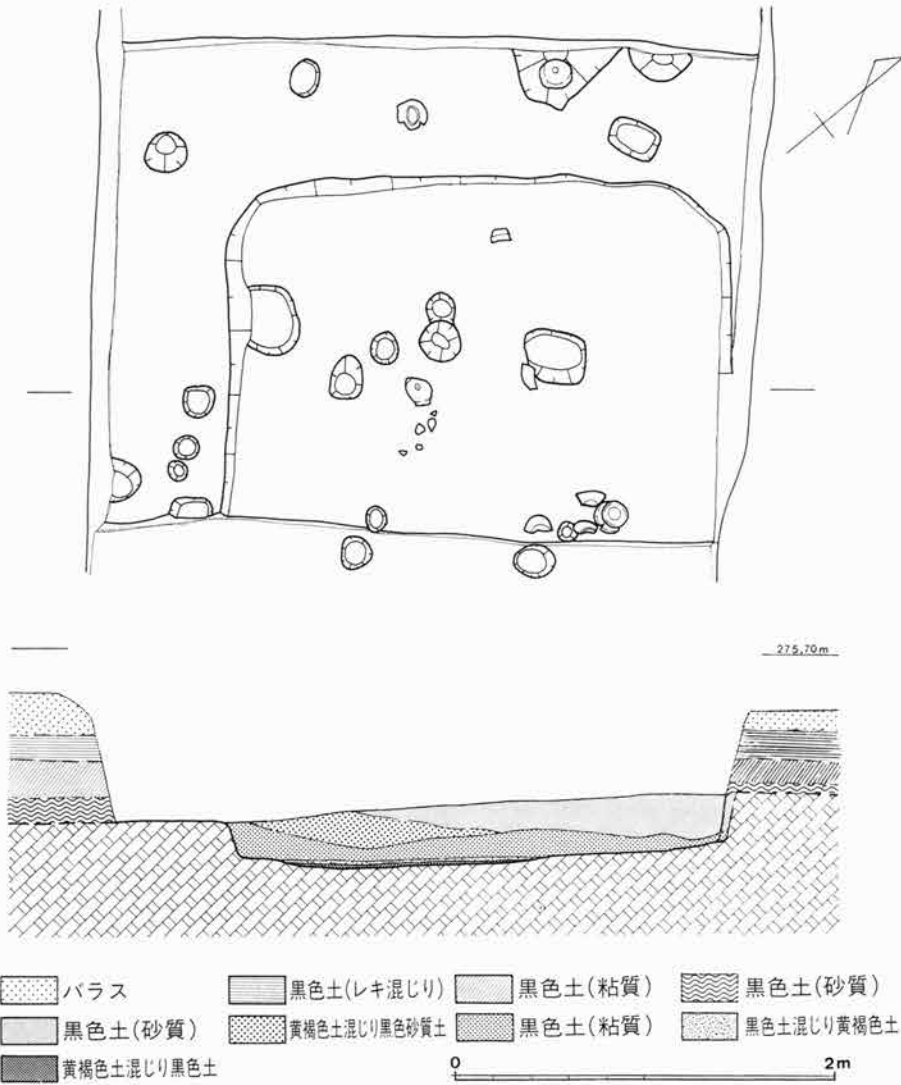
SD01 竪穴式住居跡内を東西方向にのびる溝である。幅約25cm・深さ約20cmを測る。住居跡よりも後の遺構であるが、住居跡と時期差は見られない。溝の性格については不明である。

柱 穴 Bトレンチ一帯から数多くの柱穴を検出したが、そのつながりは見られなかった。しかし、数多くの柱穴の検出は、この付近に建物・柵などが存在したことを示している。柱穴内からの出土遺物はわずかであったが、出土遺物の大半が古墳時代前期のものであることから、遺物のない柱穴も古墳時代前期の可能性が高い。

溝状遺構 幅3.6m・深さ10cmで東西にのびる。残りはかなり悪いが、格技場北側でも同じ落ち込みが見られた。昭和58年度に検出した古墳時代前期の川跡と関連した遺構と考えられる。

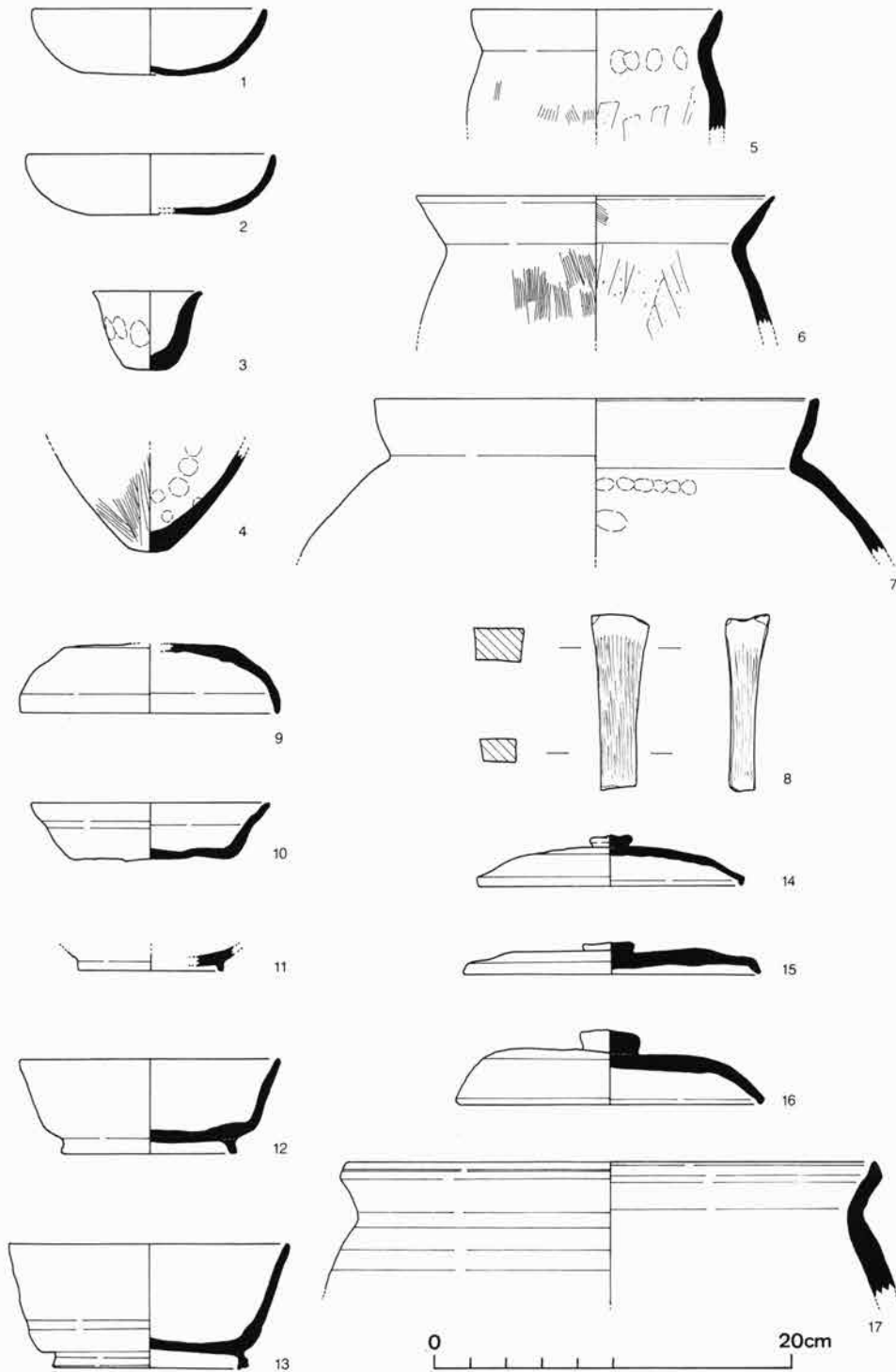
奈良時代中頃の遺構

SK06 一辺約2.6mを測る隅丸方形の土坑である。後世の削平により土坑南東部が消滅している。調査前のこの付近の地形には、8.0cm程の段差があった。重機によりその断面を観察したところ、25cm程の黒色砂質土の堆積下に約20cmの黒色土の落ち込みが見られ



第8図 SK06 実測図

た。調査の結果、黒色土の落ち込みは隅丸方形の土坑1基となり、土坑周辺から柱穴を検出することができた。柱穴内から須恵器1点が出土している。土坑をさらに掘り下げていくと、床面から奈良時代中頃の須恵器と柱穴を検出することができた。土坑床面と土坑周辺柱穴内出土の須恵器に時期差は見られず、また柱穴が土坑と同じ面から掘り込まれており、あるいは土坑に伴うものと考えられた。土坑床面を精査すると、土坑中央部に一辺1.4mの範囲に黒色土混じり黄褐色土が広がっており、その下に炭を多く含む黒色土が約3cm堆積していた。黒色土直下は岩盤となり、掘形や蔵骨器などは見られなかった。しかし床面をわずかに掘り下げ、炭を含む黒色土を覆うように黒色土混じり黄褐色土を貼り、



第9図 出土遺物実測図

周囲の面にあわせていたこと。黒色土混じり黄褐色土中央部から須恵器・蓋が出土したと。床面から柱穴を検出したが住居跡としては、土壇があまりにも小さい。これらのことを考えると、SK06の性格は火葬墓の可能性のある土壇と考えられる。

柱 穴 Cトレンチで検出したSK06周辺の柱穴である。検出面がSK06と同じであること、柱穴よりわずかに上層から奈良時代後半の遺物が出土していることから、遺物を含まない柱穴も奈良時代中頃と考えられる。

5. 出 土 遺 物

古墳時代前期の遺物(第9図1～7・8)

1・2は、土師器で底部外面にヘラ切りの痕跡が残り、体部はロクロナデをおこなっている。3はSB01の埋土内から出土したものである。甕のミニチュアで体部外面に指圧痕が残る。4は、甕の底部で、外面には縦方向のハケメがあり、内面には指圧痕が残る。5は、内面にヘラ削り、外面に縦方向のハケメを施した壺である。6・7は、内面にヘラ削り、外面にハケメを施した甕である。7は、内面に指圧痕がわずかに残っていたにすぎない。8は、SB01から出土したと石である。四面ともかなり使用され、途中で折れていた。

奈良時代中頃の遺物(第9図10～17)

10は平底の杯で、底部内面と体部内外面はロクロナデをおこなっている。底部外面にはヘラ切り痕が残る。12・13は、輪状高台を巡らす杯である。ともに高台は、ヘラ切り後貼り付けている。底部内面から体部内外面にかけてはロクロナデを施している。14～16は、宝珠つまみを有した蓋である。いずれも天井部外面をヘラ切りし、体部内外面にはロクロナデを施している。そして全体にナデ仕上げしている。17は、須恵器・甕である。体部外面はヘラ削りしており、その他は、ロクロナデしている。

時期の異なるものとして、9・11がある。9は、包含層から出土したもので、この時期のものはこれ1点だけである。11は碗の底部で、高台は削り出しである。

6. ま と め

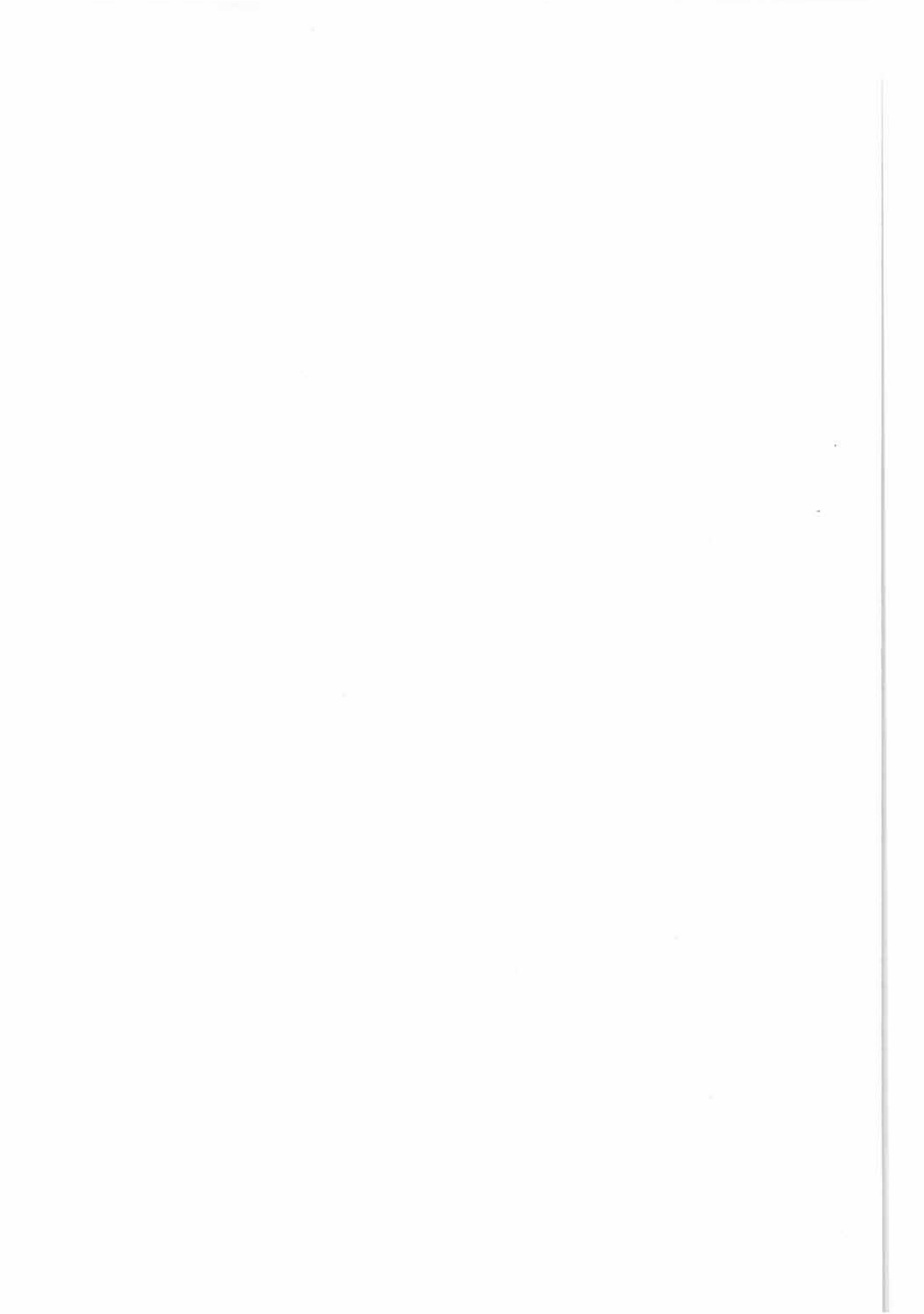
今回の調査で、初めて住居跡を発見しただけでなく、奈良時代中頃の遺構を検出するなど、大きな成果を得ることができた。これらは、いずれも前調査時に推測されていたことであるが、今回検出したことは、以前の調査成果も含めて大きな成果と言える。府立北桑田高等学校が位置する高台を5か年にわたり、部分的に調査を行ってきた結果、古墳時代前期の集落と墓、またそれを囲む川跡を知ることができた。これは、上中遺跡が、当地に

において古墳時代前期の代表的な遺跡の一つであるだけでなく、京北町の歴史を知る上で貴重な資料であることを示す。

また、奈良時代中頃の遺構を検出したことで、古墳時代の集落遺跡以外の上中遺跡の一面を知ることができ、これも大きな成果と言える。奈良時代中頃の土壇の性格については、今後検討を要するが、火葬墓の可能性も考えられ、貴重な資料である。

(岡崎研一)

- 注1 増田孝彦「上中遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第10冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984
増田孝彦「上中遺跡第2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第14冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
増田孝彦「上中遺跡第3次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第20冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986
岡崎研一「上中遺跡第4次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第22冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注2 調査補助員 藤本城次・毛利雅一・酒井比呂志
作業員 西三治郎・市野五蔵・草木小松・稲波みどり・矢谷明代・矢谷都之子・田尻フク・稲波喜久恵
- 注3 『京都府の地名』日本歴史地名大系26 平凡社 1981 378~379頁
- 注4 石田茂作・三宅敏之「丹波国周山廃寺」(『考古学雑誌』45-2) 1959
- 注5 京都大学文学部考古学研究室編『周山瓦窯跡発掘調査報告書』京北町教育委員会 1982
- 注6 注3に同じ



3. 丹波亀山城跡第2次発掘調査概要

1. はじめに

丹波亀山城跡は、京都府亀岡市荒塚町・古世町に所在する近世城郭跡である。現在では旧地に大本教本部や学校などが建設されており、内堀や外堀の一部にその名残をとどめるにすぎない。しかし、かつては亀宝城などと呼ばれ、大堰川へ向かってせりだす小丘陵上に五層の天守を置き、その雄姿を口丹波の地に誇っていた。

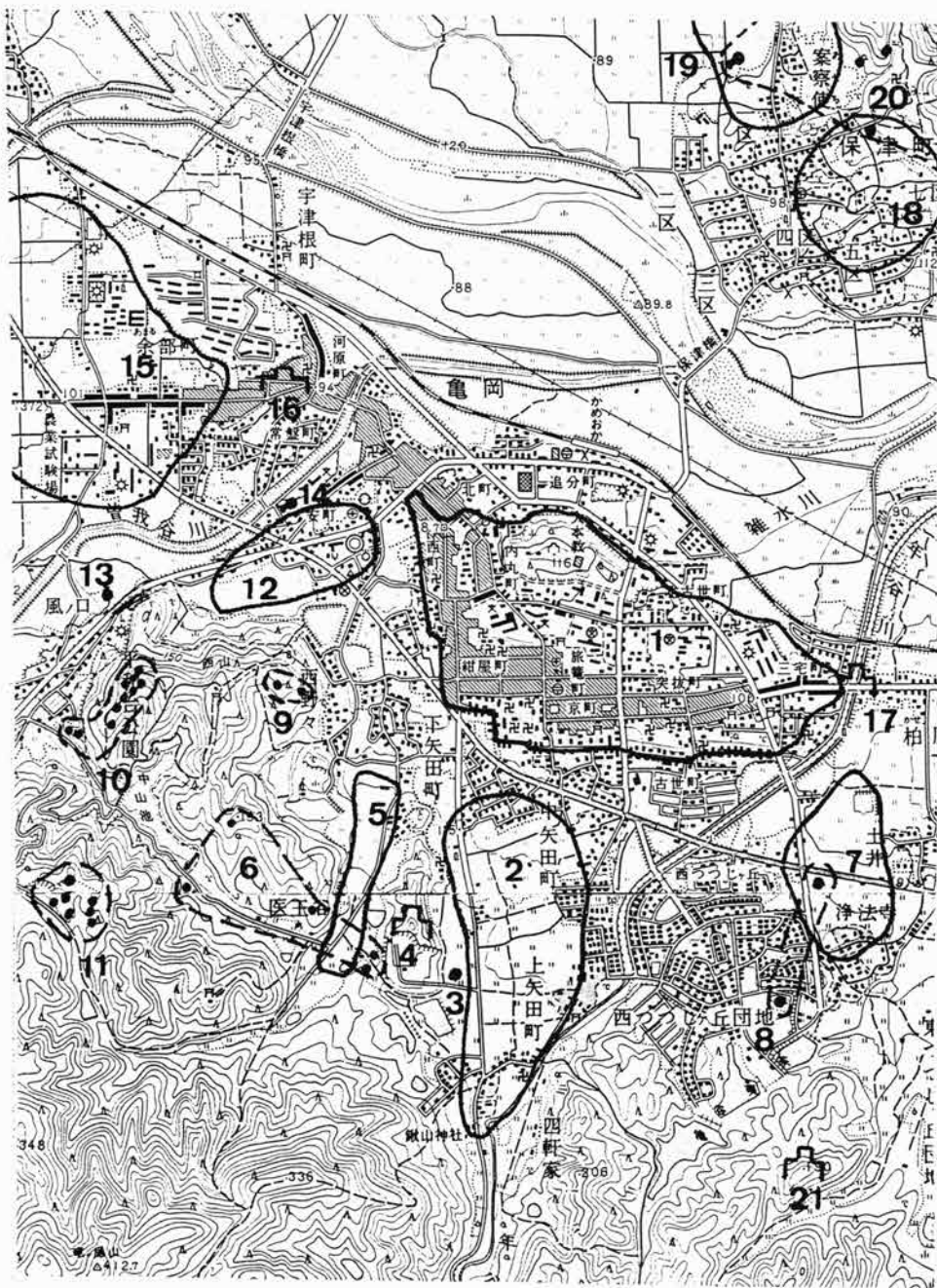
亀山城は、天正5(1577)年から同9(1581)年にわたって明智光秀によって築城され、明治元(1867)年に廃城となるまで27代の城主が続いた。^(注1)その間、城の拡大や整備が幾度となく行われたようだが、元和7(1621)年には天下普請などによって近世城郭としての体裁を完成させたといわれている。

さて、今回の発掘調査は、旧亀山城内に建設されている府立亀岡高等学校の校舎改築に先立って実施したものである。現存する絵図^(注2)などによれば、高等学校は旧城内二ノ丸跡から三ノ丸跡にわたって建設されていることが判明する。今回、校舎の改築が計画されたのは、その中でも東寄りの部分であり三ノ丸跡の一面に相当している。そのため、事前に発掘調査を行うこととなり、京都府教育委員会の依頼を受け、当調査研究センターが調査を実施した。本調査にかかる経費は、京都府教育委員会が負担した。

現地調査は、昭和62年8月3日から同年9月28日までの間に、当調査研究センター調査第2課調査第2係係長水谷寿克、同調査員森下 衛が担当して行った。調査に際しては、京都府教育委員会・亀岡市教育委員会・亀岡高等学校・口丹波史談会をはじめとする関係諸機関の協力を得た。また、地元有志の方々には、作業員・調査補助員・調査整理員として調査への参加協力を願^(注3)った。記して謝意を述べたい。なお、本概要執筆は、出土遺物の項のうち近世の陶磁器類について当センター主任調査員引原茂治の協力を得たが、その他は、森下が行った。

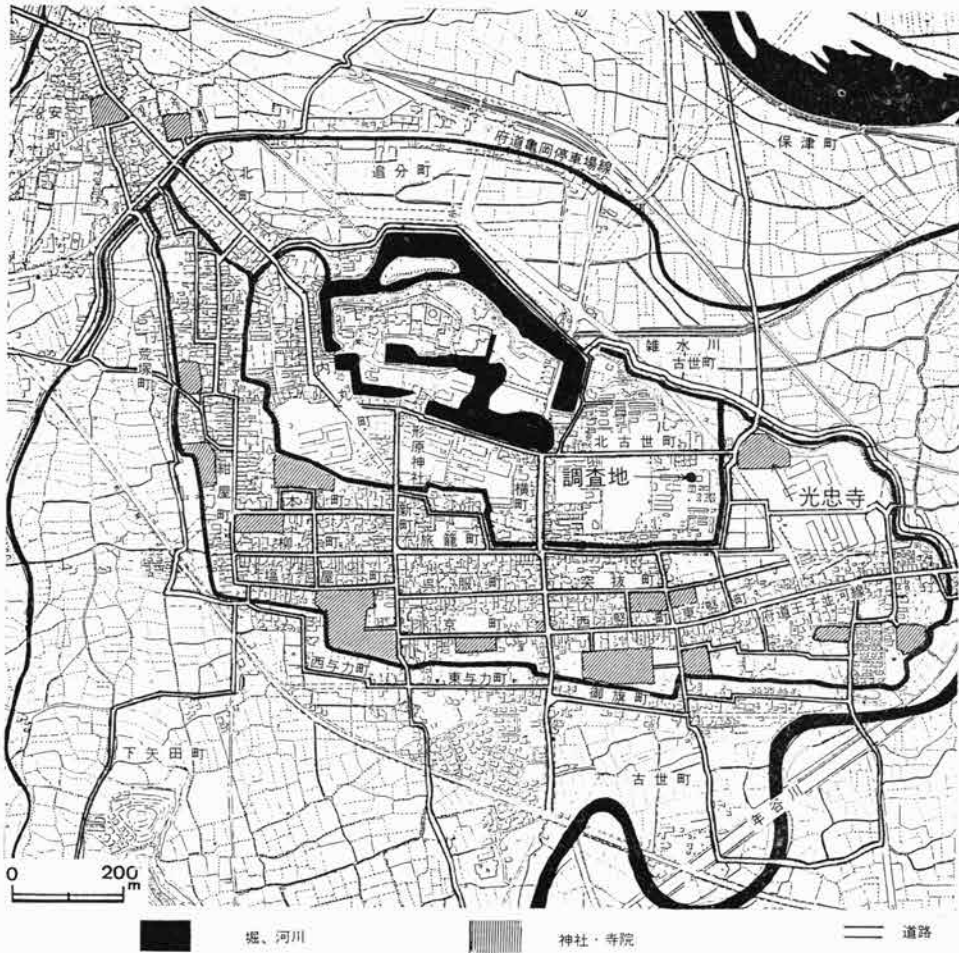
2. 遺跡の概要

京都府の中央部に位置する丹波地方は、標高800m前後の山々が連なる山地帯が大半を占める。その南端に開けた盆地が、亀山城跡の所在する亀岡盆地である。当地は、旧丹波国桑田郡に属し、老の坂峠を境として山城国すなわち畿内と接していた。こうした地理的条件から、当地は山陰道第1国の丹波国にあっても、常に畿内からの出入り口として口丹波



第10図 調査地周辺遺跡分布図 (1/25,000)

- | | | | | |
|------------|------------|-----------|-----------|----------|
| 1. 丹波亀山城跡 | 2. 矢田遺跡 | 3. 君塚古墳 | 4. 矢田城跡 | 5. 医王谷遺跡 |
| 6. 医王谷古墳群 | 7. 浄法寺遺跡 | 8. 浄法寺古墳群 | 9. 安行山古墳群 | |
| 10. 風ノ口古墳群 | 11. 龍ヶ尾古墳群 | 11. 安加塚遺跡 | 13. 狐塚古墳 | |
| 14. 加塚古墳 | 15. 余部遺跡 | 16. 余部城跡 | 17. 古世城跡 | 18. 保津遺跡 |
| 19. 安察使遺跡 | 20. 安察使古墳群 | | | |



第11図 丹波亀山城復元図(注1文献から)

地方と呼ばれるに至るとともに、古代においては国府・国分二寺が置かれるなど政治・文化の中心地としての役割を担うこととなった。

16世紀後半、丹波平定を進めつつあった明智光秀が、その拠点としての城を当地に築いたのも、こういった土地柄が大きな要因であったのだろう。ただ、光秀の築城の段階ではいまだ丹波平定のための暫的なものであったとの理解が大勢を占めている。本城が近世城郭としての体裁を完成するには小早川秀秋、北条氏勝、権田小三郎、岡部長盛らの歴代城主による築城・整備を待たねばならなかった。特に、岡部長盛による整備は大坂城包囲網を完備するための「天下普請」によるものであったらしく、かなり大規模なものであったことが確認されている。^(注4)

さて、亀山城跡は亀岡盆地のほぼ中央部に位置し、盆地を東西に分かつように南流する

大堰川の西岸、竜ヶ尾山北東麓の微高地上に立地している。

城を取り巻く地形をみると、東に年谷川(寺川)、西に曾我谷川、北に大堰川が流れ、南に竜ヶ尾山がそびえるといった具合に天然の要害とでもいえるような立地条件を備えている。特に、大堰川に面しては、発達した河岸段丘の北側に広々とした湿地が続くといった状況だったようで、これが巨大な堀としての役割を果たしていた。

亀山城の構造については、すでに前回の調査(以下、これを第1次調査と呼ぶ)^(注5)の報告で詳細に検討されており、ここでは今回の調査地について簡単にふれるにとどめる。

絵図などによって復元される亀山城は、第11図のごとくである。大堰川に面した小丘陵上に天守を置き、南方へ向かって二ノ丸、三ノ丸そして城下町を形成しているようすが理解できるだろう。これをもとに、今回の調査地をみると、先述のように三ノ丸跡の一面に相当することが分かる。地籍図や2,500分の1の地形図などを手掛かりにさらに細かく検討してみると、外堀が細長く続く水田としてその痕跡を明瞭にとどめていることや、城主形原松平家八代の墓所である光忠寺の位置が現在も変わっていないことなどから、当該地は三ノ丸跡の中でも東端部付近の武家屋敷街の一面に位置することが判明する。

また、本城跡の位置する微高地上は、城の構築される以前から人々の居住が営まれていても不思議ではない恵まれた地理的環境を有している。発達した河岸段丘が大堰川の増水時にも堤防の役目を果たすなど、亀岡盆地内でも人々の居住に最も適した場所の一つとみることができるのである。これを示すかのように、本丸跡一帯の地名が荒塚町といい、かつて古墳が存在した可能性を示唆しており、調査地に隣接する三宅町は古代桑田郡の役所である桑田郡衙跡推定地の一つとして注目されているところでもある^(注6)。

以上のように、今回の調査では亀山城跡に伴う三ノ丸跡の遺構すなわち武家屋敷跡の検出を第1の目的としていたが、その下層にそれを大きく遡る時期の諸々の遺構が存在する可能性が高く、この有無を確認することも重要な課題と考えられた。

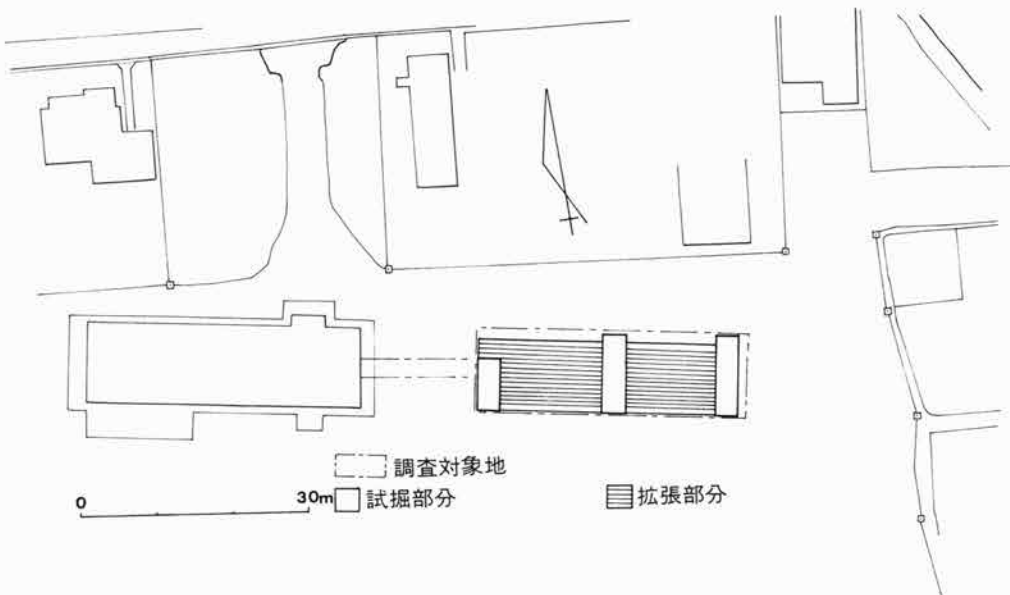
3. 調査経過

調査区においては、調査開始直前まで木造校舎が建っていたため、その基礎などによってすでに地下の遺構が破壊されている点が心配された。そこで、まず、遺構の有無ないしはその埋没状況を確認することを目的として試掘調査を実施することとなった。試掘調査は、昭和62年8月3日から開始し、対象地内(約400m²)に3本のトレンチ(約100m²)を入れ掘削を進めた(第12図)。その結果、現地表下約0.6mのところ江戸時代の遺構面(以下、上層遺構面と呼ぶ)を、同じく0.8mのところ古墳・奈良時代の遺構面(以下、下層遺構面と呼ぶ)をそれぞれ確認した。

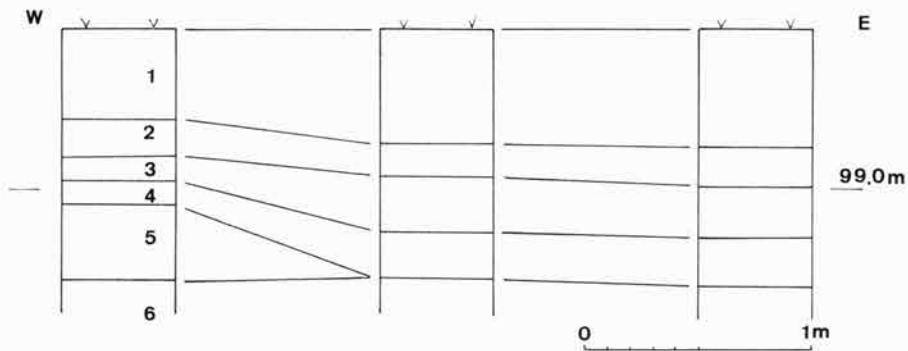
この成果をもとに京都府教育委員会と協議を行ったところ、調査区を対象地全域まで広げ面的な調査を行うこととなった。そこで、改めて8月19日から各トレンチをつなぎ、面的な調査へ移った。

地区割り 調査に際しては、まず対象地全域を包括する範囲で地区割りを作成した。新校舎建設のために置かれていた仮ベンチマーク(仮B.M.)を基点として磁北ラインおよびそれに直行するラインをもとに3m四方の方眼を設定した。南北を数字、東西をアルファベットで表し、各方眼の呼称は東南隅の杭の名称で示している。

層序 調査地の基本的な層序は第13図に示したごとくである。まず、厚さ約40cmの表土層(旧校舎に伴う整地層)があり、その下には旧校舎建設前の整地層が15~20cm程度認められた。この整地層の段階以降、当該地の地形はほぼ水平になされているが、これ以前は西から東へ向かって緩やかに傾斜する地形を呈していたようである。整地層に続いて確認した茶褐色土層(江戸時代の遺物包含層)、黒褐色土層(古墳・奈良時代の遺物包含層)とも、西から東へと厚みを増し、地形の下がりを明瞭に示していた。これは、黒褐色土層の下に認められる灰色砂礫層の堆積によるもので、地形の傾斜もこの層の認められる調査区西半部では比較的急で、東半部へいくに従って緩やかなものとなっていた。灰色砂礫層は無遺物層で、調査地近辺の洪水などの影響で西方から流れ込んだものと考えられた。この下には、ほぼ水平に堆積する黄灰色土層が認められ、遺物は全く含んでおらず、地山土と判断した。



第12図 調査地位置図



第13図 土層断面模式図（各土層図は3本の試掘トレンチのもので、左から順に西・中・東のトレンチに対応する）

1. 表土, 2. 整地層, 3. 茶褐色土層, 4. 黒褐色土層, 5. 灰色砂礫層, 6. 黄灰色土層

最終的な成果としては、上記の2層の遺物包含層に対応した状況で、茶褐色土層直下すなわち黒褐色土層上面で江戸時代の遺構を、黒褐色土層直下すなわち黄褐色土層ないし灰色砂礫層上面で古墳・奈良時代の遺構をそれぞれ検出した。

なお、奈良時代の遺構については、建物跡としてのまとまりを把握できたのは灰色砂礫層ないしは黄褐色土層上面に至ってであったが、幾つかの柱穴についてはすでに上層遺構掘削時に黒褐色土層を切り込んで設けられている状況を確認しているものもあった。本来は、黒褐色土層がさらに数層に細分することができ、その黒褐色土層中のいずれかに奈良時代の遺構面が存在した可能性が高い。しかし、本調査では黒褐色土層の細分ができていないことや、奈良時代の遺構を明確に検出したのが下層遺構面であったことから、ここでは古墳時代の遺構とともに下層遺構として一括した。

4. 調査成果

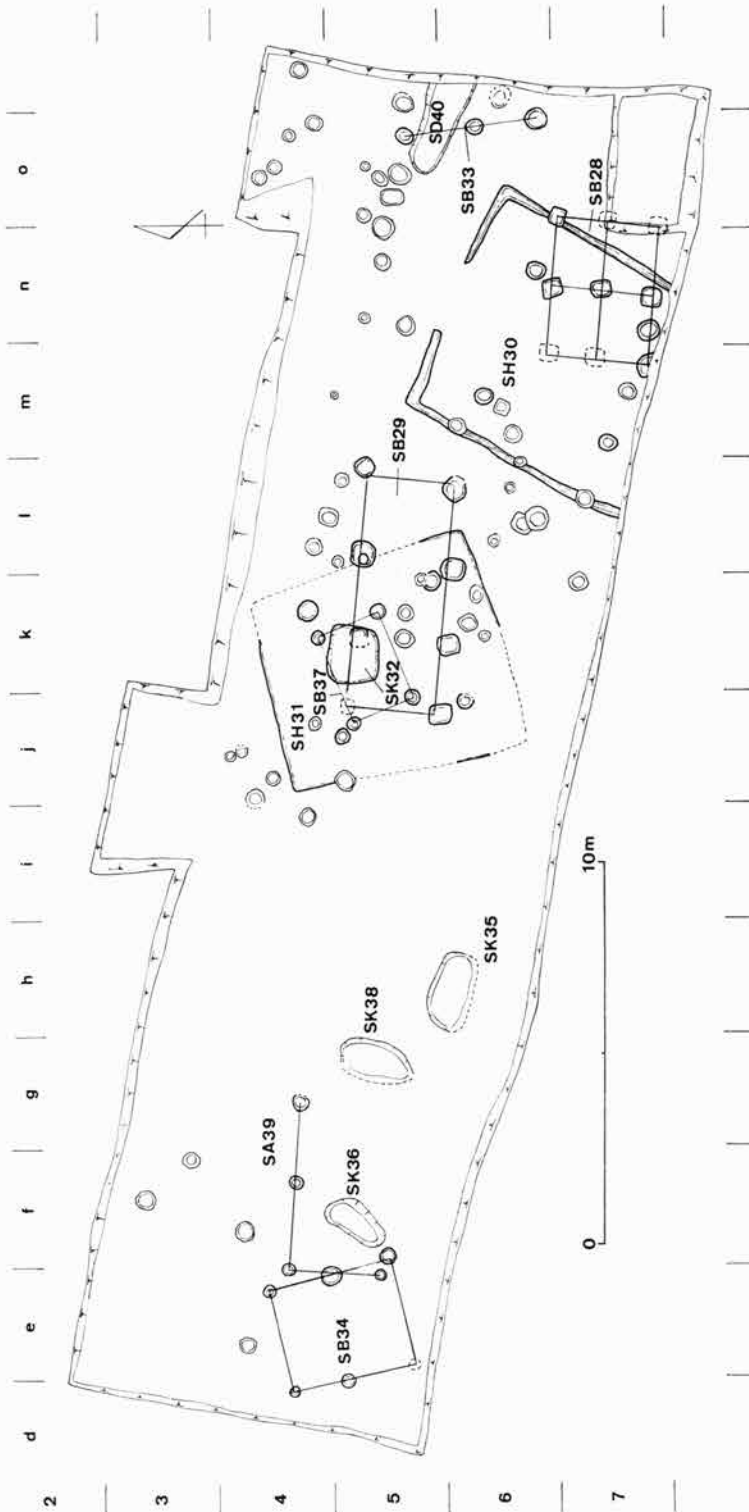
(1) 検出遺構

今回の調査では、上記のように少なくとも上・下二面の遺構面を確認した。うち、上層遺構面では、江戸時代という亀山城存続期から廃城期に相当する頃の遺構を検出した。また、下層遺構面では、古墳・奈良時代の遺構を検出した。ここでは、古墳時代・奈良時代・江戸時代の時代順に主な検出遺構の概要を報告する。

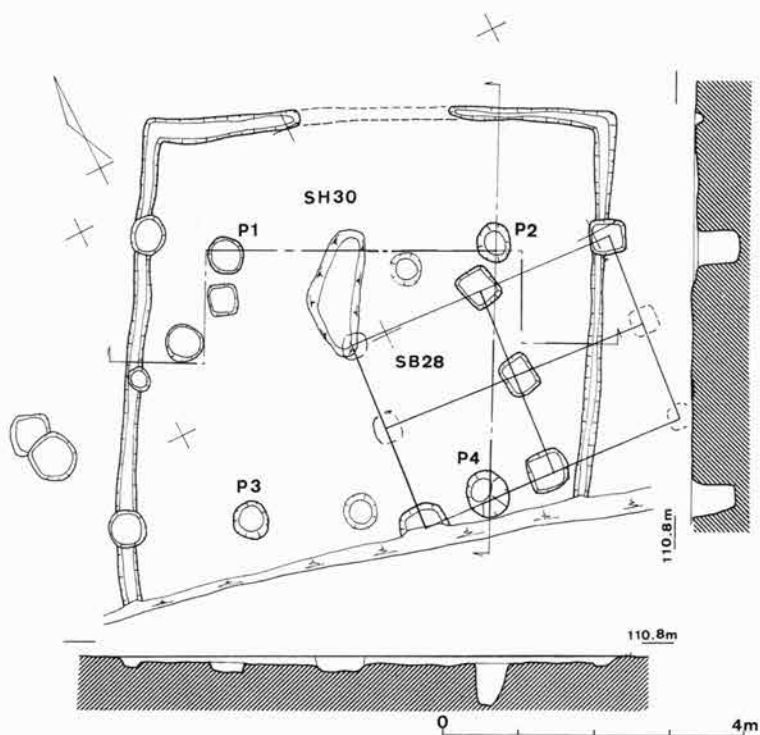
①古墳時代

竪穴式住居跡2基・掘立柱建物跡3棟・土壇4基・溝1条などを検出した。古墳時代後期(6世紀中葉～7世紀前半)に属するものが主体を占める。

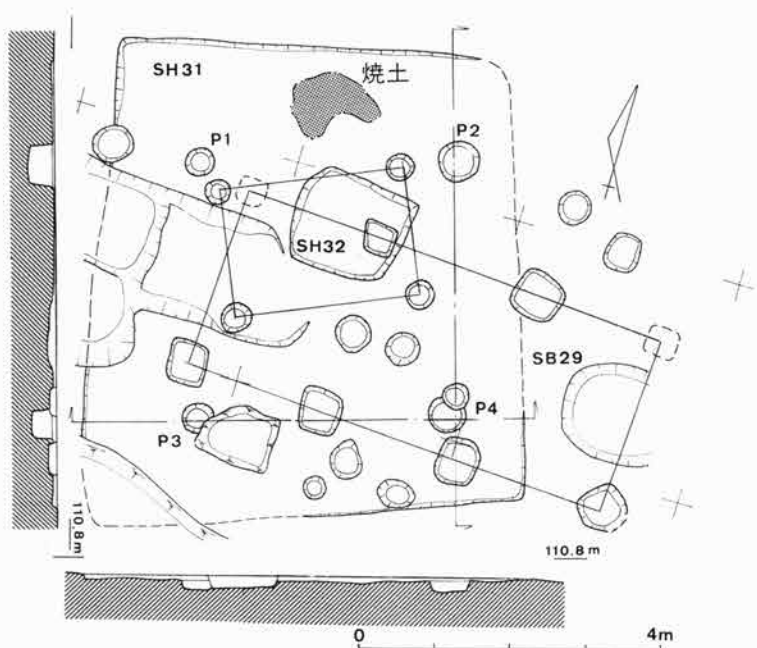
竪穴式住居跡(第15・16図) 調査区の中央から東半部において2基(SH30・31)を検出した。いずれも遺存状況は極めて悪く、かろうじてその痕跡を確認したにとどまる。規模



第14図 調査地平面図(下層遺構面)



第15図 竪穴式住居跡(SH30)・掘立柱建物跡(SB28)平面図



第16図 竪穴式住居跡(SH31)・掘立柱建物跡(SB29)平面図

・形態については、両者とも一辺6m前後の方形を呈することを確認した。時期的には、これに伴う出土遺物が少なく決め手を欠くが、およそSH30が6世紀中葉、SH31が6世紀末葉頃と考えている。住居跡に伴う施設としては、SH30で幅約20cm・深さ約10cmの壁溝を、SH31で北壁中央付近に焼土塊を確認している。特に後者についてはカマドの痕跡と考えている。

付表1 竪穴式住居跡一覧表

遺構	規模・形態	時期	出土遺物	備考
SH30	一辺6.2mの方形	6世紀中葉	第18図 1-8	主柱は第15図P.1～P.4
SH31	一辺6.0mの方形	6世紀末葉	第18図 3	主柱は第16図P.1～P.4

掘立柱建物跡(第14図) 調査区の西端部、中央部、東端部それぞれで1棟ずつ計3棟(SB33・34・37)を検出した。いずれも、径約30cm前後の柱穴から構成され、1間×2間ないし1間×1間といった小規模なものである。なお、SB34は大半が調査区外へのびており、正確な規模は不明である。時期的には、これに伴う出土遺物が少なく比定材料を欠くが、本遺構面を覆う黒褐色出土遺物や、遺構埋土の状況などから、およそ6世紀中葉から7世紀前半の範囲でとらえるものと考えている。

付表2 古墳時代掘立柱建物跡一覧表

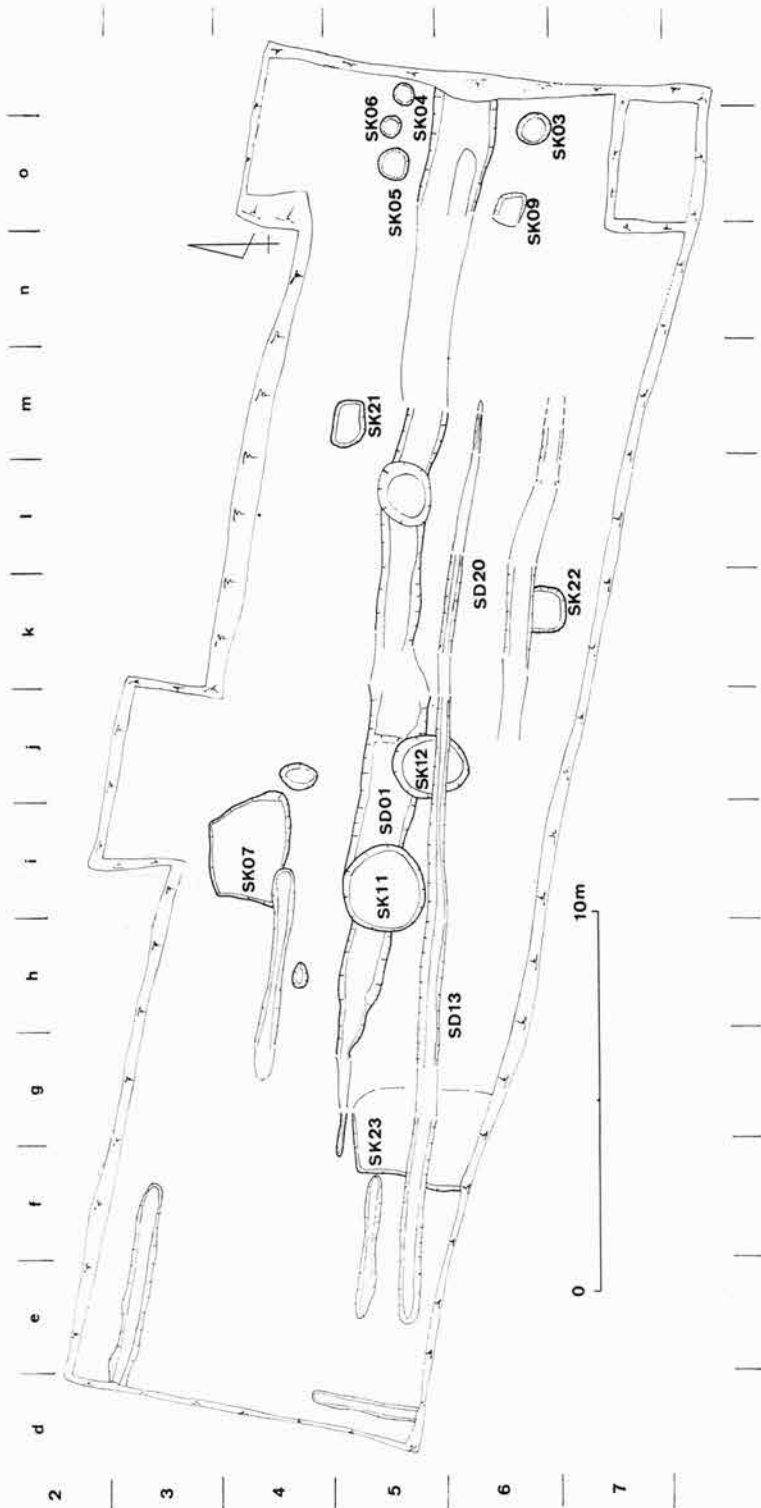
遺構	規模	時期
SB33	2間(3.2m)×1間(2.7m)	6世紀中葉 7世紀前半
SB34	2間(3.6m)×不明	
SB37	1間(2.4m)×1間(1.6m)	

土壇(第14図) 平面形が長楕円形を呈する3基の土壇(SK35・36・38)を調査区西半部で、方形を呈する土壇(SK32)を中央部で検出した。前者は、いずれも長径2.0m・短径1.0m前後を測る。出土遺物がなく、時期の比定材料を欠くが、上記の建物跡と同様の理由からおよそ6世紀中葉から7世紀前半の範囲でとらえるものと考えている。後者は、SH31の床面で検出した。ただ、これがSH31に伴う施設であるかどうかについては、SH31が床面近くまで攪乱を受けていたため、明らかにすることができなかった。なお、両者の出土遺物をみると、SH31がやや古い様相を持ち、SK32は7世紀初頭頃に位置づけることができるものと考えている。

付表3 古墳時代土壇一覧表

遺構	規模・形態	時期
SK32	1.4m×1.5mの方形	7世紀初頭
SK35	2m×1m前後の楕円形	6世紀中葉 7世紀前半
SK36	1.8m×1mの楕円形	
SK38	2m×1m前後の楕円形	

その他 以上の遺構のほかに、溝1条(SD40)および多数の柱穴状ピットを検出した。SD40は、調査区東端から西へ約



第17図 調査地平面図(上層遺構面)

2.5mを確認したもので、土坑状を呈する可能性もある。幅約0.9m・深さ約0.1mを測る。柱穴状ピットとは、建物跡としてのまとまりを確認できていない柱穴状の遺構である。規模・形態とも建物跡としてのまとまりを確認した柱穴と大差ない。現在のところ、建物跡としてのまとまりは把握できていないが、おそらく多数の掘立柱建物が存在したのでであろうと推測される。これらの時期についても、埋土内からの出土遺物がないため、先の掘立柱建物跡や土坑と同様の理由で、6世紀中葉から7世紀前半の範囲でとらえうると考えている。なお、柱穴状ピットのうち1か所から弥生時代後期末葉頃に比定しうる土器片(第18図17)の出土を認めたものがあった。この遺構が確実にこの時期に比定しうるわけではないが、この土器片は当遺跡の上限がこの頃まで遡ることを示す資料として重要なものといえるだろう。

②奈良時代

掘立柱建物跡2棟、柵列1列を検出した。本時代の遺構は、先に示したように古墳時代の遺構に比べ若干上方で検出しうる可能性があるが、これに伴い遺構の埋土も明瞭に異なっていた。古墳時代のものが黒褐色土であるのに対し、本時代のものは暗茶褐色土であった。なお、本時代の遺構は非常に攪乱を受けており、確認した規模・形態は本来の正確なものではない可能性が高い。

掘立柱建物跡(第15・16図) 調査区の中央から東半部で2棟(SB28・29)を検出した。いずれも一辺約0.4m前後の方形の掘形を有する柱穴によって構成される。SB28は2間×2間以上の総柱建物、SB29は1間×3間の建物と考えられる。

柵列(SA39) 調査区の西半部で、L字状に屈曲し、柵列を構成すると思われる柱穴列を検出した。柱穴は径約30cmを測り、南北に1間、東西に2間分を確認した。小規模な掘立柱建物跡になる可能性もある。

ここで確認した掘立柱建物跡および柵列の主軸は、ほぼ同一方向を示し、磁北から約5°東へ振る。时期的には、柱穴の埋土内から出土した遺物などから、およそ8世紀中葉頃と考えている。

付表4 奈良時代掘立柱建物跡一覧表

遺構	規模・形態	備考
S B 28	南北1間(2.4m)×東西3間(5.8m)	一辺約0.5mの方形の掘形の柱穴によって構成される。
S B 29	南北2間(2.6m)以上×東西2間(3.6m)	
S A 39	南北1間(2.4m)以上×東西2間(4.4m)以上	径約0.3mの円形の掘形の柱穴。

③江戸時代

第17図に示した上層遺構がこの時期に相当するものである。ただ、南北に走る小規模な

素掘り溝や調査区中央部の円形の土壇などについては、亀山城廃絶後、当地が畑と化した際に設けられたものと考えられる^(注8)。実際、亀山城の存続期ないしは廃城期に伴うと考えられる遺構は、溝1条および大小の土壇9基であった。

溝(SD01) 調査区を東西に走るもので、調査区の西半部から東端へ続き、さらに調査区外へのびる。幅・深さとも一定しておらず場所によって異なるが、最大幅1.5m・最大の深さ1.0mを測る。東西にほぼ真っすぐのびていることから、おそらく何らかの土地区画にかかわる溝であったと考えられる^(注9)。

土壇 土壇は調査区の各所で検出した。規模・形態から大まかに3種類に分類できる。やや大型で平面形が方形を呈するもの(SK07・23)、中型でやはり方形を呈するもの(SK21・22)、小型で平面形が円形を呈するもの(SK03～06・09)である。それぞれの性格については不明である。出土遺物から、これらの遺構は、すべて江戸時代でも後半期から末期(18世紀後半～19世紀)のものと考えられた。このうちSK07・22・23の3基からは江戸時代後半期から末期頃と考えられる多量の遺物が出土した。おそらく、廃城に伴って不要となったものを投棄したのであろう。

付表5 江戸時代土壇一覧表

遺構	規模・形態	備考
SK03	径約0.8mの円形	平瓦が完形で出土
SK04	径約0.5mの円形	瓦片や径5cm大の礫などが出土
SK05	径約0.8mの円形	同上
SK06	径約0.6mの円形	
SK07	2.2m×2.6mの方形	人頭大の石や瓦片、陶磁器片が大量に出土
SK09	径約0.8mの円形	
SK21	0.8m×1.3mの方形	陶磁器片が大量に出土
SK22	1.1m×1.2mの方形	同上
SK23	2.2m×不明の方形	

(2) 出土遺物

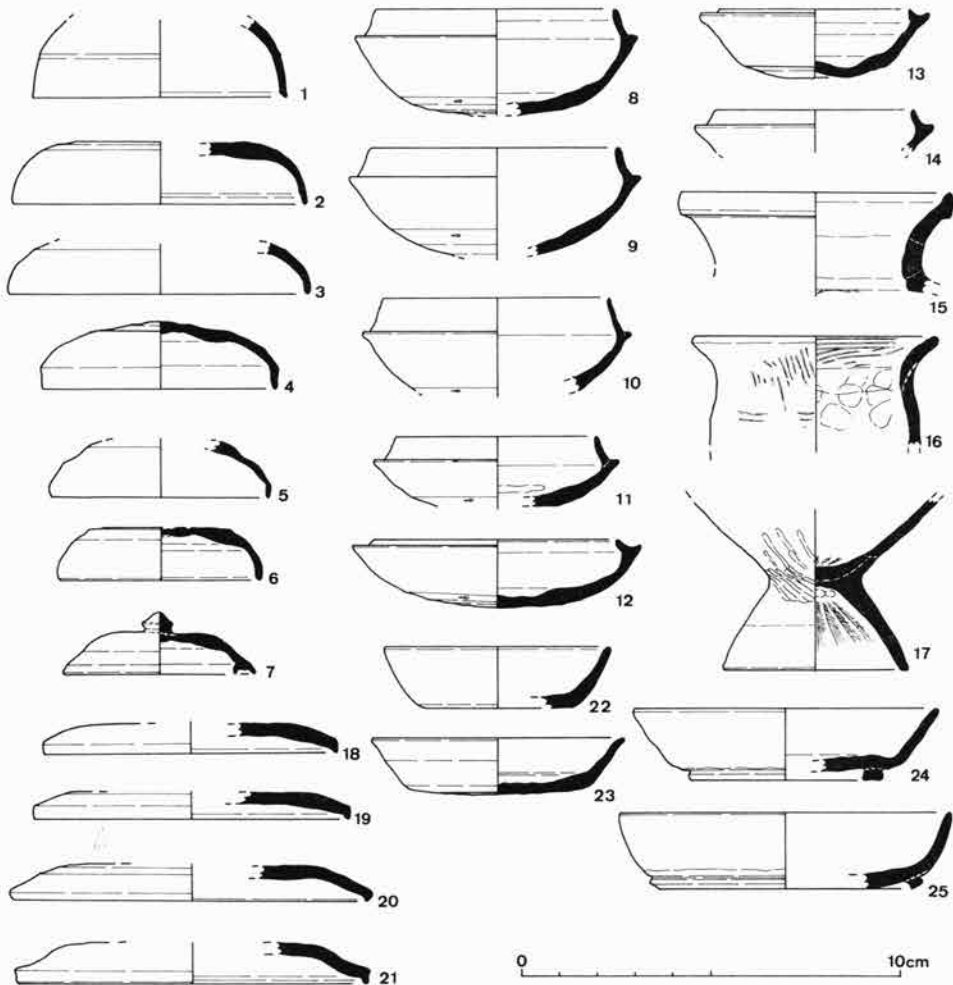
今回の調査で出土した遺物は、整理箱約40箱に及んだ。うち、37箱は江戸時代のものであり、さらにその大半を平・丸瓦類が占める。また、残り3箱では2箱が古墳時代の須恵器・土師器であり、1箱が奈良時代の須恵器・土師器である。今回の報告では、これらの中から、主に須恵器・土師器・陶磁器類について図示し、その概要を報告することにした。第18・19図が古墳・奈良時代の遺物で、第20・21図が江戸時代の遺物である。

①古墳時代(第18図1～16)

古墳時代の遺物は、先述のように黒褐色土層および竪穴式住居跡などの遺構の埋土内から出土した。須恵器が大半を占め、土師器はごくわずかであった。

1～7は須恵器杯蓋である。1は口縁部と天井部の境に明瞭な段を有し、6世紀中葉に近い時期に比定しうるものである。2～6は天井部から口縁部へとなだらかにのびるもので、1に比べると新しい形態をなす。口径の大きい2・3は6世紀後半～末葉、小さい4～6は6世紀末葉～7世紀初め頃に比定しうるものであろう。7は天井部に宝珠つまみのつくもので7世紀前半から中葉に比定されるものである。

8～14は須恵器杯身である。8～10は受け部からの立ち上がりが高く、杯蓋の1と同様に6世紀中葉頃に比定しうるものである。11は若干立ち上がりが低くなり6世紀後半頃に、



第18図 出土遺物実測図(1)

さらに低くなる12~14は6世紀末葉から7世紀初め頃に比定しうるものであろう。

15は須恵器甕口縁部片、16は土師器甕口縁部片である。

1・8がSH30、3がSH31、5・13・14がSK32からそれぞれ出土したものであり、その他は黒褐色土出土資料の中から遺存状況が良好なものを抽出し図示した。

なお、17は弥生時代後期末葉のものと考えられる台付甕の底部片である。柱穴状ピット内から出土した。

②奈良時代(第18図18~25・第19図)

この時代の遺物は、黒褐色土層上半部及び各遺構埋土内から出土した。古墳時代と同様に須恵器が多くを占めている。ここに図示したものは、すべて遺構に伴うものではなく、黒褐色土上半部から出土したもので、この時期に属する遺物の傾向を示すものを抽出し図示した。なお、遺構に伴うものは遺存状況が悪く割愛した。

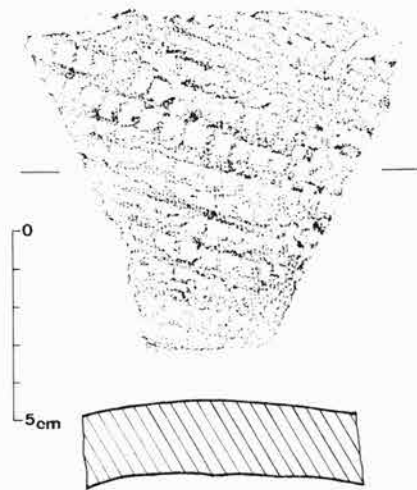
18~21は須恵器杯蓋である。平坦な天井部からなだらかに口縁部へ至るものが多い。およそ8世紀中葉頃に比定しうるものである。

22~25は須恵器杯身である。22・23は高台がなく、24・25は高台を有する。24・25ともに口縁部と底部の境からやや内側に入ったところに高台をはりつけるものである。これらにも、杯蓋と同じく、およそ8世紀中葉を主体とした時期を与えうるものと考えている。

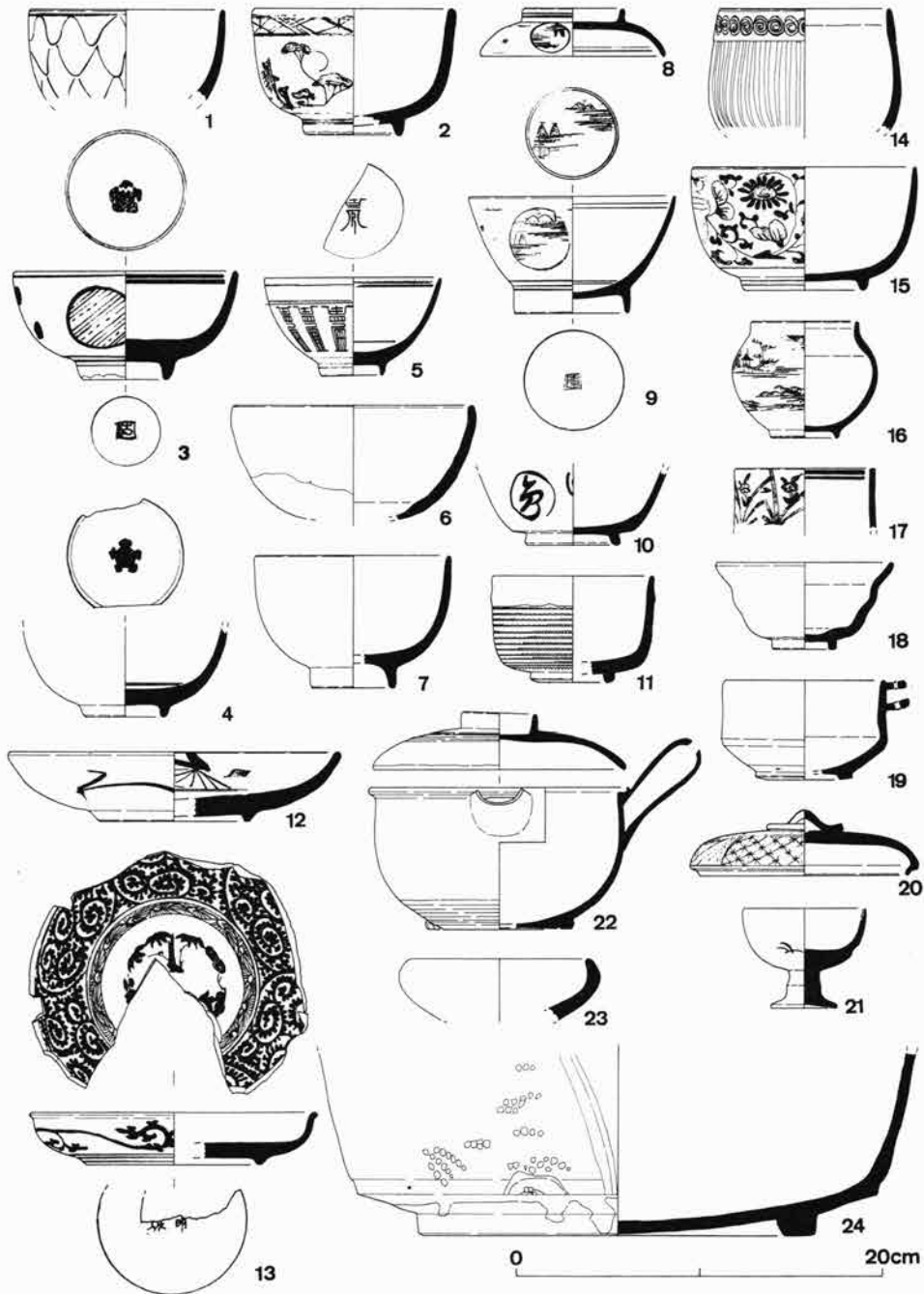
これら以外には、第19図に示した古瓦片が注目される。凸面に一辺約0.5cm四方の正格子叩きが施されているもので、焼成は良好で黄褐色を呈する。凹面は縦方向にヘラ状工具による削りがなされている。亀山城期のものと考えている土塚(SK07)内から出土したものであるが、上記の特徴は明らかに7世紀後半~8世紀初頭頃に比定すべきことを示している。本遺跡からこの時期の瓦片が出土した意義は大きく、近傍に寺院跡ないしは官衙的な施設の存在した可能性を示唆するものといえる。

③江戸時代(第20・21図)

今回の調査で出土した本時期の陶磁器には、椀・皿・鉢などがある。また、このほかには、灯明皿として使用された土師皿・炮烙などがある。生産地別にみると伊万里染付磁器などの肥前系陶磁器が最も多く、瀬戸美濃・丹波・備前などの製品も認められた。また地元亀岡の焼物と認められるものもある。



第19図 出土遺物実測図(2)



第20図 出土遺物実測図(3)

1~3・8~11・14・18・21・23・24; SK07, 4~6・12・13・15・
16・19・20・22; 茶褐色土, 7; SD01, 17; SK22

注目される点としては、17世紀前半頃のものともみられる肥前系の伊万里染付磁器が含まれていること、亀岡以北ではあまり出土例のない19世紀の瀬戸美濃系の製品が出土していることなどがあげられる。

肥前系陶磁器 最も多いのは、伊万里染付磁器である。器種としては、椀が多い。

網目文椀(第20図1)は、一本引きの網目文が描かれており、17世紀後半頃のものともみられる。染付椀(第20図2)は焼成がやや甘く、釉色は灰味をおびる。17世紀に属するものか。染付椀(第20図3)は底部が厚手であり、いわゆる「くらわんか手」といわれるものである。体部外面には円文が、見込みには五弁花文が描かれる。18世紀後半頃のものか。青磁染付椀(第20図4)は、外面に青磁釉が施されており、見込みには五部花文が描かれる。18世紀後半頃のものか。寿字文椀(第20図5)は、体部および高台がやや薄手であり、18世紀末から19世紀前半頃にかけてのものともみられる。染付蓋付椀(第20図9)は、いわゆる「広東茶碗」といわれるもので、蓋(第20図8)が伴う。19世紀頃のものであろう。

染付皿(第20図12)は、厚手であり、見込みは釉が蛇の目状にかきとられている。蛸唐草文染付皿(第20図13)は、口縁部が輪花状になる。高台内には、おそらく「大明年製」と書かれていたとみられる。これらの染付皿は、18世紀に属するものであろう。

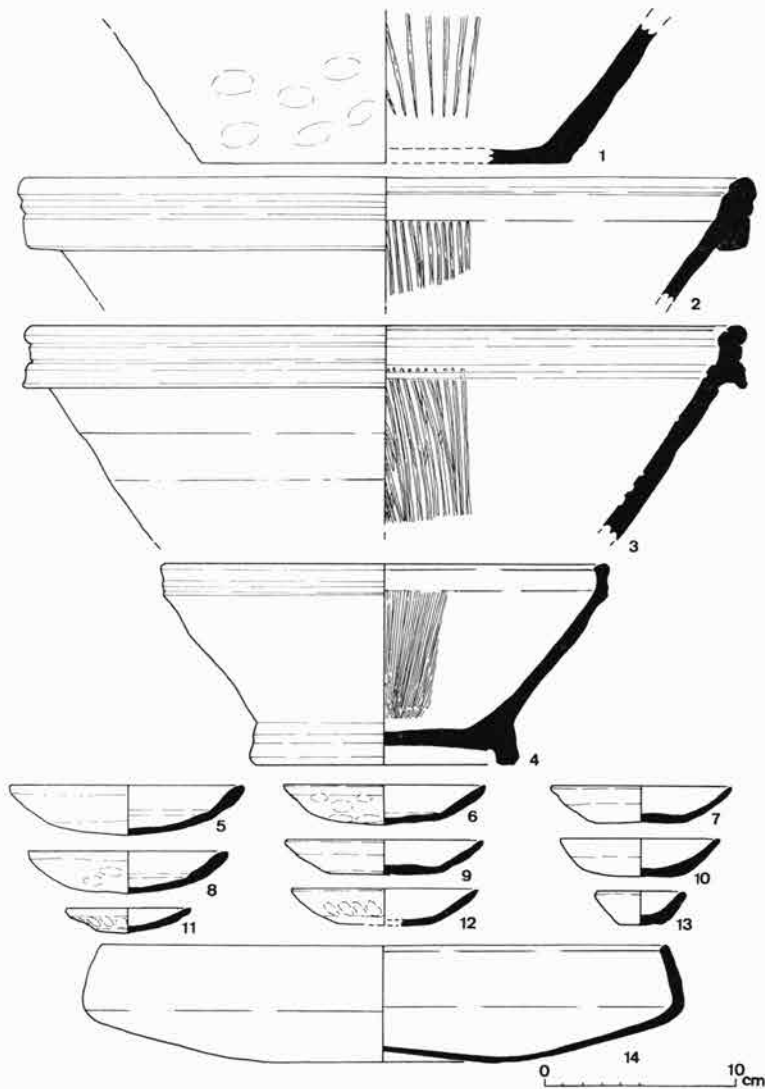
染付鉢(第20図14)は、口縁端部から口縁部内面にかけては無釉であり、蓋を伴っていたものか。口縁部外面には連続渦巻文を描き、体部外面にはヘラで縦方向の沈線を施す。17世紀前半頃のものともみられ、今回出土した伊万里染付磁器では最も古いものである。草花文染付鉢(第20図15)は、口縁端部が無釉であり、蓋を伴っていたものか。草花文の一部に、蛸唐草文に通じる表現があり、17世紀末から18世紀初頭のものともみられる。

山水文染付壺(第20図16)は、薄手の小形のものであり、18世紀に属するものか。水仙文染付向付(第20図17)は、半筒型のものであろう。18世紀後半頃のものともみられる。染付蓋(第20図20)は、短尺形のつまみを貼り付けるもので、鉢の蓋であろう。18世紀頃のものであろう。染付仏飯器(第20図21)は、脚部が「竹の節」状であり、17世紀後半から18世紀初頭頃のものともみられる。

以上の伊万里染付磁器のほか、陶質のものもある。椀(第20図7)は、灰釉系の釉を高台畳付以外に施すもので、17世紀後半から18世紀前半頃にかけてのものであろう。椀(第20図6)は、外面下半以外に褐釉を施している。18世紀前半頃のものともみられるが、瀬戸美濃系の製品である可能性も考えられる。

瀬戸美濃系陶器 椀(第20図44)は、「鎧茶碗」と呼ばれるものである。外面口縁部から内面にかけて褐釉が施される。外面体部に細かい刺突文があり、灰釉系の釉が施される。

鉢(第20図24)は、「御深井釉水鉢」である。外面に幅約1cmのV字形の掘り込み文様があ



第21図 出土遺物実測図(4)

1; SK05, 2~4; SK07, 5~9・11~13; 茶褐色土層, 10・14; SK22

り、その上に、いわゆる御深井釉が施され、さらに銅緑釉もしくは褐釉を掛け流す。

いずれも、19世紀前半頃の製品である。

丹波・備前陶器 すり鉢(第21図1)は内面に一本引きで播し目の沈線がひかれる。丹波の製品で、16世紀段階のものであろう。すり鉢(第21図2)は備前の製品で、口縁部の形態から、17世紀後半頃のものとみられる。すり鉢(第21図3)は同じく備前の製品で、2より口縁部が若干薄くなっており、18世紀初頭から前半頃に比定できる。

その他の陶磁器 碗(第20図10)は、体部外面に褐釉で字文が描かれ、器胎は磁質である。

生産地は不明。18世紀以降のものであろう。

鉢(第20図18)は、陶質の器胎に灰釉系の釉が施される。高台は無釉である。向付であろうか。京焼とみられ、18世紀以降のものであろう。

把手付鉢(第20図19)は、幅広の低い高台をもつ半筒型碗形のものである。半円筒状の短い把手が付く。これも向付であろうか。把手付鍋(第20図20)は、いわゆる「行平」である。以上の2点は、京焼に属するものとみられるが、地元亀岡の「医王谷焼」である可能性も高い。18世紀以降幕末にかけてのものとみられる。

すり鉢(第21図4)は、挿し目が細かく密である。体部外面に緑褐釉が施される。生産地は特定できない。18世紀後半以降のものか。

鉢(第20図23)は、いわゆる緑釉陶器である。厚手の器胎に緑釉を施す。生産地・時期とも特定できない。

土師質土器 皿が主体を占める。形態からみると、皿(第21図5・8・11)のように底部と口縁部の境が不明瞭なものと、皿(第21図6・9・12)のようにそれが明瞭なものがある。また、底部が糸ないしはヘラ切りで、その後回転ナデ調整を施したものもある。糸ないしはヘラ切りのものが後出するものであろう。

炮烙(第21図14)は、中央が盛り上がった底部から体部が内傾して立ち上がる。18世紀以降のものであろう。

5. ま と め

以上が今回の調査の概要である。当初目的とした亀山城三ノ丸跡にかかわる武家屋敷跡の遺構については、建物跡などを明確に検出することができなかった。しかし、その下層で、古墳・奈良時代の諸遺構を検出したことは予想を上回る大きな成果だったといえる。ここでは、今回出土した遺構・遺物をもとに、当地の土地利用の変遷を概括的に素描することで調査成果のまとめとしたい。

まず、今回の出土遺物から本遺跡の遡りうる上限についてみると、本文中でもふれたように第18図17に示した台付甕が注目される。台部の形態は、当地方の弥生後期末葉の鉢類に付されるタイプのものとは異なるようで、いわゆる「東海系土器」とされる「S字状口縁」を有する甕に付されるタイプに近い。この点、本土器の位置づけにとまどいを感じる。が、いずれにしても時期的には弥生後期末葉ないしは古墳時代初頭頃に比定しうる資料であり、本遺跡が少なくともこの頃までは遡りうることを示唆するものといえるだろう。

上記の遺物に続く時期は、竪穴式住居跡などを検出した古墳時代後期である。検出した遺構の中で、およその時期を把握できたのは6世紀中葉のSH30、6世紀末葉のSH31、7

世紀初頭のSK32であったが、出土遺物などからみれば、6世紀中葉から7世紀前半という時期幅を有するものが黒褐色土層中に包含されており、およそこの時期の遺構が当該地周辺に広がっていることは想像に難くない^(註10)。この時期、当地周辺は居住区として利用されていたのである。

視野を広げ、亀岡盆地全域において古墳時代後期に属する集落跡ないしはこれに類する遺構の確認された遺跡をみると、北金岐遺跡・千代川遺跡など数例をあげうるにすぎない。ただ、盆地の丘陵部に分布する後期古墳の数からみれば、その検出が遅れているにすぎないものと考えられ、今後の調査でその数が増加することは確実とみられる。ここで問題とすべきことは、後期古墳の分布が密に認められる盆地北部に対して、比較的希薄な当地域でこの時期の集落を発見したことであろう^(註11)。先に示したように、この近辺では亀山城本丸跡の地名が荒塚町と呼ばれるように、すでに消滅した古墳の存在が推測されている。今回の調査成果は、これが単なる推測ではなく、やはり近傍に古墳が存在したことを確実にしたといってもよいだろう。しかも、時期的にみて、一定規模の後期群集墳が存在した可能性が高いと考えられる。

黒褐色土層出土遺物や検出遺構からみて、7世紀後半から8世紀前半は空白に近い時期といえる。遺物の項でふれたように、格子叩きを施した古瓦片などがこの間を埋める資料になるが、1点のみの出土のためその時期の様相は不明と言わざるをえない。ただ、その出土は近傍に未確認の寺院跡ないしは古代官衙施設の存在を示唆するものであり、今後の調査でこういったものが確認される可能性は非常に高くなったといえる。また、このことは、桑田郡衙跡を三宅町に比定する説に対して貴重な資料を提供したと言えよう。

続く8世紀中葉から後半期には掘立柱建物が構築され、明らかに居住区として利用されている状況を確認した。今回検出した建物などの規模・形態が正確なものでないだろうという点についてはすでに示したが、それら建物跡の主軸の示す方向は、ほぼ東西南北を意識したものといつてよい状況にあった。従来から条里制の良好に残る当盆地内にあっても、斜行条里が認められる特異な地域と言われてきた当地周辺部で、こういった方向性を有する奈良時代の建物跡を検出したことは、その土地割りに対して、一つの問題を投げかけるものとなったといえるだろう^(註12)。また、建物跡の広がりなどを確認しえたわけではないが、上記の推定桑田郡衙跡と今回の掘立柱建物跡との関連も今後の課題としておきたい。

8世紀後半期以降、近世すなわち亀山城築城期までの間は、まったくの空白期となる。近隣に古世城など中世の城が築城されていたとの考えもあるが、当該地では中世に属する建物は全く出土しなかった。

亀山城期すなわち江戸時代の遺構についても、すでに述べたようにかなりの削平・攪乱

を受けており、江戸時代後半期から末葉頃の土壇や溝を検出したにすぎないという状況であった。亀山城築城期以降、幾度も人の手が増えられたと考えられ、中世から江戸時代前半期の遺構は、すでに消滅したものと理解される。

以上、簡単ではあるが、当該地における土地利用の変遷を追ってみた。しかし、調査の性格上、亀山城の築かれた広大な微高地上においてはごく一部における変遷をおぼろげながら明らかにしただけにすぎない。今後の調査に期待したい。

最後に、本遺跡の名称についてふれておきたい。ここでは丹波亀山城跡として報告したが、以上に述べてきたように当地周辺には弥生時代以来の集落跡も広範囲に広がっていることが確認されたわけである。すなわち、本遺跡は、すくなくとも弥生時代から奈良時代の集落跡及び亀山城跡を含み込んだ広大な複合遺跡であり、今後は遺跡の名称についても再吟味する必要があると思われる。

(森下 衛)

注1 慶長6(1601)年から同14(1609)年までは北条氏勝・権田小三郎と代官が続いているが、この27代の中に両名が入っており、実際の城主は25代となる。

土橋 誠ほか「丹波亀山城跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第7冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982 110頁の「歴代城主表」に拠る。

注2 亀山城跡に関する絵図は、現在のところ以下の3種類が残っている。

- ① 内閣文庫本(正保年間の製作と推定)
- ② 寛政五年山陰丹府桑田亀山図(寛政5(1793)年の作)
- ③ 浅野家旧蔵の絵図(元禄以前の作)

注3 調査参加者は以下のとおりである。

調査補助員 大西智也・森田ゆかり・横山憲郎・岩津博文・伊藤尚美・松田靖史

作業員 宇野三雄・法貴四郎・石野正男・高橋一義・田中寛治・植田武郎・西田初恵・中西ふみ子

調査協力者 田代美穂子

また、以下の方々からは調査の進行などの面で諸々の御協力を賜った。

永光 尚・樋口隆久・高野陽子・入野裕子・武内かおり・川勝 修・西井淳也・中西 宏

注4 注1文献において、亀山城築城の諸段階について詳しく検討がなされている。それによると以下のごとくである。

亀山城の築城・整備は大きく3期に分かれる。

第1期は、明智光秀の築城で、天正5～7(1577～79)年頃に相当する。かなり急な工事であったらしく、近在の社寺を破壊して用材を調達している。この間、光秀はいまだ丹波攻めの最中にあり、この段階の亀山城が近世の平城としての体裁を完備していたとは考えられない。丹波攻めのための拠点としての暫的なものであった可能性が高い。

第2期は、新規普請といわれ、諸大名も築城に手を貸したらしい。小早川秀秋(第4代城主)による築城・整備で、天正19(1591)年～文禄4(1599)年にわたる。この築城・整備によって、主に城下町が整備されたらしい。

第3期は、最も大きな整備で、3代の代官・城主(北条氏勝・権田小三郎・岡部長盛)にわたっている。費やした期間も慶長6(1601)年～元和7(1621)年にわたり、約20年間となる。この段階に至って、堀の形成がなされ、諸城門および天守が造営されたらしい。なお、この整備は、

その状況などから大坂城包圍網を完備するためになされた「天下普請」によるものと考えられる。

- 注5 注1文献では、注4でふれた、その築城過程に加えて本城の構造についても詳しく検討している。それによると、巨大な堀としての役割を有する大堰川へせりだす小丘陵上に内堀に囲まれた天守を置き、南へ向かって外堀に囲まれた二ノ丸・三ノ丸を、そしてさらにその外側には惣堀に囲まれた城下町を形成している。すなわち、三重の堀を持つ近世城郭であった。なお、詳細は注1文献を参照されたい。
- 注6 注1文献によると、前回の調査の際にも、須恵器片などが出土している。
- 注7 同様の事象は、亀岡市内の各調査(丹波国分寺跡や千代川遺跡、北金岐遺跡など)で確認されており、やはり黒褐色土の細分には苦勞している。しかし、実際これに成功し、明確な遺構面を確認しえた例はほとんどない。
- 注8 当地は亀山城廃絶後、亀岡高等学校建設前までは、畑や竹林として利用されていたようである。
- 注9 土地区画となれば、絵図などから考えて武家屋敷の区画をなしていた可能性も想定されるが、更に周辺部の状況が明瞭にならねば判断しかねる。
- 注10 この点について、調査地とは道路(クニッテル通り)を挟んで東側にある光忠寺の墓地には須恵器・土師器片が散布しているとのことである(亀岡市教育委員会樋口隆久氏の御教示による)。なお、本調査中に当地から南東約300mの地点で亀岡市教育委員会が立会調査を行った。その地点は外堀のあった部分に相当しており、やはり外堀の一部と思われる大溝が確認されたとのことである。しかし、そこでは亀山城の時期を遡る時期の遺物は出土しなかったとのことであった(同上)。
- 注11 おおざっぱにみて、亀岡盆地の東半部(大堰川東岸)や北半部(行者山山麓)には古墳時代後期の群集墳が多く確認されている。これに比して南半部(調査地近辺から篠町にかけての地域)には比較的その分布が希薄である。今回の調査結果は、これがすでに市街化したために破壊されてしまっている可能性を示唆したといえる。
- 注12 亀岡盆地においては、従来から整った条里制が遺存することが確認されていたが、そのなかにあつて、当地周辺(三宅町近辺)および当地と大堰川を挟んだ対岸の保津町(案察使周辺)に斜行条里が認められるといわれてきた。



4. 興戸遺跡発掘調査概要

1. はじめに

昭和62年7月、郵政省近畿郵政局建築部より現山城田辺郵便局庁舎の老朽化に伴う庁舎移転および新築工事を予定している地域内を対象とする埋蔵文化財の調査依頼があった。その開発予定地は、綴喜郡田辺町大字興戸小字犬伏5-3に位置しており、『京都府遺跡^(注1)地図』によるとこの付近は、周知の興戸遺跡に含まれることが明らかとなった。このため、当該地の遺構の有無を確認する目的で財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが主体となって発掘調査を実施することとなった。現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第3係係長小山雅人・同調査員伊賀高弘が担当し、昭和62年8月10日から10月13日まで実施した。

なお、当該地の現況は、宅地として周辺水田より一段高く造成されており、かつてここに技芸学校→田辺町教育委員会事務局・中央公民館→田辺町水道部事務局が所在していた。

調査に際しては、田辺町教育委員会をはじめとする関係諸機関から多大な御教示・御協力を賜った。また、発掘調査参加者の方々には、酷暑の中幾多の苦勞をかけた。ここに改めて厚く感謝の意を表したい。なお、本調査にかかる経費は、近畿郵政局が負担した。

2. 位置と環境

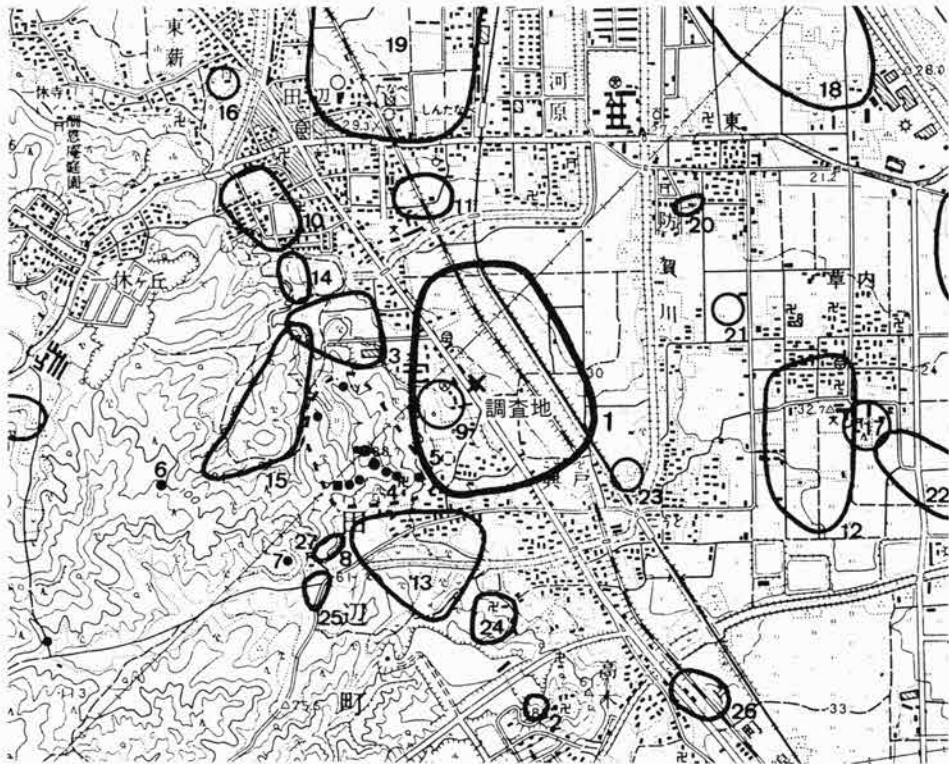
木津川の沖積作用によって形成された河谷平野である南山城盆地は、奈良県境から北へ約20kmの間は、幅2~3kmと狭長な地形を示す。田辺町は、この盆地の中央付近の木津川左岸に位置する。町域の東部は、沖積平地に一部のが、西域の大半は、標高200~300m程度の丘陵地帯で占められる。この丘陵は、構造的な造山運動によって形成された生駒山地の北延長部(通称京阪奈丘陵)で、基盤岩類の縁辺に洪積層の堆積が広くみられる。これらの丘陵を開析する中小河川は、大小の谷地形を形成しつつ木津川に流下しているが、崩落しやすい砂礫層(大住礫層・尊延寺砂泥互層等)を深く開析して多量の土砂を運搬するため、平野部では人為的改修もてつだって多くが天井川と化している。

調査対象地である興戸遺跡は、前記丘陵が沖積平野に移行する傾斜変換線を中心に広がる遺跡で、『京都府遺跡地図』によると東西600m・南北500mの範囲を占める。

今回の調査地の南方を東西に流れる防賀川は、現在のように天井川化される以前は、谷口に優美な扇状地形を形成していた。遺跡の南に接する興戸の集落は、その扇端部の豊富

な湧水のもとに成立した集落といえる。調査地は、興戸集落の北界から府道22号線(八幡-木津線)に沿って約500m北西に位置する。ここは、西側にかなり丘陵が迫っているものの、防賀川扇状地の北限付近で、その扇端部にかなり近接した地点と思われる。

次に、興戸遺跡周辺の歴史環境を簡単に概観する。調査地は、興戸遺跡の中に含まれるが、今回の調査地の西方の丘陵裾部に興戸廃寺が所在する。発掘調査が実施されていないので伽藍配置や遺構の構造等は明らかでないが、白鳳～鎌倉期の瓦類が多量に出土する。^(注3)興戸廃寺の西方の丘陵上に総数10基からなる興戸古墳群が分布する。古墳群の内、1号墳は、全長約24mの西面する前方後円墳である。2号墳は、直径28mの円墳で、粘土槨の主体部から仿製内行花文鏡3面以上、管玉、鍬形石、車輪石、石釧、鉄剣等が副葬されていた。埴輪の圍繞および葺石の存在も確認されている。5号墳は、弥生式土器の出土から弥生後期の方型台状墓の可能性が指摘されている。^(注4)興戸古墳群の南方、旧防賀川扇状地の谷



第22図 興戸遺跡および周辺遺跡分布図(1/25,000)

- | | | | | |
|------------|-----------|-------------|-----------|-----------|
| 1. 興戸遺跡 | 2. 天神山遺跡 | 3. 田辺遺跡 | 4. 興戸古墳群 | 5. 郡塚古墳 |
| 6. 稲葉丹後谷古墳 | 7. 酒壺古墳 | 8. 興戸宮ノ前竈跡 | 9. 興戸廃寺 | 10. 尼ヶ池遺跡 |
| 11. 河原遺跡 | 12. 南垣内遺跡 | 13. 興戸宮ノ前遺跡 | 14. 竹ノ脇遺跡 | 15. 田辺城跡 |
| 16. 東林遺跡 | 17. 草路城跡 | 18. 東神屋遺跡 | 19. 稲葉遺跡 | 20. 鍵田遺跡 |
| 21. 五反田遺跡 | 22. 宮ノ後遺跡 | 23. 下ノ河原遺跡 | 24. 興戸城跡 | 25. 川原谷遺跡 |
| 26. 野上遺跡 | 27. 酒屋神社 | | | |

口付近の通称北興戸の「里」と称する地区一帯が興戸宮ノ前遺跡である。ここでは、発掘調査によって防賀川旧流路が検出されたほか、中世の土器類が出土している。^(注5) さらに西方に鎮座する延喜式内社酒屋神社の社地内に6世紀末～7世紀前半の須恵器窯が1基確認されている(興戸宮ノ前窯跡)。^(注6)

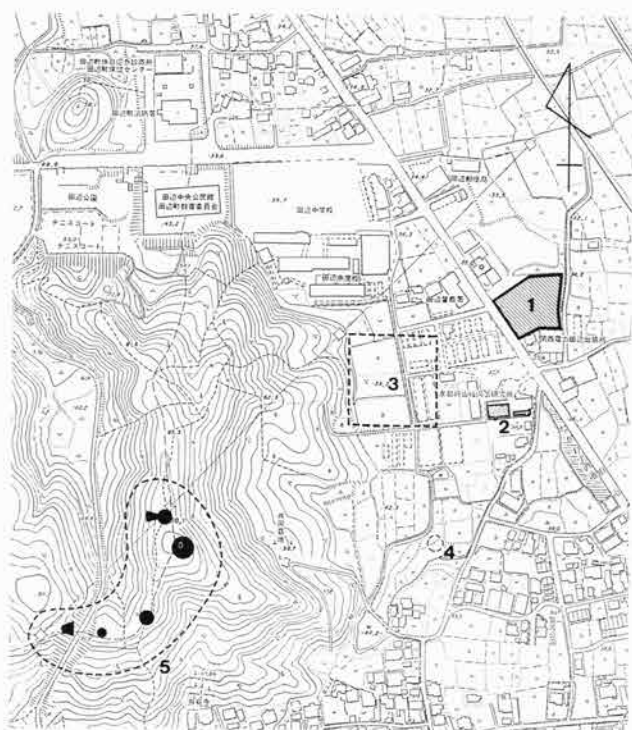
興戸遺跡の実態については、土器等が採取されているほか、過去に3回にわたって小規模な発掘調査が実施されており、遺跡全体からみればごく一部にすぎないが、その一端を窺うこと

ができる。すなわち、昭和50年の田辺中学校内の調査では、遺構は検出されなかったものの、埴輪や玉類といった古墳に関連する遺物や5世紀に遡り得る須恵器をはじめとする土器類が出土している^(注7)。一方、昭和54年の府立園芸研究所山城分場内での調査では、古墳時代後期の竪穴式住居跡2基、奈良～平安時代の整然と配された掘立柱建物跡群5基・溝6条が検出され、集落および官衙様建物群の存在が明らかとなった。この時の調査では、中期中葉～後期前半期の弥生式土器が出土し、当該期の集落等の遺構が近在することを窺わしめた^(注8)。以上の発掘調査成果のほかに、採取遺物からすると、この遺跡では、上記の遺構以外に、弥生時代以降各時期の遺物が散布することが判明している。^(注9)

3. 調査経過

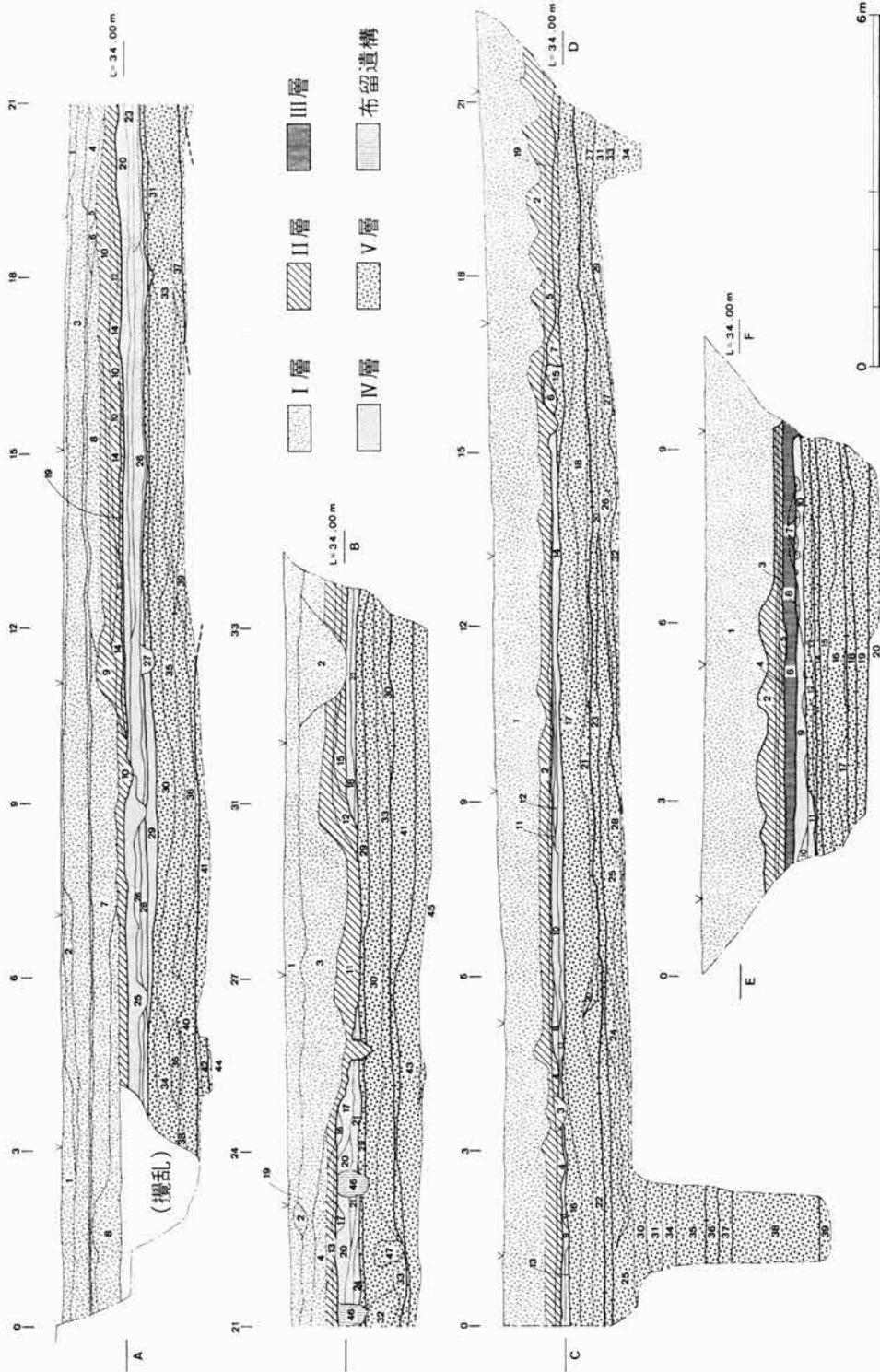
今回の調査対象地は、磁北に対し北で西に振る方向の西側の府道とほぼ南北方向に走る東側の里道に挟まれているため不整な矩形を呈しており、敷地面積は約3,600m²を測る。

調査区の設定に当たっては、基本的には、庁舎本館の建設予定範囲に調査の主眼を置いた。結果として、調査区が敷地西半に偏在することとなったが、東半部についても層位確



第23図 調査地位置図(1/7,500)

1. 今回調査地 2. 昭和54年度調査地 3. 興戸廃寺
4. 郡塚古墳(全壊) 5. 興戸古墳群



第24図 トレンチ土層断面図

土層名表

I トレンチ東壁断面 (A—B断面) 土層名

1. 褐灰色混礫土
2. 黒色土
3. (暗)灰色土
4. 灰色～暗灰色粘質土(礫・炭混)
5. 黒褐色腐植土
6. 淡褐灰色土(やや粘質)
7. (暗)灰色土(礫・暗灰色粘土混)
8. 淡緑灰色砂質土(礫混)
9. 暗灰色砂質シルト
10. 暗灰色粘質砂土
11. 黒灰色土
12. 灰色砂質土
13. 黒灰色粘砂質土
14. 茶褐色土
15. 黄褐色土(小礫・砂混)
16. (暗)黄褐色砂
17. 淡褐灰色砂礫
18. 淡灰褐色砂(同色小礫層縞状混)
19. 茶褐色砂質土(灰色土少混)
20. 灰褐色砂質土(暗茶色土斑状混)
21. 褐灰色粘土
22. 灰色粘土(黄色粘土混)
23. 褐灰色粘土(灰褐色砂質土混)
24. 褐灰色粗砂礫
25. 褐灰色砂質土
26. 淡褐灰色砂
27. 淡褐灰色砂
28. 褐灰色土
29. 暗褐灰色(粘質)砂土(腐植土)
30. 青灰色粘質砂
31. 褐灰色粘質砂
32. 淡青灰色粘質砂
33. 淡青灰色細砂質シルト
34. 淡青灰色粘質砂
35. 褐灰色混礫土
36. 淡青灰色砂
37. 淡褐灰色粘質砂
38. 淡褐灰色粗砂礫
39. (暗)褐色砂
40. 淡灰褐色細砂
41. 暗灰色シルト質砂(腐植土)
42. 暗灰色シルト質細砂(腐植土)
43. 灰色砂(やや粘質)
44. 灰色粘質砂(細粒子)
45. 暗褐色土(やや粘砂質)
46. 暗茶褐色粘質砂土(灰色粗砂・暗褐灰色粗砂混)
47. 暗茶灰色砂質土

II トレンチ南壁断面 (C—D断面) 土層名

1. 茶褐色混礫土(下半淡緑灰色混礫土)
2. 黒灰色粘質砂土
3. 暗灰色土
4. 暗灰色粘質砂土
5. 灰色土(やや砂質)
6. 暗灰色土(黒灰色シルト灰色砂質土混)
7. 暗灰色シルト(やや砂質)
8. 灰褐色砂質土(やや粘性を帯びる)
9. 淡灰褐色砂質土
10. (暗)褐灰色土(やや粗砂っぽい)
11. 黄褐色粘質土
12. (暗)褐灰色土(やや粘質)
13. 淡褐灰色粘土(淡青灰色粘土・黄褐色粘質砂土斑状混)
14. 灰褐色砂質土
15. 褐灰色砂質土(淡茶灰色砂質土混)
16. 灰色砂(やや粘質)
17. 青灰色砂(小礫少混)
18. 淡青灰色粘質細砂(黄茶色酸化斑混)
19. 茶褐色粘質砂土
20. 淡青灰色粘質細砂(純粹)
21. 淡黄灰色粘質細砂(灰色粘質細砂混)
22. 淡青灰色粘質細砂=18
23. 暗茶灰色砂質土(暗灰色細砂質シルト混)
24. 淡灰褐色砂
25. 淡青灰色粘質砂(淡灰褐色粘土混)
26. (暗)灰色シルト質砂土
27. 暗灰色シルト質砂土(26より暗い色)
28. 淡灰色粘質細砂
29. 淡褐灰色粗砂礫
30. 暗灰色粘土
31. 灰色砂(灰色粘質細砂混)
32. 淡青灰色粘質細砂(黄灰色粘質細砂縞状混)
33. 淡褐灰色粗砂礫
34. 灰色粗砂礫(灰色粘砂・灰色シルト質砂混)
35. 黒褐色シルト(下半黒褐色砂質シルト)
36. 灰色砂
37. 黒灰色砂土(硬く締まる, 上半暗黄茶色砂土)
38. 灰色砂・(暗)灰色砂質土・灰色砂礫の互層
39. 黒色土(土質の詳細は不明)

III トレンチ東壁断面 (E—F断面) 土層名

1. 暗灰色砂質土
2. 黒灰色土
3. 灰色土
4. 淡灰褐色砂質土
5. 灰褐色土
6. 褐灰色土
7. 褐灰色砂
8. 黄褐色土
9. 灰茶色土
10. 灰色粘土
11. 灰褐色粗砂礫
12. 淡褐灰色砂(小礫混)
13. 淡青灰色細砂質粘土
14. 暗灰色粘質砂土
15. 淡青灰色シルト質砂
16. 淡青灰色シルト質細砂
17. 淡青灰色シルト質砂
18. 暗灰色砂質土
19. 灰色砂(粗砂質)
20. 暗灰色粘質砂

認を目的とするサブトレンチ(Ⅲトレンチ)を付設してこれを補うこととした(調査面積約600m²)。調査に当たっては、敷地が一面の宅地として盛土造成されているため(敷地東縁で水田面との比高約1.5m)、相当量の掘削土量が予想された。このため、調査方法として大型土木重機(0.4~0.7バックホー、10tダンプ)を使用して旧耕作土下面まで掘削し、合わせて層位確認を目的とする断ち割りをトレンチの一方の側に設けた。この際、客土の崩落防止・湧水対策として適宜ベンチカットおよびのり切りを行ったため、実質上の調査面積は、掘削面積を下回る(掘削面積の約70%)。

調査地内の層序は、場所により若干の差異があるものの、基本的には上位よりⅠ. 宅地造成の際の盛土、Ⅱ. 耕作土、Ⅲ. 灰色系混礫土、Ⅳ. 褐色系の砂質土、Ⅴ. 青灰色系のシルトおよび砂となる。Ⅰ層は、更に数層に細分でき、数次にわたって宅地が造成されたことを物語っている。Ⅱ層は、当地が宅地化される以前の畑または水田の耕作土および耕地造成土で、敷地西寄りでは畝の形状がよく残っている。Ⅲ層は、布留期の遺物が少量ながら出土するので、同期の包含層と考えられる。Ⅳ層は、比較的硬く締まった砂質シルトと崩落しやすい砂(礫)からなる。また、同層には植物質腐蝕土を多量に混入した暗茶灰色系の硬く締まった砂質土が、数10cm程度の層厚で間層として入る。特にⅡトレンチ深掘部ではこれを4面(標高33.3m, 32.1m, 31.4m, 29.6m)確認した。Ⅳ層以下は、広義の流れ堆積で、当地が防賀川による河川堆積土によって厚く覆われていることがわかる。また、Ⅲ層以下は、各層とも自然地形に沿って西から東へ緩く傾斜しているが、耕地造成の際、地形を水平化させる目的で山側を削っているため、その上位に位置するⅢ・Ⅳ層は、削平を受け、後者は敷地西寄りでは残存せず、また前者はⅢトレンチに認められるにすぎない。

4. 検出遺構

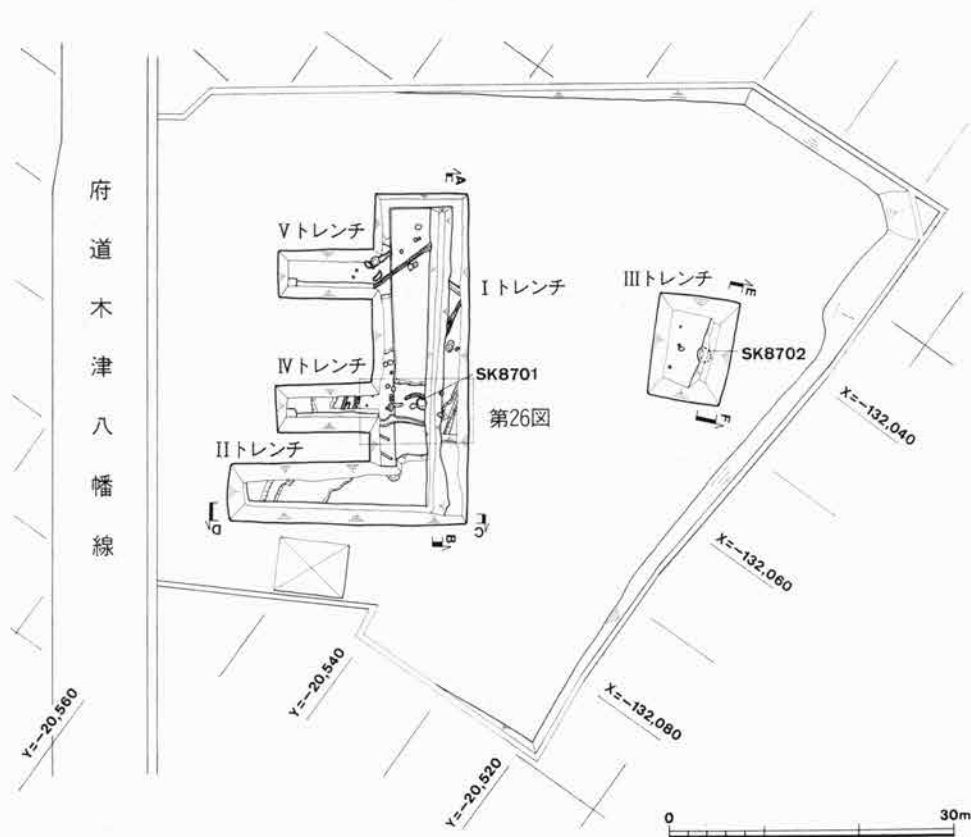
今回の調査で検出した遺構は、土坑および小規模な溝状遺構である。これらは、帰属時期から古墳時代と近世以降に大別されるが、自然に開析されたものなど時期不明なものも少なくない。後者は、小規模な溝状をなすものが多く、主として耕作溝や地境溝等近年の耕作に関連するものが大半で、遺構平面図には載せるものここでは詳述しない。古墳時代の遺構は、Ⅳ層上面で検出したもので、貯蔵穴様土坑2基とピット状土坑である。

ピット状土坑は、伴出遺物を根拠に同期と判別したが、遺物を伴わないものについても坑内埋土の類似するものを含めて各々に番号を付した。これらは、一見貯蔵穴様土坑の周辺に集中する傾向をみせるが、これは古墳時代の遺構面の残存状況に対応するものである。掘形の形状は主に円形プランで、直径20~50cmの規模を有する。中に直径15cmの柱痕穴を残すものがあり(P1・2・4・6)、これらは明らかに柱穴とみなし得る。調査範囲の関係もあ

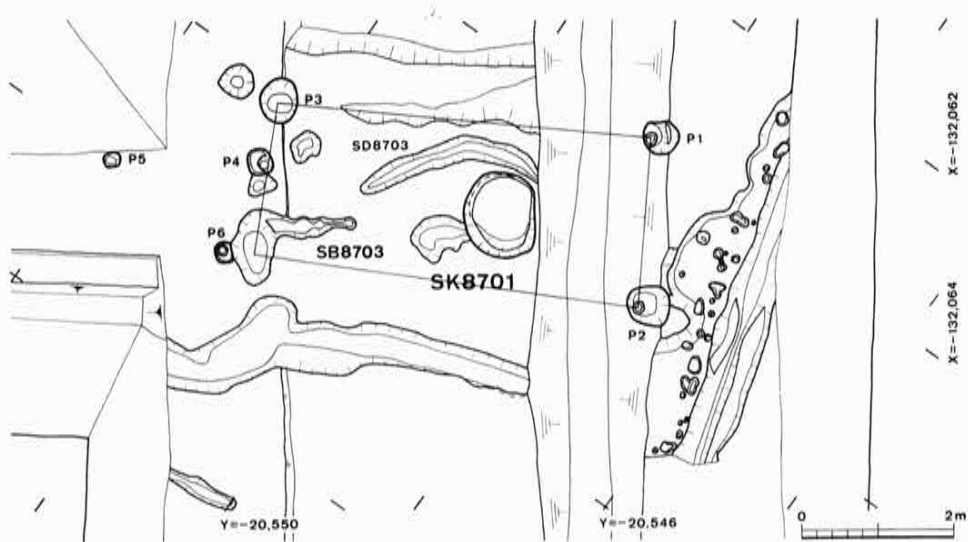
って建物としてまとめ難いが、あえて復元したのがIトレンチ中程のSB8703である。桁行1間? (柱間寸法4.5m)、梁間1間(同2.2m)のやや矩形を呈する東西棟(主軸方位N31°30'W)の掘立柱建物跡で床束はない(第26・28図)。

SK8701は、Iトレンチ南寄りで見出した貯蔵穴様土坑である。現状では、IV層上面から掘り込まれ、底はV層に深く達する。形状は、やや南北に長い円形プランを呈し(長径120cm、短径100cm)、比較的平坦で面をもつ底部(直径約40cm)から側壁が垂直に近く立ち上がり、外縁付近で、大きく外上方に広がる2段構造の断面形を示す(検出面からの深さ70cm)。坑内には明確に分層可能な土層が7層にわたって水平を基準に堆積しており、各層位から布留期の土師器がややまとまって出土した。いずれも破片と化していたが、坑底付近において小形丸底壺1個体が甕(破片)体部内にあたかも据え置かれたような状態で出土した(第26・27図)。

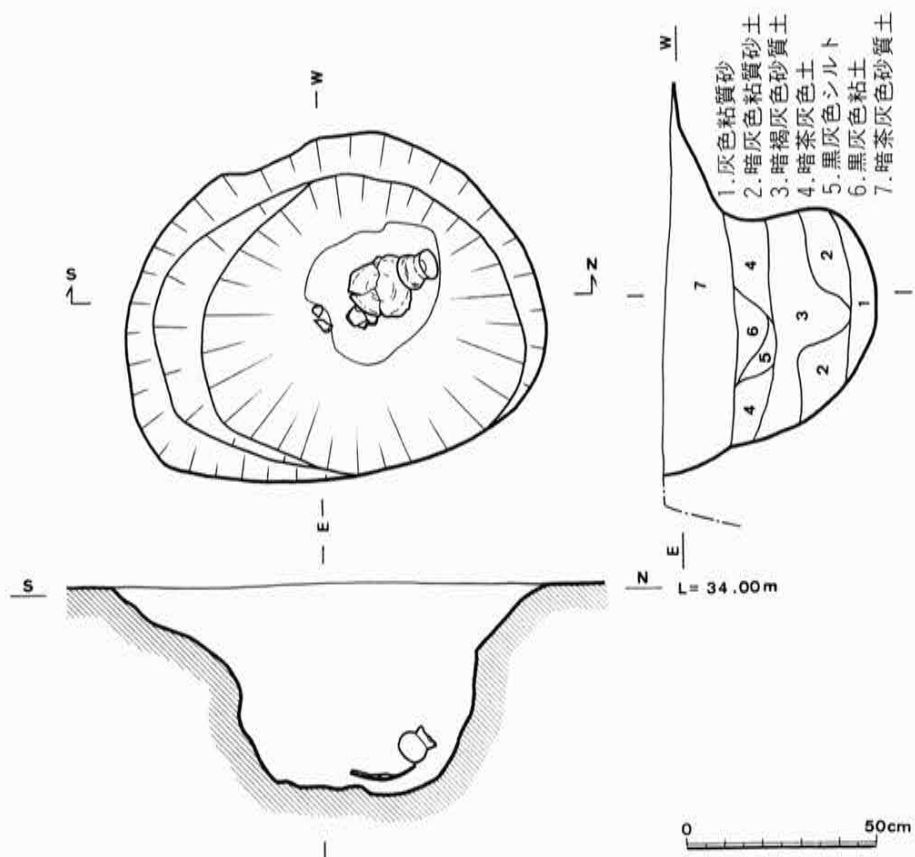
SK8702は、IIIトレンチ東寄りで見出した貯蔵穴様土坑である。調査の過程で東半分を断ち割った関係で、規模を明確にできないが、トレンチ壁面まで達しないことから直径150



第25図 トレンチ配置図

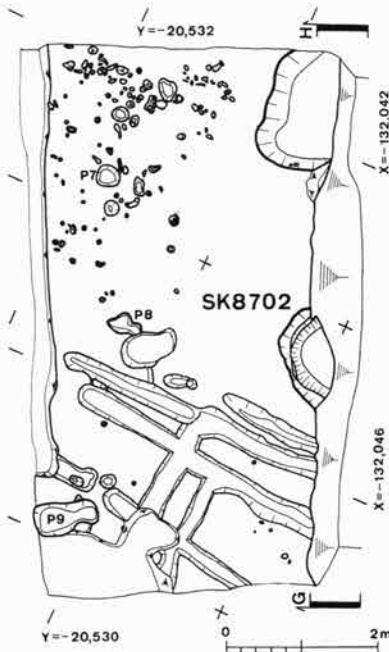


第26図 遺構実測図(Iトレンチ部分)

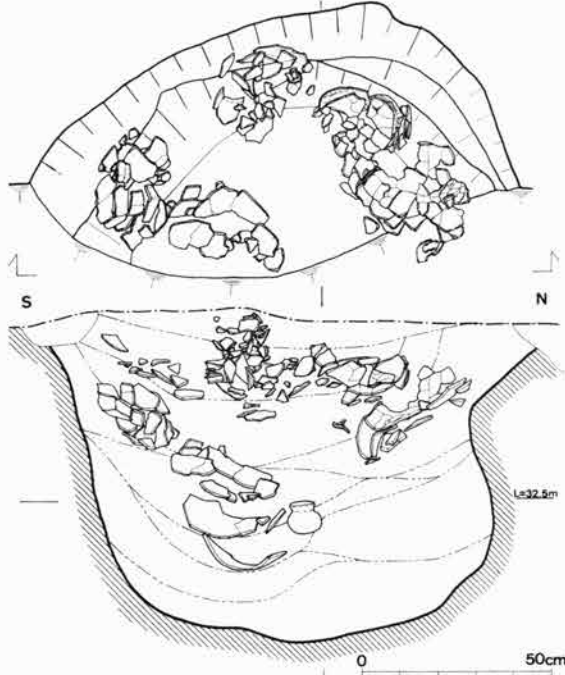


第27図 SK8701 実測図

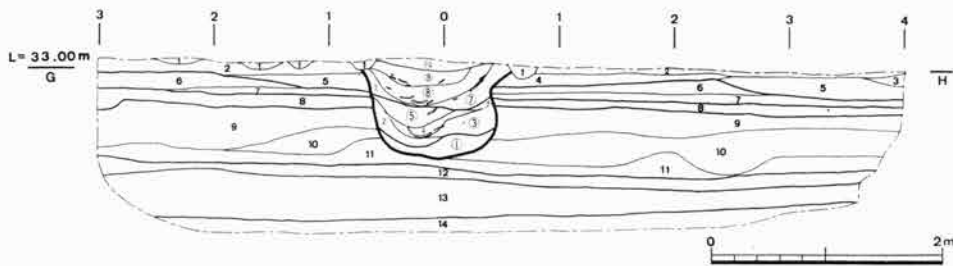
cm程度の円形プランを呈するものと推定される。Iトレンチと比べしっかりした灰色粘土層(IV層相当)を成立面としており、坑底は、硬い第2腐植土層(V層間層)に達する。断面形は、SK8701と変わるところがなく、相対的にやや規模が大きい(底径100cm, 検出面からの深さ90cm)。側壁が部分的に袋状を呈するか所については、軟弱地盤の崩落に起因す



第28図 遺構実測図(Ⅲトレンチ)



第29図 SK8702 遺物出土状況図



第30図 SK8702 断面図

1. 褐灰色砂(素掘り溝埋土)
 2. 暗褐灰色土(やや砂質)[IV層]
 3. 暗青灰色砂質土[IV層]
 4. 灰色粘土(やや酸化)[IV層]
 5. 暗褐灰色砂礫
 6. 灰色砂[以下V層]
 7. 淡青灰色粘質砂
 8. 暗(茶)灰色粘質砂土(腐植土)
 9. 淡青灰色細砂質シルト
 10. 灰色粗砂礫(灰色粘質細砂混)
 11. 灰色粗砂(黄色粘質砂混)
 12. 黒灰色粘質砂土(腐植土)
 13. 灰色砂(灰色粗砂混)
 14. 暗灰色粘質細砂(シルト質)
- SK8702内埋土**
- ①. 黒灰色粗砂質土(青灰色砂ブロック状混)
 - ②. 暗灰色シルト質粗砂
 - ③. 黒灰色粘質土(暗灰色シルト質粗砂・黒灰色砂質シルト・黒色シルトの互層)
 - ④. 黒灰色シルト(暗灰色粘質粗砂混)
 - ⑤. 暗灰色粘質粗砂
 - ⑥. 灰色粘土(やや酸化)
 - ⑦. 暗灰色粗砂土(やや灰褐色っぽい)
 - ⑧. 暗茶褐色土(灰褐色砂質土・黒灰色シルト・小礫混)
 - ⑨. 黒褐色土(やや粘質)
 - ⑩. 暗褐灰色土(やや砂質)

ることが埴底最下層に青灰色系砂が混入していたことから判明する。伴出遺物は布留式併行期の土師器で、各層位から出土している。埴内には、細かく分層すると、土層が10層にわたって堆積しているが、これらはよく観察すると埴内⑤層と同⑦層の間で上下2層に大別することが可能である。すなわち、各大別層中においては各層はレンズ状に堆積するが、埴内⑤層まで堆積した段階で埋土上面を一端水平にならした形跡が認められる。土埴内の堆積土のうち、最下層の①層を除く各層位から布留期の土師器がまとまって出土している。その量や破片の大小は層毎に変化がみられ、④・⑧・⑨層下面で相対的に多く出土した。とりわけ⑧層下面(⑦層埋積上面)では多数個体が緩く外上方に傾斜する埋積面に埋設するような様相を呈し、また、埴底近くの④層下面では、他の破片に混じり完形の小形丸底壺1個体が正立した状態で出土した(第28・29・30図)。

BD8703は、SK8701の北に接して東西流する小規模な(幅30cm)溝状遺構である。現状では、削平により両端が途切れ(残存長2.5m)、またSK8701とは直接重複しない。断面形(大きく外上方に開くU字形)および埋土(灰褐色砂質土による流れ堆積)から自然開析されたものと思われる。内部より石廬丁1点が出土した(第26図)。

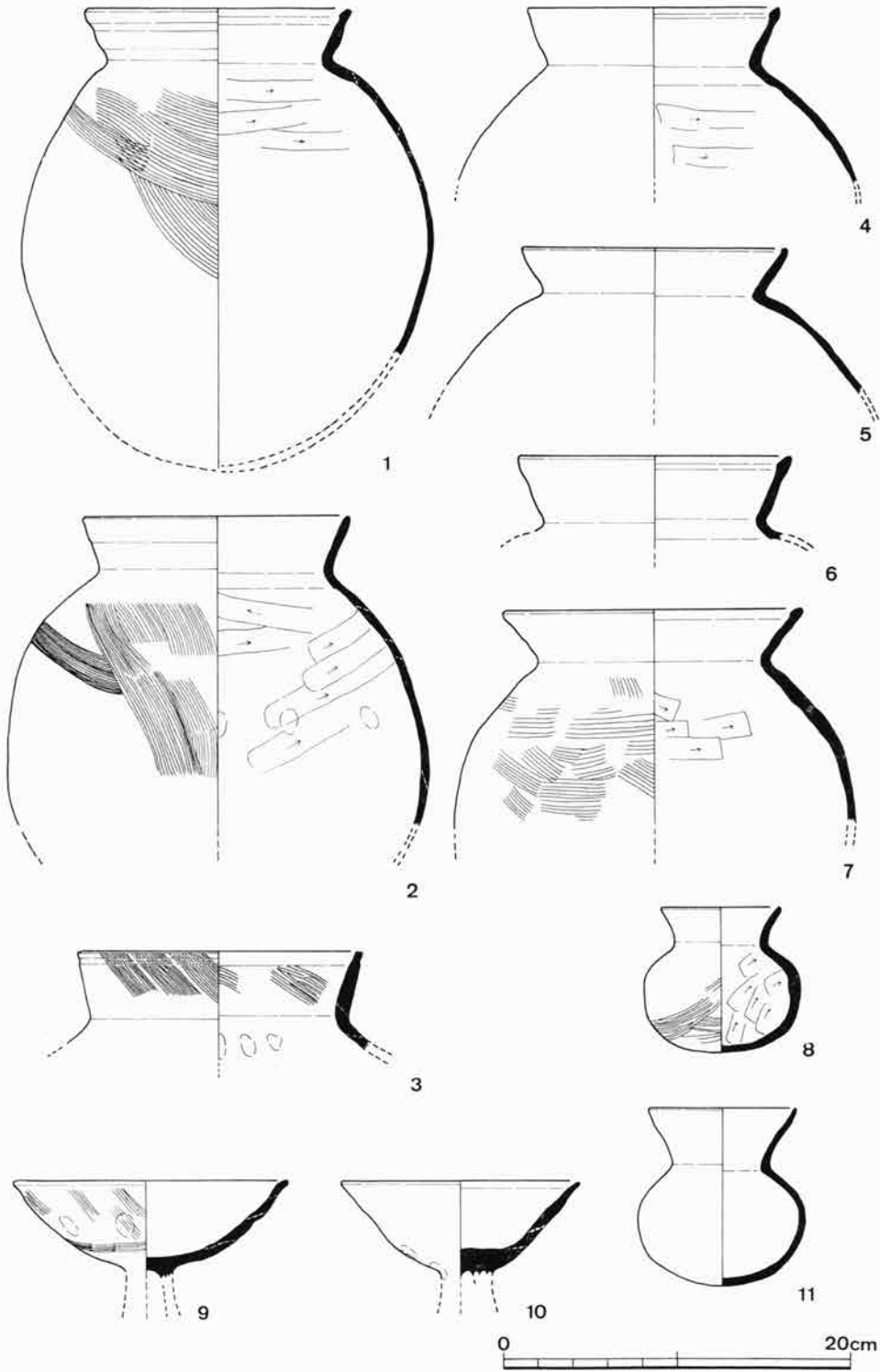
この他、Ⅱトレンチでは、布留期の遺構面がほとんど残らないことを確認した上で、これを掘り下げ、Ⅴ層の第2腐植土上面で遺構検出を試みた。結果、トレンチ主軸に斜交する方向性をもった浅い溝状の落ち込み(幅約5m・深さ約40cm)を検出したが、時期を同定し得る遺物の出土をみなかった(腐植土層内部より土器細片1点が出土したに留まる)。

5. 出土遺物(図版第14, 第31・32図)

今回の調査によって出土した遺物は、コンテナバットにして約5箱相当を数える。ほとんどが貯蔵穴様土埴より出土したもので、布留期に包摂される土師器である。それ以外の遺物としては、Ⅰ・Ⅱ層中より奈良～現代に至る遺物が若干出土したが、いずれも細片で、古手は磨耗度が強く二次的混入品と考える。ここでは、前者の遺構伴出遺物について簡単に説明を加える。

土師器(図版第14, 第31図) 甕・高杯・小形丸底壺・鉢・壺等の器種がある。

甕は、土埴内出土土器の大半を占める器種である。全般に保存状態は悪く、体部中位以下の遺存度は低い。球形に近い長胴球形の体部を有し(1・2より)、口縁は、わずかに内湾ぎみに外上方へのびるのを一般とする(3・7は直線状にのびる)。口縁の接合線付近と口縁上半では、体部との接合および端部の造作を目的として顕著にナデつけるため、接合部外面は内方にくびれ、口縁の厚さは中程において最大となる。口縁端部の形態は、口唇部を内傾させて肥厚させたもの(1・4～7・他3個体)と口唇部を単純に丸くおさめるもの

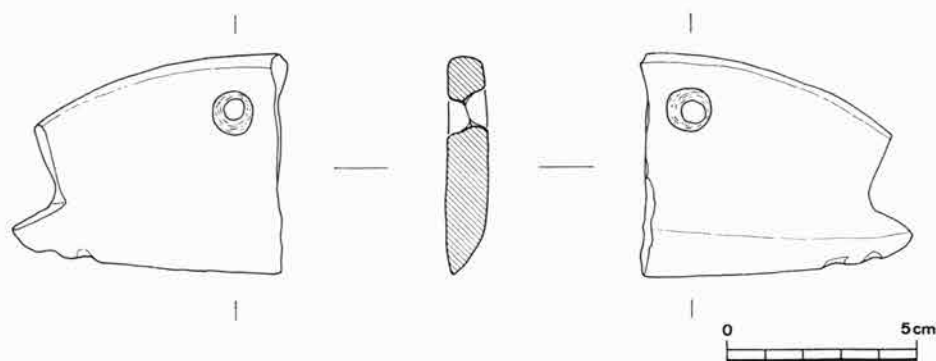


第31図 出土遺物実測図

(2・他4個体)があり、前者が全体の半数を占める。また、口唇部の上方にやや外傾する方向の面取りをもつもの(3・他1個体)が若干みられる。肥厚面が内傾する類型は、外面端部を丸くおさめるものを一般とし、これはさらに内面に大きく幅のある内傾面をもつもの(6・7)、内面に大きく内傾させるだけでなく外面にも若干肥厚させるもの(1・4)、小さく内面に肥厚させるもの(5)等に細分できる。外面調整技法は、体部全般調整→体部上半(肩部)調整→口縁調整の順でなされるのを一般とする。体部全般には、斜めあるいは傾斜する方向をも含め全体としてタテ方向基調のハケメを施す。これらは、方向性が一定するもの一ランダムに施すもの、緩慢なもの一重複してていねいに施すもの等の区別がある。肩部の調整に関しては、これを施すものと省略するもの(2・他2個体)とに大別でき、その比率は6:3である。前者は、横ハケを用いるもの(7・他5個体)と斜めハケでこれに代用させるもの(1)に細分できる。口縁の調整は、細かい条痕が認められる横方向のナデが用いられるが、ナデに先行する粗い縦ハケが残るものもある。ナデの施される範囲は、内外面とも口縁の接合線より数cm下位に達し、この部分先行する調整が消される。体部内面調整は、ケズリ手法が多用される。横方向を基調とし、くびれ部の数cm下位から施す。体部下半を残す破片の中には縦方向のケズリが認められるものがある。また、底部付近には指頭による押捺手法が顕著なものとケズリによってそれがほとんど残らないものが存在する。胎土は、全体に砂粒(長石・チャート)の混入が目立ち精良とはいえない。焼成は甘いものが多く、保存状態も概してよくない。

小形丸底壺は、3個体相当確認した。8は、扁球形の体部に外反ぎみに開く口縁をもつもので、口縁高は器高の4分の1程度で、口径は体部最大径より小さい形態を示す。体部調整は、外面を断続的な横ハケで調整した後、底部付近を一定方向にヘラケズリしてやや平底風に造作する。内面は、全面にわたり下から上へ斜め方向のヘラケズリを用いる。口縁部は、横ナデするが、これは外面では体部上半にまで及ぶ。また、口縁内面には先行する横ハケがわずかに残る。暗灰色を呈し、焼成良好だが、厚手で粗製の感は免れない。11は、扁球形を呈する体部にやや内湾ぎみに外上方へ開く口縁部を具備するもので、器高の3分の1の口縁高を有し、口径は最大腹径をわずかに下回る。赤灰色(一部黒斑をもつ)を呈し薄手の精製品であるが、器表の磨耗が激しく調整技法の詳細を知り得ない。わずかに体部外面に横ヘラミガキが、また口縁外面に左上がりハケが痕跡として残る。他の1点は、くびれ部付近の小片で、体部と口縁部の接合部が顕著な横ナデで凹線状にくぼむ形態を示す。口縁と体部外面を横ナデ、体部内面を押捺手法で調整する。

高杯は、杯部のみで、3~4個体を数える。いずれも広義の有段高杯の範疇に入るが、その最も退化した形式に属する。つまり、体部と口縁部間の接合稜線が不明瞭であり、9



第32図 石庖丁実測図

では内面のくびれもほとんど認められない。比較的保存状態のよい9で調整技法を概観すると、外面は、左上がりハケの後、口縁部に限り横ナデを用い、体部と口縁下半部にオサエが残る。また、接合部付近のみ断続的な幅の狭い横ハケがみられ、接合稜線を平滑に仕上げる。内面は、左上がり斜めハケの後、横ナデ調整している。他の1点も同様の手法を用いる。脚柱部との接合は、いずれも充填法による。

この他の器種として、台付鉢の鉢部、子杯を付設する装飾高杯？、短頸壺？の口縁部等があるが、小片であるため図示しない。

石器(第32図) 石庖丁がある。

石庖丁は、SD8703から出土したもので、表面にかなりの鉄分やマンガンの沈着がみられる。厚手の造りで、刃は片刃に研ぎだしている。平面形は、背部が大きく外湾し、刃部は緩く外湾する形態を示す。穿孔は、研磨後に両面から行っている。石材は、風化が進んで白色化した花崗岩質アブライトを用いる。^(注10)

6. 貯蔵穴様土坑内堆積土壌の花粉等微化石分析の結果(図版第15, 第33図)

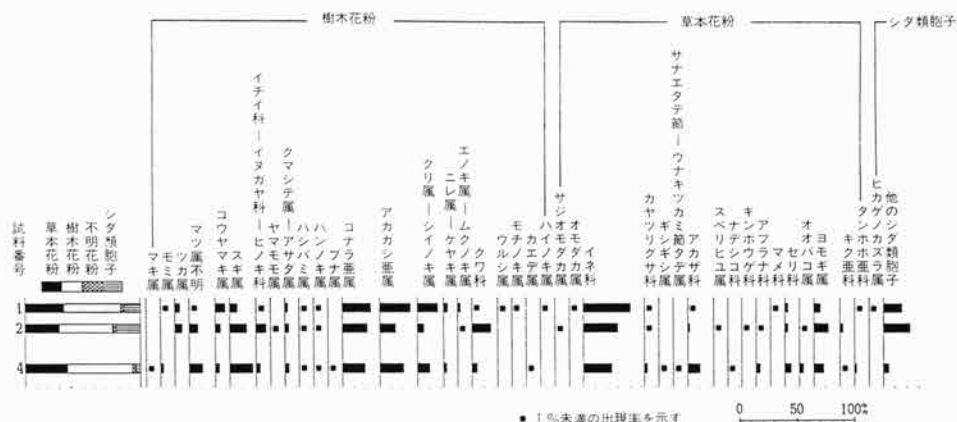
貯蔵穴様土坑について古植生および自然環境の復元を目的として、その内部埋土の花粉等の微化石分析を実施した。その結果を簡単に紹介する。土壌サンプルは、1・2:SK8702③④層の2地点から任意に抽出したもの、3:SK8701下層出土の小形丸底壺内土、4:SK8702③層出土の小形丸底壺内土、の4点を試料とした。分析の方法・過程はここでは省く。

以下、分析結果の計数に基づいた花粉化石群集変遷図を第33図に示す。ここで出現率とは、樹木花粉ではその総数を、草本花粉の場合、総花粉・孢子数から不明花粉数を除いた数を基数として百分率で算出したものである。分析結果に基づく花粉・孢子化石の産状は、試料3でほとんど検出されなかったのを除き、含有量は少ないものの各試料から良好な保存状態で検出された。検出された試料1・2・4は、いずれもSK8702内に堆積した土壌であ

り、これらはほぼ類似する微化石の出現傾向を示す。すなわち、これらの出現率をみると、樹木花粉のコナラ亜属・アカガシ亜属、草木花粉のイネ科の高率出現が目立ち、他に樹木花粉のスギ属・クリ属—シイノキ属、草木花粉のヨモギ属がこれに伴う特質がみいだされる。これらから、遺跡地周辺にシダ類・ナラ類等の落葉広葉樹とシイ類・カシ類等の照葉樹からなる森林が成立していたことが想定される。また、試料採取地点の周辺にはイネ科植物や人里や畑などで普通にみられるオオバコ属等が生育し、さらに水生植物のオモダカ属などが生育する浅い水域が存在したことが判明する。これらの分析結果を既存の古植生の研究成果に照合させた場合、興戸遺跡周辺のナラ類等の落葉樹は、約2,000年前以降に始まる人為的植生干渉の影響を受けた結果、生育するようになった二次林の構成種であった可能性が指摘される。^(注11・12)

7. ま と め

今回の調査では、古墳時代前期の土壌が検出された。当該期の遺構の検出は、過去に土器類は採取されていたものの、興戸遺跡においては初見であり、当遺跡が弥生時代(石庖丁・弥生式土器の出土による)から大きく断絶することなく連続と機能していたことが判明した。ところで、古墳時代の遺構面であるIV層は、先述のごとく近年の耕地造成にともなう地形改変により、敷地西半部では大きく削平を受けて、遺存状態が悪いことがわかった。すなわち、今回の調査の主眼である基礎建物建設予定範囲は、この敷地西寄りに偏しているため、当該期の遺構の残存状態は決して良好とはいえない。反面、敷地東寄りのⅢトレンチの状況から判断して、古墳時代の遺構面は、敷地東半部では比較的よく保存されているものと推量される。古墳時代の遺構は、ピット(柱穴)状土坑と中規模円形土坑であるが、



第33図 興戸遺跡における花粉化石群集変遷図

上記削平による遺存範囲の狭さ、およびその一部しか調査し得なかったことから、それらの性格を具体的に追及し難い面が残される。ここで敢えて後者を「貯蔵穴様」と冠した根拠を列挙すると以下の諸点に要約できる。(1)従来の貯蔵穴資料に形態・規模において類似点が求められる。つまり、円形を基本とする平面形、平坦で底部から垂直に立ち上がる壁面が上半で大きく広がる断面形(いわゆる2段掘り塚)等の形態的特質を持つ。これに規模・立地・削平状況等を勘案すれば、屋外貯蔵穴の類型に最も近いものである。特に、二段構造は、被覆材による土坑密閉を考慮したものと考えられる。(2)完形もしくはそれに近い土器が出土する(塵捨塚の否定要因)。完形品の埋納行為は、土器自体を貯蔵容器に供し、内部に貯蔵物を入れた状態で土坑内に埋納した現象を示すものとする。但し、すべての土器が上記のように用いられたものではないらしく、細片化した土器片が少なからず認められることから、貯蔵穴の機能が喪失した時点での塵捨塚への転用に際し混入したものが多く含まれるようである。(3)堆積状態より、一定期間を経て自然埋没した形跡が認められる。このことは、即時に埋め戻す必要のある墓の可能性を否定するものである。以上の諸点をもって貯蔵穴にこの遺構の性格を求めたわけだが、これを屋外貯蔵穴とすると周囲に住居跡を含む居住域の存在が想定される。今回のピット(柱穴)の検出は、掘立柱建物の存在を窺わしめるものであり、その一部を垣間見たのかも知れない。最後に、貯蔵穴様土坑から出土した遺物について考察を加えたい。これら土坑内遺物は、広義の布留期に属する土師器類であり、甕が器種構成の過半を占めることは前項で触れた通りである。両土坑間の形式差に関しては、保存環境の相違に起因する土器の遺存状態(SK8702のそれが高い)から、厳密な比定は困難であるが、両者に差は見出し難いようである。次に、各土坑の堆積過程における層位間の土器の変化であるが、SK8701では、各層からの絶対量が少なく、かつ遺存度の悪さも手伝って正確に観察できないが、概ね同一形式の範疇で把握可能な一括の共存資料と考えられる。一方、SK8702の場合、検出遺構の項目で述べた大別層の上下2区分に対応する若干の形式差が認められる。出土数は、上層が圧倒的に多く、下層は小形丸底壺1点(8)と甕数片にすぎない。両者を比較した場合、下層出土の甕の器厚は2~3mm前後と極めて薄く、上層のそれと際立った差を示すのを根拠とする。但し、小形丸底壺からこの形式差はわずかなものである。要するに、両土坑間に廃棄の同時性を認めて大過ないものと考えられる。具体的な時期設定については、以下に挙げる土器の特徴から布留期でも新しい段階に設定できる。まず、甕では、長胴球形の体部形態、肥厚内傾に混じり単純に丸くおさめる口唇部形態が散見されること、肩部外面の横位ハケ調整の退潮、底部内面の押捺技法の省略、等が代表的な要素として挙げられる。小形丸底壺では、形態そのものが新しい段階に出現または盛行する形式(11=A・8=D₁形式)であること、粗製化^(註13)

の進行(8), 外面のハケメ(ミガキ退潮)・内面の粗いケズリ(ナデ・ハケ退潮)等の調整技法上の新相, 等が挙げられる。高杯の場合, 形態そのものの新相(B₆形式), 調整技法の簡素化(ミガキ退潮等)に代表される。これらを敢えて既存の編年案に照合すれば, 大和地域の編年ではあるが, 寺沢編年^(注14)の布留3~4式, すなわち同氏が「典型的な布留式」に続く「広義の布留式」と称する布留Ⅱ式に包摂される資料ということができる。

(伊賀高弘)

- 注1 京都府教育委員会『京都府遺跡地図』第5分冊〔第2版〕(昭和60年3月)
- 注2 調査参加者(順不同・敬称略)
水野哲郎・佐藤正之・穎娃ちか子・梶本真由美・北岡里絵・村本香奈子・島原みどり・坂田千晶
- 注3 田中重久「平安奠都の寺趾と其の出土瓦に就いて」『夢殿論誌』18(昭和13年)
田辺郷土史会『田辺町郷土史一社寺篇』(昭和38年)
田辺町教育委員会「田辺町遺跡分布調査概報」『田辺町埋蔵文化財調査報告書』3(昭和57年)
- 注4 梅原末治「田辺町興戸古墳」『京都府文化財調査報告』21(昭和30年)
田辺郷土史会『田辺町郷土史一古代篇』(昭和34年)
奥村清一郎・西川英弘「興戸古墳群発掘調査概報」『田辺町埋蔵文化財調査報告書』2(昭和56年)
田辺町教育委員会 注3文献
- 注5 奥村清一郎・西川英弘・伊辻忠司「興戸宮ノ前遺跡発掘調査概報」『田辺町埋蔵文化財調査報告書』2(昭和56年)
- 注6 吉村正親 他「田辺町遺跡分布調査概報」『田辺町埋蔵文化財調査報告書』3(昭和57年)
- 注7 江谷 寛・粟野 護『北鉢立遺跡』(昭和50年)
- 注8 山口 博・大槻真純「興戸遺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-1)』(昭和55年)
- 注9 田辺町教育委員会 注3文献
本調査終了後, 田辺町教育委員会によって興戸遺跡内の発掘調査が実施されている。この調査地は, 当地の南西約300mの地点で, 調査面積は小規模ながら, 11世紀後半の完形土器を多量に包含する東西方向の溝, これに斜交して重複する弥生中・後期~古墳時代後期の溝が検出された。なお, 田辺町教育委員会と次数の調整を行い, 本概要報告分を興戸遺跡第4次調査とした。
- 注10 石材鑑定および観察は, 京都府立山城郷土資料館 橋本清一氏による。
- 注11 当該項目は, 花粉分析業務を朝日航洋株式会社に委託し, その分析結果および報告原稿をもとに伊賀が執筆した。
- 注12 深泥池団体研究グループ「深泥池の研究」(2)『地球科学』30巻2号(昭和51年)
前田保夫「大阪湾の自然史一潜函でとらえた海と盛りの変遷一」『科学』47巻9号(昭和52年)
安田喜憲「大阪府河内平野における過去一万三千年間の植生変遷と古地理」『第4紀研究』16巻4号(昭和49年)
- 注13 土器の形式分類は, 樫原考古学研究所編『矢部遺跡』(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊)による。
- 注14 注13に同じ。

5. 長岡京跡右京第281次発掘調査概要

(7ANNKN-3 地区)

1. はじめに

この調査は、京都府長岡京市友岡一丁目1-1に所在する、府立乙訓高等学校の体育施設建設工事に伴う事前調査である。

調査地は、高校敷地の中央部西側の運動場北西端で、長岡京の条坊復元図によれば、右京七条二坊十六町に相当する。このため、京都府教育委員会管理課、文化財保護課と協議した結果、発掘調査を実施することになった。

調査地の西側とは3m以上の比高差がある。これは、乙訓高校が造られる以前、西山からのびる段丘の東端を昭和初期に造成し、長岡競馬場を開設したときの観覧スタンドの痕跡である。競馬場の痕跡は、乙訓高校、北接する竹の台団地等の地形に、明瞭に残っている。そして、競馬場造成以前、教室棟付近が谷状地形であったことが旧地形図からわかる。



第34図 調査地位置図 (1/5,000)

乙訓高校の右京第79次^(注1)調査では、競馬場のコンクリート溝と土壇が検出されたのみである。東端の右京第193次^(注2)調査では、3m以上ある盛土層の下から競馬場造成前の水田畦畔・土壇、その下層から谷地形(自然地形)が検出されている。

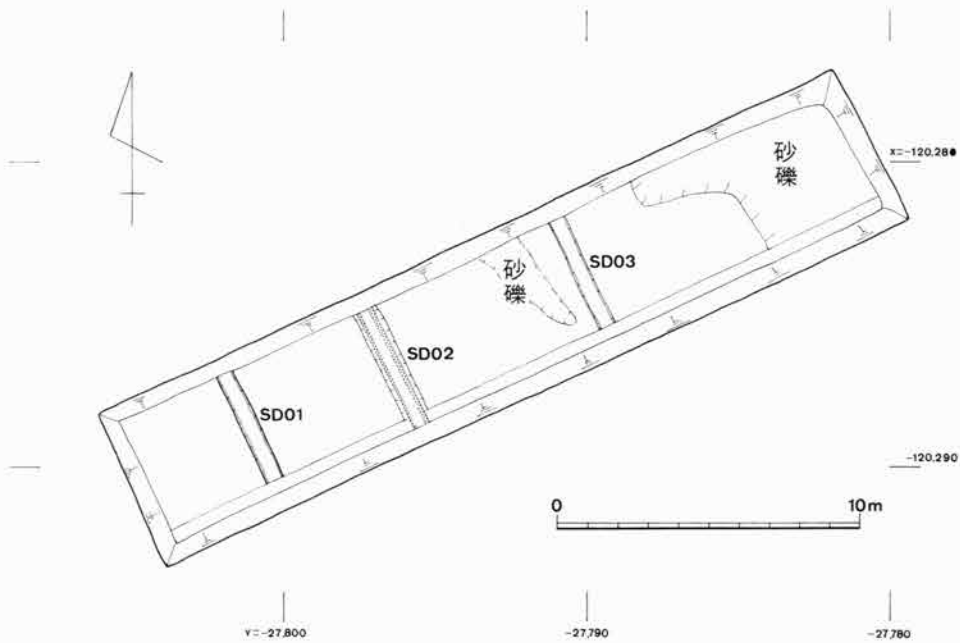
乙訓高校周辺(東側)は小規模な宅地開発が継続しており、これに伴って発掘調査の回数も増加している。右京第102次^(注3)調査では、長岡京期の木簡等の遺物が出土した東西溝が検出され、右京第135次^(注4)調査では、長岡京期の掘立柱建物跡・柵列跡等が検出されている。右京第208次^(注5)調査では、長岡京期の掘立柱建物跡・南北溝等が検出され、南北溝は西二坊坊間小路側溝と推定されている。その他の調査でも、長岡京期の井戸跡、中世の井戸跡をはじめ、古墳時代～中・近世の遺構、遺物等各時期のものがある。中世の遺物には、乙訓地域の土器編年を解明する上で重要なもの^(注6)が含まれている。これらのことから、削平を受けていない場所には、長岡京期～中・近世の遺構が残っていることが推測される。

現地調査は、京都府教育委員会の依頼を受けて、昭和62年10月9日に開始し、11月6日に終了した。調査にあたって、乙訓高等学校、長岡京市教育委員会、財団法人長岡京市埋蔵文化財センター、長岡京跡発掘調査研究所の御協力を得た。また、現地調査、図面・遺物整理には、学生諸氏等^(注7)の参加・協力があった。記して謝意を表す。なお、本調査にかかる経費は、すべて京都府教育委員会が負担した。

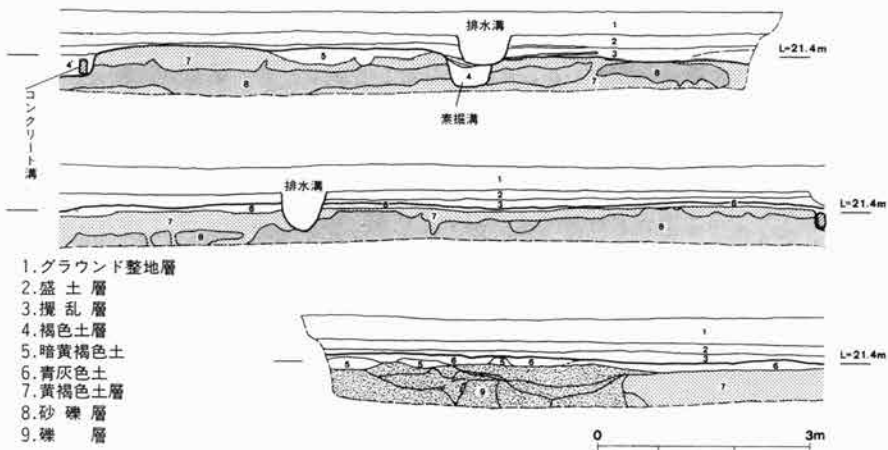
2. 調査概要

現地調査は、グラウンド北西端の一段高くなったバスケット・バレーコートに、幅4m・長さ10mのトレンチを設定し、重機で盛土層の掘削から開始した。ここでは、グラウンド整地層・盛土層・攪乱層の下から、黄褐色土層・砂礫層が表れる。黄褐色土層の一部は、水分等により変色している。これらの層を掘り込んだ4本の溝が検出された。グラウンド排水溝(SD03)・コンクリート溝(SD02)・素掘溝(SD01)である。コンクリート溝・素掘溝は、遺物の出土はないが段丘削平以後のものと推測される。両者は、平行していることから同時期の、競馬場の側溝と推定できる。遺物としては、陶磁器片が少量出土したのみである。黄褐色土層は、堅く締まり、部分的に砂礫を含む「地山」と推定される。

この調査では、以上のとおり顕著な遺構・遺物は検出されず、段丘の削平が判明した。なお、調査にあたって長岡京跡基準点54-2・54-6を使用して測量を実施した。平面図は国土座標でしめた(国土調査法施行令で定められた17座標系によるもので、座標番号はVI系である。Xは南北軸・Yは東西軸を示す。)



第35図 調査地平面図



第36図 南壁断面図

3. おわりに

今回の調査では、右京第79次調査と同様なコンクリート溝・素掘溝等が検出されたのみで、競馬場の造成に伴う段丘面の削平により、長岡京の条坊等は検出されなかった。

乙訓高校の西半分は造成による削平が著しいが、東側では遺構の検出が期待される。

(石尾政信)

- 注1 山口 博「長岡京跡右京第79次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第3冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982
- 注2 石尾政信「長岡京跡右京第193次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第20冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986
- 注3 岩崎 誠「右京第102次調査略報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報 昭和57年度』財団法人長岡京市埋蔵文化財センター) 1983
- 注4 岩崎 誠「右京第135次調査略報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報 昭和58年度』財団法人長岡京市埋蔵文化財センター) 1984
- 注5 小田桐 淳「右京第208次調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報 昭和60年度』財団法人長岡京市埋蔵文化財センター) 1987
- 注6 原 秀樹「右京第222次調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報 昭和60年度』財団法人長岡京市埋蔵文化財センター) 1987
- 注7 補助員 藤原ひとみ・今石和美

6. 長岡京跡右京第266次発掘調査概要

(7ANKHT-Ⅲ地区)

1. はじめに

塚本古墳は、過去3度の調査結果から、全長32mを超える前方後円墳に復原された。そして、後円部の一部が五条大路と重複するため、長岡京の造営との係わりが一段と注目されるに至った。

今回の調査は、長岡京市開田三丁目(旧小字名 東塚本)を東西に走る府道開田神足線の拡幅工事に伴って実施したものである。当該地は、長岡京条坊復原図によれば、右京六条二坊八町にあたり、五条大路のすぐ南側に位置し、上記塚本古墳の後円部の一部と重複する。そのため、本調査では長岡京の造営のみならず、同古墳の規模、消滅時期等を確認できる資料が得られるものと期待された。

現地調査は、京都府乙訓土木事務所の依頼を受けて、昭和62年6月8日から同年7月31日まで行い、当調査研究センター調査第2課調査第3係長小山雅人、同調査員竹井治雄が担当した。調査面積は約90m²である。

調査にあたり、長岡京跡発掘調査研究所々長中山修一氏に御指導を頂き、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターの方々のお助言、御協力を得た。記して感謝の意を表す。なお、発掘調査に係る経費は、全額京都府乙訓土木事務所が負担した。

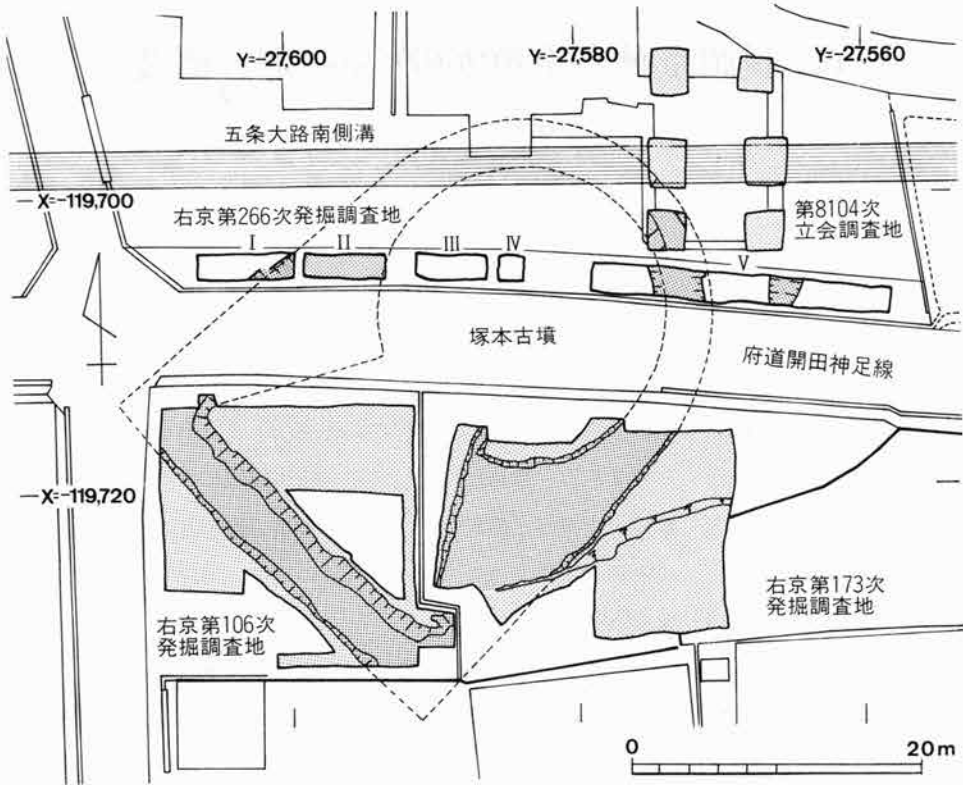
2. 調査経過

本調査では、隣接する民家の排水溝、進入路を確保するため、小刻みに幅2mのトレンチを5本設定し、西側からⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴトレンチと名付けた(第38図)。掘削作業に先立って、基準点測量と平板測量を行い、あらかじめ周濠の推定位置を道路上に示した。

掘削作業は、Ⅰ→Ⅴトレンチの順に盛土、耕作土を重機で除去した。その結果、Ⅰ・Ⅱトレンチでは地表下0.3~0.5mの近世層に埴輪が混入しているのが確認でき、これ以後、下層については緻密



第37図 調査地位図(1/25,000)



第38図 トレンチ配置図

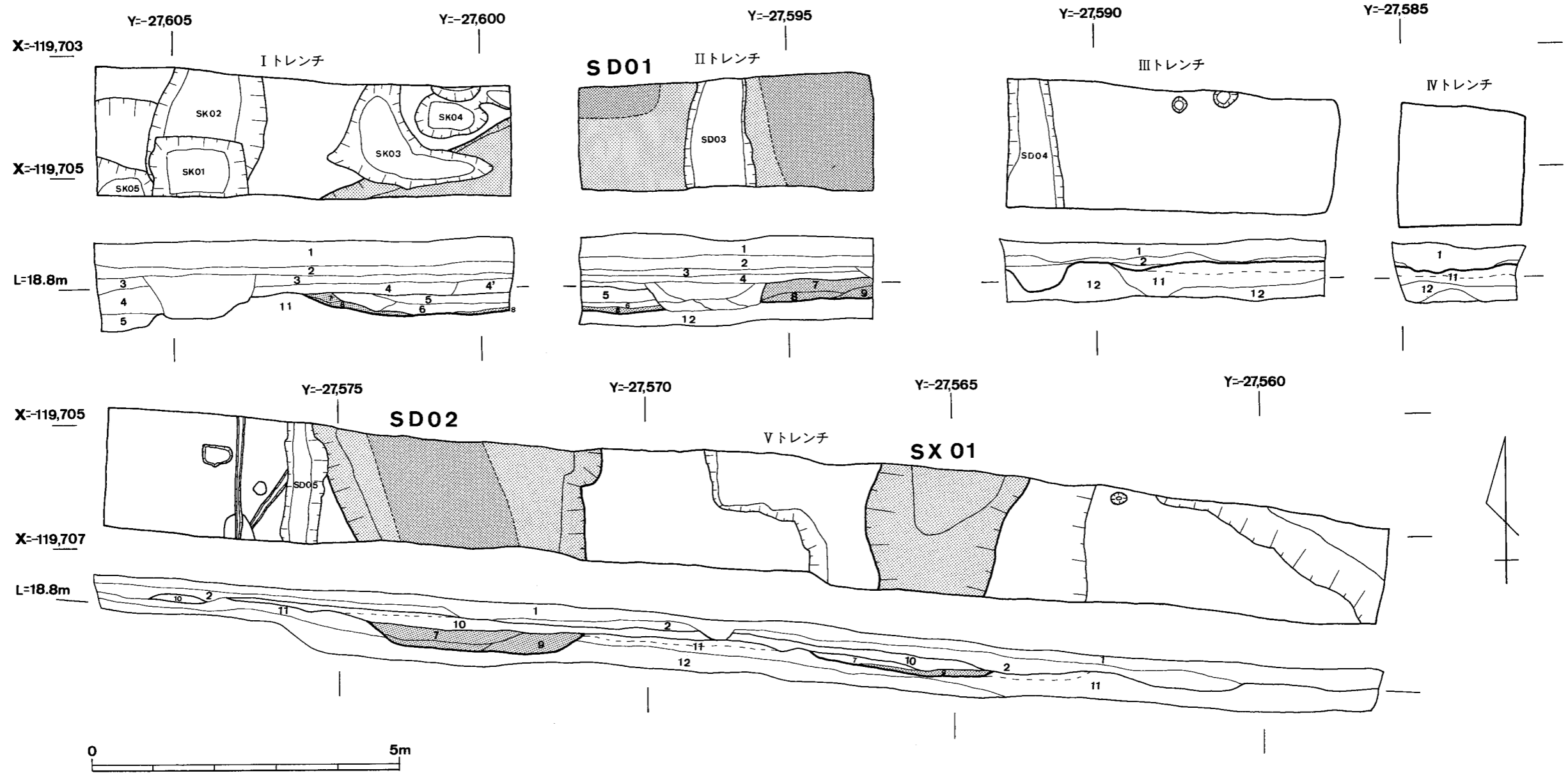
な調査を行った。Ⅰトレンチの周濠(SD01)は、近世の土壌によって大きく攪乱を受けていた。Ⅲ・Ⅳトレンチでは、盛土・耕作土以下、部分的に遺物包含層が認められるものの、地表下0.3mで黄褐色粘質土及び砂礫層(地山)が現われ、Ⅴトレンチで周濠(SD02)が検出できた。

周濠内には、埴輪を多量に含むため、精査に時間を費やさねばならなかった。検出遺構は、縮尺1/20の遣り方測量で記録し、あわせて写真撮影を行った。調査終了間際に、Ⅱトレンチから、家形埴輪、盾形埴輪等を多量に採集した。

3. 検出遺構

今回の調査で検出した遺構は、2か所で周濠(SD01・02)・落ち込み(SX01)・柱穴・近世土壌・溝等である。周濠は、従来の復原された位置にはほぼ収まる。以下、周濠を中心に各遺構について概観する。

SD01 Ⅰトレンチの東半部及びⅡトレンチ全域で検出された塚本古墳の西側の周濠である。平面形をみると、SK03・SK04の近世土壌によって大きく攪乱され、長さ0.5mの直



- | | | |
|-------------------|------------------|------------|
| 1: 盛土 | 5: 暗褐色土+黄褐色土 | 9: 黑色粘質土 |
| 2: 耕作土 | 6: 茶灰色粘質土 | 10: 暗褐色粘質土 |
| 3: 茶褐色砂泥 | 7: 黒褐色粘質土 | 11: 黄褐色粘質土 |
| 4: 褐灰色粘質土 | 8: 黄褐色土、黒褐色粘質土含む | 12: 黄褐色砂礫 |
| 4': 褐灰色粘質土、暗褐色土含む | | |

第39図 各トレンチ検出遺構実測図

線的なプランが残っている。この土壇群を掘り下げ、底部に至ってわずかな痕跡を見出した。濠の本来の堆積土は黒褐色土であるが、濠の肩口と底面に薄く残存しているだけである。埴輪の出土量も少ない。Ⅱトレンチでは幅1m・深さ0.6mのSD03(近世溝)が中央に走る。この溝を境に東西の堆積土が異なる。西半部は暗褐色粘質土(黄褐色土混り)、茶灰色粘質土が厚く堆積し、一方、東半部には、黒褐色粘質土・黒色粘質土が安定している。この後者の層に埴輪が多く含まれる。埴輪の形態は、円筒埴輪・朝顔形埴輪・盾形埴輪、その他不明形象埴輪等がある。これらには、完存品がなく、破片で散在している。また、長岡京期の土師器杯・須恵器杯等の土器も混在している。

周濠は、外堤側を確認することができたが、後円部側の立ち上がりは判明しなかった。周濠底面の標高は、18.3mを測る。

SD02 Vトレンチ中央西よりで検出された東側周濠である。平面形を見ると、後円部側は、SD05(排水溝)によってやや乱れてはいるが曲線をなし、外堤側は、北側でややふくらみをもち、黒色土が堆積している。周濠は、幅3.4m・深さ0.5mを測り、断面皿状を呈している。底面の標高は、18.5mである。周濠内の堆積土は、暗褐色粘質土・黒褐色粘質土・黒色粘質土の順に堆積しており、主に黒褐色粘質土の中から長岡京期の土器とともに埴輪が出土した。埴輪には、円筒埴輪・盾形埴輪・朝顔形埴輪等がある。このなかで、円筒埴輪は、比較的残存状況が良好なものが多い。また、出土状況からみて、後円部側から投げ棄てられたものと推察される。

SX01 SD02から東へ4.2mの位置にあって、溝とも土壇とも考えられる落ち込み状の遺構である。幅0.2m・深さ0.2mと浅い。堆積土は、暗褐色粘質土・黒褐色粘質土であり、埴輪片も少量含まれ、SD02と酷似している。

その他の遺構 Vトレンチの墳丘部には、封土がまったく認められず、削平されたものと考えられる。この墳丘相当部上で柱穴2個を確認した。円形を呈し、直径0.3m・深さ0.2mを測る。堆積土は、暗褐色を呈し、土師器片・須恵器片が含まれる。これらは平安時代の遺構、遺物である。
(竹井治雄)

4. 出土遺物

今回の調査では、埴輪・土師器・須恵器・近世陶磁器など、各種遺物が出土した。ここでは、主として周濠SD01・SD02から出土した埴輪について報告するに止める。

(1) 円筒埴輪(第40図, 図版第19)

コンテナ25箱分が出土した。うち、1箱分が朝顔形埴輪である。朝顔形埴輪は、最低1個体を確認できるのみで、全体を復原できるものはない。外面ではタテハケ、内面では、



第40図 埴輪実測図および拓影

(1～6：円筒埴輪，7：盾形埴輪筒部，8～10：円筒埴輪ヘラ記号)

口縁部で断続的なヨコハケ，胴部でハケメの後にナデを行う。胎土はクサリ礫・チャートを含み，焼成は軟質で，色調は乳白色である。

普通円筒埴輪は，底部が多く残っていた。形態的には，タガ4条をもって5段とし，器壁の立ち上がりは，外傾度が比較的小さい。法量は，高さ・口径を把握できる資料は少ないが，高さ50cm前後・口径25cm前後・底径12～23cmを測り，底径17～19cmの例が最も多

い。タガは低い断面台形で、貼り付けに伴う横ナデは概して雑である。透孔は、円形で、唯一の復原例では、^(注3)2・3・4段に市松文様状に配する。ヘラ記号は、すべて最上段にあり、第4段透孔の真上に配する。「○」が2点(1・8)、「×」が3点(9・10)あり、後者のうち1点は、太い原体で小さくしるす(10)。ヘラ記号とハケメの単位との関係は、「○」及び小形「×」では5～6本/cm、大形「×」では8～10本/cmのハケメを施す。胎土は、全体に砂粒を多く含み粗い。含有鉱物によって3類型に分類できる。色調は、乳白色・橙色・灰色など焼成状態によって様々である。焼成は、概して良好であり、須恵質の埴輪が全体の1/2を占める。調整については、外面はタテハケを原則とするが、1点のみタテハケの後に4本/cmの粗いヨコハケを断続的に施す。内面は、口縁部では斜めハケまたは横ハケを断続的に施す場合と、ナデのみの場合とがある。胴部では縦方向のナデと指オサエが主であるが、縦ハケ後にナデを施す例がある。底部は、40個体中32個体が底部調整を行うが、その方法はバラエティに富む。各種底部調整について略記すれば、外面では板オサエ(1・3・5)、板ナデ(4)、指ナデ(6)、ヘラケズリ(2)があり、板オサエには、木目痕を明瞭に残す例(3)と、縦長に押さえつけた稜線を残す例(5)とがあり、板ナデには、板の端部があたった痕が線状に残る例と、最下段タガ以下のハケメを消し去る例(4)とがある。内面ではユビオサエ(4)・ヘラケズリ(1・2)がある。

以上の特徴から、当墳の円筒埴輪は、川西編年^(注4)のV期に比定できる。また、乙訓地域の当該期の古墳である舞塚^(注5)、中ノ段古墳^(注6)と比較すると、舞塚ではタガが低く、全体に器壁を薄くして底部調整を略すほか、内面はほとんどナデ調整である。中ノ段古墳では断面三角形のタガが存在する。これらを製作上より簡略化の進んだものとみることができれば、本例はこれらより若干先行する可能性がある。

(2) 家形埴輪(第41図、図版第20)

ここに報告するもの以外に、別個体の棟木状の破片などがあり、2個体以上あったものと思われる。以下、本例について、便宜上、長方形の切りぬきをもつ面を「平」、透孔のみもつ面を「妻」とし、平の図示した面を「平-1」、反対側を「平-2」、「平-1」の右側に続く面を「妻-1」、その反対側の面を「妻-2」として、説明を加えることにする。

この家形埴輪は、ほぼ横断面正方形をなし、背の高い四壁をもって形づくる。法量は、屋根部の残存部までの高さで70.3cm、平部の最大幅で38cm、妻部の最大幅で34.6cmを測る。色調・焼成は、平-1から平-2にかけては赤褐色を呈し硬質であるが、平-2から妻-1にかけては黄白色で硬度がやや落ちる。胎土にはチャート・長石を多く含み、チャートは1.5cmの大形のものも含む。壁面の立ち上がりは、下方ではやや内傾するが、中央から上方に向って、平部からみると内傾ぎみに、妻部からは中央から胴張りぎみになって内傾す



第41図 家形埴輪実測図(左:平-1, 中央:妻-2, 右:妻-2右側断面)

るかのようにみえる。屋根部は、廂から屋根上方へと傾斜を強めつつのびるが、廂下端部から10.5cm残存するにすぎないためその構造は判然としない。しかし、同一個体に同定できる破風板片、堅魚木片などから、入母屋造りになる可能性がある。

次に細部の構造である。壁面は3条のタガで四段に区切る。最下段のタガは、底面から3cmの低い位置につく。平部両面には、最上段左側と第3段右側に長方形の切り抜きがある。各切りぬきには辺を囲むように線刻がある^(註7)。また、平-1の第3段の切りぬき付近には線刻前に×状の線刻を軽く入れる。妻部両面には、最上段と第2段の中央に直径3.5~4.5cmの円形透孔を1個、第3段に2個穿孔する。壁から屋根にかけては、正面を縦位にヘラケズリした粘土塊を各隅に1個、その間隙に各3個をほぼ等間隔にあたかも斗拱を表現するかのように貼り付ける。屋根は、廂の端部に幅約2cmの粘土帯を貼り付けて押縁を表現する。また、屋根上面の各所に上方または水平に近い方向からの穿孔がみられる。

次に、製作技法についてである。四壁は、断面観察から、3~6cmの粘土板を積み上げ、最下段は2枚貼り合わせである。上述したように、全体的に若干不整形であるが、これは、結局は第3段で自重のため、外傾ぎみになったことから平部を押さえるようにして修正したことによるものである。壁と屋根との接合は、壁上端の外方に貼り出す粘土板の端部に刻線をいれ、廂部の粘土板を上方からかぶせるように取り付け、接合部内面には薄粘土を貼り付けて補強する。内面は、板状工具でナデた後に接合部を指で押圧する。特に、第3段タガ以下をていねいに行う。外面は、左上→右下方向にハケメを施した後、横ナデによってタガを貼り付ける。最上段上方は、ハケメの後、屋根部と接合する際に板状工具によるナデを行う。

本例は、屋根に穿孔を行い、四壁を高く作り、二階建風の表現をとるなど、当時期の家形埴輪の様相のなかで理解されるとは言え、特異な形態を示す一例として注目される。

(3) 石見型盾形埴輪(第42図、図版第19、附表6)

円筒状の基部に左右対称の鱗をつけたものであり、奈良県磯城郡三宅町石見遺跡出土例を標式とする。

盾部と基部とを接合できるものはないが、同一個体として認識できるものが2個体、盾部のみが4個体、基部が5個体の、計11個体を数える。

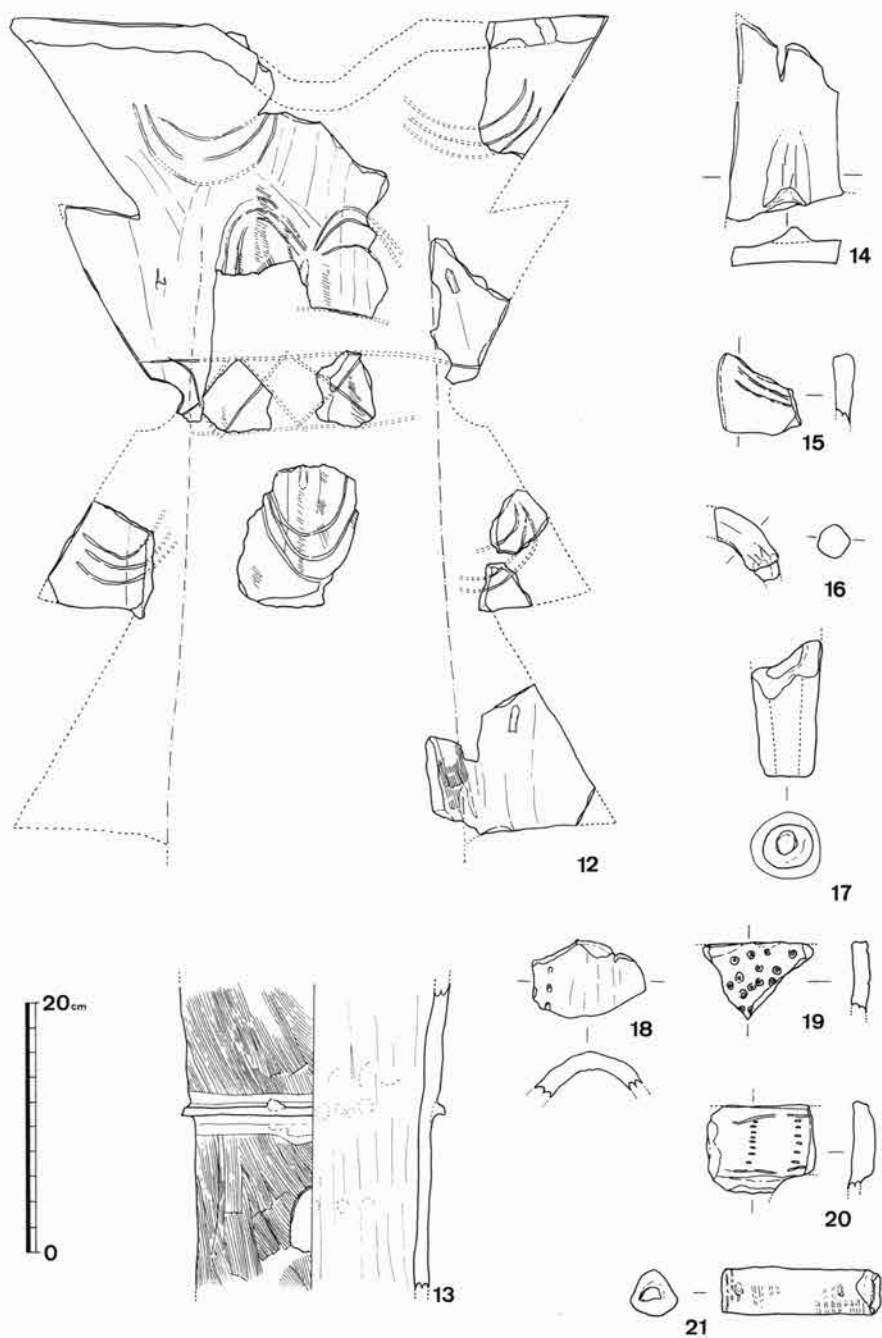
盾面では製作技法はほぼ共通しているが、胎土・線刻文様から次の3類型に大別できる。

Ia類-Aタイプの胎土をもち、斜格子文様帯と直弧文を配する。

Ib類-Aタイプの胎土をもち、綾杉文様帯を有する。

II類-Bタイプの胎土をもち、斜格子文様帯を有する。

製作技法は、普通円筒埴輪の上半部を徐々にすぼめた形の基部に、鱗部を接合するが、



第42図 各種形象埴輪実測図

その際、鱗部内面や、筒部内面に粘土を補充しつつ、ナデ・指オサエによって接合する。盾部の調整は、ナデによるが、12のみは、縦ハケの後ナデている。基部は、普通円筒埴輪と同様の調整だが、盾に取り付く上半部は、12のタテハケ以外は、ナデである。鱗部の端

付表6 盾形埴輪観察表

類型	個体番号	残存部位	盾 部			円筒部		胎土	焼成	色調
			線刻文様	穿孔	調整	調整	タガの特徴			
I a	1 (第42 図12)	盾面~円筒	直弧文+斜格子	有	(外)ハケ→ ナデ (内)ナデ+ オサエ	(外)ハケ→ 一部ナ デケン ガ (内)ナデ+ オサエ	突出するタガ	チャート・ 長石>石英	堅 (須恵質)	灰色
	2	盾面	直弧文+単斜格子	無	(外)ナデ (内)ナデ+ オサエ	—	—	チャート・ 長石>石英	硬質	淡橙色
I b	3	盾面~円筒	?+綾杉文	—	(外)ナデ (内)ナデ+ オサエ	(外)ハケ ナデ+ オサエ (内)底部に ハケ	盾面との間のタガは幅広い	チャート・ 長石>石英	やや硬質	黄白色
	4	盾面	?+綾杉文	—	(外)ナデ (内)ナデ+ オサエ	—	—	チャート・ 長石>石英	硬質	淡橙色
II	5	盾面小片	?+斜格子	—	(外)? (内)ナデ+ オサエ	—	—	チャート・ クサリ礫> 石英	軟質	乳白色
	6	盾面小片	?+複斜格子	—	—	—	—	クサリ礫> 石英・チャ ート	軟質	乳白色

※注 Aタイプ=チャート・長石・石英

Bタイプ=チャート・クサリ礫・石英

付表7 その他の形象埴輪観察表

図番	器種	調整	胎土		焼成	色調	備考
			粗・密	含鋳 有物			
14	蓋	内外面ナデ, 端面ケズリ	やや粗	A	硬質	茶褐色	
15	蓋		粗	B	軟質	橙色	ヘラ状工具による線刻あり。
16	人物	ナデ, 一部オサエ	やや密	B	軟質	乳白色	
17	動物		粗	B	軟質	乳白色	
18	不明	内外面ナデ	粗	A	やや硬質	淡橙色	外面に竹管文。19と同一個体か。
19	不明	内外面ナデ, 一部オサエ	粗	A	硬質	茶褐色	外面に竹管文。
20	不明	内外面ナデ	やや粗	A	硬質	淡橙色	外面にヘラ状工具による線刻あり。
21	不明	イタオサエ	やや粗	A	硬質	茶褐色	接合痕あり。

※注 A=チャートを主体に長石・石英を含むもの。

B=Aにクサリ礫が加わるもの。

面は、ナデあるいはケズリを行う。

次に、筒部のみの例について略述する。須恵質で、幅約7mmのタガを有し、Ia類の13の筒部に類似する例が3点ある。また、土師質で底部に幅2～2.5cmの粘土帯を有し、Ib類の筒部に類似する埴輪が2点ある。7は、Bタイプの精良な胎土で、底部にていねいな指オサエによって貼り付けた粘土帯を有する。底径21.2cm・残存高25.6cmを測る。内面に板状工具によるナデの際、板の小口があたって抉れた痕が明瞭に残る。

(4) その他の形象埴輪(第42図、図版第20)

蓋形埴輪2点・人物埴輪1点・動物埴輪1点・不明の形象埴輪数十点が出土した。いずれも小破片である。代表例を図示し、以下に諸特徴を記述した。詳細は付表7に譲る。

14・15は、蓋形埴輪の立飾部の破片である。端面にケズリを施す以外は、ナデを施す。14には、片面の立飾部同士の接合付近に補強粘土が付着する。15は、片面に2条の線刻がある。

16は、人物埴輪の腕部と思われる。小さく湾曲する筒状の粘土に、薄い粘土帯を貼り付けて袖を表現する。粘土帯貼り付けの際にはユビオサエを行うが、他はナデを施す。

17は、動物埴輪の脚部であろう。中空に作る。

18・19は、外面には直径5～7mmの不規則な竹管文を施し、ともに同一個体の可能性がある。その他に同様の破片が10点余りある。馬形埴輪の鞍部とも思われるが、不明である。

20は、粘土板を2枚重ね、外面にヘラ状工具による直線文・刺突文を配する。中央をあけて両端を接合する帯状の部位と思われる。靱形埴輪の一部かと思われるが、不明である。

21は、表面には主軸に直交する木目痕を残し、板状工具で断面三角形にする。両端面のうち一端面が部分欠落するものの、その中央部を棒状工具で凹ます。断面から見て三角形の一辺の側と、これを底辺とした頂点側の各2か所に接合痕を残す。堅魚木かもしれない。

(吉田野乃)

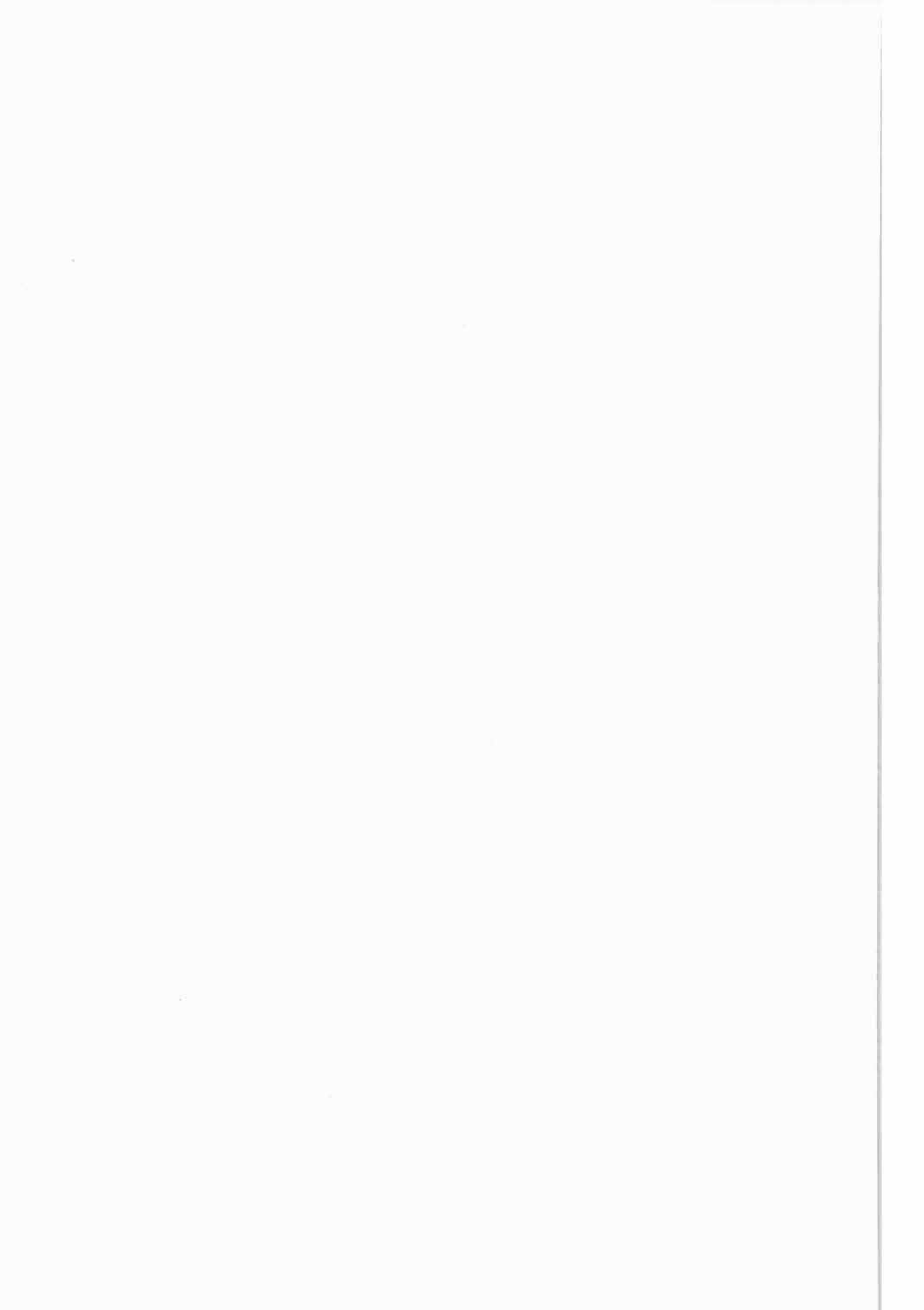
5. おわりに

塚本古墳は、従来の復原された形態、位置、規模等が今回の調査でさらに明瞭になった。墳丘の盛土や埴輪の原位置等は、後世の攪乱によって確認できなかった。周濠部の埋没は、堆積状況や出土遺物からみて、墳丘の削平時より早い長岡京期に求められる。

最後に、長岡京の造営と塚本古墳との係わりについてであるが、五条大路がこの古墳を回避して造られたと今日では考えられている。この一帯に数多くの建物跡等があり、上記の事由を考慮すると、条坊施行が大方完了した後、塚本古墳の封土を造成するのに必要な土として利用したものかもしれない。

(竹井治雄)

- 注1 調査補助員として福富 仁，西岡成郎，長谷川聡，古賀敦子，各氏の参加，協力を得た。遺物の実測トレース等にあたって，吉田野乃が協力した。
- 注2 第38図の作成にあたっては，「右京第173次(7ANKHT-3地区)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報・昭和59年度』の第26図を基本にして，今回の調査区を加えトレースしたものである。そして，「推定位置」の表示は，この第26図の復原図によった。
- 注3 ここでは，タガによって区切られた5段を下方から，最下段，2段，3段，4段，最上段と呼称する。
- 注4 川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』第62巻第2号 日本考古学会) 1979
- 注5 山口 博「長岡京跡右京第83・105次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第9冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984
- 注6 中尾陽太郎「長岡京跡第7909次(7 ANBNK 地区)立会調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第6集 向日市教育委員会) 1980
- 注7 本例では，タガによって区切られた4段を下方から，最下段，2段，3段，最上段と呼称する。
- 注8 奥村清一郎「長岡京の造営によって壊された古墳」(『長岡京古文化論叢』中山修一先生古稀記念事業会編 同朋舎) 1986



7. 平安京左京北辺三坊五町発掘調査概要

1. はじめに

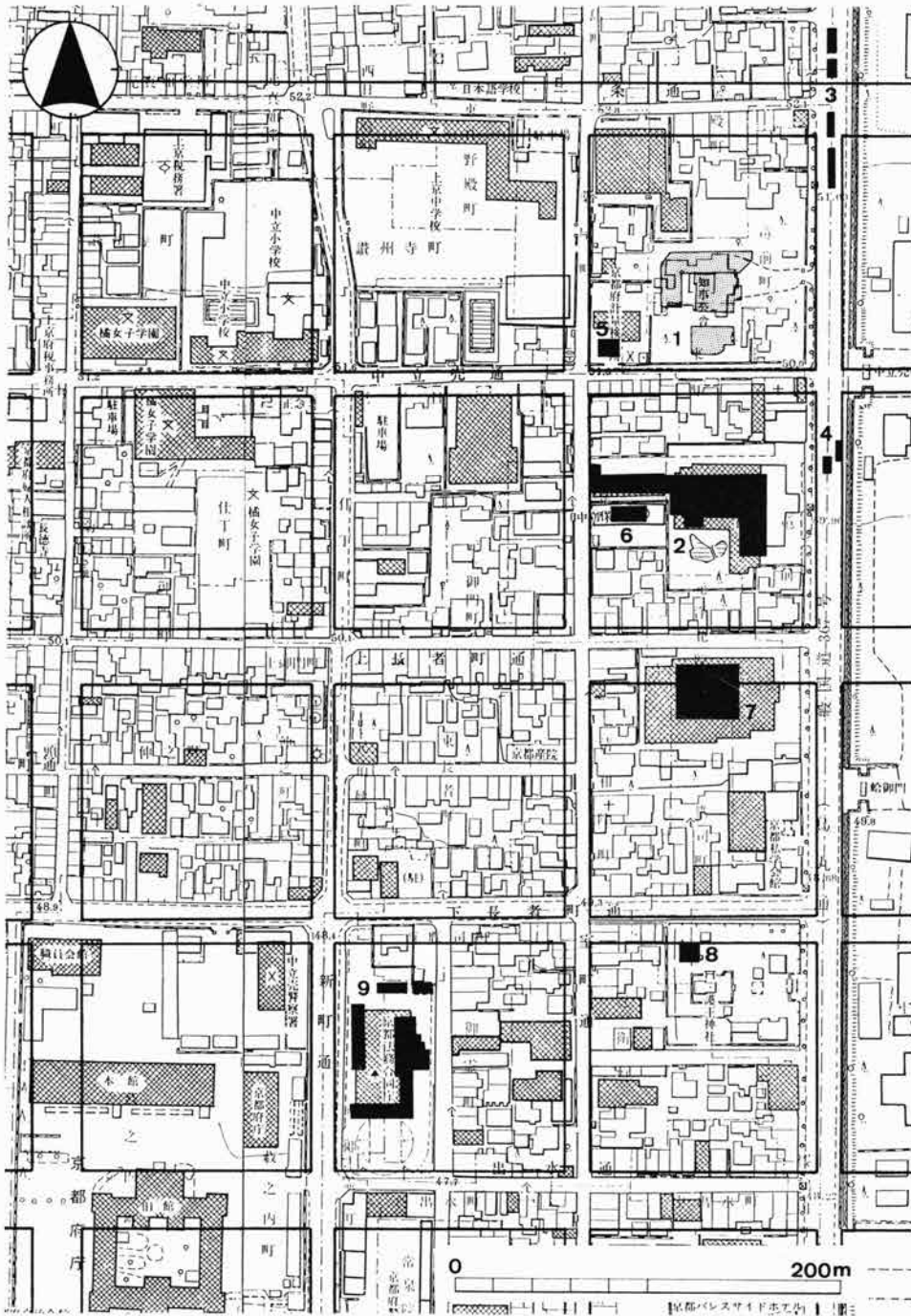
平安京跡(府民ホール)の調査地は、京都市上京区烏丸通中立売上ル龍前町590の1ほかにある。烏丸通を隔てた東側には京都御所があり、木々の緑が多く見え都会の中でも閑静さを残した一画にある。元々、当地は知事公舎のあったところで、今般この地に文化活動や交流の場として、併せて迎賓館としての機能をもった府民ホール(仮称)を建設する計画が京都府企画管理部秘書課より出された。そのため、当該地が平安京跡と弥生時代の遺跡である内膳町遺跡にあたることから、文化財保護課と協議し、発掘調査を実施することになった。当調査研究センターでは、京都府企画管理部の依頼を受け、昭和61年10月1日から昭和62年6月6日まで発掘調査を行った。以下は、この調査の概要報告である。

発掘調査は、知事公舎建物の解体作業の都合で、2年度にわたることとなった。第1年度は、当調査研究センター調査課主任調査員辻本和美・同調査員伊野近富・石井清司が担当し、調査面積は約1,200m²であった。第2年度は、調査第2課調査第3係長小山雅人と同上の調査員が担当し、調査面積は約500m²であった。期間中多くの補助員・整理員(注1)の協力を得、京都府秘書課・営繕課・文化財保護課、財団法人京都埋蔵文化財研究所(注2)や、全京都建設協同組合、鹿島建設のお世話になった。記して謝意を表す。なお、発掘調査にかかる経費は、全額京都府企画管理部が負担した。

2. 歴史的環境

近隣での発掘調査の成果と文献的成果を加味し、調査地周辺の歴史的環境を略述したい。調査地周辺に人々が住み始めたのは、縄文時代晩期から弥生時代前期にかけてのことである。特に、西隣(注3)の京都府計量検定所改築予定地(内膳町遺跡)での調査では、当時の石器や土器が多数発見されている。しかし、住居跡は確認されていない。

この後、平安京造営までの間は、遺物がほとんどなく不明な点が多い。この地が大きく変わるのは平安京造営以後である。条坊の表示によれば、平安京左京北辺三坊五町の地に相当する。この一町南には諸司厨町のひとつである内膳町がある。昭和53・54年度の現「平安会館」(注4)予定地での調査では、10世紀後半以後に属する多種多様の遺構・遺物が出土したが、これが内膳町(平安宮内膳司に出仕する官人たちが住んだ町)に伴うものかどうかは不明とされている。それは、内膳司が機能していた9・10世紀前半の遺物がほとんど認められな



第43図 調査地位置図

- 1. 調査地
- 2. 内膳町跡
- 3. 一条大路(地下鉄烏丸線)
- 4. 石垣溝(地下鉄烏丸線)
- 5. 内膳町遺跡(京都府計量検定所)
- 6. 内膳町(京都市保育所)
- 7. 土御門内裏(KBS 京都)
- 8. 左京一条三坊十町(護王神社)
- 9. 左衛門町(法務合同庁舎)

いことと、11世紀には受領が住んでいた可能性が高いことによる。

平安時代の調査地周辺は、上記の内膳町のほかに采女町、正親町、右衛門府町など多数の諸司厨町があり、その間に貴族の邸宅がひしめいていた。今回の調査地に誰が住んでいたかは明らかではないが、このような状況の下にあったのである。

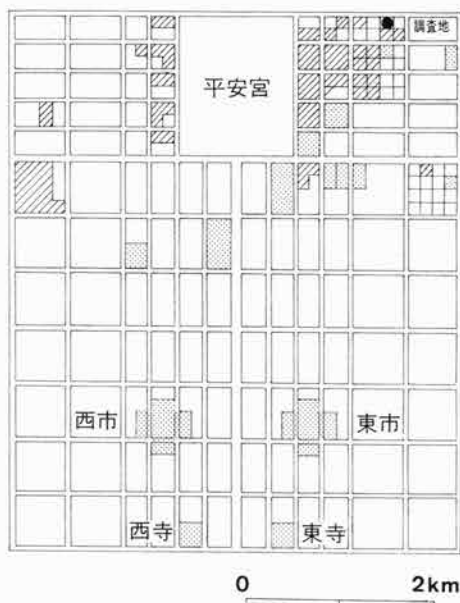
鎌倉～室町時代を通じて連綿と人々が住み続けたことは明らかである。それは早く衰微した平安京右京の地とは対照的である。この左京の地は、上京と下京の2つの商工業の中心地に分割される。応仁の乱(1467～1477年)の後、町はそれぞれ自衛のために構(かまえ)と称する防御施設を造るが、

それは町が自立してきた結果である。それがいくつか集まって強い結束を誇る町組織ができる。調査地周辺においても六町と呼ばれる町組ができる。六町とは一条が二町、正親町が二町、橘辻子と烏丸がそれぞれ一町、都合六町が集まったものである。当地は、その内の正親町に相当する。町田本「洛中洛外図屏風」によれば、16世紀前半には甘露寺殿が居住し、その西隣には薬屋があったことが確認できる。

織田信長が足利義昭を奉じて入洛(1568年)して後、この周辺は大いに変容する。数百m南には義昭のために旧二条城が造られ、周囲には武家屋敷が点々と建てられたようである。また、信長に反抗した上京を焼討(1570年)したりもしている。ただし、この際には六町は禁裏御所に近いことで罹災を免れているようである。

豊臣秀吉は天正14(1586)年、方千間の聚楽第(かつて平安宮のあった辺り)の建築を開始し、およそ1年ほどで完成させた。これに伴って近辺に大名屋敷が建設されたが、六町の地でも、天正19年に住民に対して屋敷替が命じられている。しかし、秀吉が文禄4(1595)年に自ら聚楽第を破壊した後は、大名屋敷もまた急速に姿を消したと思われる。

江戸時代になると、町屋が密集した地であったようで、一町南には京都の新興都市町人である糸商人が居住していたことが、発掘調査によって明らかとなっている。当時の絵図面には住人の判明した例があるので、いくつか列記する。寛永16(1639)年には「半井庵庵」、元禄期(1688～1703)年には「松平スルカ守 七万石」、寛保元(1741)年には「東その」、天



第44図 平安京条坊図

保8(1837)年には「東園」「勸修寺殿ヤシキ」と書かれている。また、延宝6(1678)年には、京焼の一種である「みそ路池焼(御菩薩池焼)」の内窯があり、ここで商品を買っていた記録(『森田久右衛門江戸日記』^(注5))もある。

3. 調査経過

調査に際しては、平安京跡の他の調査と整合性をもたすために、国土座標に合わせた地区割りを行った。4m方眼を設定し、第Ⅵ座標系の $X = -108,400.000$ をAラインとし、南へ順次アルファベットで表示した。また、 $Y = -21,700.000$ を1ラインとし、西へ順次アラビア数字で表示した。そして、地区表示は北東隅とした。なお、レベルについては、中立売御門前にある京都市建設局基準点(50.23m)によった。

昭和61年度の調査

発掘調査は、敷地内の測量後、府民ホール(仮称)建設範囲の中で、知事公舎本館部分の周辺に3か所トレンチを設定して開始した。掘削をした順番によって第1～3トレンチと名付けた。表土は重機で除去し、地表下約80cmの江戸時代後期の面から人力による掘削にかえた。

江戸時代の面では、石室^{イシムロ}や井戸をはじめ倉跡、溝などを検出し、それに伴って多数の遺物も発見した。特に京焼の一種である「みそ路池焼(御菩薩池焼)」と思われる破片を多数(整理箱10箱程度)発見したことは特筆に値する。

安土・桃山時代の面では、石室や井戸、溝などを検出したが、特に遺物の中で金箔瓦を発見したことは注目される。これらの中には、佐竹氏の家紋のあるものも数点あり、これによって一時期戦国大名の屋敷として使用されたことが判明した。

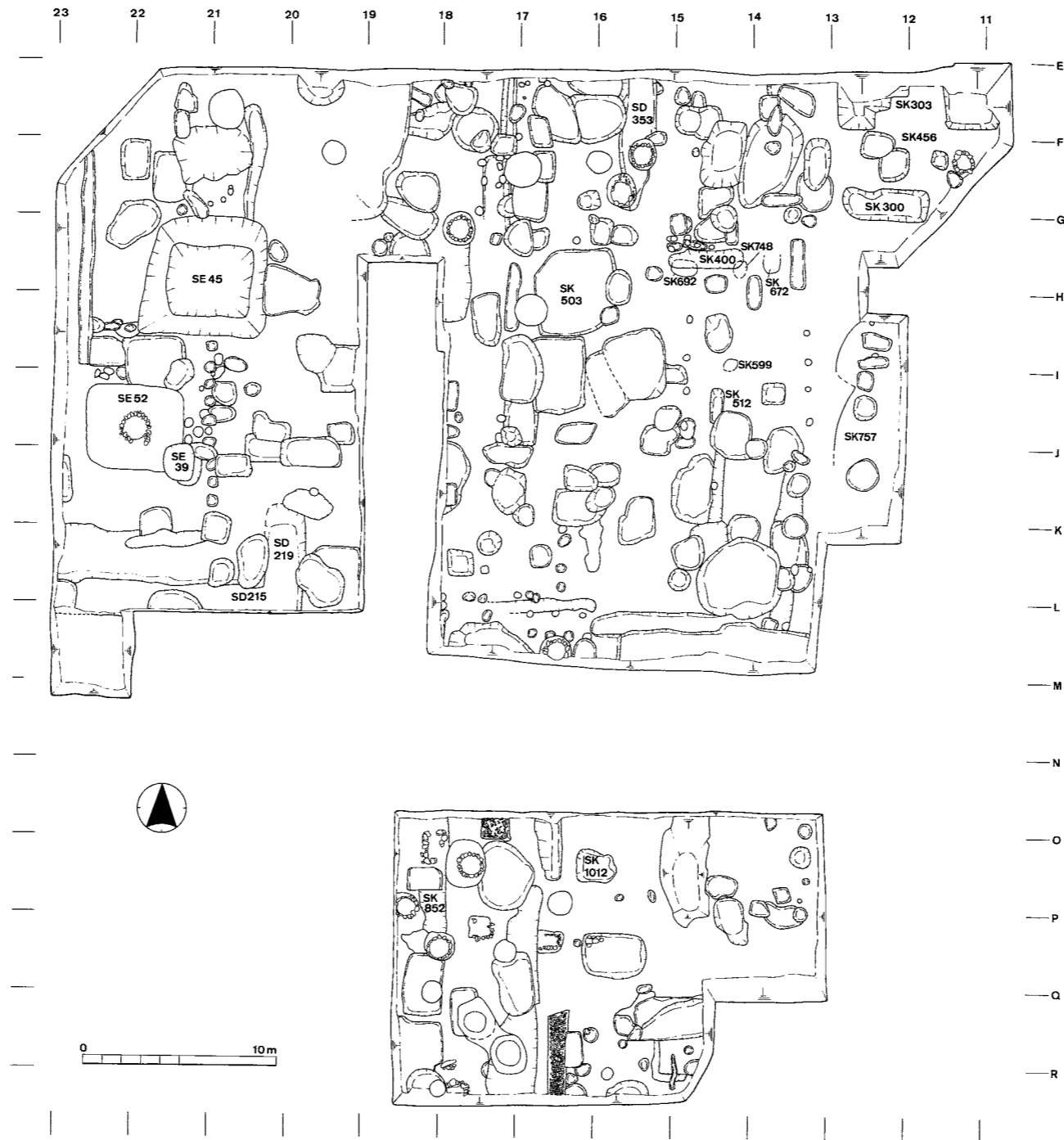
平安時代から室町時代にかけては、ほぼ同一の面を使用したようである。それぞれの時代に断絶なく人々が居住していたことは、遺物の点から知られるが、特に平安時代中期の大型井戸を検出したことは重要である。その大きさや占地した位置から少なくとも1町全域を占有していた住人の井戸と思われ、出土遺物の中に緑色をした石帯があることから官人、それも貴族と呼ばれる人が居住していたと推定できる。

弥生時代の面は、後世の削平によってほとんど認めることができないが、遺物は点々とあり、西隣の内膳町遺跡との関連を指摘できる。

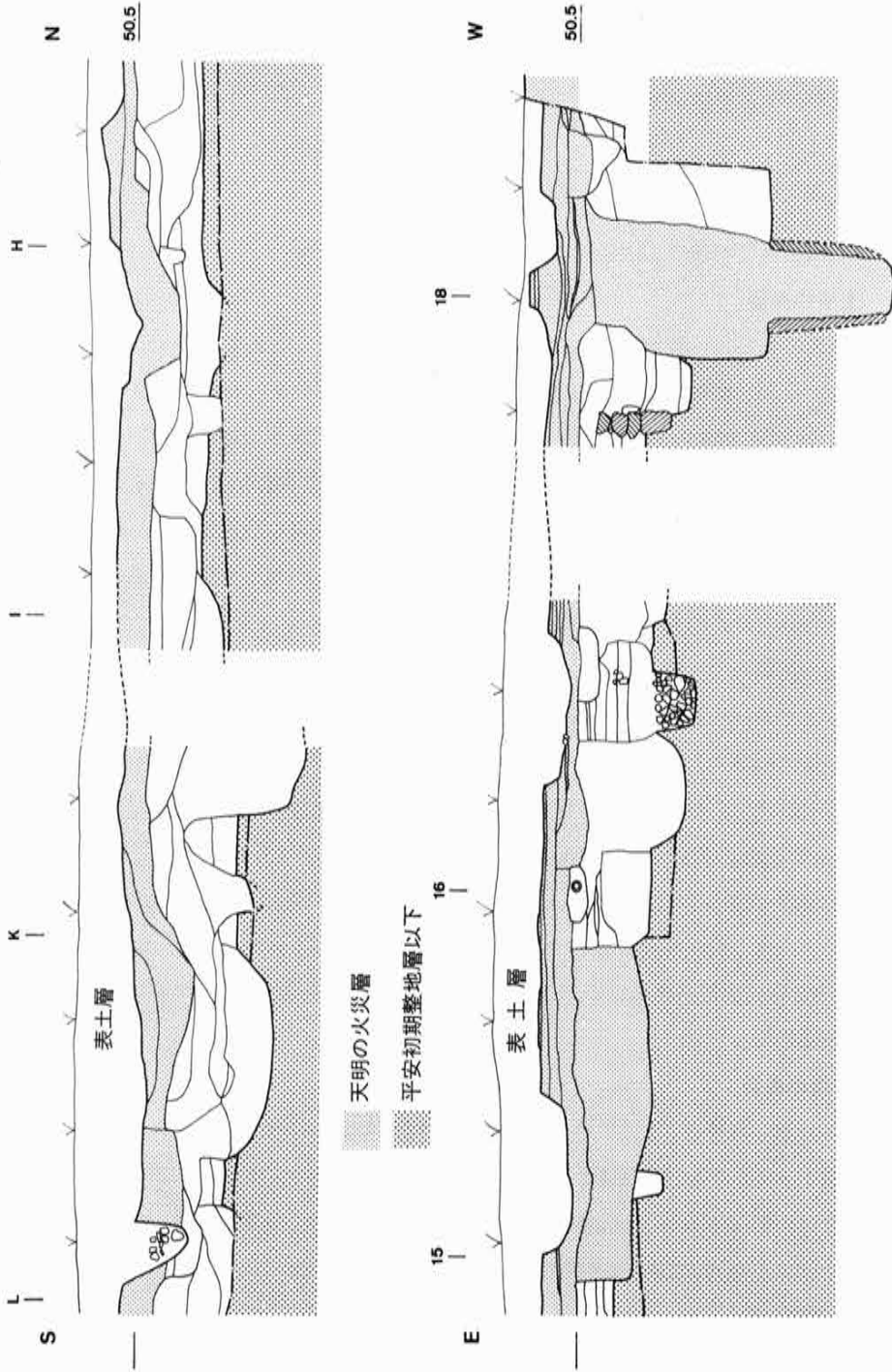
以上の調査経過をたどった後、昭和62年3月20日に現地作業を終了し、同月末まで室内作業をした。この間、知事公舎本館の解体作業が進んだ。

昭和62年度の調査

当該年度は本館直下を対象とし、4月2日から開始した。今回のトレンチは、前年度の



第45図 調査地平面図(主要遺構)



第46図 土層断面図(上は第1トレンチ西壁, 下は第2トレンチ南壁)

第1～3トレンチに囲まれる形で設定し、第4トレンチと名付けた。

調査方法は前年度を踏襲した。各時代の様相は前年度の成果を補足するものであったが、下記の2点は新知見であった。すなわち、安土・桃山時代に鑄銅施設をつくっていた点と弥生時代前期の炉跡が検出できた点である。

4. 調査概要

まず、土層の概要を述べ、次いで遺構と遺物の順で略述したい。

(1) 土層の概要

現代の地表面の高さは概ね51.1mである。しかし、それ以下の層位は若干の違いを見せているので、北部と南部に分けて略述する。北部では、天明の火災層(1788年)の上面は50.5m前後で、同下面は50.3m前後である。したがって、18世紀後半の地表面は50.3mと言える。そして、もっとも高く残った平安時代初期の整地面(暗茶褐色粘土層)の上面は49.8mである。なお、15世紀末～16世紀初めの土塚SK400の上面も同じ高さなので、平安時代以降室町時代までは、同様の生活面であったと言える。それが、安土・桃山時代と江戸時代前半に盛土され、だんだん高くなった点が指摘できる。

南部では、天明の火災層の上面が50.5m前後で、この地点は盛土されていない。もっとも高く残った平安時代初期の整地面の上面は49.7mである。江戸時代初期の地表面は天明の火災面とほぼ同じであるので、一気に地上げをしたのは、その頃であるらしい。

結局、平安時代は北が高く、南がやや低い地表面であったものが、遅くとも江戸時代初期には50cmほど地上げされて、ほぼ水平に整備されたことが知られる。その後、50.9m前後でも火災層を認めることができ、これを嘉永7(1854)年の大火層と推測することも可能である。その後、大正時代に建設された知事公舎に伴う地上げを最後に、現在に至る。

なお、平安時代初期の整地はわずかしかわられておらず、数cm下部からは弥生時代前期の遺構を検出した。

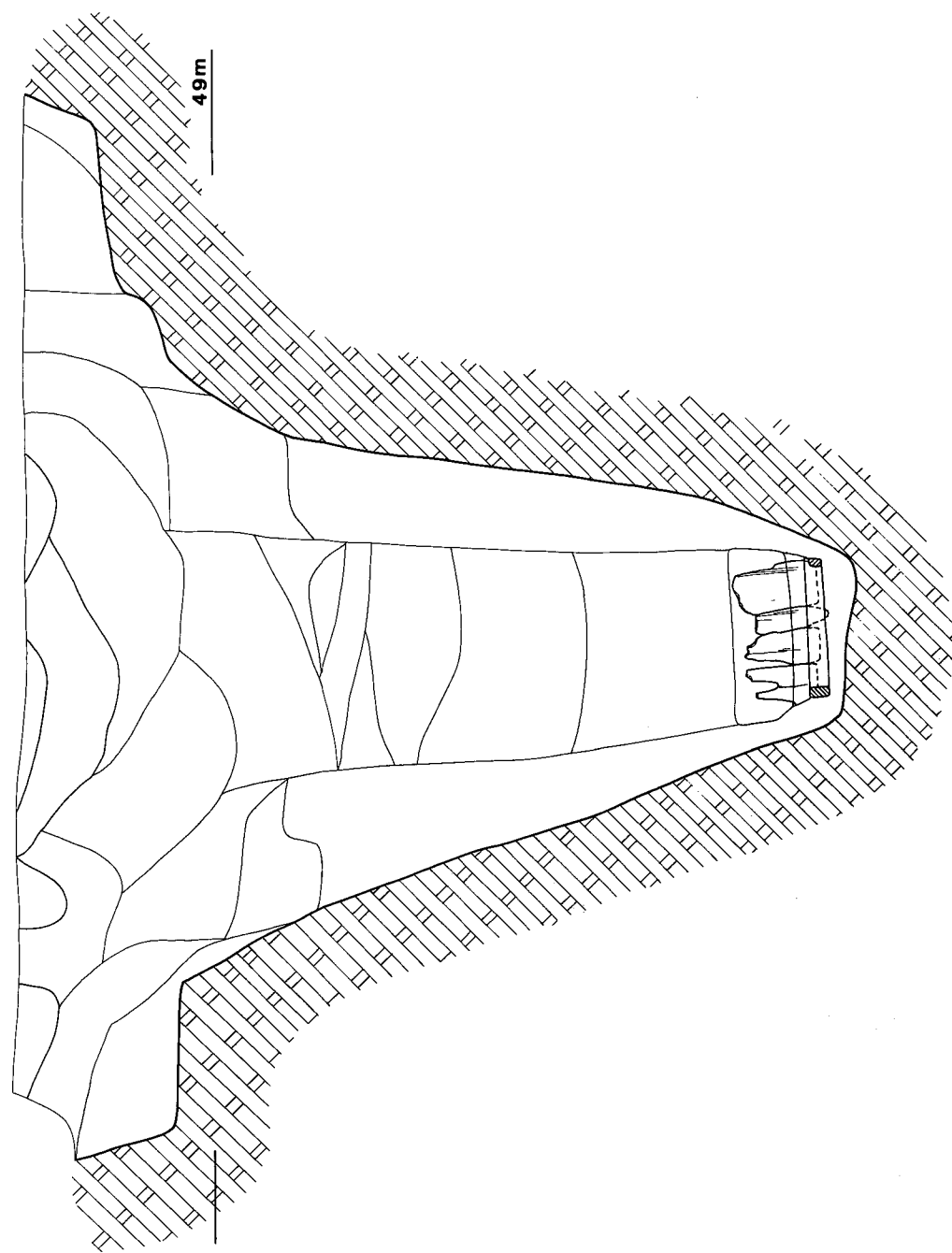
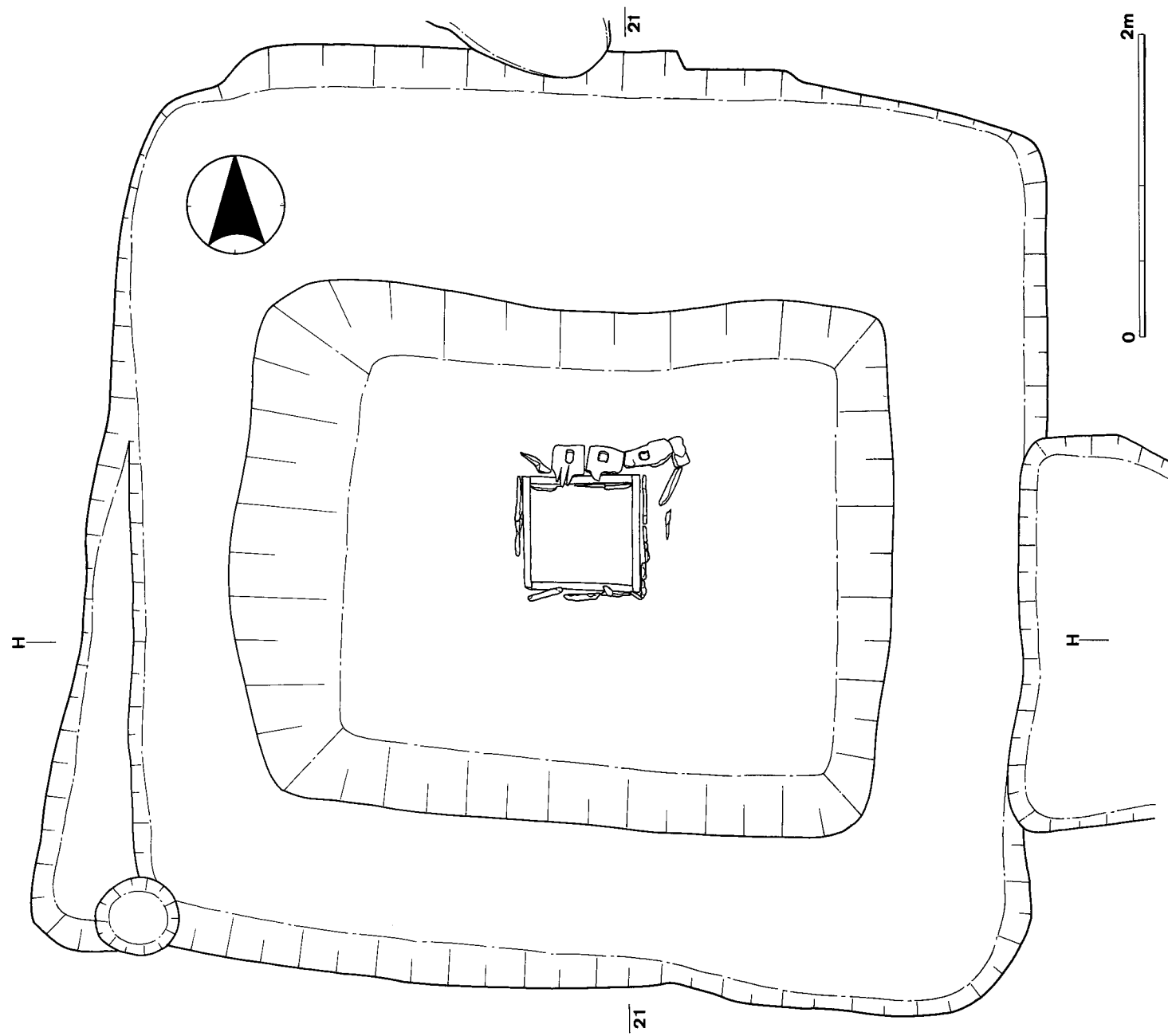
(2) 遺構の概要

遺構番号は通し番号としたが、トレンチ毎に分けたため、遺構番号数と遺構数とは一致しない。第1トレンチは1～258まで、第2トレンチは800～1,028まで、第3トレンチは300～451まで、第4トレンチは460～676までとなった。結局、遺構数は853である。

では、まず平安京造営以降の遺構について略述し、次にそれ以前の遺構について述べる。

(平安京造営以降)

SK456 第3トレンチの東端で発見された大土塚である。東西幅4.7m以上、南北は10m以上・深さ1.3m以上である。埋土は暗褐色砂礫層である。南端は4トレンチに入り込んで



第47图 井戸 SE45 实测图

はいるが、ほぼ終息している。

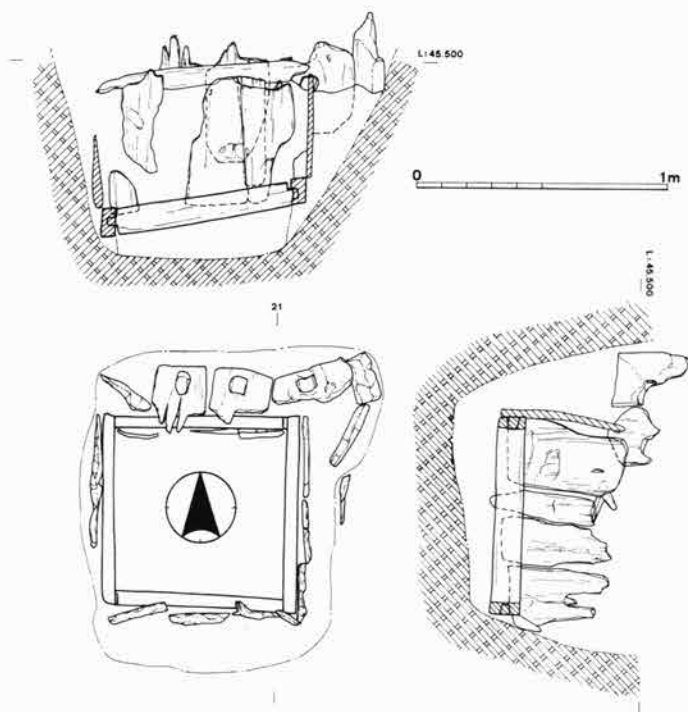
SE45 第1トレンチの中央、21G区付近で発見された井戸である。掘形は一辺約6.1mと非常に大きく、平安京で発見された井戸の中ではもっとも大きい部類と言える。掘形は深さ1mのところで一辺約3mと狭くなっており、検出面から深さ約4mで木枠が発見された。四角に組んだもので、一辺約80cm・棧は12cm角の材を使用しており、底までの深さは検出面から約4.7mであった。縦板の幅は20~30cmである。井戸の分類からすれば「縦板組横棧どめ^(注6)」と呼ばれるものである。上部が平安時代初期の整地層である暗茶褐色粘質土層を切り込んでいるほか、ほとんどは黄褐色砂礫層という固い地山を掘り込んでいる。埋土はこの地山の二次堆積層である黄褐色砂礫層で、下層は灰色泥土に砂礫が混った土層であった。遺物は多種多様で、上下層に関係なく接合するので一気に埋没したと思われる。

この井戸が一町域に占める位置は中央やや西寄りであるので、少なくともこの使用者は、西半町を占有していたと考えられ、この場合、敷地の中央にあり過ぎるので、一町すべてを占有した者を推定した方が不都合がない。また遺物の中に緑色をした石鈿帯のあることも、上記の推測を補強するし、他の青磁や白磁を始めとする多種多様な遺物群も同様のことを示す。

SK672 第4トレンチの北東部、13G区にある隅丸方形の土坑である。規模は東西0.95m・南北0.82mである。北部は削平されている。ゴミ穴である。

SK692 第4トレンチの北端部、14・15G区にある楕円形の土坑である。規模は東西1.7m・南北1mである。ゴミ穴である。

SD353 第3トレンチの中央やや西寄



第48図 井戸 SE45 下部実測図

り、15E区にある溝である。東西2.6m・南北2.9mを確認した。北から南へ流れる溝で、北部はトレンチ外へ、南部は近世の土壌によって削平されている。埋土は暗褐色砂質土層で、洪水等により埋没したものであろうか。

SD215 第1トレンチの南端にある東西方向の溝である。幅は約2m、少なくとも10m以上のびるが、20K区では北へ屈折し、SD219と連結するようである。埋土は黄褐色粘質土である。

SD219 第1トレンチの南部にある南北方向の溝である。幅は2.1mで、19J区で途切れる。

SK757 第4トレンチの東部、12I区にある土壌である。土師器皿や瓦器鍋などが検出された。不定形で、あるいは大きなゴミ穴かも知れない。

SK852 第2トレンチの北西部、18P区にある土壌である。規模は東西1m、南北0.95mである。安土・桃山時代の井戸SE826に切られる。

SK512 第4トレンチの中央部、14I区にある長方形土壌である。規模は東西0.63mで、南北1.63mである。土器を多く埋納した土壌である。

SK599 第4トレンチの北部、14H区にある土壌である。規模は東西0.77m・南北0.64mで、南北とも他の遺構によって切られている。土器埋納土壌である。

SK748 第4トレンチの北部、14G区にある隅丸方形の土壌である。規模は東西1mで、南北1.25mである。

SE52 第1トレンチの南西部にある井戸である。方形掘形で、中心に円形の石組をしている。掘形の規模は東西4.9m・南北4.15mで、石組は直径2.2mである。石は河原石(20~30cm)を使用し、積み方は短辺を見せるように、いわゆる小口積みをしている。最高8段まで残っているが、組み方は乱雑である。この井戸のまわりには少なくとも2方向(北辺と東辺)に柵がめぐらせてあった。

SK400 第3・4トレンチにまたがる14・15G区にある土壌である。隅丸長方形で、規模は東西2m・南北0.4mである。多量の土器、特に土師器皿を包含していた。

SK1012 第2トレンチの北部にある不定形の土壌である。

SK503 第4トレンチの北部、16G・H区にある長楕円形の土壌である。規模は、東西2.24m・南北4.2mである。埋土は炭を多量に含み、ふいごの羽口やるつぼの破片が多数発見された。るつぼの内側には銅が融着しており、この付近で鑄造していたと思われる、この土壌は、それらの廃棄されたものといえよう。

SK300 第3トレンチの東部、11・12F区にある東西に長い隅丸方形の土壌である。規模は東西5.12m、南北0.62mで、埋土は灰や炭を含む暗灰褐色土である。

SK303 第3トレンチの東部、12E区にある隅丸方形土坑である。北端はトレンチ外にのびている。規模は東西1.9m、南北は2.2m以上である。SK300とは同様の埋土であるので、同時期のゴミ穴と思われる。

SE39 第1トレンチの南部、21J区にある円形の石組み井戸である。規模は掘形が2mで、石組みの直径は0.8mである。石は河原石ではあるが、角張ったものを使用しており、長辺を見せるように積み上げている。

以上、簡単に遺構の概要を述べたが、これは次項で述べるように、遺物が良好に残ったものを中心に選定したものである。したがって、当該地における遺構の全体を見た場合の注意点、これは遺跡の評価につながるが、これについては不十分であるので、新ためて後章で触れることとしたい。

(3) 遺物の概要

遺物は両年度合わせて約1,300箱出土した。近世のものが7割程度を占める。遺物の種類は、瓦・土師器を筆頭に、須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・無釉陶器・瓦器・貿易陶磁器(白磁・青磁・三彩・褐釉・緑釉など)、いわゆる中世陶器の常滑・瀬戸・備前・越前など、いわゆる近世陶器の美濃・瀬戸・唐津・信楽・丹波など、土製品・石製品・金属製品(銭貨や針・キセルなど)、木製品・縄文土器・弥生土器・石器・古墳時代の須恵器などがある。

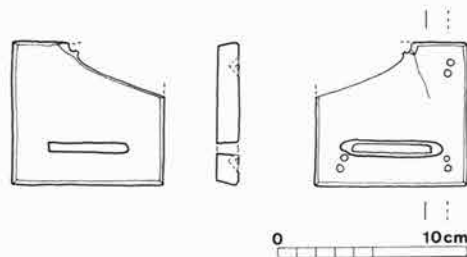
このように多種多様にわたり、出土量も膨大なためすべてを紹介することは不可能である。したがって、今回はその一部を紹介するに止める。図示しやすい製品を中心としたため、小型食器類が多いが、実態としては大型甕や火舎なども少量ながら確実にある。

図示した分については一覧表(付表10)に譲るとして、ここでは平安京造営以降の遺物群の変遷について少し触れたい。

①平安京造営以降

9・10世紀の遺物はSK456がある。須恵器を主体とし、灰釉陶器及び中国製の越磁も10点程度ある。

10世紀末～11世紀初頭にかけてひとつの画期がある。特に井戸 SE45 出土遺物は質量とも群を抜いている。第49図の石鈔帯は緑色をしており、縦が3.8cmで横が4cmと大型品である。『平城宮発掘調査報告VI』^(注7)によれば、もっとも大型品となる。また『延喜式』^(注8)によれば美しい色



第49図 井戸 SE45 出土石鈔帯

付表8 SE45 出土遺物集計表

	土師器	白色土器	緑 釉	須恵器	黒色土器	灰 釉	貿易陶磁	計	破片数
破 片 数	725	38	208	142	81	151	57	1,402	
全 体	51.7	2.7	14.8	10.1	5.8	10.8	4.1	100%	1,402
椀・皿	56.8	3.0	16.2	2.5	6.3	10.8	4.4	100%	1,264
そ の 他	4.3	0	1.5	81.2	1.5	10.9	0.7	100.1%	138

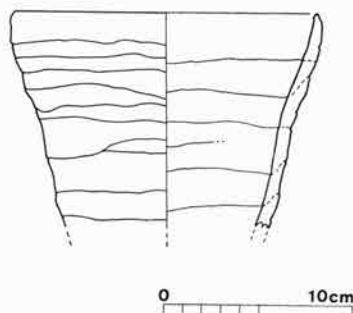
をしたものが五位以上の用いる物とされており、本品が位階の高い者の使用品であることは疑いなかろう。

付表8によれば、全体に占める緑釉陶器の割合は14.8%であり、灰釉陶器は10.8%、貿易陶磁器は4.1%である。これは、10世紀後半の下級貴族の邸宅跡と推定されている例(緑釉陶器11.4%、灰釉陶器5.8%、貿易陶磁器0.9%)と比較すると、それぞれ出土率が高く、この点からも上位の貴族が住んでいたことが推定できる。

個々の遺物で注意すべきなのは、62の白磁椀と、71の須恵器鉢である。前者は高台だけを見れば12世紀に通有な白磁椀Ⅳ類(森田・横田分類)であるが、口縁部が相違しており、この型式が11世紀初頭まで遡ることが明らかとなった。71は焼成から言えば東播系の魚住窯と類似しており、現段階で窯跡を限定することは危険だが、少なくとも播磨で生産されたとは言えるのではないか。だとすれば、播磨産須恵器鉢の古い例と言えよう。

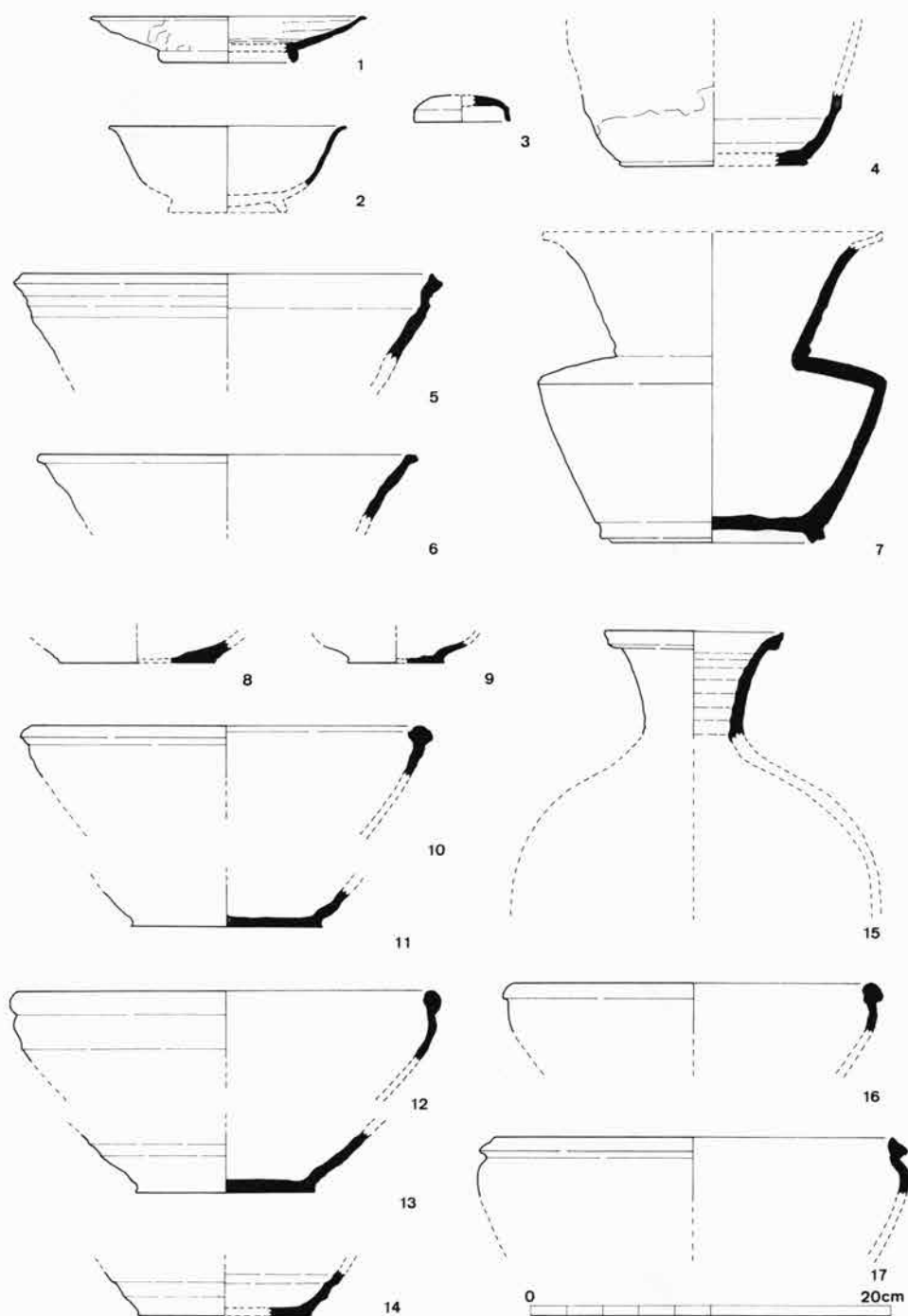
12～15世紀に属する遺物も点々と発見されている。図示した分を羅列すると以下のとおりとなる。SK672は12世紀後葉に属する。SK692は13世紀後半である。SD353は13世紀末～14世紀初頭、SD215・219、SK757は14世紀前半、SK852は15世紀前半、SK512・SK599は14世紀前半、SK748は15世紀前半、SE52は14世紀前半である。これらの中でSE52出土品は質量ともに他を圧倒しているので、少し説明を加える。

157は常滑甕である。口縁部に注目すれば中野氏編年の14世紀前半に相当する。体部外面には二種類のタタキ目がある。いずれも左から右へ叩いている。原体復原図(縮尺1/4)でもわかるように、肩部のは広い格子が柄の近くにあり、胴部のは柄から遠くにある。土師器皿はいわゆる白土器と赤土器があり、へそ皿も認められる。中国製陶磁器では盤が目立つ。褐釉・黄釉・緑釉というように多種類発見されている。なお、時代は違うが日本製の花文を施した緑釉陶器も出土している。



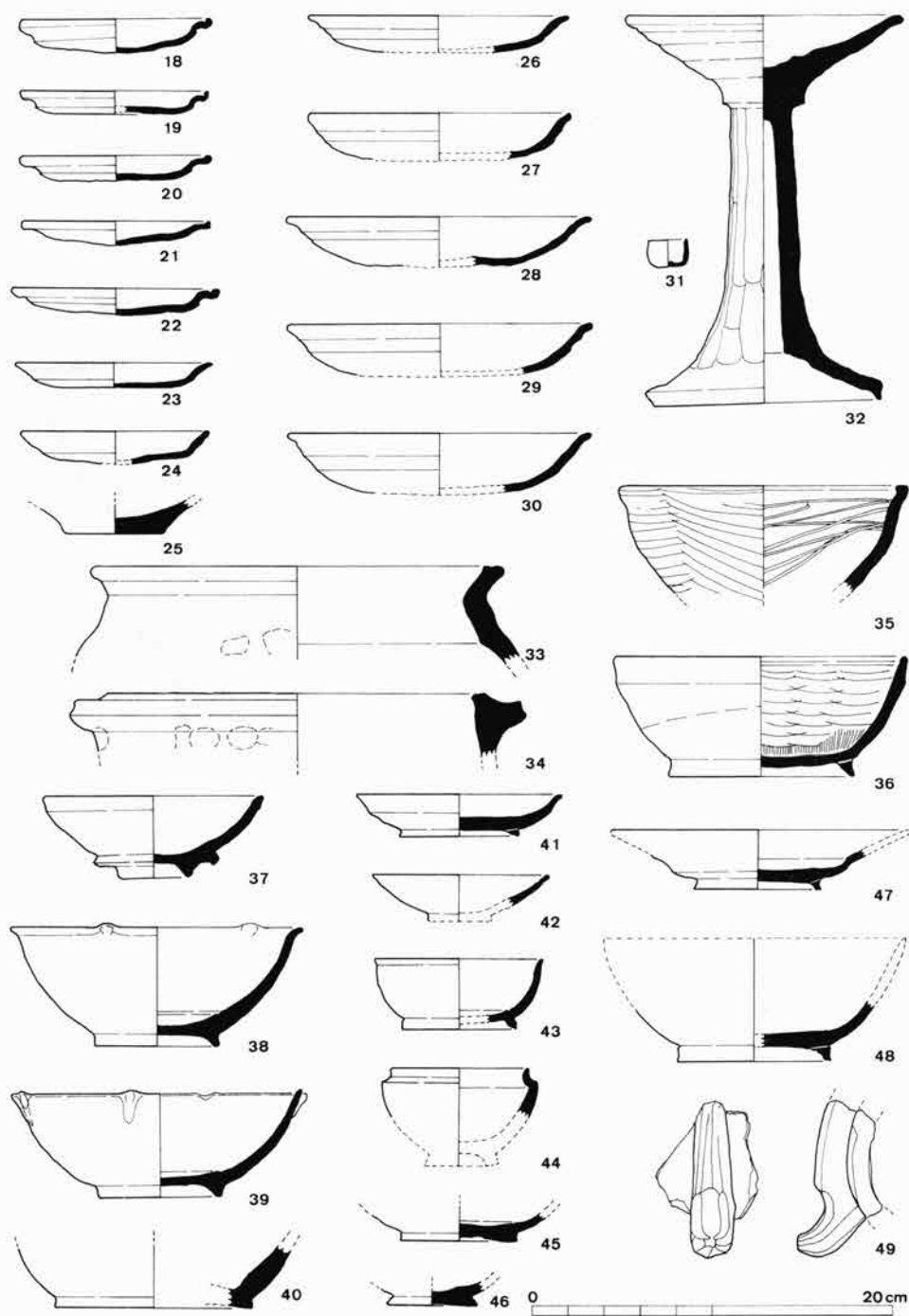
第50図 SD353 出土製塩土器

この時代の特徴的な遺物には製塩土器がある。第



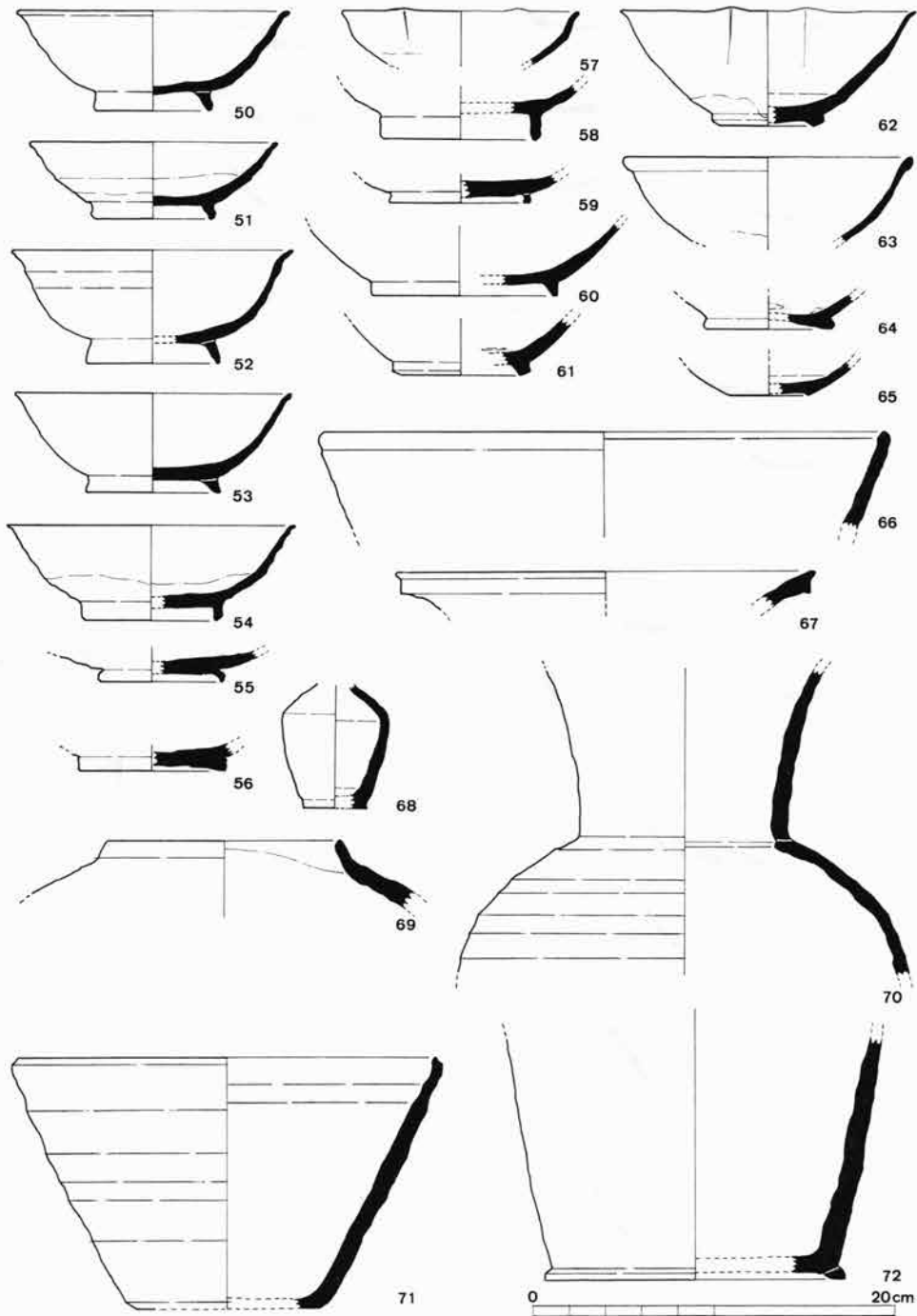
第51図 SK456・SE45 出土遺物実測図

- SK456 : 1. 灰釉皿, 2. 灰釉碗, 3. 青磁蓋, 4. 灰釉壺, 5. 須惠器鉢, 6. 須惠器甕,
7. 須惠器壺
SE45 : 8. 須惠器杯, 9. 須惠器碗, 10~14・16・17. 須惠器鉢, 15. 須惠器壺



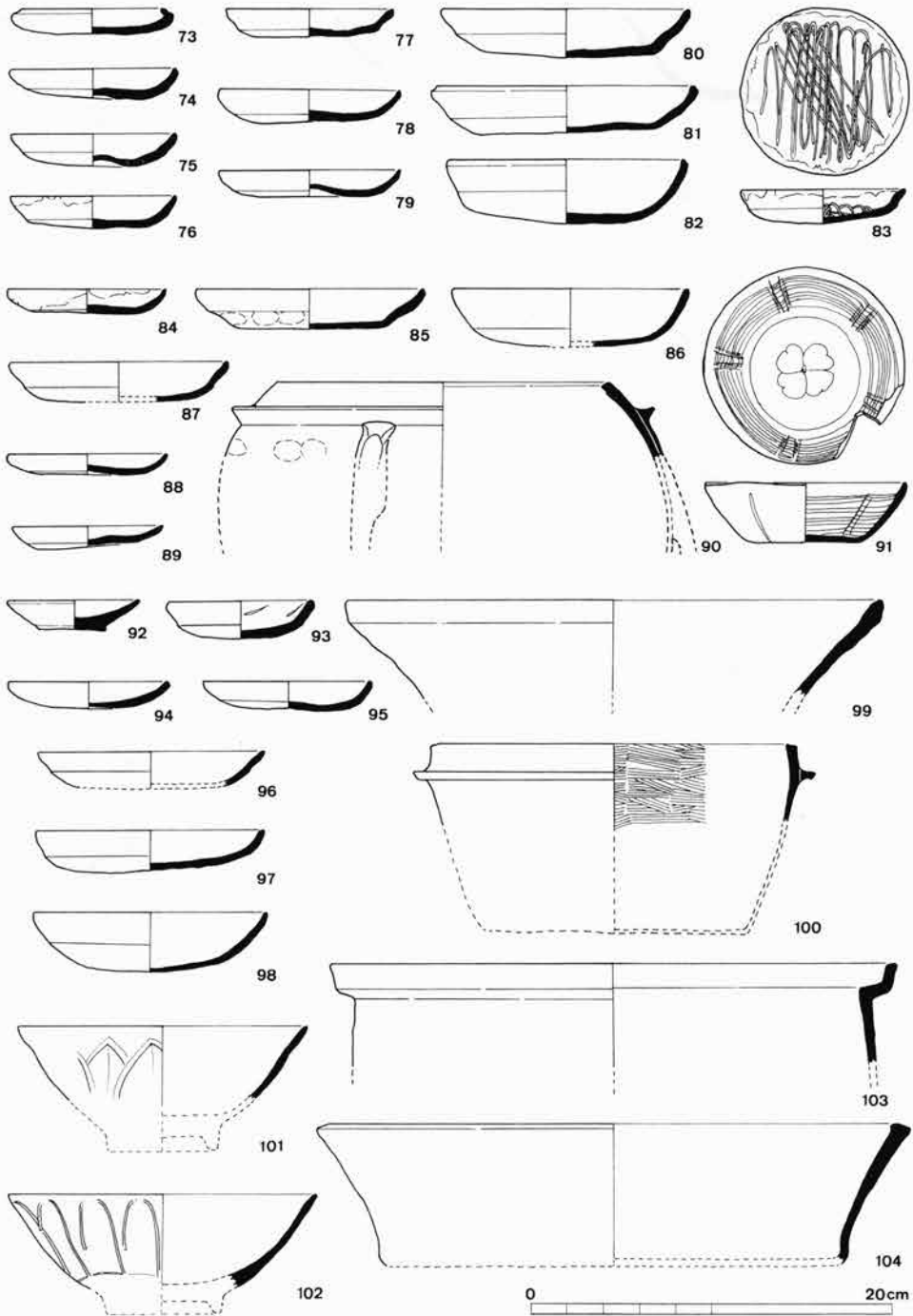
第52図 SE45 出土遺物実測図

18~24・26~30. 土師器皿, 25. 土師器杯, 31. 土師器小壺, 32. 土師器高杯,
33・34. 土師器甕, 35. 土師器鉢, 36. 黑色土器碗, 37~39・43・45・46・48. 緑釉碗,
40・49. 緑釉壺, 41・42・47. 緑釉皿, 44. 緑釉香炉



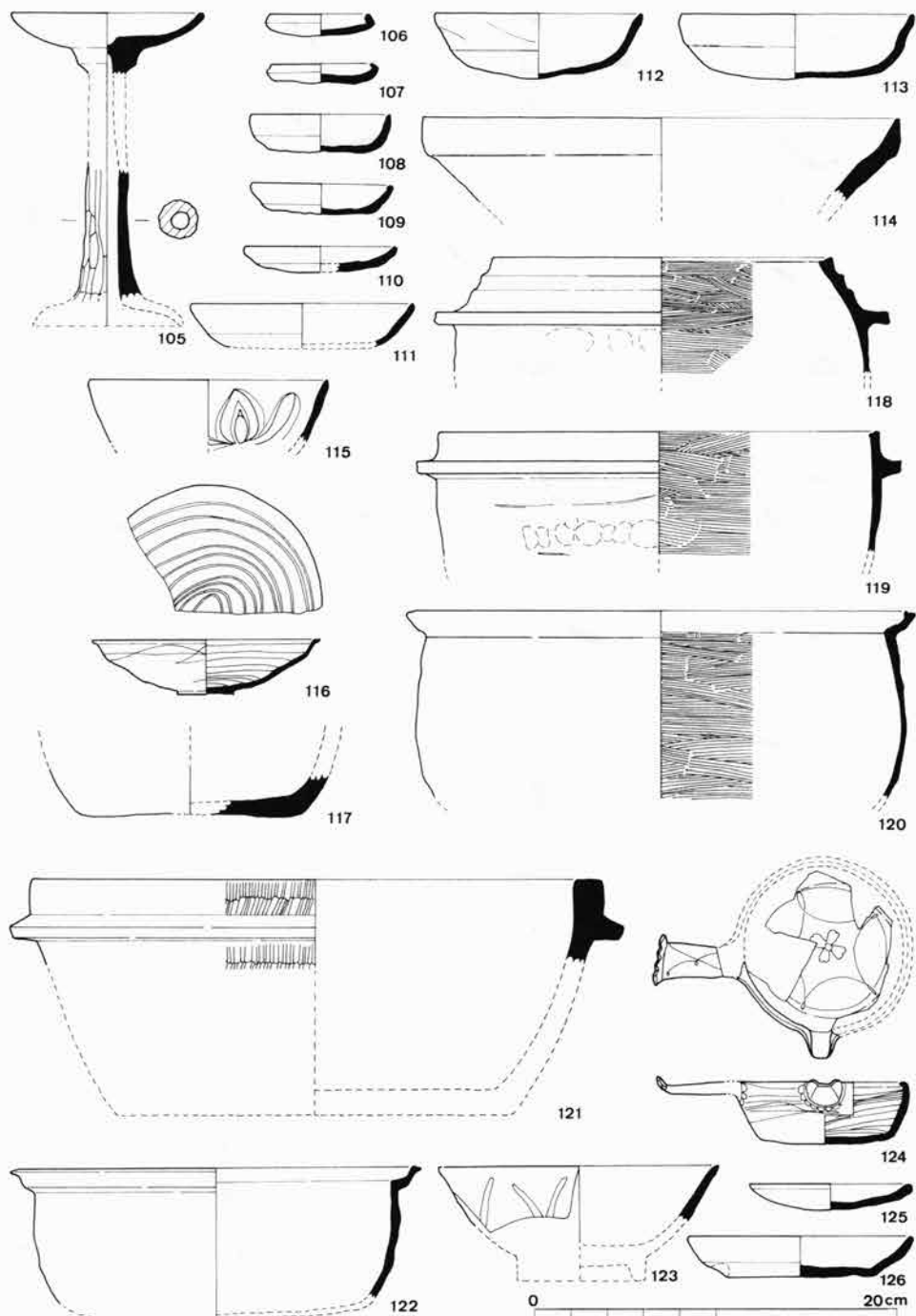
第53図 SE45 出土遺物実測図

50~54・57・58. 灰釉碗, 55. 灰釉皿, 56. 無釉皿, 59. 緑釉碗, 60・61・64. 青磁碗, 62・63. 白磁碗, 65. 青磁皿, 66. 灰釉鉢, 67・70. 灰釉壺, 68・69. 須恵器壺, 71. 須恵器鉢, 72. 灰釉甕



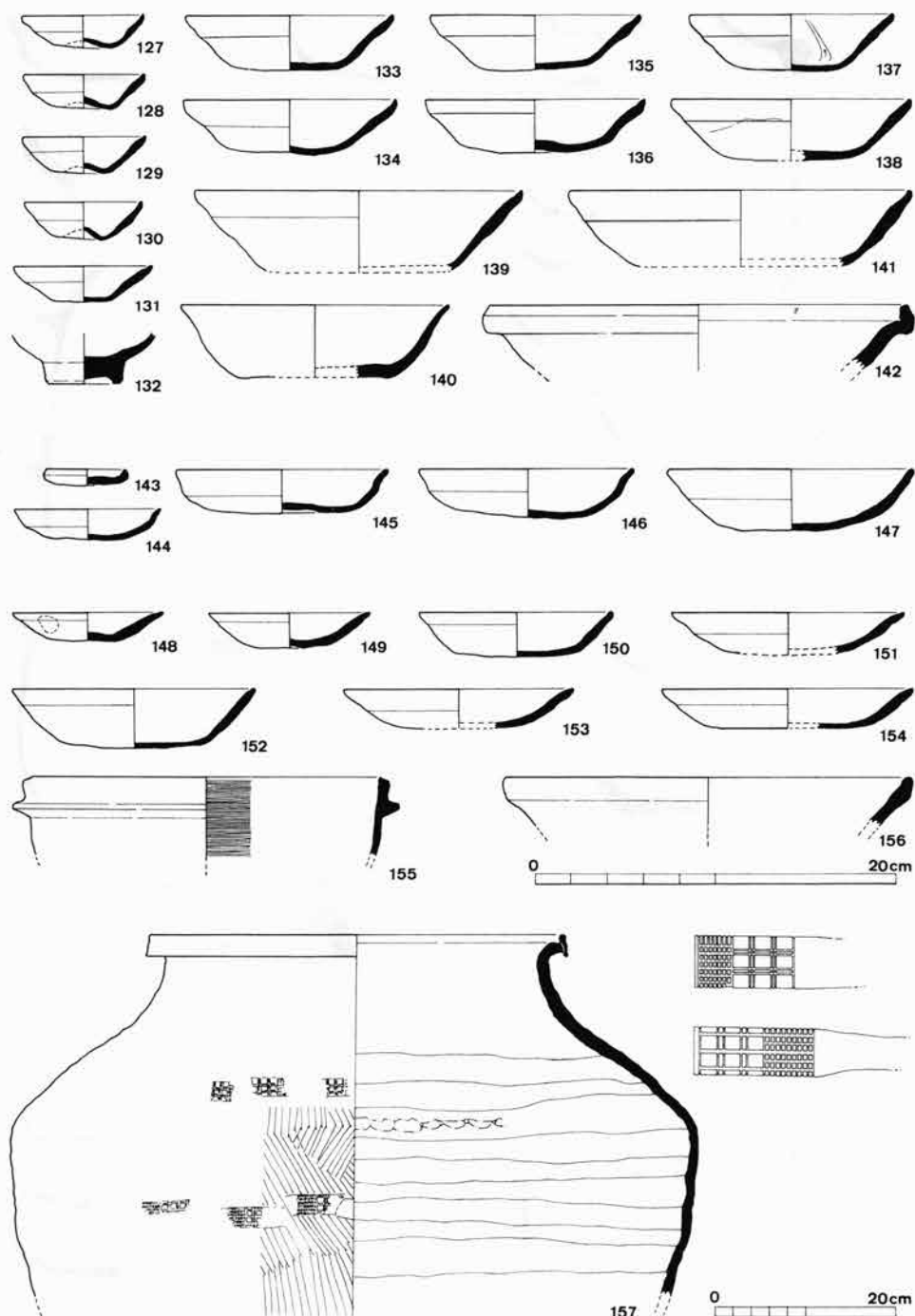
第54図 SK672・SK692・SD353 出土遺物実測図

- SK672 : 73~82. 土師器皿, 83. 瓦器皿
 SK692 : 84~89. 土師器皿, 90. 瓦器羽釜, 91. 瓦器碗
 SD353 : 92. 土師器杯, 93~98. 土師器皿, 99. 須恵器鉢, 100. 瓦器羽釜,
 101・102. 青磁碗, 103. 瓦器鍋, 104. 瓦器盤



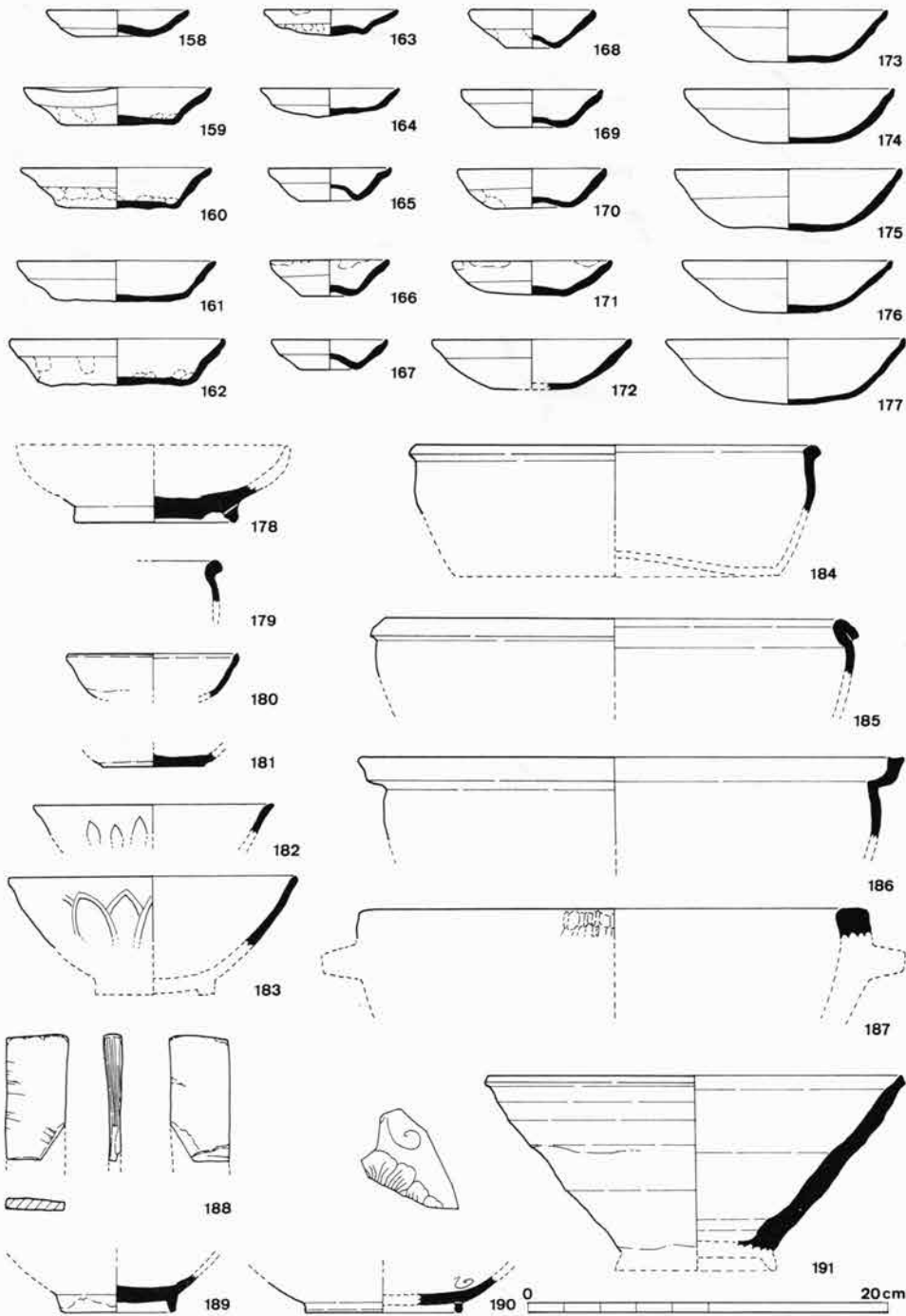
第55図 SD215・SD219・SK757 出土遺物実測図

- SD215 : 105. 土師器高杯, 106~113. 土師器皿, 114. 須恵器鉢, 115. 青磁碗,
116. 瓦器碗, 117. 石鍋, 118・119. 瓦器羽釜, 120. 瓦器鍋
SD219 : 121. 石鍋, 124. 瓦器杯
SK757 : 122. 瓦器鍋, 123. 青磁碗, 125・126. 土師器皿



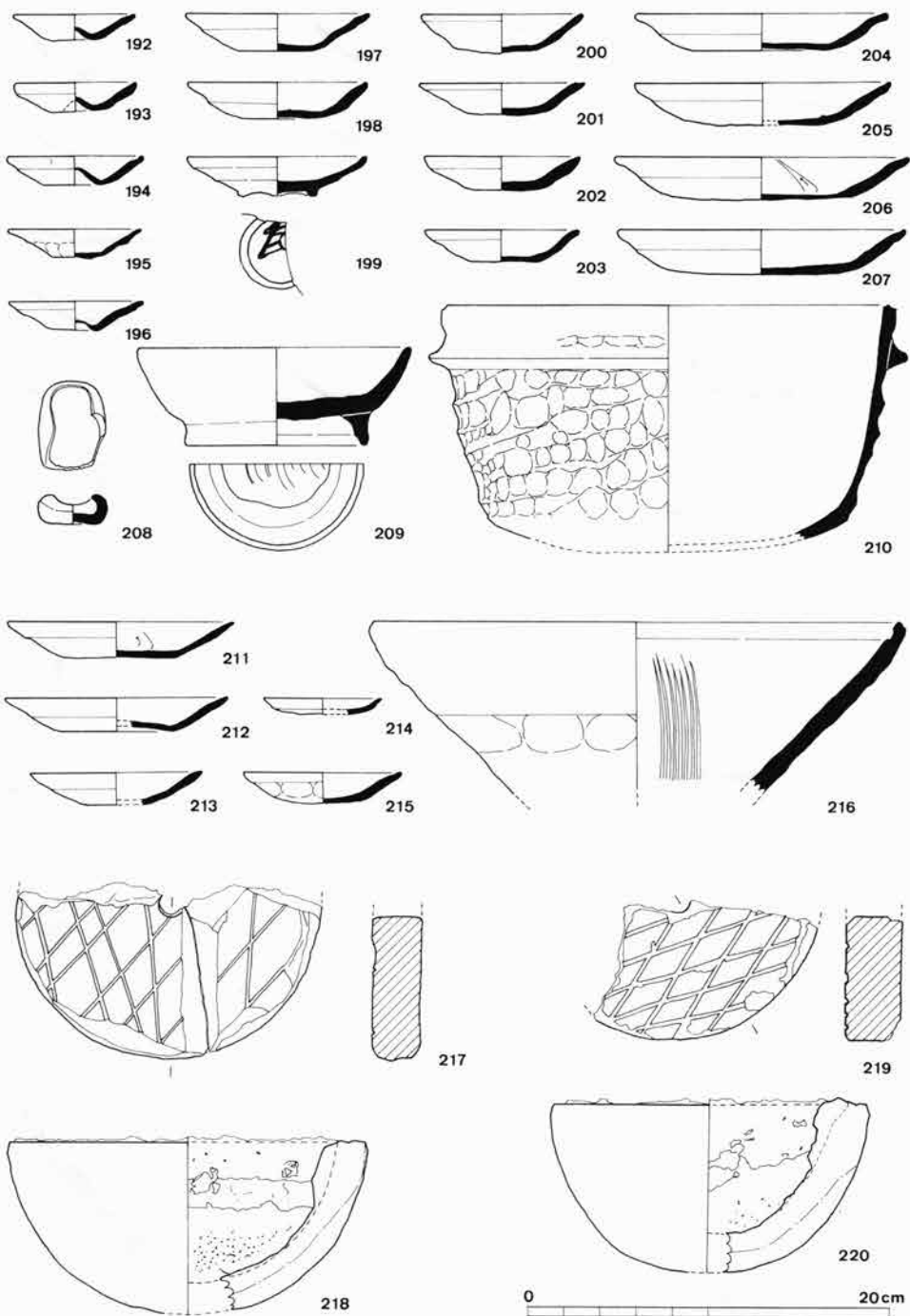
第56図 SK852・SK512・SK599・SK748・SE52 出土遺物実測図

SK852 : 127~131・133~139・141. 土師器皿, 132. 青白磁碗, 140. 瓦器碗, 142. 須恵器鉢
 SK512 : 143~146. 土師器皿 SK599 : 147. 土師器皿
 SK748 : 148~154. 土師器皿, 155. 土師器羽釜, 156. 瓦器鉢
 SE52 : 157. 常滑甕



第57図 SE52 出土遺物実測図

SE52 : 158~178. 土師器皿, 179. 緑釉盤, 180・181. 白磁小皿, 182・183. 青磁碗,
 184. 黄釉盤, 185. 褐釉盤, 186. 瓦器鍋, 187. 石鍋, 188. 砥石,
 189. 白磁碗, 190. 緑釉碗, 191. 灰釉鉢

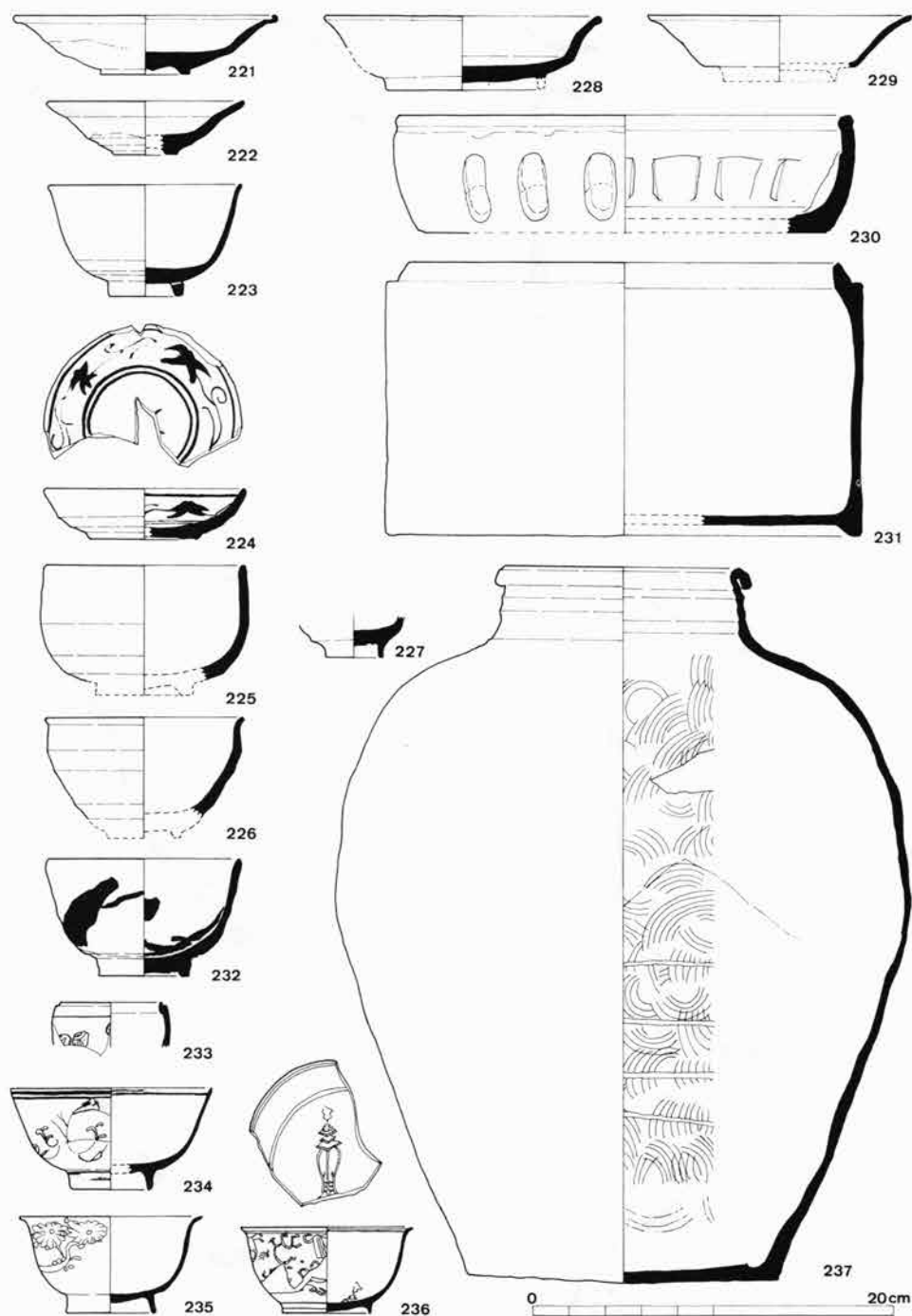


第58図 SK400・SK1012・SK503 出土遺物実測図

SK400 : 192~198・200~207・209. 土師器皿, 199. 白磁皿, 208. 土師器耳皿,
210. 瓦器羽釜

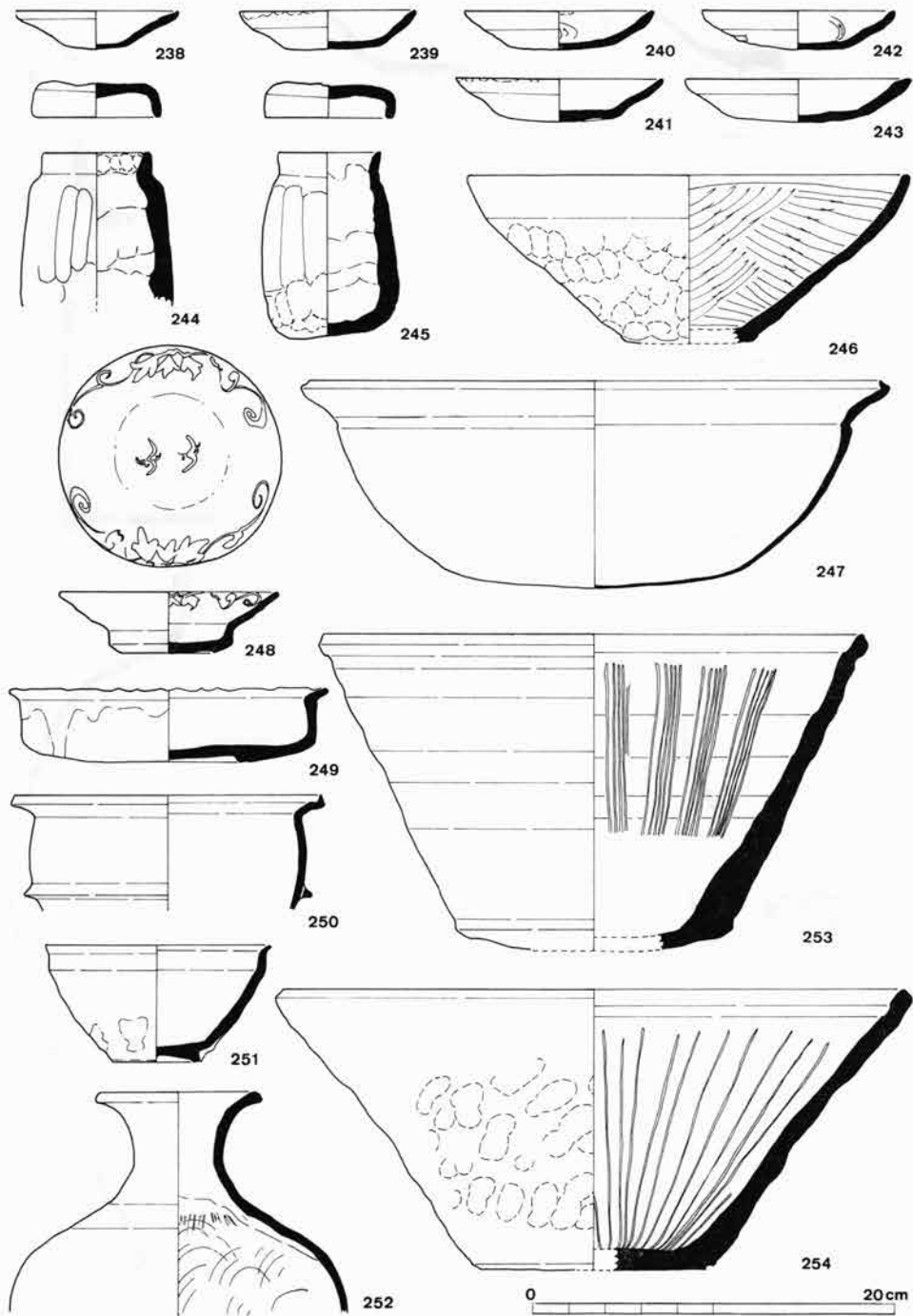
SK1012 : 211~215. 土師器皿, 216. 越前鉢

SK503 : 217・219. 蓋?, 218・220. るつぼ



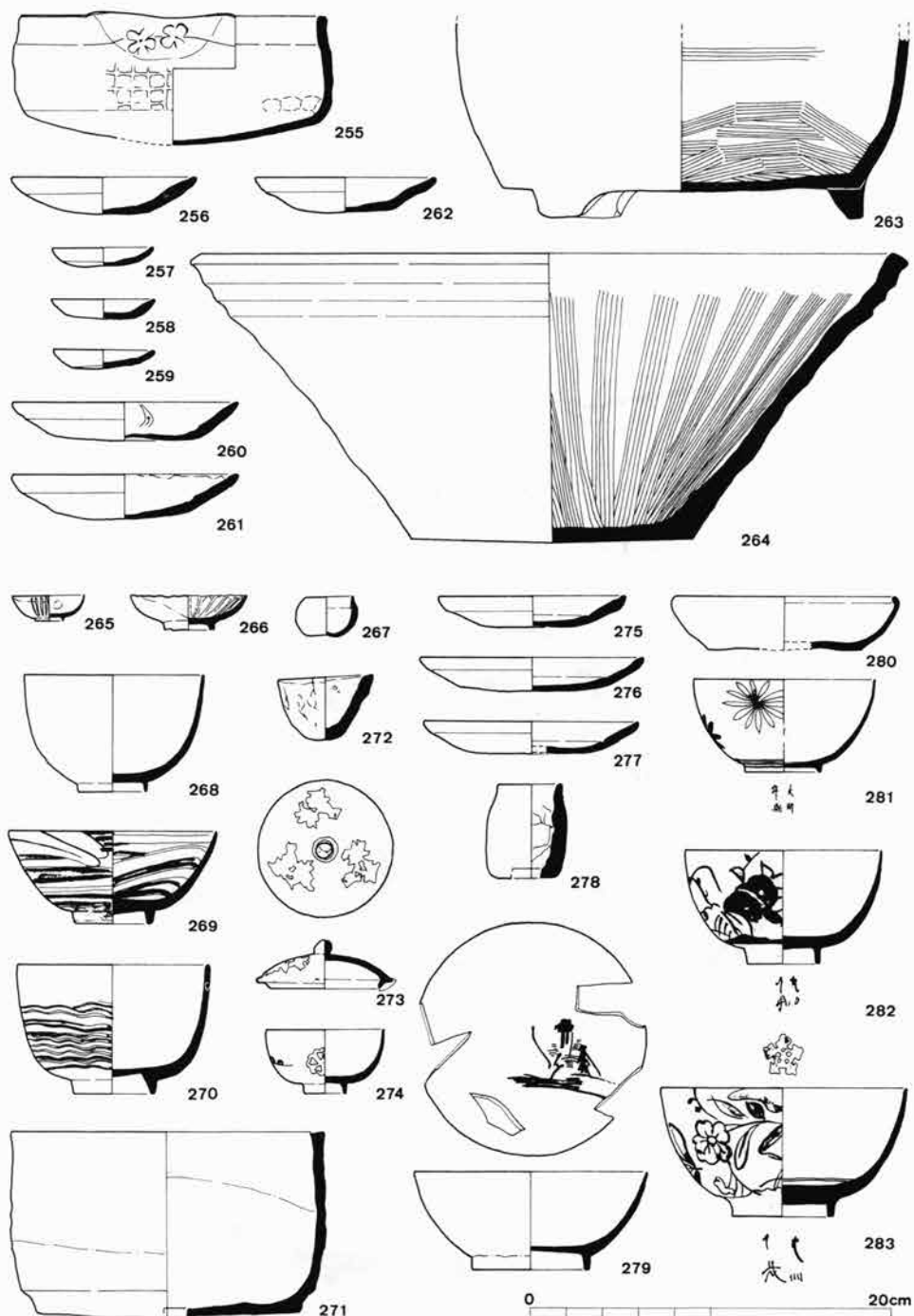
第59図 SK300 出土遺物実測図

SK300 : 221・222. 唐津皿, 223. 唐津碗, 224. 美濃皿, 225. 黒織部碗,
226・227・232. 美濃碗, 228・229. 志野皿, 230. 丹波盤, 231. 瓦器火舎,
233. 青花磁器小壺, 234~236. 青花磁器碗, 237. 唐津壺



第60図 SK303 出土遺物実測図

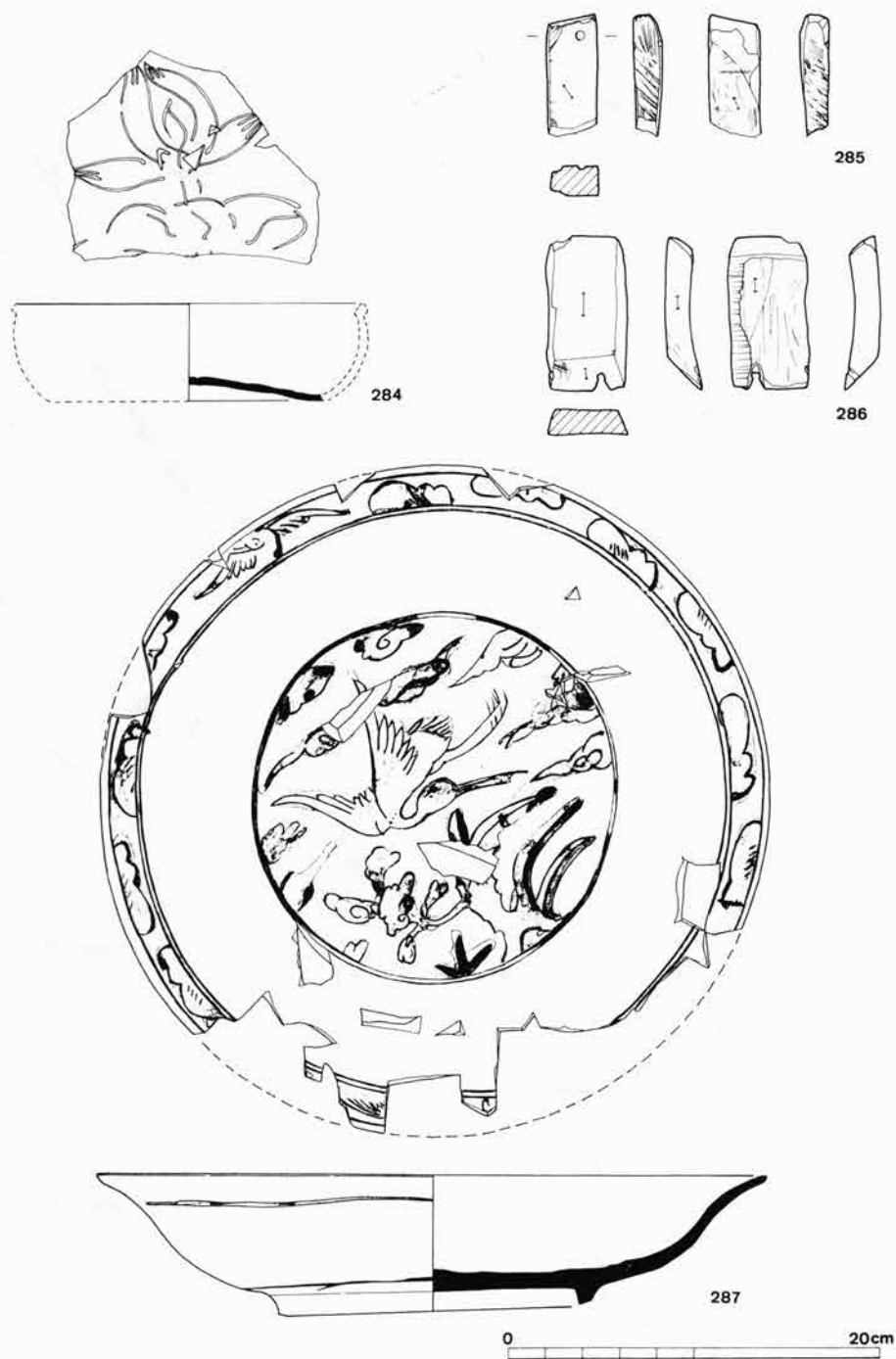
SK303 : 238~243. 土師器皿, 244・245. 焼塩壺・同蓋, 246. 瓦器鉢, 247・250. 土師器鍋,
248. 志野皿, 249. 志野鉢, 251. 美濃碗, 252. 唐津舟徳利, 253. 信楽すり鉢,
254. 丹波すり鉢



第61図 SK300・SE39 出土遺物実測図

SK300 : 255. 土師器鍋, 256~262. 土師器皿

SE39 : 265・266. 白釉紅皿, 267. 土師器壺, 268. 白磁碗, 269・270. 唐津碗, 271. 志野? 桶,
272. るつぼ, 273. 伊万里蓋, 274. 伊万里小杯, 275~277. 土師器皿,
278. 焼塩壺, 279. 美濃碗, 280. 土師器鉢, 281~283. 伊万里碗



第62図 SD215・4トレンチ荒掘中出土遺物実測図
 SD215：284. 三彩盤, 285. 砥石, 286. 滑石製品
 4トレンチ荒掘中：287. 青花磁器大皿

50図で示したようなタイプである。調査地全体では10個体を越えない程度出土している。特に13世紀後半～14世紀の遺構でよく出土する。

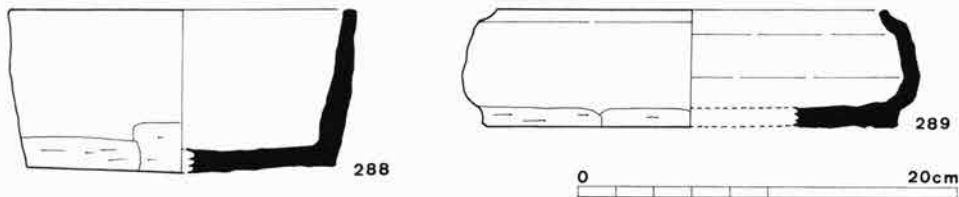
この他、珍しい遺物としてSD215出土の中国製三彩劃花文盤がある。内底面に三彩があり、褐色と黄色と緑色で構成されている。ヘラによる花文はのびやかで、おそらく蓮華文をイメージしていると思われる。色彩は河南省宝豊窯^(注12)出土品に似るが、本品は福建省で焼成された可能性が高い。^(注13)

15世紀末～16世紀にかけての遺物も点々と発見されている。SK400は15世紀末～16世紀前葉に属すると思われる。天文元(1532)年に埋没した山科寺内町石室資料にはへそ皿^(注14)はなく、SK400出土例にはほとんど退化したへそ皿があることから、ほぼ妥当な年代と思われる。SK1012は16世紀中葉で、ここでは越前焼すり鉢^(注15)が出土した。京都市内ではこの段階は信楽焼が主流であり、珍しい例と言える。

16世紀後葉～17世紀初頭、つまり安土・桃山時代は当該地において大きな画期である。調査経過の項で述べたように、佐竹氏の家紋である「扇に月丸」の金箔瓦が発見されており、一時期戦国大名の屋敷地であった。他の遺物も多種多様で、唐津や瀬戸・美濃、丹波や備前、信楽などの国産陶器のほか、中国製の青花磁器もある。SK300・303などが代表的遺構である。金箔瓦の出土分布を見てみると、第2トレンチの北部、第1トレンチの東部、第3トレンチの東部にあり、第4トレンチの周辺に分布している。また、ゴミ穴も同様であることから、かつて第4トレンチ部分に中心的な建物があり、その軒の周りを金箔瓦で飾ったと思われる。

17世紀～18世紀の遺物も多数発見されている。今回はSE39出土資料を図示したに過ぎないが、御菩薩池焼と思われる資料(SK02)もある。

項をかえて瓦とるつぼについては述べるが、他に銭貨も発見された。寛永通宝・永楽通宝・皇宋通宝・元豊通宝・元祐通宝・政和通宝・淳熙元宝・祥符通宝・洪武通宝・皇宋元宝・熙寧元宝・天禧通宝・嘉祐通宝などの種類が確認されている。金属製品としては、他にキセルの部品・文鎮・不明針状製品などがある。なお、木製品にはSE45から出土した曲物などがあるが、今回は割愛した。(伊野近富)



第63図 SK303・SD590 出土信楽焼

②平安京造営以前の遺構・遺物

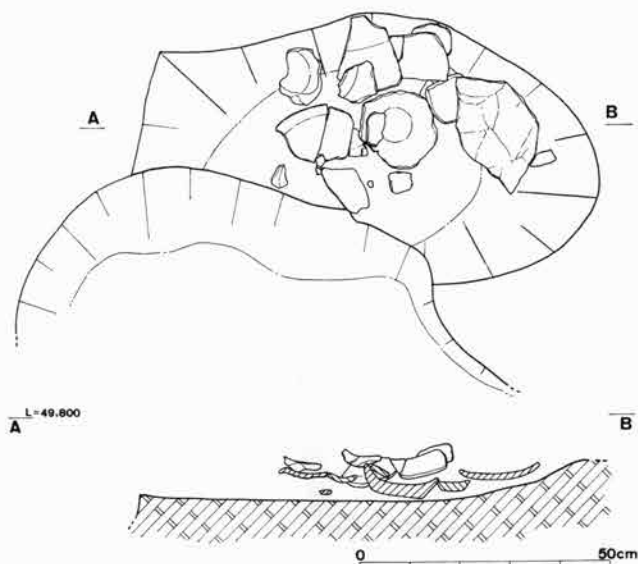
平安京跡(府民ホール)の発掘調査では、平安京造営以前の遺構・遺物として弥生時代のものがある。この弥生時代の遺構は、今回の調査地の南西部に位置する京都府立計量検定所の増改築に伴う発掘調査(左京北辺三坊五町)において、弥生時代前期の遺構・遺物が出土し、内膳町遺跡として命名されている。この内膳町遺跡については、昭和54年に発掘調査を行った平安京内膳町跡(現平安会館)でも細片ながら弥生時代前期の遺物が確認されており、今回の調査を含め遺跡の範囲が予想できた。

平安京跡(府民ホール)の調査で検出した弥生時代の遺構は、平安京の造営による整地に際して、偶然その一部が削平を受けず残った状態で出土したもので、遺存状態は極めて悪い。これら遺存状態の悪い弥生時代の遺物は、黒褐色粘質土の整地層に細片が混じった状態で出土したものが大半であるが、比較的まとまって出土した地点には、第1トレンチの21区を中心とした土坑(SK233)、第4トレンチの17Ⅰ区を中心とした不明遺構(SK601)などがある。以下、弥生時代の遺構・遺物をまとめて記述する。

SK233の遺構・遺物

SK233は、第1トレンチの21F区を中心として検出したもので、平安京造営時の整地層(黒褐色粘質土)を10cmほど掘り下げた面で検出した遺構である。土坑は長軸91cm・短軸53cmの楕円形土坑であり、検出面からの深さ7.5cmを測る浅いものである。この土坑内からは壺・甕・鉢などが破損した状態で出土した。

壺(308)は体部最大径が中位より上方にあり、体部の張りが強い。口頸部は筒状の頸部より、大きく外反する口縁部へ続くものと思われるが、口縁部が欠損しており明らかでない。頸部外面には7条+ α の沈線文がめぐり、体部上半には貼付突帯文が2条めぐり、この突帯文の上面にはヘラ状工具による刻み目を全面に施したと思われる。体部外面の調整は摩滅により不



第64図 SK233 土器出土状態

明瞭であるが、底部外面には一部縦方向のヘラ磨き調整が認められる。

甕(305)は倒鐘形の体部を呈し、口縁部は如意形口縁である。口縁部外面にはヘラ状工具による刻み目を施す。肩部には3条の半截竹管による沈線文がめぐり、体部内・外面は摩滅により調整は不明である。

SK601の遺構・遺物

SK601は第4トレンチの西端部17I区を中心に検出した不明遺構である。SK601は中・近世の各遺構により削平を受け、全容については明らかでないが、偶然にも削平を受けていないところでは第71図のように壺・甕などの土器片を意図的に細かく砕き、敷き詰めた状態で遺構があり、炉跡となる可能性がある。

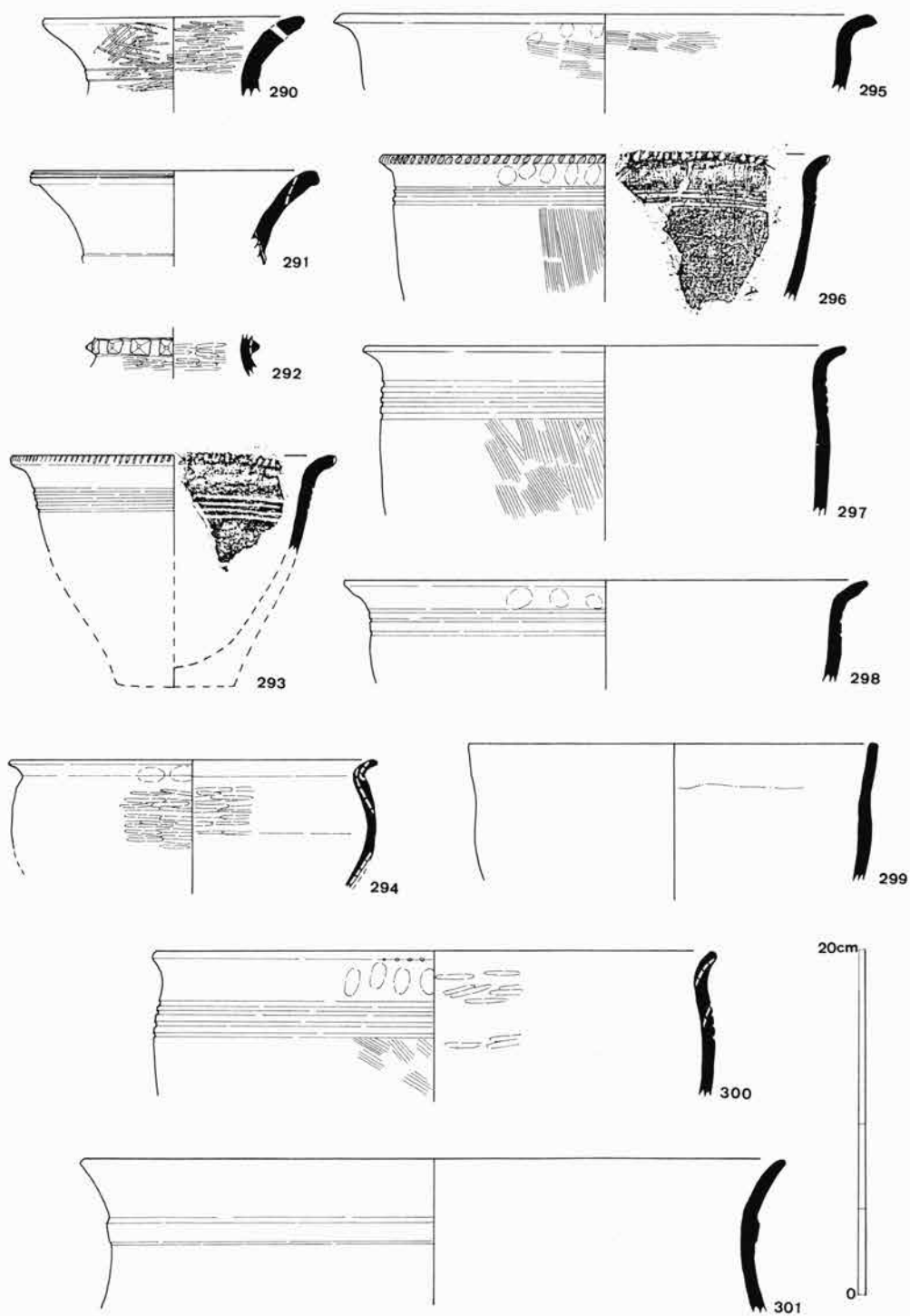
壺(290・291)は頸部より短く外反する口縁部へ続く広口壺である。290・291は頸部に削り出しによる幅広の突帯文がめぐり、口縁部は無文のもの(290)と2条の沈線文がめぐり、291の器壁の遺存状態が悪く不明瞭である。290は焼成前に円孔が開けられている。壺(292)は頸部片である。頸部外面にはコブ状突起を貼り付ける。壺(301)は口縁部が短く外反し、頸部には幅広の削り出し突帯を設ける。口縁部内・外面は遺存状態が悪く調整不明である。壺の体部片(311・312)は肩部に削り出しによる段を設け、段上には3条+ α の半截竹管による沈線文と沈線文間には棒状刺突文(311)あるいは竹管文を施す。体部外面はヘラ磨き調整を施す。

甕(295~298・300)は如意形の口縁形を呈し、体部は倒鐘形と思われるが完形に復元しえるものがない。甕296・300は口縁端部に刻み目を、肩部にはヘラ状工具による3条の沈線文を施すもの(296)、あるいは半截竹管による4条の沈線文を施すもの(300)がある。体部外面はハケ、内面はナデ(296)あるいはヘラ磨き調整(300)を施す。297・298は口縁端部が無文で、肩部に3~4条の半截竹管文による沈線文をめぐらす。体部外面は縦方向のハケ、内面はナデ調整と思われるが、298は表面の摩滅が著しく不明瞭である。295・299は口縁部および肩部とも無文のものである。甕328・329は口縁部に刻み目突帯を巡らしたもので、縄文晩期のものである。

鉢(293)は口縁部が短く外反したもので、口縁部外面にはヘラ状工具による刻み目を、肩部には半截竹管による4条の沈線文をめぐらす。体部外面の調整は不明である。体部内面はナデ調整を施す。鉢(294)は肩部の張りが強く、口縁部は短く外反する。体部内・外面は横方向のていねいなヘラ磨き調整を施す。

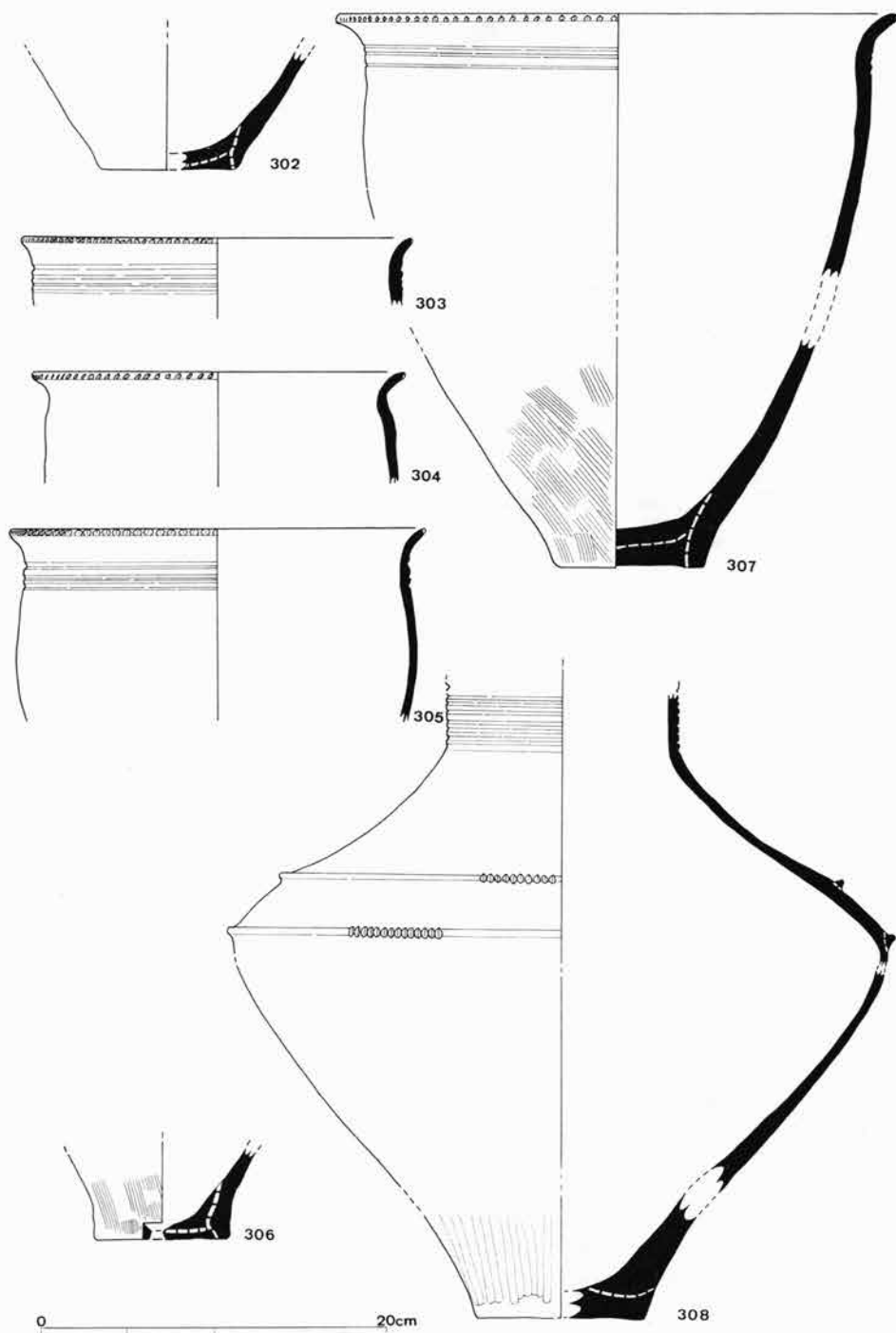
その他の遺構から出土した弥生土器

弥生時代前期のまとまった遺構はSK233・SK601の2か所であるが、各トレンチの整地



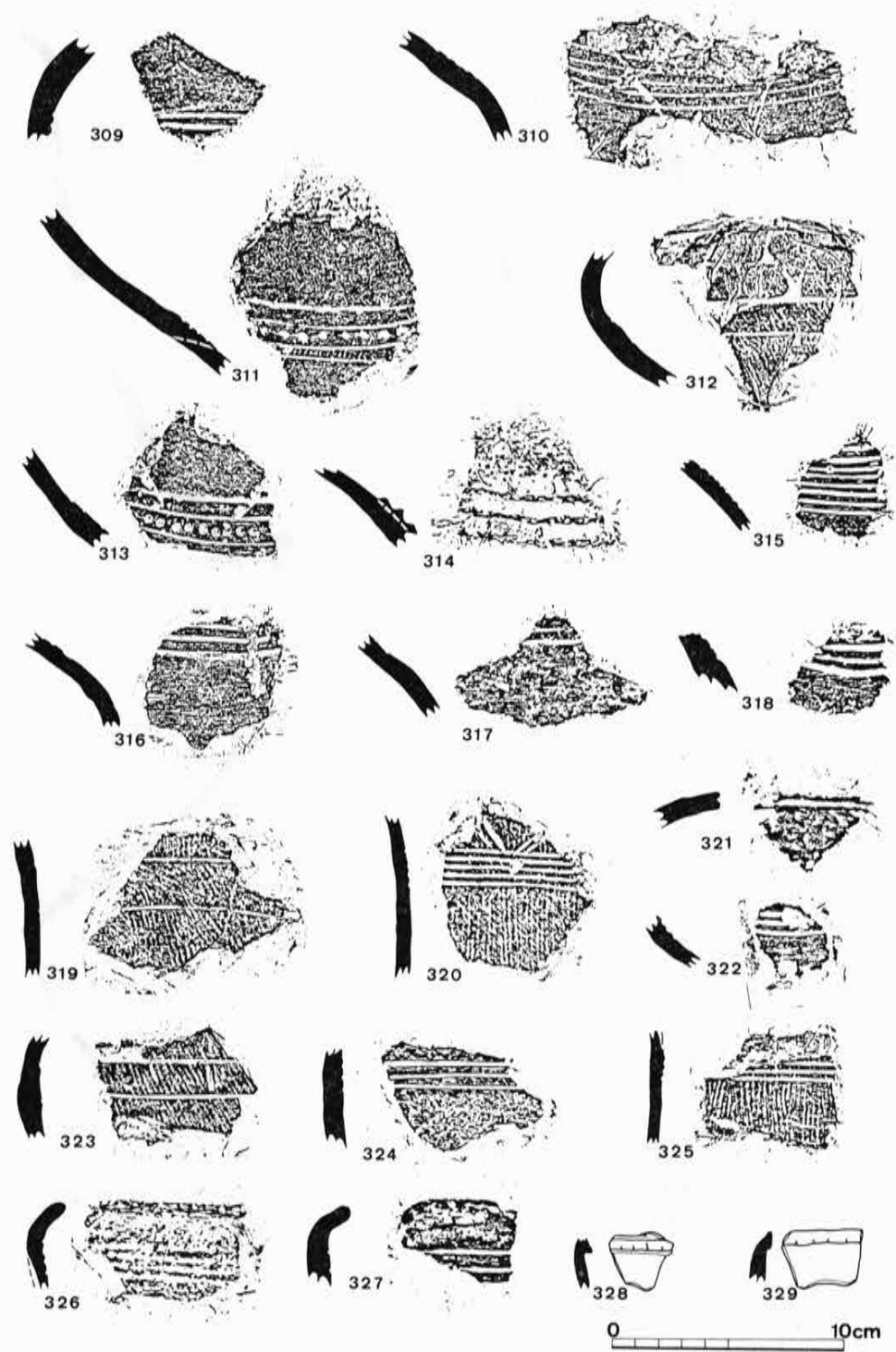
第65図 弥生土器(1)

290~296・298・299・301; SK601, 297; 2トレ整地層, 300; SK780



第66図 弥生土器(2)

302~304・306; 2トレ整地層, 305・308; SK233, 307; SK780



第67図 弥生土器(3)

層からも細片ながらも土器が出土している。

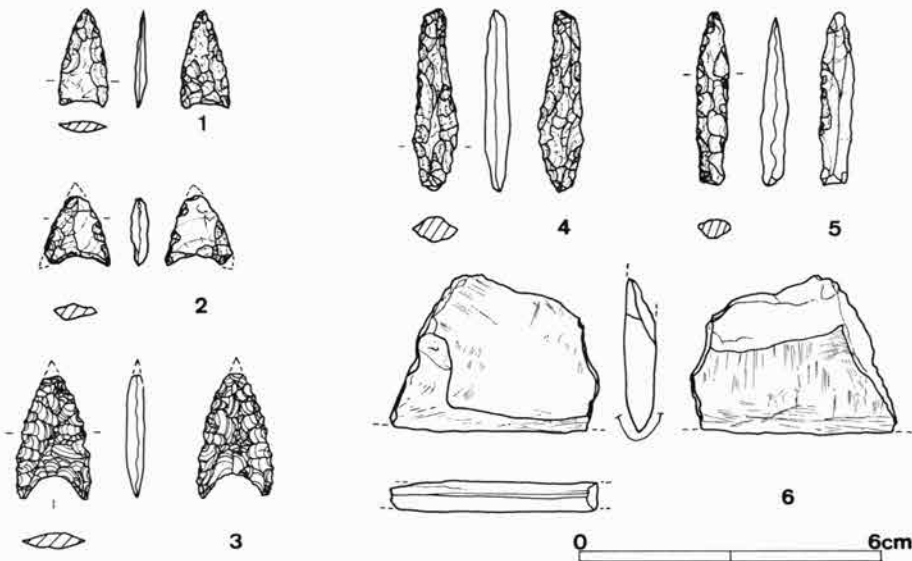
甕(307)は第4トレンチ、SK780から出土したものである。307は倒鐘形の体部から、口縁部が如意形を呈するもので、今回の調査地では唯一完形に近い状態で復元できる甕である。口縁端部にはへら状工具による刻み目を、肩部には半截竹管による3条の沈線文をめぐらす。体部内・外面は器種の遺存状態が悪く、調整は不明瞭であるが、底部外面には粗いハケ調整が認められる。甕(303・304)は16Q・R区の整地層から出土したものである。甕303は口縁端部に棒状工具による刻み目を、肩部には半截竹管による4条の沈線文をめぐらす。甕304は肩部が無文である。口縁部外面にはへら状工具による刻み目を施す。306は底部片で、底部には焼成前に円孔を開けている。

SK233・SK601を含めたこれらの土器は、昭和48年に調査された内膳町遺跡と同様、弥生時代前期の中段階から新段階の資料である。(石井清司)

石器類

石器類は合計10点出土した。内訳は、石鏃3点・石錐2点・石庖丁1点・敲石類3点・石皿1点である(第68～70図)。

石鏃は、3点とも凹基鏃である(第68図1～3)。1は長さ1.9cm・幅1cm・厚さ2mm・重量0.6gを測る。細かな剝離による両面加工である。基部のえぐりはそれほど深くないが、明瞭につけられている。石材はサヌカイトを使用している。2は先端部および片側基部を



第68図 石器実測図

欠損している。残存長1.5cm・残存幅1.4cm・厚さ3mm・重量1gである。両面加工であるが、裏面の加工痕は片側側縁から基部にかけてよくとどめている。基部のえぐりは滑らかな弧を描く浅いものである。石材はサヌカイトである。3は、先端部をわずかに欠損する。残存長2.5cm・残存幅1.5cm・厚さ3mm・重量2gを測る。非常に入念で細かな剥離加工痕により両面とも成形されている。基部のえぐり込みは1・2と比較して深く、全長のおおよそ5分の1にまで達している。石材は暗赤色のチャートである。

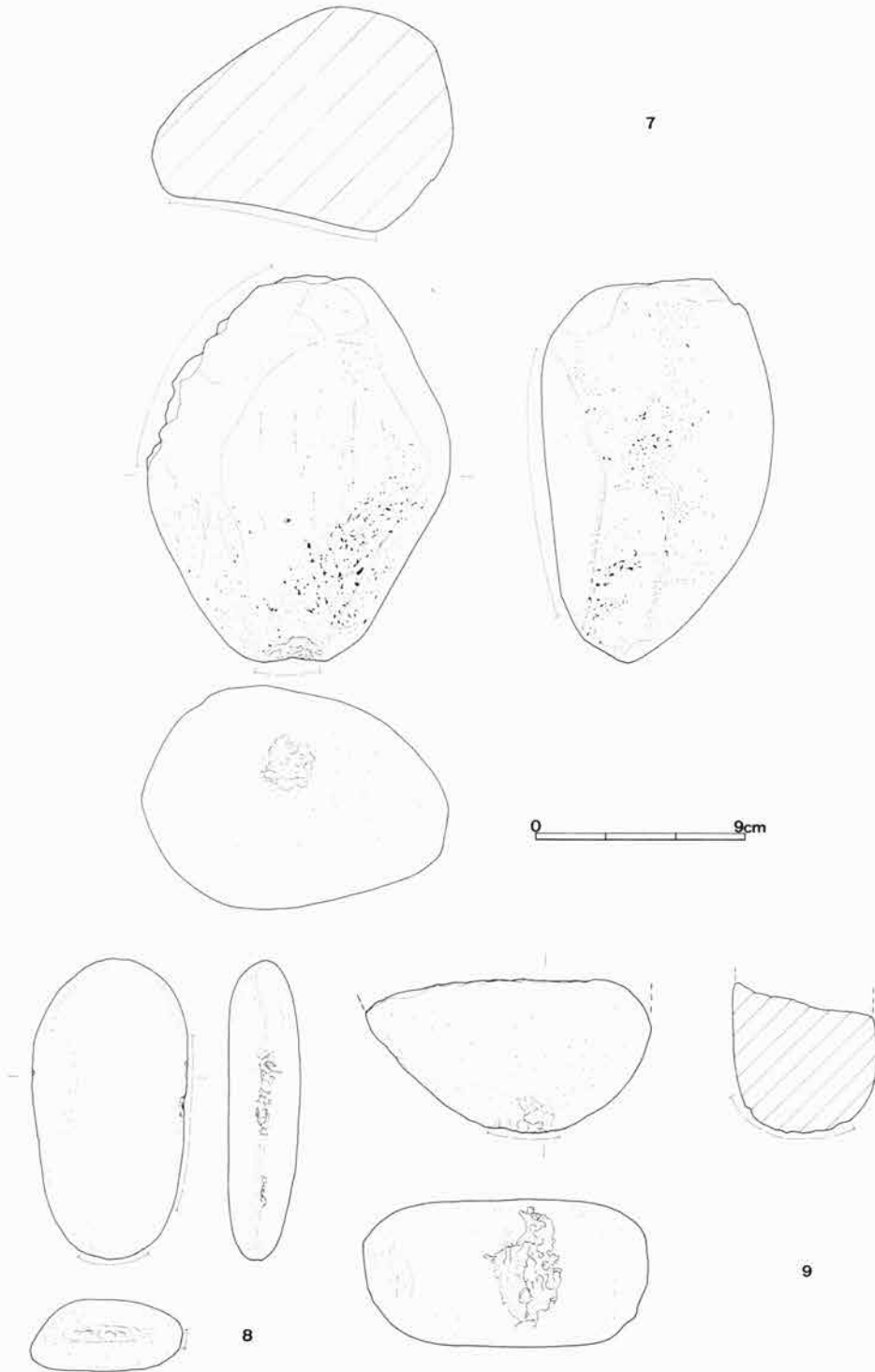
石錐はつまみなどをもたない細長い形態のものである(第68図4・5)。4は長さ3.6cm・幅1cm・厚さ5mm・重量3gである。断面形は凸レンズ形を呈する。加工痕は両面とも入念で細かく、中間部がややふくらむ。先端部はやや鋭利さを欠くため、石錐の未製品とみる。石材はサヌカイトである。5は長さ3.4cm・幅7mm・厚さ4mm・重量2.2gを測る。断面形は長軸の中央部に沿って稜をもつため、やや菱形に近い形となる。片面は両側縁からの細かな加工痕をとどめ、もう片面は主要剥離面から剥がれた際の稜線をとどめるのみである。先端部は鋭く尖る。

石庖丁は、残存長4.1cm・残存幅3cm・厚さ6mm・重量11gである(第68図6)。激しく破損しているが、刃部の稜線は明確につけられており両刃である。刃部および残存する面はよく磨かれており、滑らかな感触をもつ。細かな線條痕が観察でき、刃部付近は刃部に平行して、その他の残存面は主に縦方向(刃部に対して垂直)に走っている。石材は粘板岩である。

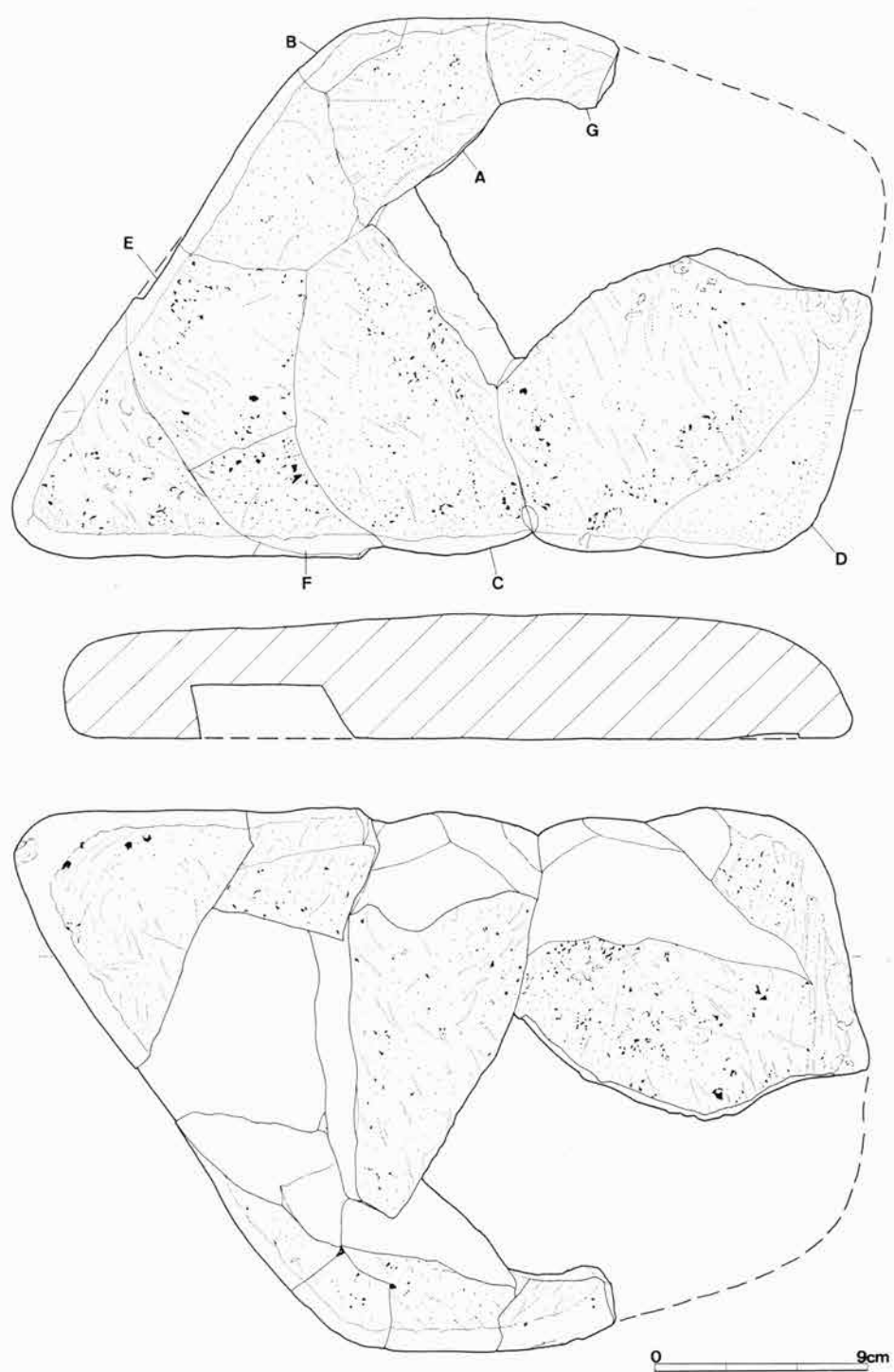
敲石類は、自然の円礫を用い、面的で滑らかな磨面をもつ磨石(第69図7)と、先端部や側縁部にコツコツと敲かれた痕をとどめる敲石(第69図8・9)がある。磨石は、長さ16.4cm・幅13.1cm・厚さ9.5cm・重量2.1kgを測る。一方の先端部には連続した敲打による潰れ痕をとどめている。片方の先端部から中間部にかけては階段状剥離が認められ、激しい打撃を受けたことがわかる。磨面は片側の表面に広く形成されている。磨れの状態は顕著で、滑らかな曲面を形成している。油脂の飛沫が付いたのか、黒いタール状の付着物が疎らに観察できる。火熱は受けていないようである。石材は硅質砂岩を使用している。

8は扁平楕円形の自然礫を素材とする敲石である。長さ12.8cm・幅6.7cm・厚さ3cm・重量370gである。片方の先端部と側縁部に軽微な敲打痕をとどめる。石材は砂岩である。9はほぼ半割しているが、側縁部の一部に明瞭な敲打痕を残している。残存長12.2cm・残存幅6.7cm・厚さ6.3cm・重量670gを測る。砂岩を石材とする。

石皿は、長さ35.4cm・幅22.8cm・厚さ5.3cm・重量4.6kgといった大きなものである(第70図)。6個分に割られた接合資料で、他所に持ち出された部分があり、完形に接合復元し得ない。表裏面ともよく磨かれており、凹み痕はなく平坦で滑らかな面となっている。



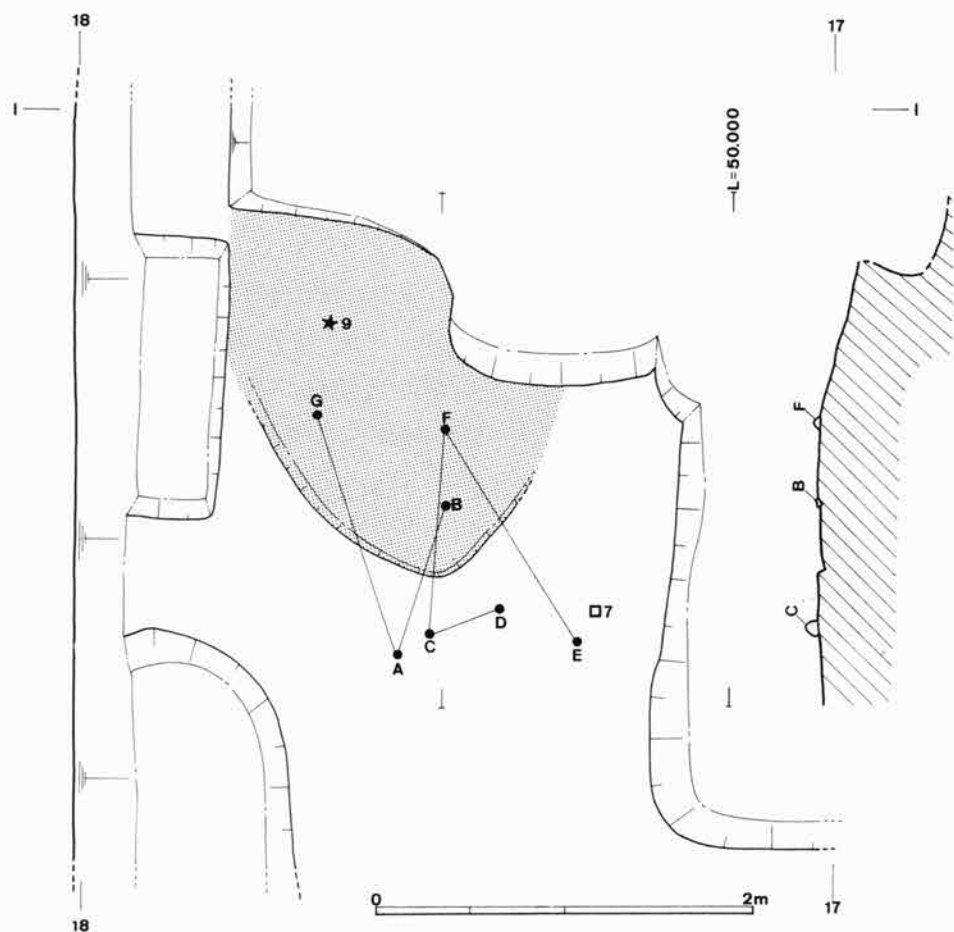
第69図 敲石・磨石実測図



第70図 石皿実測図

また、先の磨石と同様、タール状の付着物が表裏面ともに認められる。磨かれた方向は一定しておらず、広く全面を使って何らかの作業を行ったようである。石皿は縄文時代では完形品で出土する例が少ないという指摘がある。^(注16) 今回の出土例も通常の使用では考えられないほど破損している。破損は一方の長辺に沿った縁部から順に打撃が加えられているため、割れ方に規則性がある。調理具としての機能をおえたのちに、壊され、破片のいくつかは炉中に投じたものと言える。

石皿と磨石の分布状況についてふれておきたい。本遺跡では石皿と磨石は、弥生時代前期の土器片が細かく貼られた火床部をもつ炉の周辺部から出土している(第71図)。磨石は炉跡からおおよそ1m 南東方向に離れて位置する。石皿はその磨石出土位置の西側に破砕した状態で出土しており、破片6点のうち、3点が炉跡内に入っている。この状況からみて、炉の南側付近で石皿と磨石が使われたものと考えられる。石皿と磨石は、縄文時代で



第71図 石皿・磨石分布状況図

はドングリなどの堅果類を主な対象とする植物質食糧の調理加工具とされる。稲作伝播以後の弥生時代でも、稲以外の植物質食糧は縄文時代ほどではないにしろ利用された。ごく最近では、古墳時代の住居跡内からも石皿や敲石類の出土例が報告されてきており^(注17)、生活復元の上からもこれらは大切な遺物であると言えよう。また、石皿と磨石による調理空間(厨房)としてこの場を捉える上で、炉の存在はごく自然である。しかしながら、次の点は注意しておかねばならない。それは炉の形態の問題である。縄文時代はいうに及ばず、弥生時代の多くの住居跡内には中央付近に炉を備えている。そしてごく日常的な炊事作業の大半は屋内炉でこなしたであろう。本炉跡が屋内炉か屋外炉のいずれであったかは、検出面積の制約から判断し得ない。ただ、炉の周辺部に竪穴式住居跡としての柱穴痕が認められなかったことや、土器片を細かく火床に貼って造られた特異な形態の炉であることなどから、屋内でしかも各住居跡ごとの施設であったとは考えにくい。したがって、仮に屋外炉とするならば、非日常的な食糧の調理やなんらかの作業に使うための集落共有の炉ではなかったかと推察する。住居跡外における火処の分布状況がわかるような調査例の増加を待ちたい。

(黒坪一樹)

③個別の遺物概要

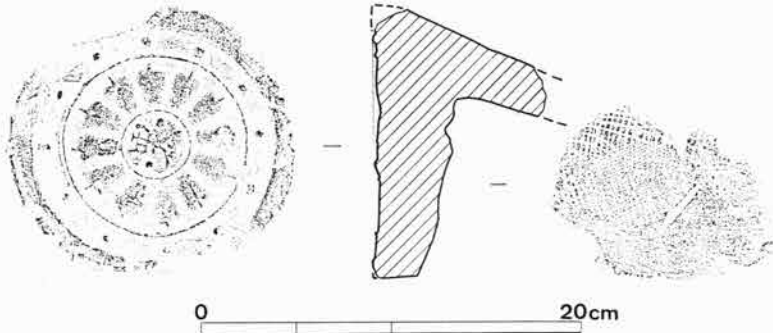
瓦類

今回の調査で出土した瓦類は、平安時代中期以降、江戸時代末期までの各時代の瓦を含み、多種多量である。大概、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、棧瓦、椽先瓦などに分類できる。しかし出土遺物の総量が膨大なため、今だ洗浄・整理途上であり、今後、種類などが増加する可能性も高い。本概要では現時点で整理を終えた平安時代の瓦と近世前半期に属する金箔瓦についてその概略を記し、全体総括などは後日にゆずることとする。

ア. SE45出土軒丸瓦(第72図)

内区に梅花形を呈した十二葉の単弁蓮華文を有する軒丸瓦である。中房内には1+6の蓮子を配するが、「栗」銘を陽刻するのを最大特徴とする。外区には12個の珠文から構成される珠文帯をもち、そのうち2個の珠文は範キズにより外縁と連続し、また珠文間には範の木目痕が残る。外縁にも範型痕や木目痕が付く。瓦当裏面は、上半部では木目粗い布目痕、下半部では木目細かい布目痕が見られ、下半部はその上面をさらに2回横ヘラケズリ調整する。しかし調整不十分なため凹凸状を呈し、極めて粗雑に仕上げている。顎端面は横ヘラケズリし、丸瓦部では縦ヘラケズリ調整する。胎土・焼成は良質で、黒灰色を呈する。いわゆる一本造りによる軒丸瓦で、平安時代中期に属する。同文瓦が平安宮推定内裏跡から出土している。「栗」銘から、本軒丸瓦は京都市洛北に存した栗栖野瓦窯産と考

えてよかる
う。



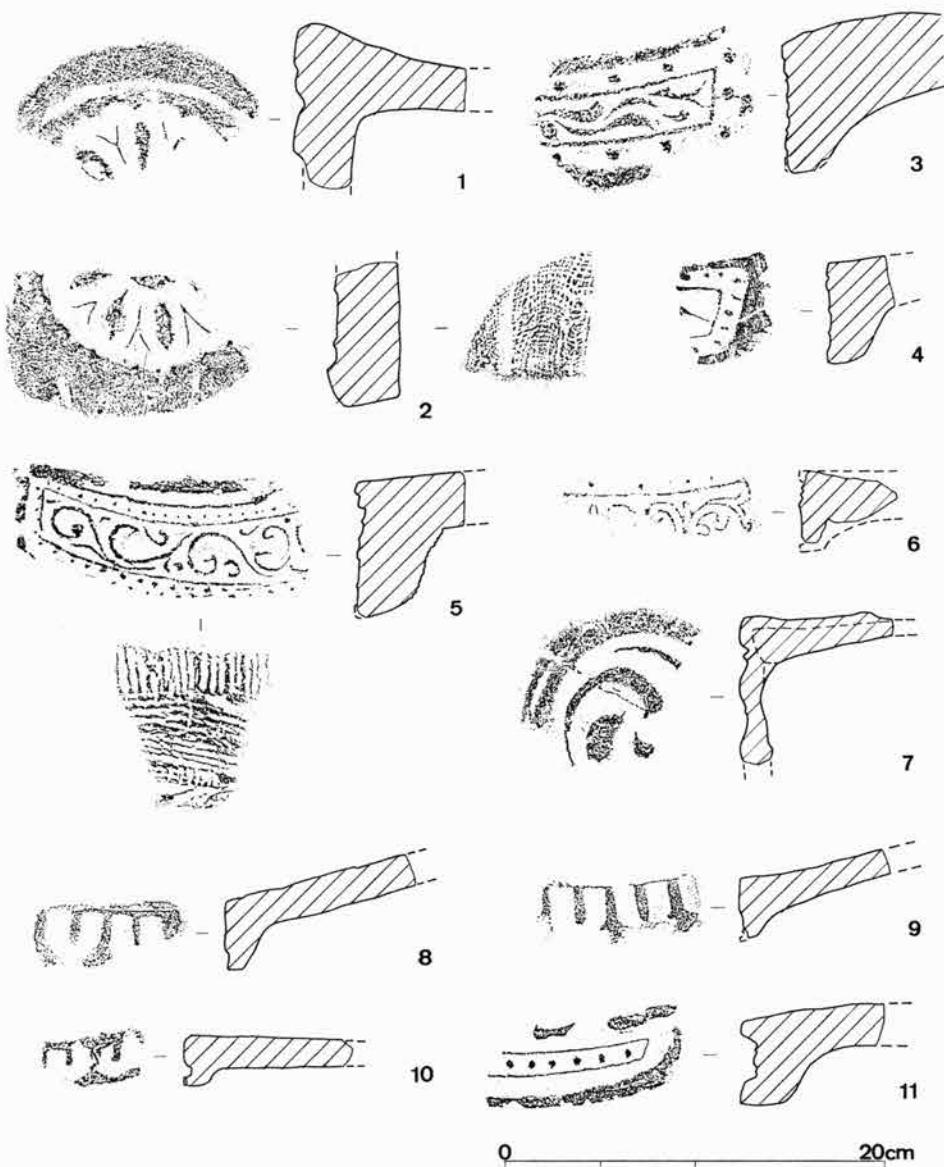
第72図 SE45 出土軒丸瓦実測図

イ. 平安時代の軒丸瓦(第73図1・2・7)

瓦当文様の差違をもって、単弁八葉蓮華文軒丸瓦(1・2)と巴文軒丸瓦(7)に二分できる。前者は同范関係にある軒丸瓦片2個体で、極めて簡略化された蓮華文を瓦当文様とする。瓦当文様部は大概円形を呈するが、外縁外周のヘラケズリ調整が粗雑すぎるために、瓦当面は不整形で、三角形や四角形状(2)をなす場合が多い。瓦当面には明瞭に范型痕を残す例(1)もある。瓦当裏面には布目痕が顕著にみられ、「一本造り」を証明している。平安時代中期に属し、京都市近郊の「左」字瓦窯系である。後者は左巻き三巴文を瓦当文様とし、珠文帯を有しない小形の軒丸瓦で、瓦当裏面は押圧整形し、薄く仕上げている。胎土・焼成・技法などから京都幡枝瓦窯系に属し、平安時代末期の12世紀中葉頃に比定できる。

ウ. 平安時代の軒平瓦(第73図3～6・8～10)

軒平瓦は、瓦当文様によって、均整唐草文軒平瓦(3～6)と、剣頭文軒平瓦(8～10)に大別できる。3は肉厚の退化した唐草文を内区文様とし、文様面は浅く、上下外区外周は横ヘラケズリをていねいに施す。直線顎で、造りも厚い。京都市左京区御瓦屋の森瓦窯系で、平安時代中期に属する。4は瓦当右端部の小破片であるが、文様はかなりデフォルメされており、^{オカイラ} 箆の木目が顕著である。平安時代後期前葉に比定できよう。5は逆対称C字形の中心飾をもち、左右に三反転する唐草文を配するが、箆ズレにより下半部から下外区珠文帯にかけ2～3重の文様と化す。顎部には縦→横→縦の粗い縄目叩き痕が明瞭につく。硬質である。典型的な丹波篠・王子瓦窯系ではあるが、脇区界線が直線であることを特徴とする。安井良三氏分類の第一類一式に属し、平安時代中期に比定される。6は、2重線で唐草文を描出させた、C字形中心飾り内に裏字を陽刻した「右」銘軒平瓦で、京都市東山区今熊野池田瓦窯系に属する。平安時代中期である。8・9は折り曲げ技法による剣頭文軒平瓦で、瓦当面に木目痕や布目痕が部分的に認められる。5の軒丸瓦と同時期・同生産地と考えられる。10は小形の剣頭文軒平瓦で、通常築地用と推定されている。8・9と同時

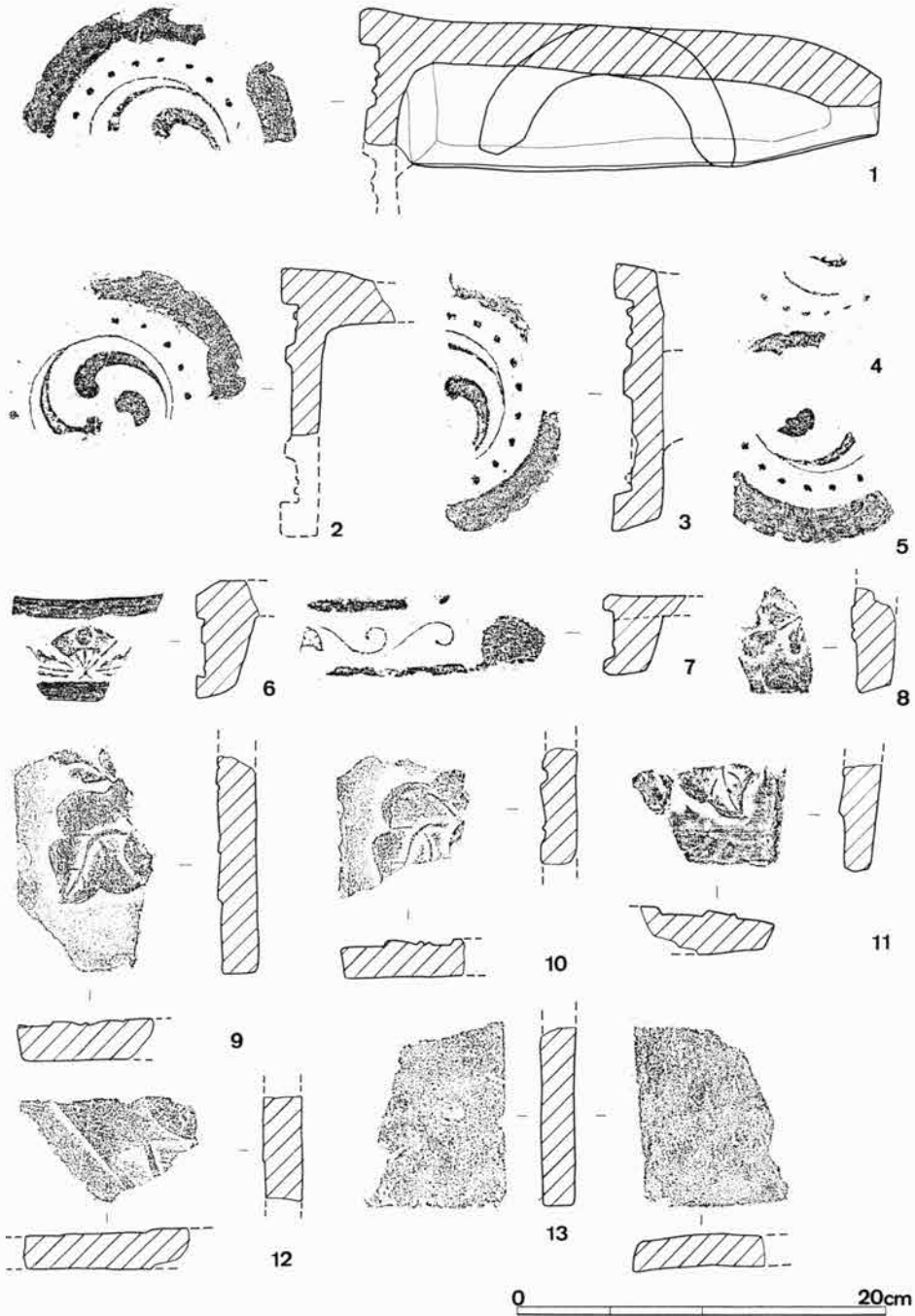


第73図 各種軒瓦実測図

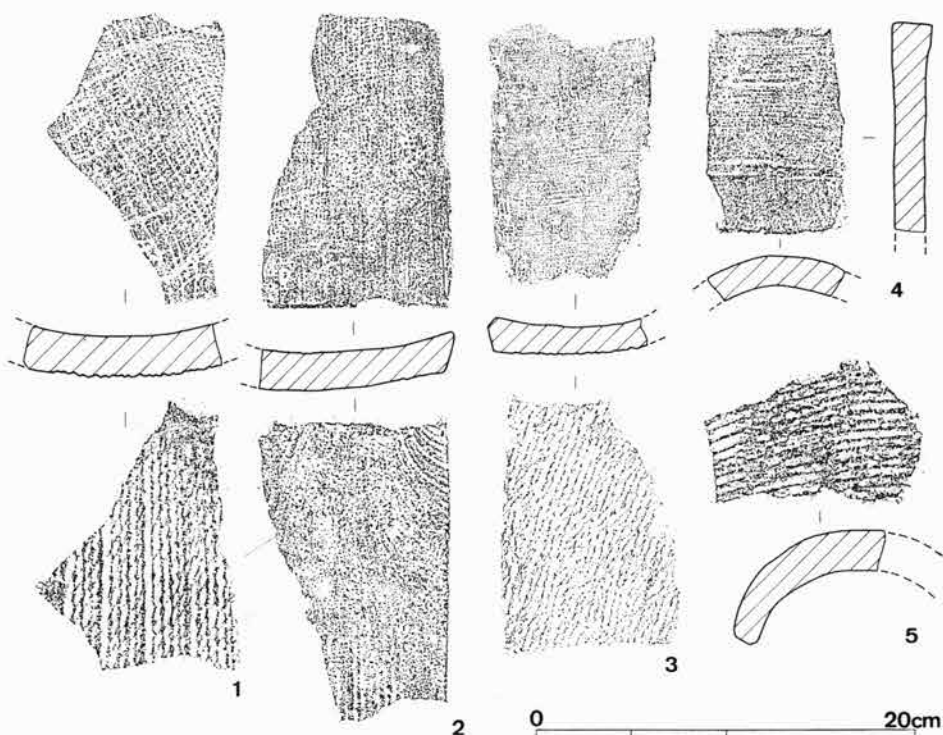
期である。時代が異なるが、連珠文を内区文様とする鎌倉時代の軒平瓦(11)も見られる。

エ. 近世前半期の金箔瓦(第74図)

金箔瓦は、軒丸瓦(1~5)、軒平瓦(6・7)、檼先瓦(8~12)、鬘斗瓦(13)などに大別できる。軒丸瓦は、右巻きの尾が長い圏線状をなす三巴文を内区文様とし、復元個数21ないし22個の珠文を配する。外縁も含め文様突出平坦部には、黒漆を塗布した後、金箔を貼り付けている。瓦当裏面のナデ調整、あるいは丸瓦部凸面の縦ヘラナデ調整、側端面の面



第74図 各種金箔瓦実測図



第75図 平瓦・丸瓦実測図

取りなどは極めていいである。同凹面には布目痕と布袋しぼり痕がみられる。軒平瓦は、日の丸扇子文を中心飾りとして、左右に桐葉を各一葉描き、さらに2反転する唐草文を配する。軒丸瓦同様に漆による金箔を貼り付けるが、6は朱漆を使用しており特異な存在である。瓦当と平瓦部との接合点は上外区に存し高い。顎部などの各表面の横ナデ・横ヘラケズリ調整はいいである。8~11は、厚さ約2cmを測る。桐文を陽刻した榿先瓦で、全体の大きさは不明である。桐文上面には漆使用による金箔がつく。この桐文以外に、佐竹氏の家紋である扇子文(12)や上半部に三巴文を配した縦長の榿先瓦もある。総じていいいなナデ仕上げである。13の熨斗瓦は側端面にのみ金箔を施す。

オ. 平安時代の平瓦・丸瓦(第75図)

平瓦は製作技法上3類に大別できる。凹面に布目痕を有する点は共通するものの、凸面には1のような平行縄目叩き痕、2のような糸切り痕、3のような斜行縄目叩き痕が付く。これは、胎土・焼成とともに、時期差と生産地の差異を示し、1は京都市内周辺の平安時代中期窯系、2は平安時代後期の京都市洛北の幡枝系、3は平安時代後期の讃岐窯系に同定できる。丸瓦も同様で、4は京都周辺窯系に対し、5は凸面に平行叩き目痕をもった播磨系の平安時代後期に属する。4・5とも凹面には布目痕がつく。(松井忠春)

5. るつぼ破片の分析結果

発掘作業中に葉賀七三男氏と池田一郎氏が訪れ、その際にSK503のるつぼ破片を分析して頂くこととなった。以下は、その両氏に依頼された久野雄一郎氏による分析結果である。なお、紙面の都合上文章は一部改変して掲載したことをお断りする。

(1) 試料の概観

試料の外観は、粘土製のるつぼに付着した金属滓で、重量は144.4gである。

(2) 分析試料の採取

金属滓と考えられる部分を削り、更にそれを粉碎した。十分に砕いた後、100メッシュのふるいによって、ふるい分けた。通過しなかった粒子を金属粒、通過したものを粉末として別々に分析した。

(3) 成分分析

金属粒および粉末を定量分析した結果、付表9の結果を得た。この結果から、銀を含んだ銅・錫・鉛・砒素合金が熔解されたるつぼの破片であると考えられる。

(4) 葉賀氏の見解

るつぼの底面は球状を呈する。この形態は平城京工房跡出土のるつぼを始め、山城銭司跡等で発見されており、奈良時代から使用されたことがわかる。以後戦国時代まで使用されていたが、今回の発掘例によって安土・桃山時代まで下げて考えることができ、新発見と言える。

分析データによれば、金(Au)が0.016%あり、金鉱石の標準値が0.001%であるので、16倍の含有量である。また銀(Ag)は0.20%で、これも標準値の10倍に当たっている。これによって、金銀細工用の熔解にも使われた可能性がある。

鉛(Pb)が10%以上の含有であるのは、鉛を含んだ青銅か、鑄造の湯流れをよくするために加えたものである。また砒素(As)が2%近い含有であるのは、鉛同様湯流れをよくし、かつ仕上りを硬くする目的で使用されている。これによって、特に白目(しろめ)が使用されたものと推定される。

付表9 成分分析の結果(%)

試料		定量項目	
		金属粒	粉末
重さ(g)		7.638	5.972
全	Fe	0.50	3.22
	O	2.02	17.81
	Cu	90.71	35.03
	As	0.62	1.73
	Si	0.72	6.80
	Pb	1.85	11.60
	Sb	0.10	0.34
	Zn	0.08	0.08
	Ni	0.03	0.05
	Al	0.32	2.57
	Ag	0.20	0.05
	Au	0.016	—
	S	0.07	0.07
	Sn	1.69	13.83
	Ca	0.37	2.15
	Mn	0.03	0.17
	Ti	0.03	0.12
	Mo	0.03	0.02
	Mg	0.02	0.45
計		99.406	96.09

以上を総合すると、安土・桃山時代にふさわしく、金銀細工を中心として、各種合金の調合に繰り返し使用されたるつぼであり、時代色を正しく反映していると言えよう。

6. ま と め

以上のように、多様な調査成果があった。すべてを把握することは不可能に近く、今回は平安京条坊復原案と調査地との相違についてと、井戸・石室・溝を中心とした遺構変遷図で考えられることと、歴史的環境の項を踏まえて周辺の歴史を略述したい。

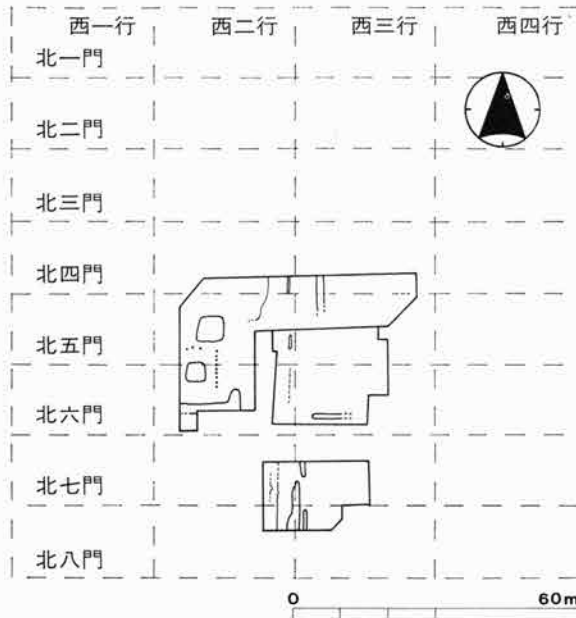
(1) 平安京条坊と調査地

今回の調査地は、平安京左京北辺三坊五町の地に当たる。一町域の中は32分割(南北は門、東西は行で表示した。その数から四行八門の制と呼ぶ)されていたが、財団法人京都市埋蔵文化財研究所の復原案によれば、その南部、つまり北四門から北八門までと西二行から西三行までにわたっていることになる。約1,200年前に施行された条坊がどうであったかについては、近年の発掘調査によってしだいに明らかとなっている。それは、溝によって区画された計画性の高いものであった。平安京は、ある一定の尺度で造営(以下造営尺と呼ぶ)されたわけであるが、平安京条坊の復原はつまるところ、この造営尺がいくらであったのかを追求することによって前進した。

昭和37年に杉山信三氏は、発掘調査で確認された西寺食堂院南門跡を基点とし、東寺と

西寺の伽藍中心線の間を、夜間を選んでスチールテープで実測した。結果は897.5mで、この間は『延喜式』によれば3,000尺となっており1尺が約0.29917mと計算できた。その後、財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、すべての調査地に国土座標点を導入し、発掘成果に整合性を持たせた結果、造営尺1尺を0.29835mと推定するに至った。

今回の調査地は、前述したように、一町の内側のみであり、平安京条坊復原案をよりいっそう高めることは直接できないが、一町内の区割がどうであったか



第76図 四行八門の制と調査地

を知る資料とはなかった。『延喜式』によれば、西二行と西三行との間、つまり一町のセンターラインには1丈5尺の幅の道があった。平安京造営当初に設定された道が、ずっと同じ位置に設定されていたかどうかは明確ではないが、少なくとも道の部分が建物や土塚などによって攪乱されず、したがって、平安京造営当初の面がよく残っている場所が道である可能性が高いことになる。

調査地を注意してみると、17ラインと18ラインの間が平安京造営当初の整地面がよく残っている。しかも、その両側に溝を認めることができる。残念ながら、平安時代に遡る溝は確認できないが、他の場所が建物跡やゴミ穴によって大きく改変されているのに対してこの地帯にはなく、前述したように道であった可能性が高い。

今仮りに17ラインと18ラインの間を道とした場合、従来の平安京条坊復原案とのずれは、前者が西へ約2mずれていることになる。しかし、一町南の内膳町跡で検出した柵SA202Aを一町のセンターラインと仮定した場合、従来との復原案とは約1m東へずれており、結局近接した地点でも、最大3mのずれを指摘することができる。しかし、それは1丈5尺(約4.5m)の道路幅の範囲内に収まっており、宅地内の区画は若干移動しながらも、ほぼ連続と踏襲されていたことがわかる。

(2) 遺構の変遷について

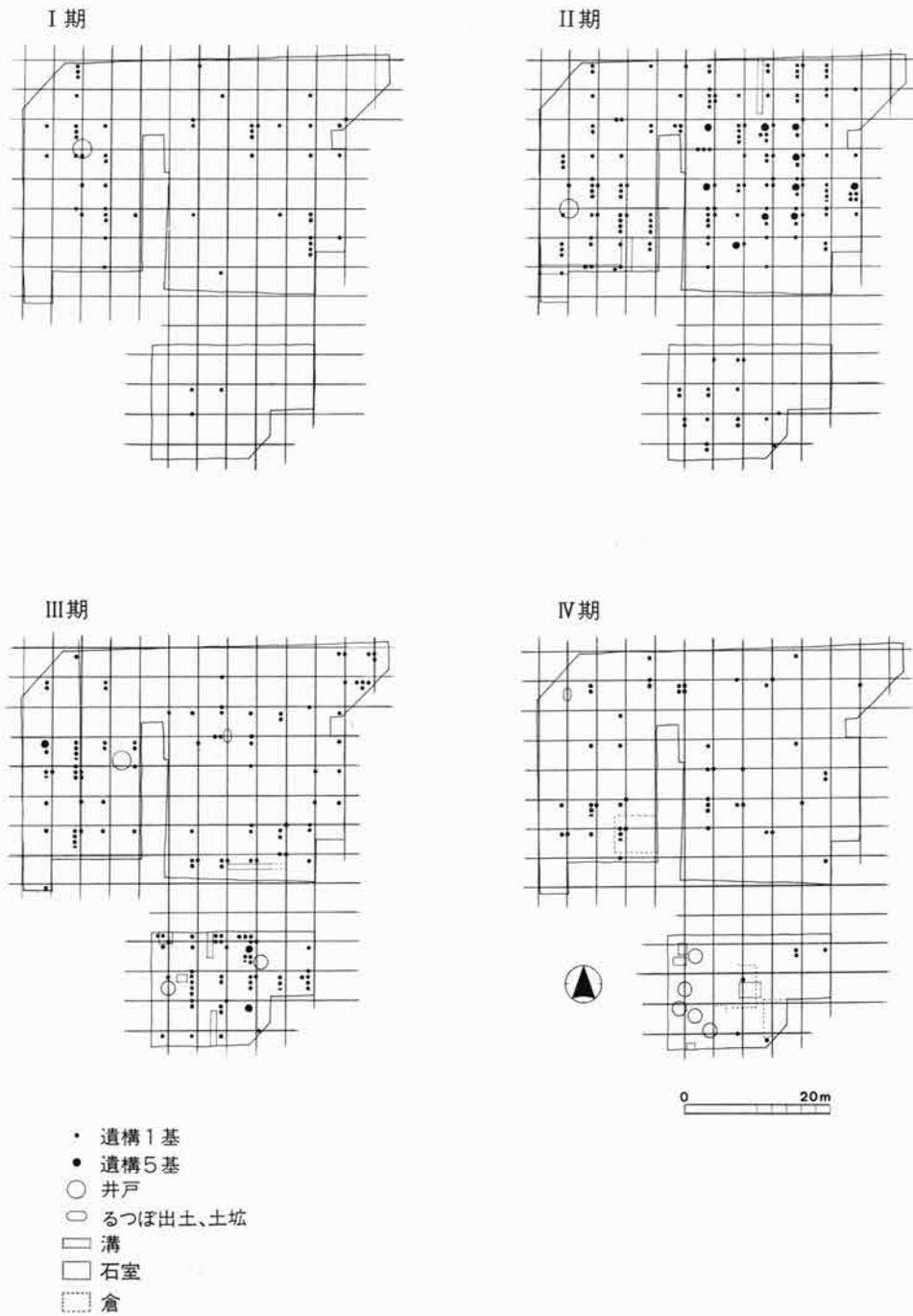
第77図のとおり、平安時代から江戸時代にかけての4枚の遺構変遷図を作成した。本来ならば、20～30年単位にしなければならないが、時間の制約があり現時点で言える範囲に収めた。図に表現したのは遺構、特に土塚の分布であるが、それ以外に区画を示す溝や生活基盤を示す井戸や地下式貯蔵庫と思われる石室、そして倉跡を示した。それでは4期の内容を略述しよう。

I 期

8世紀末から12世紀までの段階である。遺構の密度は高くなく、また井戸も1基しか確認されていない。この点から宅地住人の共同井戸と、広々とした空閑地を想定することができよう。但し、今回発見された井戸SE45は、出土遺物等から上級官人の使用したものであるので、10～11世紀初頭は貴族の邸宅跡と推定したい。井戸内から出土した「栗」の字のある瓦を、官窯系の栗栖野瓦窯の製品とし、これを積極的に解釈すれば上記の推定を、より確かなものとできよう。

II 期

13世紀から15世紀までの段階も、井戸は1基しか確認されていない。しかし、遺構の密度は、非常に高い。基本的には共同井戸であるが、空閑地は縮小され、多くの人々が居住していたらしい。今回検出された井戸は、14世紀には埋没しているが、その中には各種の



第77図 遺 構 変 遷 図

遺物が埋没しており、中でも中国の三彩盤などがあるので、有力者が住んでいたらしい。

実は、区画を示す柵や溝が、井戸SE52の埋没と同時に廃絶しており、この13世紀末から14世紀前半にひとつの画期を認めるべきかも知れない。この時期が荘園制における領主層の没落時期と重複することは、かつてこの地に貴族が住んでいたこととも合わせて注意を要しよう。つまり、Ⅱ期の前半と後半では居住者層の変化があったと思われるのである。但し、それは都市機能を大きく変えるものではなかった。

Ⅱ期後半には、調査地の南部に甘露寺親長が居住したことが知られる。すなわち、『親長卿記』にみる、応仁の乱後すぐ、荒廃した元の地に家を立てるという記事である。家の構造などについては不明だが、調査地全体を見渡しても、遺構群に質的な違いは認めることができないので、ほぼ同質、もしくは同階層の住人が居住していたらしい。そして、彼らが後の「六町」の母胎となるのである。

高橋康夫氏の研究によれば、Ⅱ期後半の「六町」は、たとえば正親町通の烏丸から橘辻子に至るわずか22丈ほどの正親町面北頬には「小家」ばかりが10軒ないし20軒建ち並んでいた、という。一軒の敷地間口は平均して一丈ないし二丈であり、零細な敷地間口であるといってよい。実は、調査地の場合「正親町」も、同様であったと推定できるのである。

Ⅲ期

16世紀末から17世紀初頭は、調査地においてもっとも大きな画期であったと言えよう。それは、町屋を壊して大名屋敷が建設されたことによる。建物の外見を彩っていた金箔瓦の出土は、第4トレンチの周辺に限られており、したがってこの地に主屋を想定することができる。井戸は、第1トレンチに1基と第2トレンチに2基発見された。したがって、この段階は共同井戸ではあるが、数は増えて使用階層ごととなった可能性も考えられる。遺物の質を考慮すると、第3トレンチの東部に厨房があったようであり、第2トレンチは2か所に地下式貯蔵庫と思われる石室があり、また溝もあることから小規模な副屋が数棟建ち並んでいたらしい。武者達や使用人が居住したのであろうか。

なお、第4トレンチの北部、主屋と接するような地点で、銅や金・銀細工の工房跡と思われるか所を発見した。これらの完成品は、大名屋敷の中で使用されたり、金箔瓦として葺かれたと考えられるが、ともかく、このような貴重な製品は厳しい管理の下で生産されたことが考えられ、発見か所はそれを裏づけている。

蛇足であるが、「六町」の代表者の1人に真継兵庫助^(註18)久直がいた。彼は16世紀後半には蔵人所官人・柳原家雑掌の地位にあり、諸国の鋳物師を宰領した人物であった。調査地において、銅を製造していたことは事実だが、聚楽第に伴う大名屋敷建造という緊急時に、「六町」の真継氏が関与していたと推測することも可能であろう。今後、他の大名屋敷と

銅製造の関係が明らかとなれば、あるいは「六町」周辺に工房を限定できるかも知れない。

IV期

17世紀中葉から18世紀の段階は、遺構の密度は低くなるが、井戸は多くなる。井戸が第2トレンチの西部に集中するということは、この地点が湧水地点であったことを示すが、井戸が各戸の所有ではなく幾つかの集団組織のものであったことも示している。地下式貯蔵庫と思われる石室は、とりも直さず建物のあった位置を示し、倉跡との関連から言えば、居住場所と倉は別空間に設定されていたことになる。つまり、第2トレンチの西部に居住空間である建物があり、その東側に倉を設けている。位置的に言えば数棟の居住建物と2～3棟の倉をもつ商家が、中立売通りに店を構えていたと想定することもできよう。

第1トレンチの北部にはるつぽを多量に出土した土坑があり、この段階に町中で銅を製造していたことが知られる。但し、その規模は小さい。また、その南側には京焼の一種である「御菩薩池焼」の製品と思われるものを多数発見した。このように、一町域の奥まった地点でも、銅細工や土器工などの工房の存在を確認することができた。彼らの使用した井戸は調査地外にあるのかも知れないが、あるいは、この地点の人々も南の井戸を使用していたのかも知れない。今後、発掘調査を進めていけば、どのように井戸が使用されたのかが明らかとなるだろう。

なお、蛇足であるが、かつてこの地は盧庵町と呼ばれていた。「京雀」によれば、盧庵町は典薬頭半井盧庵法印が町の東に住していたからとし、その旧地には名水半井があり、半井の名は、板で仕切って半分を製薬に半分を雑用に用いたからという(雍州府志)。さらには、町の西には絹帛染に用いた和泉井もあった(拾遺都名所図会・京町鑑)。したがって、調査地で検出された井戸群は、実は以上のような理由があったのである。

以上のような調査成果があった。今一度ここでポイントを箇条書きにすると以下のとおりとなる。

- ・弥生時代前期の内膳町遺跡の範囲が明らかとなった。
- ・石器や土器のほか厨房跡も発見され、より具体的に当時の生活が推定できるようになった。
- ・平安京条坊復原案にとって、特に宅地内の新たな資料が発見された。また、井戸SE45出土資料によって、この地が貴族の邸宅地として使われていたことがほぼ明らかとなった。
- ・鎌倉時代から室町時代にかけて、この地が徐々に小区画に分割されていったことが推測できるようになった。文献史料では、戦国時代になってこの地が禁裏六町のひとつ正親町となったことが知られるが、その実態が以上のようなとおりだったのである。

- 安土・桃山時代には聚楽第造営に伴う大名屋敷であったことが明らかとなった。そして緊急に銅や金・銀細工をした工房もあったことが明らかとなった。
- 江戸時代には、おそらく商家が中立売通りに立ち並んだ状態であったことが推測できる。また、奥の方には土器や銅製品を作る工房もあったことも知られる。

(伊野近富)

付表10 遺物観察表

SK456

種類	器形	番号	法量 口径 (cm)	器高 (cm)	特 徴	胎 土	焼 成	色 調
灰釉	皿	1	15	2.6	◦高台部分にも施釉。貼りつけ高台。 ◦前川編年による折戸53号窯式第1段階。	良	堅	灰白色。釉は淡灰緑色。
	碗	2	13		◦内外面にわずかに釉が残る。	良	堅	黄灰色。釉は淡灰緑色。
	壺	4	底径 10		◦外面はヘラケズリ。内面はロクロナデ。 ◦体部外面上部施釉。内底面もわずかに釉有り。	良	堅	淡灰褐色。釉は濃黄緑色。
青磁	蓋	3	5.4	1.5	◦越州窯。	精 良	堅	灰色。釉は灰緑色。
須恵器	鉢	5	22.8		◦全面ロクロナデ。	良 (白砂含む)	堅	青灰色。
	甕	6	20.8		◦全面ロクロナデ。自然釉付着。	良 (白砂含む)	堅	灰色。
	壺	7	底径 10.8		◦ロクロナデ。貼り付け高台。	良	堅	青灰色。

SE45

須恵器	杯?	8	底径 8.4		◦底部糸切り。	若干の砂粒 含む。	やや軟	灰白色。
	碗	9	底径 5.4		◦底部糸切り。	良	堅	青灰色。
	鉢	10	21.4		◦全面ロクロナデ。	良	堅	青灰色。
		11	底径 10.6		◦底部糸切り。	良	堅	茶灰色。
		12	23.2		◦全面ロクロナデ。	良(白い土 が層状に入る)	堅	青灰色。
		13	底径 10		◦底部糸切り。	良	堅	淡青灰色。
		14	底径 9.6		◦底部糸切り。	良	堅	青灰色。
		16	20		◦ロクロナデ。	良	やや軟	灰褐色。
	17	22.4		◦ロクロナデ。	良	やや軟	淡灰褐色。	
壺	15	10		◦ロクロナデ。	良	堅	淡灰褐色。	
土師器	皿	18	10.6	1.85	◦ての字状口縁。口縁部ヨコナデ。	良(白砂, 金 雲母含む)	軟	淡茶褐色。
		19	10.4	1.3	同 上	良(白砂, 金 雲母含む)	軟	淡茶褐色。

種類	器形	番号	法 量		特 徴	胎 土	焼 成	色 調
			口径 (cm)	器高 (cm)				
土師器	皿	20	9.8	1.5	○ての字状口縁。口縁部ヨコナデ。	良	堅	淡褐色。
		21	10	1.4	同 上	良 (白砂含む)	軟	淡褐色。
		22	11.4	1.45	同 上	良(白砂, 金・白雲母 含む)	軟	淡茶褐色。
		23	10.8	1.4	○口縁部一段ナデ。	良(白砂,白 雲母含む)	軟	茶褐色。
		24	10.4		同 上	良(白砂,白 雲母含む)	軟	茶褐色。
		26	14.4		○口縁部二段ナデ。	良 (白砂含む)	軟	淡茶褐色。
		27	14.4		同 上	良(白雲母 含む)	軟	淡褐色。
		28	16.8		同 上	良 (白砂含む)	軟	淡茶褐色。
		29	16.8		同 上	良(白砂,金 雲母含む)	軟	淡茶褐色。
		30	8		同 上	良	堅	淡褐色。
	杯	25	底径 5.2		○内外面不明。	良	軟	乳白色。
	小壺	31	2.1	1.5	○てづくね成形。	良	軟	淡茶褐色。
	高杯	32	15.6	21.6	○柱状部ヘラ削りの後ナデ。他は ロクロナデ。	良 (細砂含む)	堅	乳白色。
	甕	33	22.4		○口縁部ヨコナデ。体部上半ユビ オサエ。内面ケズリ。	良(白砂,金 雲母含む)	軟	赤褐色。
34		20		○つば下はユビオサエ。	良(白砂,赤 色砂含む)	軟	赤褐色。	
	鉢	35	14.8		○内外面ミガキ。	良	やや堅	茶褐色。
黒色土器	碗	36	15.4	6.7	○A類。内面ミガキ、底部は一方 向のミガキ。口縁部外面はミガ キか。	若干の白色 砂含む。	軟	黒色、外面下半 は淡褐色。
緑釉	碗	37	12.1	4.6	○全面施釉。内底面にはトチン様 の痕跡あり。口縁部には金を塗 った文様。	良(ガラザ ラした感じ)	やや軟	灰白色。釉は緑 色。
		38	16.2	6.6	○輪花は4か所か。外底面以外施 釉。	良(ガラザ ラした感じ)	軟	黄色。釉は緑色。
		39	16.25	8.5	○輪花は5か所か。全面施釉。ハ ケ塗りか。	精 良	硬	口縁、暗灰色。 底部、淡黄褐色。 釉は濃緑色。
		43	9.3	3.9	○全面施釉。内底面にトチンあり。 近江系。	精 良	堅 緻	淡灰色。釉は濃 黄緑色。

種類	器形	番号	法 量		特 徴	胎 土	焼 成	色 調
			口径 (cm)	器高 (cm)				
緑 釉	椀	45	底径 6.5		◦外底面以外施釉。蛇ノ目高台。 篠系。	精 良	堅 緻	暗灰色。釉は暗 濃緑色。
		46	底径 5.0		◦外底面以外施釉。底部糸切り。 篠系。	精 良	堅 緻	暗灰色。釉は薄 暗緑色。
		48	底径 8.5		◦全面施釉。内底面にトチンの痕 跡。近江系。	精 良	堅 緻	暗黄褐色。釉は 明濃緑色。
		59	底径 7.7		◦内底面に印刻花文。全面施釉。	精 良	硬	淡黄褐色。釉は 薄黄緑色。
	壺	40	底径 10.4		◦外面施釉，ミガキ。内面ロクロ ケズリ。	やや疎	軟	断面淡褐色。釉 は黄緑色。
		49			◦三足(四足)。ヘラによる足の作り が精巧。	良	やや軟	表面淡黄緑色。 断面黄土色。釉 は黄緑色。
	皿	41	13.4	2.4	◦外底面以外施釉。内面にトチン。 近江系。	精 良	軟	淡黄灰色。釉は 濃緑色。
		42	9.8		◦全面施釉。	精 良	やや軟	淡黄灰色。釉は 淡緑色。
		47	底径 7.1		◦全面施釉。糸切りの後貼り付け 高台。近江系？	精 良	堅 緻	暗灰色。釉は暗 濃緑色。
	香 炉	44	7.6		◦全面施釉。須恵質。	精 良	堅 緻	淡灰色。釉は淡 緑色。
灰 釉	椀	50	15	5.6	◦内外面ロクロナデ。	良 (白砂含む)	堅	灰白色。
		51	13.8	4.25	◦体部上半施釉。内外面ロクロナ デ。	良 (白砂含む)	堅	灰褐色。釉は灰 白色，光沢なし。
		52	15.6	6.4	◦内面にわずかに釉が残る。	良 (白砂含む)	堅	灰白色。
		53	14.65	4.45	◦貼り付け高台。内面にわずかに 釉が残る。	良	堅	淡灰色。
		54	16	5.4	◦内底面はハケ塗り。	良 (白砂含む)	堅	灰色。釉は灰緑 色。
		57	12.6		◦あるいは焼成不良の白磁か。	良	堅	断面白色。釉は 黄緑色。
		58	底径 8.4		◦全面ロクロナデ。	良	堅	淡灰褐色。
	皿	55	底径 7.6		◦内面施釉。掘形出土。	良	堅	灰色。釉は灰緑 色。
	鉢	66	31.6		◦外面にわずかに釉が残る。	良	堅	淡灰褐色。釉は 灰黄緑色。
	壺	67	23		◦釉は青白色の部分が点在。	良	堅	薄灰褐色。釉は 緑茶灰色。
		70			◦外面施釉。体部外面ヘラケズリ。	良 (白砂含む)	堅	灰色。釉は灰緑 色。

種類	器形	番号	法 量		特 徴	胎 土	焼 成	色 調
			口径 (cm)	器高 (cm)				
灰釉	甕	72	底径 16.6		◦内面上部は施釉。	良 (白砂含む)	堅	灰白色。釉は薄 灰緑色。
無釉	皿	56	底径 8.2		◦土師質。	良	やや堅	赤褐色。
青磁	椀	60			◦越磁。畳付以外施釉。内外面とも平滑。	良	堅	暗灰緑色。
		61	底径 6.2		◦越磁。畳付以外施釉。見込みに重ね焼き痕。	良	堅	灰緑色。
		64			◦越磁。	良	堅	露胎、茶褐色。 釉は灰緑褐色。
	皿	65			◦外面は露胎。内面に重ね焼き痕。	良	堅	断面灰白色、外面灰白色（やや緑色）。
白磁	椀	62	16.7	6	◦外底面は露胎。輪花は内側から外側にヘラで押さえてつけている。	良	堅	淡黄色。釉は黄灰色。
		63	15.2		◦外底面露胎。小破片。	精 良	堅	白色。
須恵器	壺	68	底径 3.6		◦底部糸切り。	良 (小石含む)	堅	内側青灰色、外側黒灰色、断面内部茶色、外部青灰色。
		69	12.6		◦ロクロナデ。掘形出土。	良 (白砂含む)	堅	青灰色。
	鉢	71	23.2	14.0	◦片口かどうかは不明。外底面不調整。他はロクロナデ。	粗 (白砂含む)	堅	灰色。

SK672

土師器	皿	73	7.6	1.4	◦コースター型。白土器。	良	軟	乳白色。
		74	9.1	1.5	◦口縁端部は面取り。	良 (金雲母含む)	軟	茶褐色。
		75	9.1	1.8	◦二段ナデ。	良	軟	赤褐色。油煤の痕有り。
		76	9.2	1.8	◦二段ナデ。	良	軟	淡褐色。油煤の痕有り。
		77	9.2	1.6	◦二段ナデ。外底面不調整。	良 (小石含む)	軟	淡赤褐色。
		78	10	1.7	◦二段ナデ。白土器。	良	軟	乳白色。
		79	10.1	1.5	◦二段ナデ。内底面一方向ナデ。白土器。	良 (小石含む)	軟	乳白色。
		80	13.6	2.75	◦口縁部ヨコナデ。内底面一方向ナデ。	良 (金雲母含む)	軟	淡赤褐色。
		81	14.1	2.55	◦口縁端部面取り。	良	軟	赤褐色。
		82	13	3.6	◦口縁端部面取り。口縁部ヨコナデ。	良	軟	淡褐色。

種類	器形	番号	法 量		特 徴	胎 土	焼 成	色 調
			口径 (cm)	器高 (cm)				
瓦器	皿	83	9	1.9	◦口縁部ヨコナデ。	良	軟	黒色。油煤の痕有り。

SK692

土師器	皿	84	8.7	1.4	◦口縁部に油煤あり。口縁部二段ナデ。外底面不調整。	良(白砂, 金雲母含む)	軟	淡褐色。
		85	12.4	2.25	◦外面下半ユビオサエ。	良(白砂, 小石, 金雲母含む)	軟	橙褐色。
		86	12.8	3.2	◦二段ナデ。	良(小石含む)	軟	淡褐色。
		87	11.9		◦口縁端部の面取り不明瞭。	良(白砂, 金雲母含む)	軟	橙褐色。
		88	8.8	1	◦口縁部ヨコナデ。内底面一方向ナデ。	良(白砂, 小石含む)	軟	淡褐色。
		89	8.2	1.1	同 上	良(小石含む)	軟	橙褐色。
瓦器	羽釜	90	18.2		◦三足がつくと思われる。つばと足は貼りつけている。	良	やや軟	灰白色。外面は黒色。
	椀	91	11	3.3	◦全面を柔らかいハケのようなものでヨコナデ。その後暗文を施す。口縁端部外面はヘラミガキ。	良	やや軟	断面, 灰白色。表面, 黒色。

SD353

土師器	杯	92	7.2	1.6	◦底部糸切り。見込みは一方向ナデ。	良	軟	淡褐色。
	皿	93	7.8	2.2	◦内面にツメ様の圧痕あり。ヨコナデ。	良(白砂含む)	軟	橙褐色。
		94	8.8	1.4	◦口縁部ヨコナデ。内底面一方向ナデ。	良(白砂, 金雲母含む)	軟	淡灰褐色。
		95	9.3	1.5	同 上	良(白砂, 金・白雲母含む)	軟	橙茶褐色。
		96	12.4		◦口縁部一段ナデ。油煤の痕あり。体部外面下半不調整。	良	軟	淡茶褐色。
		97	12.6	2.3	◦二段ナデ。成形後に指による変形か所あり。	良(白砂, 金・白雲母含む)	軟	橙茶褐色。
		98	12.9	3.3	◦二段ナデ。	良(白砂, 小石含む)	軟	淡褐色。
須器 恵	鉢	99	29.2		◦全面ロクロナデ。	やや粗	堅	灰白色(口縁端部黒色)。
瓦器	羽釜	100	19.2		◦内面横方向のハケ目あり。外面ヨコナデ。一部火を受けて茶褐色変色。	良(金雲母含む)	堅	断面, 淡茶褐色。内面・口縁外部, 黒色。外面, 茶褐色。

種類	器形	番号	法 量		特 徴	胎 土	焼 成	色 調
			口径 (cm)	器高 (cm)				
瓦器	鍋	103	31		◦口縁部は粗いヨコナデ。体部外面ユビオサエ。	良	堅	灰白色。外部から口縁内部黒色。
	盤	104	31.4	7.9	◦体部外面ヨコナデ。外底面にもみ殻痕。	やや粗(白雲母含む)	軟	淡茶褐色。
青磁	椀	101	16		◦鎬蓮弁文椀。龍泉窯。外面ロクロケズリ。内面ロクロナデ。	良	堅	暗灰緑色。
		102	17		◦へらによる蓮弁文。外面ロクロケズリ。内面ロクロナデ。	良	やや軟	淡褐色(橙褐色、灰白色の部分あり)。釉は灰緑色(灰黄色、淡灰茶色の部分あり)。

SD215

土師器	高杯	105	10.4		◦杯部はロクロナデ。内面中央はくぼむ。柱状部の面取りは断面で10~11面体。	良	軟	淡褐色。
	皿	106	5.6	1.2	◦コースター型。外面ユビオサエ。白土器。	良(白砂,小石含む)	軟	淡褐色。
		107	5.5	1.1	同上	良	軟	乳白色。
		108	7.8	2	◦口縁部ヨコナデ。外底面ユビオサエ。白土器。	良	軟	淡褐色。
		109	7.8	1.6	◦口縁部ヨコナデ。外底面不調整。赤土器。	良(金雲母含む)	軟	暗褐色。
		110	8.3	1.4	◦二段ナデ。	良(白砂,金雲母含む)	軟	淡茶褐色。
		111	12.2		◦一段ナデ。	良(金雲母含む)	軟	淡茶褐色。
		112	11.4	4.7	◦口縁部ヨコナデ。内底面一方向ナデ。外底面不調整。体部外面に亀裂あり。	良	軟	淡褐色。
113	12.8	3.7	◦口縁部ヨコナデ。白土器。	良	軟	乳白色。		
須器	鉢	114	26.2		◦内外面ロクロナデ。	粗	堅	青灰色。
青磁	椀	115	13.2		◦龍泉窯蓮弁文椀。南宋早・中期。	良	堅	灰色。釉は灰緑色。
瓦器	椀	116	12.5	3	◦和泉型瓦器椀。尾上編年14世紀中葉。口縁部ヨコナデ。内面は粗いナデ。外面ユビオサエ。	良	堅	断面, 灰白色。表面, 暗灰色。
	羽釜	118	18.6		◦内面ハケ目。つばより上はヨコナデ。下はユビオサエ。	やや粗	堅	断面, 灰白色。外側, 黒色。内側, 灰色。
		119	24		◦同上。外面のつばより下には, 粘土紐の継ぎ目が横方向に走っている。	やや粗	堅	断面・内壁, 灰黄色。外壁, 黒色。
	鍋	120	26.9		◦内面ハケ目。外面ユビオサエ。	やや粗	堅	断面・内壁, 灰黄色。外壁, 黒色。

種類	器形	番号	法 量			特 徴	胎 土	焼 成	色 調
			口径 (cm)	器高 (cm)					
石製品	鍋	117	底径 12.6			・内外面とも煤が付着。	滑石		断面、灰色。表面、暗灰色。
三彩	盤	284				・内底面に施釉。へらで蓮花文を刻む。復原図は推定部分が多い。もっと口縁部が長いものの可能性あり。他に陶枕の可能性もある。	粗（細かい砂含む）	堅	こげ赤茶色。釉は濃緑、黄緑色、黄色。
石製品	砥石	285	長 6.5	幅 2.75	厚 1.6	・上部に円形のくぼみあり。	粘板岩		黄土色。
	不明	286	長 8.4	幅 4.4	厚 1.3	・石鍋を転用したもの。用途不明。	滑石		ねずみ色。

SD219

石製品	鍋	121	31.2			・ところどころに煤付着。縦方向に細かいノミで削った痕あり。	滑石		灰褐色。外側は全体に黒っぽい。
瓦器	杯	124	8.8	3.4		・把手付。内底面に花柄の暗文あり。内面及び外面上半に暗文、把手にもあり。	良	堅	断面、灰白色。表面、暗灰色。

SK757

瓦器	鍋	122	12.4	2.3		・体部下半はユビオサエ顕著。	良	軟	淡茶色。
青磁	椀	123	15.6			・龍泉窯。幅の広い片切彫りの蓮弁文。	良	堅	灰色。釉は灰緑色。
土師器	皿	125	9	1.5		・粗雑なつくり。	良	堅	淡褐色。口縁部右、暗褐色。
		126	12.4	2.3		・口縁部ヨコナデ。外底面不調整。	良	軟	淡茶色。

SK852

土師器	皿	127	6.7	1.8		・内面は右上にナデ上げ。外面下半ユビオサエ。	良	普通	淡褐色。
		128	6.6	1.8		同 上	良	普通	淡褐色。
		129	6.6	2.1		同 上	良	普通	淡褐色。
		130	6.4	2.1		同 上	良	堅	乳褐色。
		131	7.6	2		・最後にユビで押し上げないタイプ。	良	普通	淡褐色。
		133	11.4	3.1		・口縁と内面はヨコナデ。内底面一方向ナデ。	精良	堅	乳褐色。
		134	11.6	2.9		・乳褐色系。133・137も同様。	精良	堅	乳褐色。
		135	11.6	3		・作り方は133と同様。褐色系。	精良	軟	淡褐色。
		136	12	2.9		同 上	良 (砂粒含む)	堅	乳褐色。
		137	11.2	3.1			精良	堅	乳褐色。

種類	器形	番号	法量		特 徴	胎 土	焼 成	色 調
			口径 (cm)	器高 (cm)				
土師器	皿	138	13.2	3.3		良	堅	乳褐色。
		139	18		◦口縁部から内面ヨコナデ。外面ユビオサエ。	精良	堅	乳白色。
		141	18.8	4.2	◦褐色系。	良(白雲母含む)	軟	淡褐色。
青白磁	椀	132	底径 3.9		◦高台は施釉の後削り。砂高台。景德鎮窯系か。	良	堅	白色。釉は青白色。
瓦器	椀	140	14.7	4	◦底部ヘラオコシ。他はロクロナデ。	良	堅。須恵器のような堅さ。	灰白色。口縁部付近は暗灰色。
須恵器	鉢	142	23		◦東播系魚住窯。	粗 (白砂含む)	堅	青灰色。

SK512

土師器	皿	143	5.5	0.8	◦コースター型。ヨコナデ。	良	硬	灰白色。
		144	8.2	1.7	◦外底面不調整。他はヨコナデ。	良	硬	橙褐色。
		145	11.6	2.3	同 上	良(金雲母含む)	硬	橙褐色。
		146	11.8	2.7	同 上	良(金雲母含む)	硬	橙褐色。

SK599

土師器	皿	147	13.4	3.4	◦内底面一方向ナデか。	良	軟	淡褐色。
-----	---	-----	------	-----	-------------	---	---	------

SK748

土師器	皿	148	8.4	1.6	◦ユビオサエ顕著。赤土器系。	良	軟	淡褐色。やや赤みがかる。
		149	9.2	2	◦口縁部ヨコナデ。赤土器系。	良	軟	淡褐色。
		150	11	2.5	◦褐色系。	良	軟	褐色。
		151	13		◦口縁部ヨコナデ。外面下半ナデ。	ザラザラ	軟	淡褐色。口縁部淡赤褐色。
		152	13.4	3.3	◦口縁部ヨコナデ。内底面一方向ナデ。	良	軟	灰色。
		153	12.8	2.2	同 上	良 (砂粒含む)	軟	乳白色。
		154	14	2.2	◦赤土器系。	良(赤色粒含む)ややザラザラ	軟	赤褐色。
	羽釜	155	19.4		◦内面ハケ目。つばの下に煤付着。	良	軟	灰褐色。外面は黒色。
瓦器	鉢	156	22.6		◦堺方面の製品か。	疎	軟	灰色。所々赤褐色。

SE52

種類	器形	番号	法 量		特 徴	胎 土	焼 成	色 調
			口径 (cm)	器高 (cm)				
常滑	甕	157	45.4		○口縁部付近ヨコナデ。肩部ナデ。肩部下はヘラケズリ後ヨコナデ。下部ヘラケズリ。内面はケズリ後ヨコナデ。肩部～胴部に右方向タタキ。	良 (白砂含む)	堅	暗灰色。肩部・外口頸部は灰白色。
土師器	皿	158	7.8	1.5	○赤土器。へそ皿様にややくぼむ。	良(白色砂, 灰色砂含む)	軟	暗褐色。
		159	10.4	2.1	○赤土器。ユビオサエ顕著。	良(白色砂, 金雲母含む)	軟	赤褐色。
		160	10.6	2.25	同 上	良 (白砂含む)	軟	赤褐色。
		161	11	2.3	同 上	良(白色砂, 灰色砂含む)	軟	赤褐色。
		162	12	2.6	同 上	良(小石, 金・白雲母含む)	軟	赤褐色。
		163	7.4	1.5	○同上。口縁部に油煤あり。	良(小石, 金雲母含む)	軟	赤褐色。
		164	7.7	1.5	○赤土器。	良(白色砂, 金雲母含む)	軟	赤褐色。
		165	6.8	1.8	○白土器。へそ皿。	良(白色砂含む)	軟	乳白色。
		166	6.6	2.05	同 上	良 (小石含む)	軟	乳白色。口縁部に油煤の痕あり。
		167	6.4	1.7	同 上	良(金雲母含む)	軟	乳白色。
		168	6.8	2.2	同 上	良(白色砂含む)	軟	乳白色。
		169	7.8	2.1	○白土器。へそ皿様。	良	軟	乳白色。
		170	8.2	2.1	同 上	良	軟	乳白色。
		171	8.8	1.9	○白土器。口縁部に油煤あり。	良 (小石含む)	軟	乳白色。
		172	11	2.85	白土器。	良 (小石含む)	軟	乳白色。
		173	11	2.95	同 上	良	軟	乳白色。
		174	11.6	3	同 上	良	軟	乳白色。
175	12.6	3.3	同 上	良(小石, 金雲母含む)	軟	乳白色。		
176	11.6	2.95	同 上	良 (小石含む)	軟	乳白色。		
177	13.2	3.7	同 上	良 (小石含む)	軟	乳白色。		

種類	器形	番号	法 量		特 徴	胎 土	焼 成	色 調
			口径 (cm)	器高 (cm)				
土師器	皿	178	底径 8.9		◦底部は糸切り後、高台を貼り付ける。他はロクロナデ。	良	軟	赤褐色。
緑釉	盤	179			◦内外面とも施釉。小破片。中国製。	良 (小石含む)	堅	灰色。釉は緑色。
	椀	190			◦平安時代のへら描き花文。全体に施釉。貼り付け高台。東海系。	良	やや軟	淡褐色。釉は薄黄緑色。
白磁	小皿	180	9.6		◦口禿げ。	良	堅	断面・内口縁部、灰色。外底部・外口縁部、暗茶色。釉は灰白色。
		181	底径 5.6		◦180と同タイプの底部。	良	堅	白色。外底部は明茶色。釉は緑がかった白色。
	椀	189	底径 6.4		◦平安時代末の中国製椀。	良	堅	白色。釉は白色。
青磁	椀	182	13.4		◦鑄蓮弁文。龍泉窯系。	良	堅	灰白色。釉は淡緑色。
		183	16		同 上	良	堅	灰白色。釉は淡灰緑色。
黄釉	盤	184	22.2		◦外面は自然釉。口縁部内側は無釉(灰色がかった赤色)。その下部は施釉。中国製。	良(小石を含む)	堅	断面外側、灰色。断面内部、灰黄色。釉は内部、灰黄緑色。
褐釉	盤	185	25.2		◦口縁部は黄灰色。外面下半は赤褐色。平安京ではあまり出土しない。中国製。	良(白砂、小石含む)	堅	断面、赤褐色。内面、黄灰色。外面、赤褐色。
瓦器	鍋	186	28.6		◦口縁部ヨコナデ。外面不調整。	良	堅	灰白色。外部、黒色。
石製品	鍋	187	25.4		◦外側はスス付着。	多孔質		黄灰白色。外側、黒色。
	砥石	188	長 (7)	幅 3.35 厚 7(mm)	◦横方向に擦痕あり。	軟質粘板岩		黄土色。
灰釉	鉢	191	23		◦口縁端部から内面は灰緑色の釉がわずかに残る。	良(小石、白砂含む)	堅	灰褐色。

SK400

土師器	皿	192	6.6	1.5	◦口縁部と内面ヨコナデ。他は不調整。へそ皿。	良(白雲母あり)	軟	淡褐色。
		193	6.6	1.6	同 上	良(赤色粒含む)	軟	橙褐色。
		194	7.4	1.6	同 上	良(赤色粒含む)	軟	淡赤褐色。
		195	7.4	1.6	◦赤土器系。	良	軟	暗褐色。
		196	7.5	1.7	◦へそ皿。	良	やや軟	明淡黄褐色。

種類	器形	番号	法 量		特 徴	胎 土	焼 成	色 調
			口径 (cm)	器高 (cm)				
土 師 器	皿	197	10	2.1	口縁部ヨコナデ。外底面掌オサエ。	良	普通	橙褐色。
		198	9.8	2	同上	良	普通	淡褐色。
		200	9	2.2	同上	良 (石粒含む)	やや軟	淡黄茶色(黒斑あり)。
		201	9.3	1.75	同上	良 (石粒含む)	やや軟	明淡茶褐色(黒斑あり)。
		202	8.7	1.9	同上	良	やや軟	明淡黄褐色。
		203	8.4	1.8	同上	良	軟	橙褐色から淡褐色。
		204	13.8	2.1	同上	良	軟	淡褐色(橙褐色に近い)。
		205	14.2	2.3	同上	良(石粒含む)	やや軟	淡茶褐色。
		206	16.2	2.3	同上	良	軟	淡褐色。
		207	15.8	2.5	外底面はていねいなユビオサエ。	良	軟	淡褐色。
		209	14.9	5.4	体部はナデ調整。貼り付け高台。外底面には粗いハケメあり。	良 (石粒含む)	やや硬	外面, 明淡橙褐色。内面, 明淡橙白色。
	耳皿	208	短径 2.1	1.6	口縁部から内面はヨコナデ。他は不調整。	良	軟	淡赤褐色。
白磁	皿	199	9.8	2.2	外面ロクロケズリ。底部は輪花状に4か所削り取っている。内底面に重ね焼き痕あり。	良	堅	淡黄褐色。釉は同色。
瓦器	羽釜	210	24.4	12.9	外面はユビオサエ顕著。内面調整はナデを数回に分けて横方向に施す。	良(石粒、金雲母含む)	やや軟	外面, 暗茶灰色, 一部淡茶灰色。内面, 淡茶灰色。

SK1012

土 師 器	皿	211	12	2.1	内底面一方向ナデ。外底面は板状圧痕。	良	軟	灰褐色。内面は暗黒灰色。
		212	12.4	1.9	外底面は不調整。	良	堅	灰褐色。外面は暗黒灰色。
		213	9.5	1.8	口縁部ヨコナデ。外底面不調整。	良	堅	淡褐色。
		214	6.5	0.9	同上	良	軟	淡褐色(やや濃い)。
		215	8.7	1.8	口縁部油煤付着。	良	堅	灰褐色。内面は淡褐色。
越前	鉢	216	29.2	(9.4)	外面上半はヨコナデ。下半はユビオサエ。内面は使用による磨滅。	良(白色砂含む)	堅	明褐色。一部暗褐色。

SK503

種類	器形	番号	法量 口径器高 (cm)(cm)	特 徴	胎 土	焼 成	色 調
	蓋 ?	217		◦二次的な火熱を受けてもろくなっている。一面には格子状の沈線あり。他面はナデ。	(砂,もみがらを混ぜる)		赤白灰色。
		219		同 上	(白砂粒含む)		
る つ ぼ		218		◦内底面にはぶつぶつと気泡がある。口縁部に近い所は付着物が多く、盛り上がっている。	(砂,もみがらを混ぜる)		赤白灰色。黒斑あり。
		220		同 上			

SK300

唐 津	皿	221	14.2	3.3	◦内底面に砂付着。口縁部から内面は施釉。外底面にも一部釉がかかる。	良	堅	灰色(赤味をおびた所あり)。釉は暗茶色(黒色,灰緑色の部分あり)。
		222	10.8	3	◦削り出し高台。内底面に砂付着。	良 (やや粗)	やや軟	明茶色。釉は灰緑色。
	碗	223	10.6	6.2	◦内底面にトチン痕。貼り付け高台。	良	堅	灰色。釉は灰白色。
	壺	237	13 底径 17.4	39.5	◦外面施釉。内面はタタキ。下半には所々強くヨコナデ。内底面はタタキが消えている。外底面に砂付着。	やや粗	堅	灰茶色。釉調は暗茶色。
美 濃	皿	224	11.2	2.8	◦接地部分以外施釉。削り出し高台。外面下半ロクロケズリ。同上半はロクロナデ。	良(空洞が多い。粒が大きめ。)	やや軟	淡茶褐色。釉は薄灰茶色。絵は暗茶色から薄茶色。
		碗	226	10.8		◦全面施釉。ロクロナデ。	良 (やや粗)	やや軟
		227	底径 3.1		◦削り出し高台。	良 (やや粗)	やや軟	淡褐色。釉は灰黄緑色。
		232	10.4	6.5	◦削り出し高台。底部以外施釉。所々釉は黒色となっている。	良	堅	灰色。釉は茶色。鉄絵部分は黒。
黒 織 部	碗	225	10.8		◦全面施釉。	良 (白砂含む)	堅	暗灰色。釉は黒色。
志 野	皿	228	15.2	4.2	◦接地部分以外施釉。内底面に重ね焼きの痕なし。貫入あり。	良(粒がやや粗い)	堅	淡灰茶色。釉は薄灰色。貫入あり。
		229	14.6		貫入あり。	良 (キメ細か)	堅	白。釉は白。貫入あり。
丹 波	盤	230	25	6.5	◦外面は指で押した痕あり。これを文様としている。下半はケズリ。他はナデ。	良(白砂,小石含む)	堅	断面・底部灰色。側面灰茶色。側面外部暗灰色。外面桃茶褐色。釉は灰黄色。

種類	器形	番号	法 量		特 徴	胎 土	焼 成	色 調
			口径 (cm)	器高 (cm)				
	すり鉢	264	38.4 底径 15.6	15.9	◦外面ヨコナデ。内面には6条一組の筋目あり。内底面には「米」の字状の筋目あり。	良 (白砂含む)	堅	断面、明茶色。 表面、暗茶色。
瓦器	火舎	231			◦外面ミガキ。貼り付け高台。			
		263	底径 20		◦外面ミガキ。外底面不調整。内面は横方向のケズリ。	良	堅	断面、灰白色。 外面、黒色。内面、暗灰色。
青花磁器	小壺	233	5.6		◦全面施釉。外面の施釉部分は光沢がなく、ザラザラしている。	良	堅	白色。釉は白色。 文様は濃青色。
	椀	234	10.9	5.6	◦全面施釉。内底面に2本圏線あり。全面ロクロナデ。	良	堅	白色。釉は白色。 文様は明青色。
		235	10	5.4	◦全面施釉。ロクロナデ。外底面に2本の圏線(濃青色)あり。景德鎮窯系。明代後期。	良	堅	白色。釉は外面 褐釉。内面・外 底部、白。
		236	9.4	4.9	◦全面施釉。ロクロナデ。外底面に「大明成化年製」の銘あり。焼成の際、壘付を削ったと思われる。	良	堅	白色。釉は白色。 文様は青灰色。
土師器	鍋	255	16.8	7.3	◦外面上半と内面はヨコナデ。内底面は一方向ナデ。外底面はヘラケズリ。外面にタタキ。	良(砂、小石含む)	軟	赤褐色。
	皿	256	10.2	2	◦外底面ナデ。他はヨコナデ。口縁部に油煤。	良	軟	乳褐色。口縁部 一部淡褐色。
		257	5.8	1	◦外面上半ユビオサエ。下半不調整。	良	軟	灰黄褐色。
		258	5.8	1.2	同 上	良	軟	淡褐色。
		259	5.6	1.1	同 上	良	軟	黒褐色。
		260	12.4	2.2	◦内外面ともていねいなナデ。	良	軟	淡褐色。
		261	12.4	2.5	◦同上。口縁部に油煤附着。	良	軟	淡褐色。
		262	10	2	◦外底面ナデ。他はヨコナデ。	良	軟	淡褐色。

SK303

土師器	皿	238	9	2.2	◦外底面ユビオサエ。口縁部から内面ナデ。	良	軟	乳淡褐色。
		239	9.6	2.2	◦口縁部に油煤。	良	軟	橙褐色。
		240	10.4	2.3	◦238と同様。	良	やや堅	淡褐色。
		241	11.3	2.4	◦口縁部に油煤。	良(金雲母含む)	軟	淡赤褐色。
		242	10.6	2.2	同 上	良	軟	淡橙色(所々炭痕がある)。
		243	12.4	2.4	◦外底面不調整。	良	やや堅	淡褐色。

種類	器形	番号	法 量		特 徴	胎 土	焼 成	色 調
			口径 (cm)	器高 (cm)				
土師器	鍋	247	31.4	11.4	◦口縁部ヨコナデ。他はていねいなナデ。	精 良	軟	内面, 淡褐色。 外面, 暗褐色。
		250	17		◦全面ヨコナデ。胴部の突帯は貼り付け。	やや粗 (白砂含む)	堅	淡赤褐色 (所々黒ずんでいる)。
焼塩壺		244	5.4		◦蓋と身。両方とも内面に布目痕あり。身の外面は縦方向にヘラケズリ。	良 (赤砂, 金雲母含む)	軟	外壁, 淡褐色。 内壁・口縁外部, 淡赤褐色。
		245	5.5	10.2	同 上			
瓦器	鉢	246	24.4 底径 7	9.4	◦内面ミガキ。口縁部ヨコナデ。他はユビオサエ。	良	堅	断面, 灰白色。 表面, 黒色。
志野	皿	248	12	3.5	◦完形。全面施釉。文様は鉄絵。	良	堅	釉は淡黄白色。
	鉢	249	17.2	4	◦全面施釉。特に体部上半は釉が厚くなっている。	粗	良	断面, 淡褐色。 釉はくすんだ白 色, 所々褐色。
美濃	椀	251	12.4	6.4	◦外底面および体部下半は無釉。	良	良	断面, 淡乳茶色。 釉は濃茶色。
唐津	舟徳利	252	8.4		◦内面にタタキ。口縁部から外面は施釉。ヨコナデ。	良 (白砂含む)	堅	淡褐色。釉は暗 灰緑色。
信楽	すり鉢	253	29.8	17.4	◦外面ロクロナデ。内面下半は磨滅。他の信楽鉢より厚く、重いので伊賀焼か。	粗 (小石含む)	堅	橙褐色から赤褐 色。
丹波	すり鉢	254	17.1 底径 12.4	15.4	◦外面ユビオサエ顕著。外底部ナデ。口縁部は光沢がある。	良 (白砂, 小石含む)	堅	暗茶色。
信楽	盤	288	20.4	6.3	◦外底面ヘラケズリ。内底面ユビオサエ。	良 (白砂含む)	堅	外面, 明茶色。 内面, 橙褐色。 断面, 灰白色。 釉はクリーム色 と暗茶色。

SE39

白釉	紅皿	265	4.1 底径 1.7	1.5	◦内面と口縁部は施釉。	細	堅	白。釉は白。
		266	6.5	1.9	◦貼り付け高台。1か所粘土紐の縫ぎ目あり。	粗	堅	灰色。釉は灰白 色。施釉部, 黄 灰色。無釉部, 灰色。
土師器	壺	267	2.7	2.3	◦ミニチュア。手づくね成形。	良	軟	クリーム色。
	皿	275	10.3	1.8	◦内底面にヘラ沈線。	良 (白砂含 む)	堅	淡褐色。
		276	12.4	1.9	同 上	良	堅	淡褐色。外底面 は灰褐色。
		277	11.8	1.8	同 上	良	堅	淡褐色。

種類	器形	番号	法 量		特 徴	胎 土	焼 成	色 調
			口径 (cm)	器高 (cm)				
	鉢	280	12.2	3	◦外底面ヘラ切り後ヘラケズリ。	粗	軟	淡黄褐色。
白磁	碗	268	10	6.5	◦ケズリ出し高台。伊万里。	良	堅	白。釉は白。断面、淡黄白色。
唐津	碗	269	11.5	5.1	◦畳付けは無釉。刷毛目文。	良	堅	淡こげ茶。釉は茶褐色とクリーム色の縞。
		270	10.6	7.15	◦ケズリ出し高台。三島唐津。	良	堅	こげ茶。釉は内側、透明。外側、白とこげ茶の縞。
志野？	桶	271	17.3	10.3	◦体部外面と内面上半は施釉。焼成後底は穿孔。	粗	硬	黄褐色。釉は乳白色。無釉部、肌色。
るつば		272	4.7	3.7	◦使用痕あり。銅のかたまりが付着。			
伊万里	蓋	273	7.5	2.7	◦外面にコンニャク印版。	細	堅	白。釉は白。文様は青。
	小杯	274	6.65	3.5	同上	細	堅	白。釉は白。無釉部、淡橙色。
	碗	281	10.1	5.7	◦高台は無釉。	良	堅	白。釉は透明。文様は青藍。
		282	10.9	6.3	◦高台は無釉。外底面に「大明年製」の銘。	良	堅	灰白色。釉は青灰色。文様はくすんだ藍色。
	碗	283	13.8	7	◦外底面に粗雑な「大明年製」の銘。	良	堅	白。釉は白。文様は紺。
焼塩壺		278	3.7	(5.1)	◦底は空いている。	やや細	硬	黄褐色。
美濃	碗	279	12.8 底径5	5.4	◦「楼閣山水図」が見込みにあり。ケズリ出し高台。	良	やや軟	淡黄色。釉は黄土色。文様はこげ茶と茶色。

4トレ荒掘中

青花磁器	大皿	287	35.8	7.1	◦内底面にのびやかな鳥と雲を描く。外底面に砂が付着。中国南部の製品。	良	堅	灰白色。釉は青灰白色。砂が付着。
------	----	-----	------	-----	------------------------------------	---	---	------------------

SD590

信楽	鉢	289	17.6	8.8	◦底部近くはヘラケズリ。内底面ユビオサエ。	良(白砂を含む)	堅	表面、赤褐色から橙褐色。断面、灰白色。
----	---	-----	------	-----	-----------------------	----------	---	---------------------

- 注1 補助員及び協力者等
 福富 仁・坂下雅朗・中坪美曉・中井英策・平野仁佳子・上東克彦・白石由香・長田康平・高橋由美子・一井富佐代・宮内啓隆・駒沢啓二・松本英人・田村真由美・横田小枝子・谷内 栄・田中さか江・松江君容・高嶋登久子・川口立子・重松麻里子・秋山典子・竹谷和子・本田小百合・木下一夫・幸田直子・針尾紀代・香西和子
- 注2 財団法人京都市埋蔵文化財研究所には、平安京条坊復原案の資料を頂いた。なおこれに関連する国土座標点の設定は、当調査研究センターの竹井治雄が行った。
- 注3 高橋美久二「内膳町遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報 (1974)』京都府教育委員会) 1974
- 注4 a. 平良泰久・伊野近富・塩沢珠代「平安京内膳町跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報 (1979)』京都府教育委員会) 1979
 b. 平良泰久・奥村清一郎・伊野近富・鷹野一太郎・杉本 宏・橋本高明・常盤井智行・谷口智樹「平安京跡(左京内膳町)昭和54年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-3)』京都府教育委員会) 1980
- 注5 みそ路池焼については三好 一氏より教示を受けた。『森田久右衛門日記』については、a. 森谷尠久「文献からみた京焼の歴史」(『世界陶磁全集6』小学館) 1975, b. 中ノ堂一信『京都窯芸史』淡交社 1984
- 注6 宇野隆夫「井戸考」(『史林』65巻5号) 1982
- 注7 「平城京左京一条三坊の調査」(『平城宮発掘調査報告VI』奈良国立文化財研究所) 1974, (によれば大きさが3分類程度ある。石鈔帯b I : 帯幅が4cmで、巡方の場合は縦横の比が0.9対1。石鈔帯b II : 帯幅が3.3cm。石鈔帯b IV : 帯幅が1.9cm。
- 注8 『延喜式』弾正台の条によれば、「……玳瑁・碼瑙・斑犀・象牙・沙魚皮・紫檀五位已上通用」
- 注9 永田信一「輸入陶磁器」(『第四卷窯業, 講座・日本技術の社会史』日本評論社) 1984
- 注10 横田賢次郎・森田 勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」(『研究論集4』九州歴史資料館) 1978
- 注11 中野晴久「鎗場・御林古窯址群の編年的研究」(『知多古文化研究2』磯部幸男先生退官記念論文集) 1986
- 注12 「河南省宝豊窯」(『近年発見の窯址出土中国陶磁展』出光美術館) 1982
- 注13 堀内明博氏の教示による。
- 注14 岡田保良・浜崎一志「山科寺内町の遺跡調査とその復原」(『国立歴史民俗博物館研究報告第8集, 共同研究「中世の地方政治都市」』国立歴史民俗博物館) 1985
- 注15 秋田裕毅氏の教示による。
- 注16 岡本孝之「住居内出土の石皿について覚え書」(『神奈川考古』第3号所収) 1978
- 注17 芦澤廣衛・大竹憲昭・橋本裕行他『利島村大石山遺跡一範囲確認調査報告書Ⅲ-1』利島村教育委員会・利島村大石山遺跡調査団 1985
- 注18 高橋康夫『京都中世都市史研究』思文閣出版 1983

※ なお、発掘調査中、福山敏男氏には史料関係について教示をいただいた。記して感謝します。

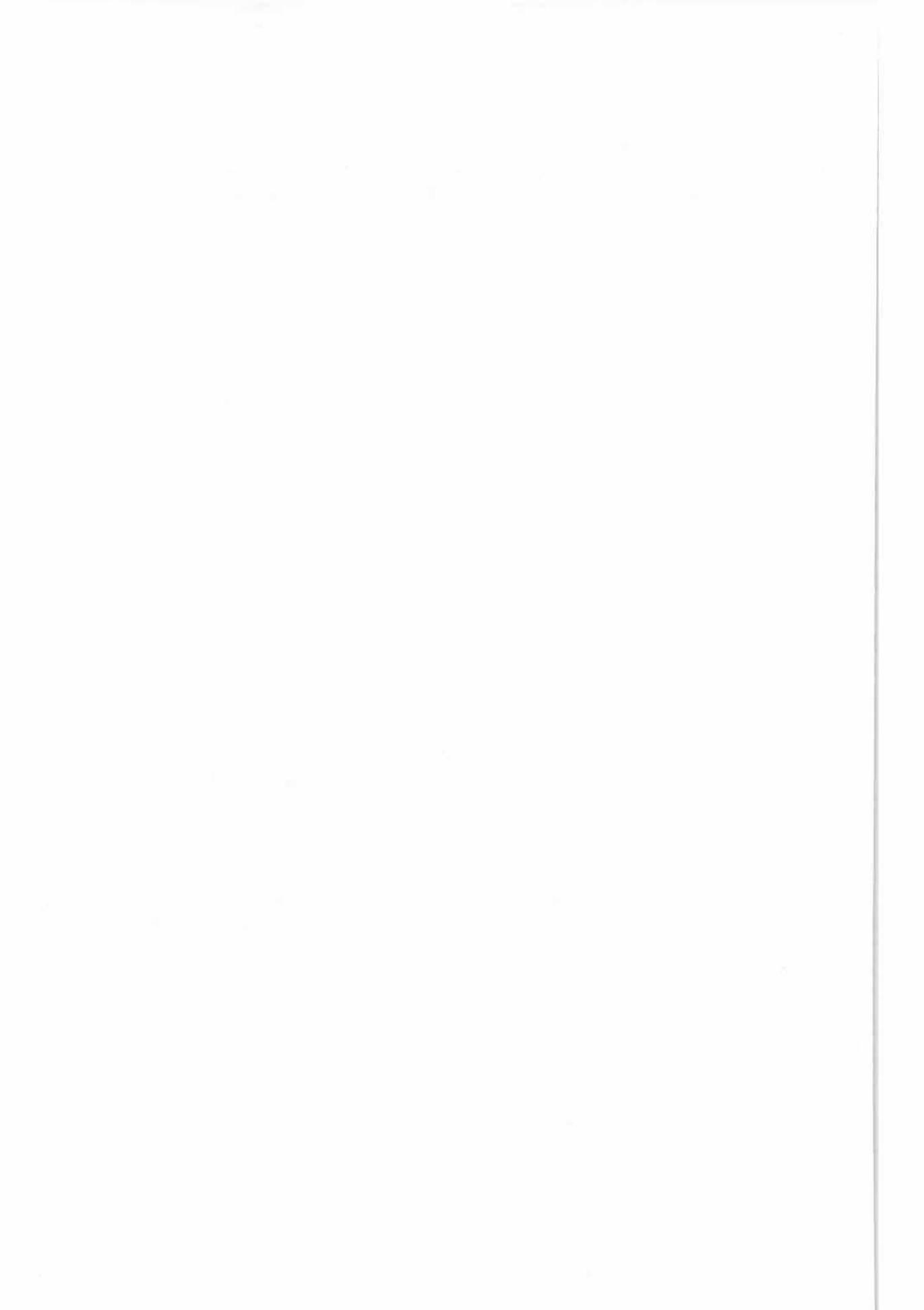
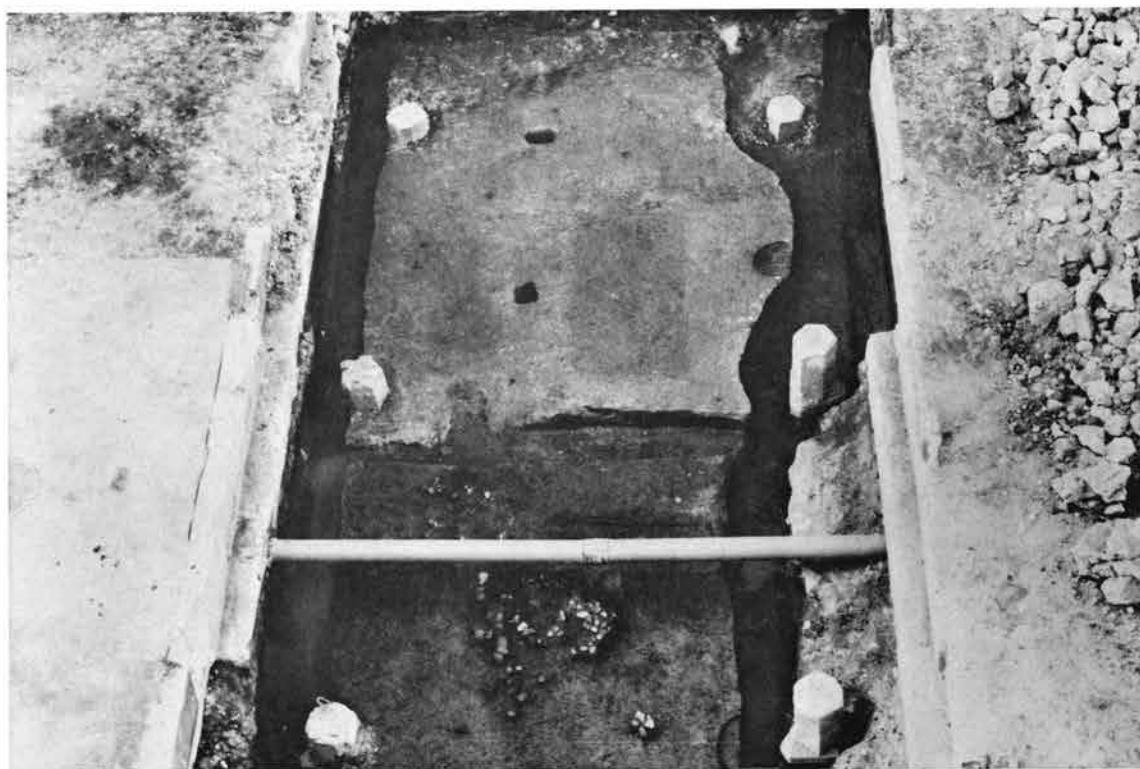
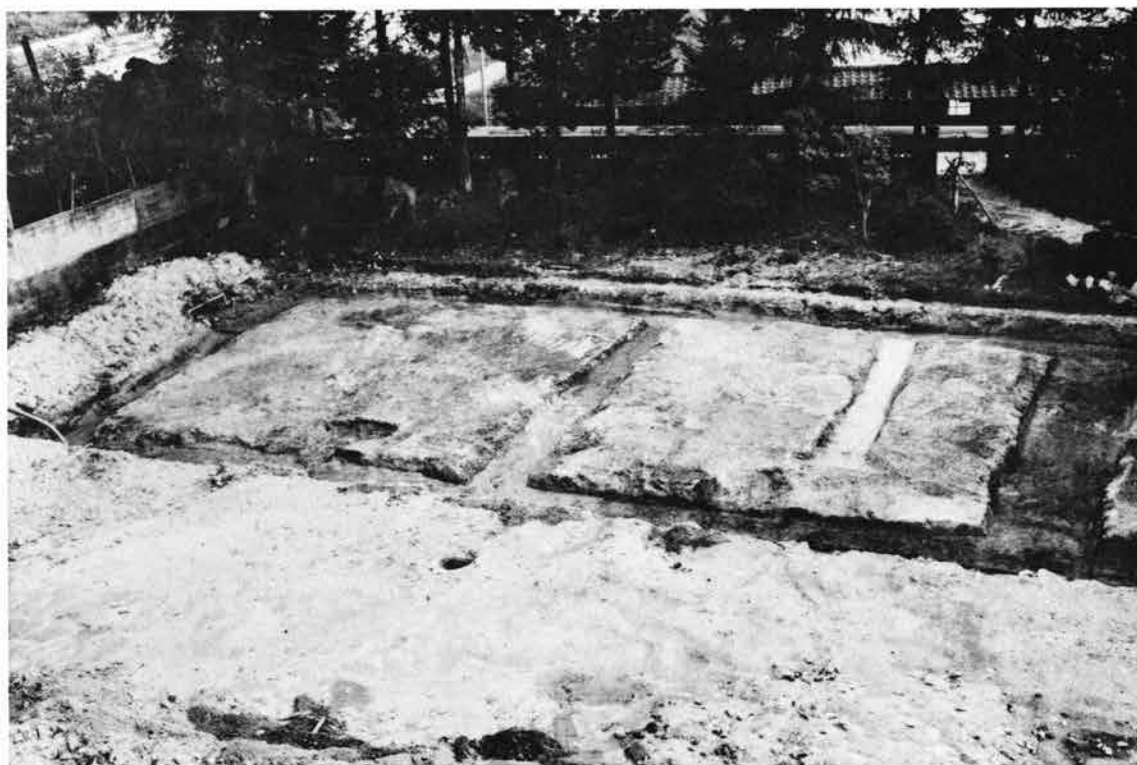


圖 版



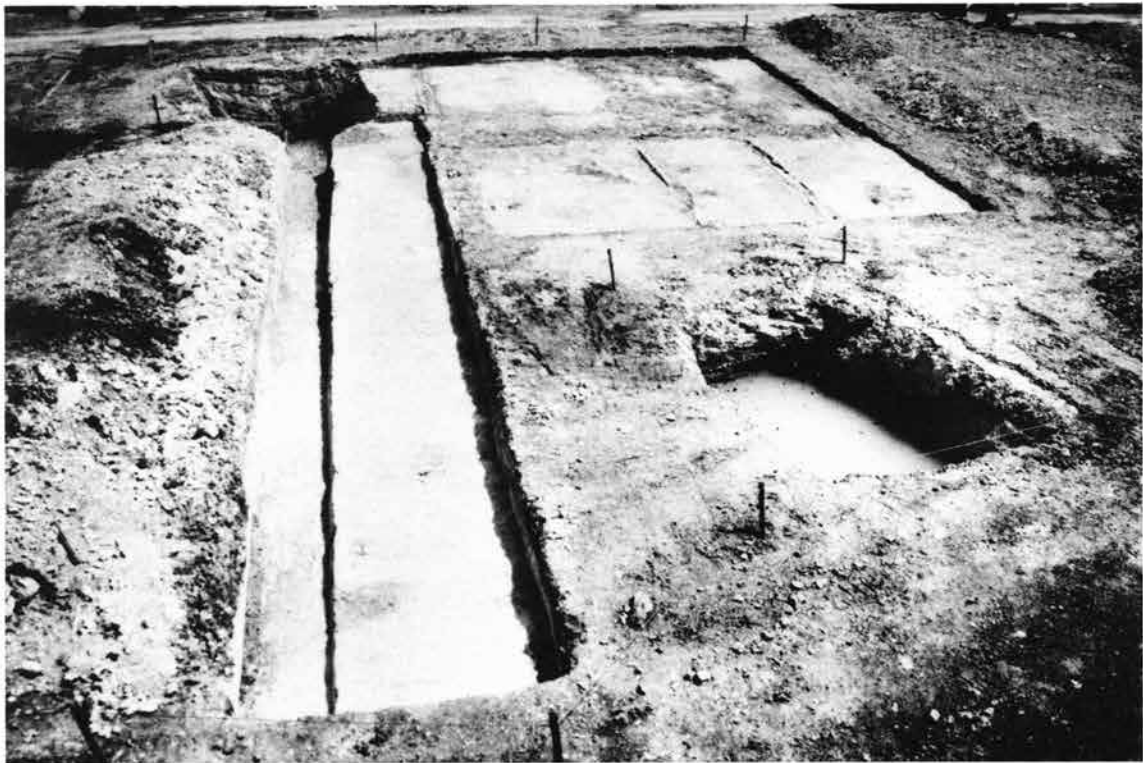
(1) 1トレンチ全景 (南から)



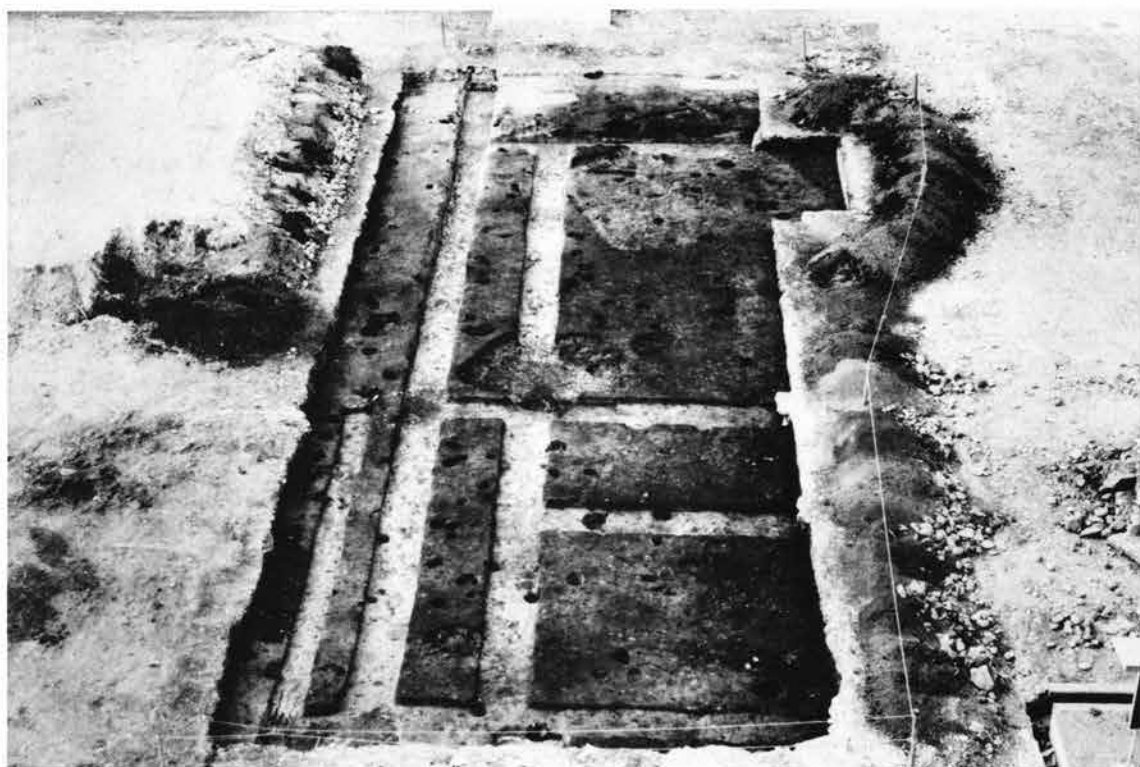
(2) 2トレンチ全景 (北から)



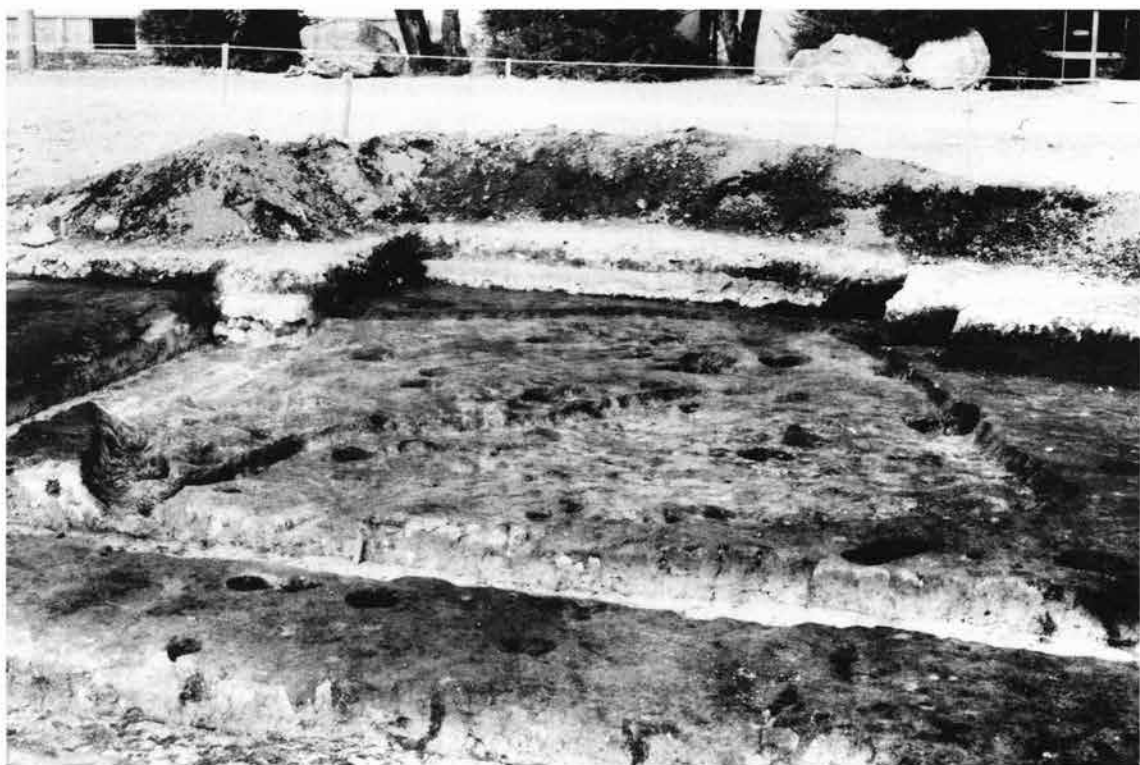
(1) A・Bトレンチ調査地全景（南西から）



(2) Aトレンチ掘削状況（南東から）



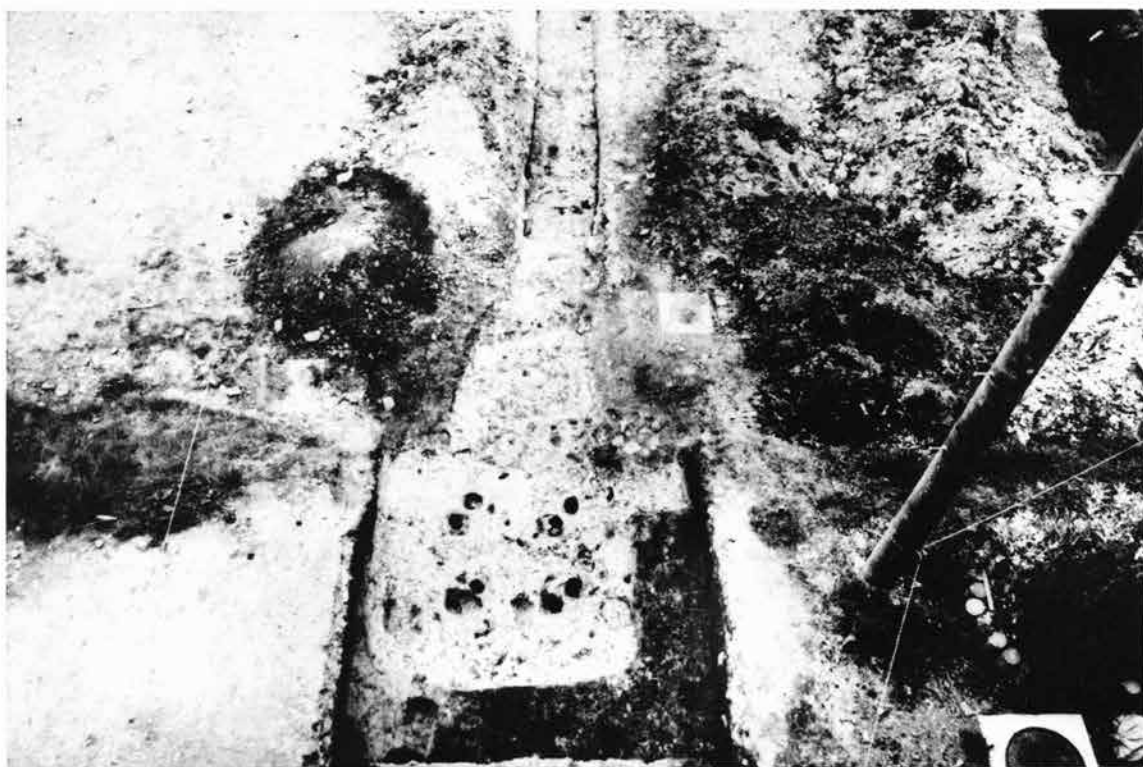
(1) Bトレンチ遺構検出状況(南東から)



(2) S B01全景(南西から)



(1) Cトレンチ調査地全景（北東から）



(2) Cトレンチ全景（北西から）



(1) S K06炭層検出状況(北西から)



(2) S K06完掘状況(北西から)



出土遺物



(1) 調査地調査前全景（西から）



(2) 調査地調査前全景（東から）



(1) 調査地全景（上層遺構面・東から）



(2) 調査地西半部遺構検出状況（上層遺構面・東から）



(1) 調査地全景 (下層遺構面・西から)



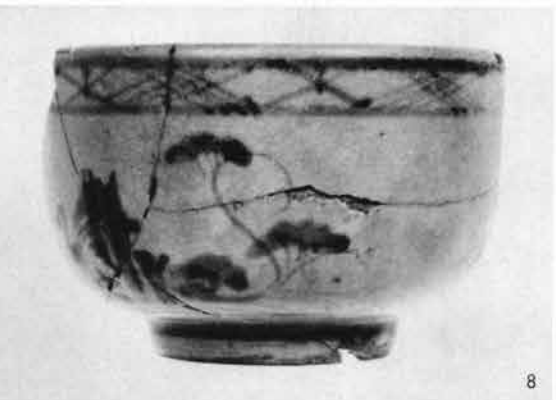
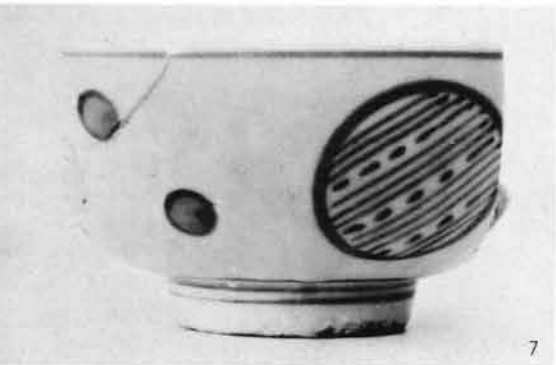
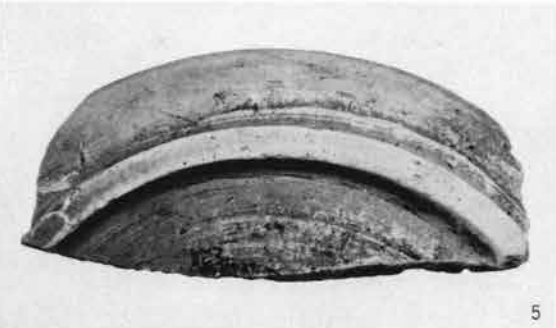
(2) 調査地全景 (下層遺構面・東から)



(1) 竪穴式住居跡(S H30)全景(北から)



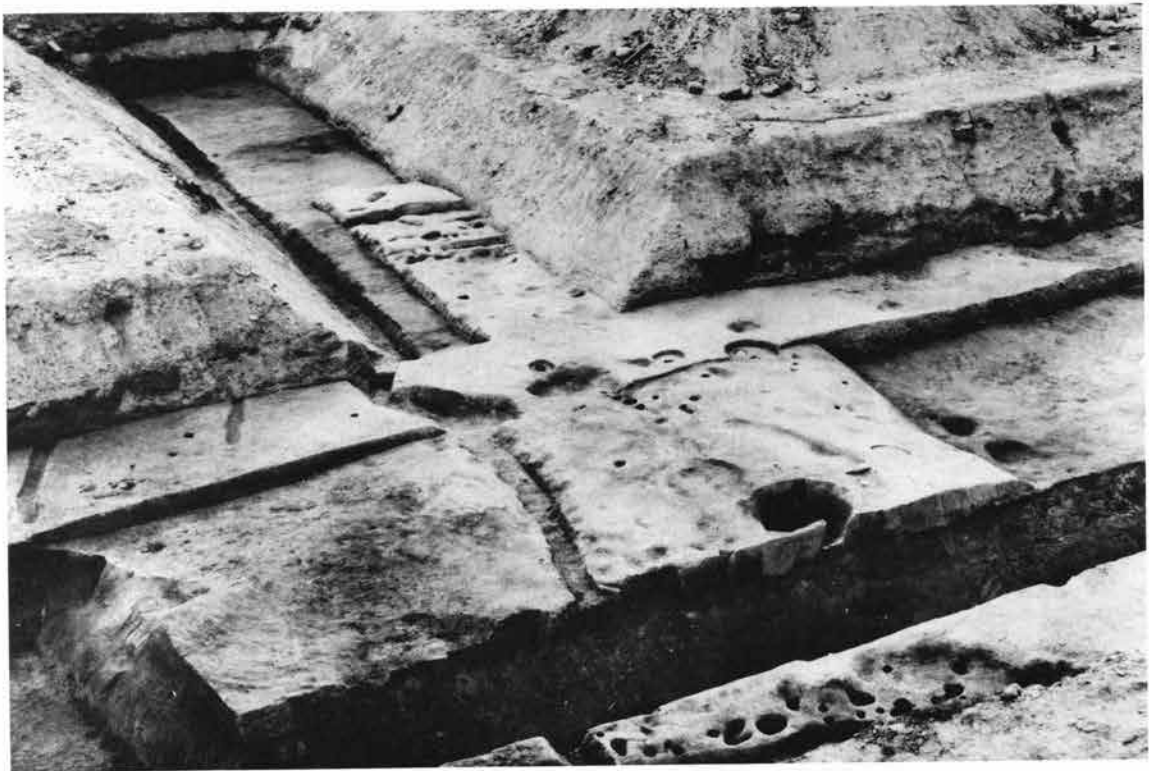
(2) 竪穴式住居跡(S H31)全景(北から)



出土遺物 (1~4. 古墳時代, 5. 奈良時代, 6. 弥生時代後期, 7~10. 江戸時代)



(1) Iトレンチ全景（北から）



(2) Iトレンチ遺構検出状況（東から）



(3) S K 8702全景 (東から)



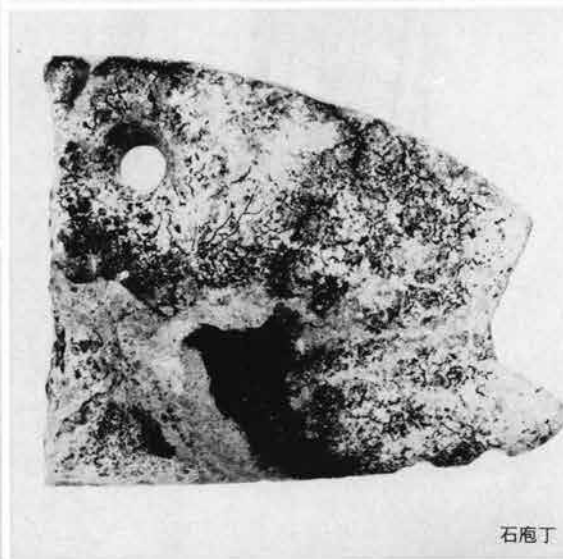
(4) S K 8702⑧層遺物出土状況



(1) S K 8701全景 (西から)

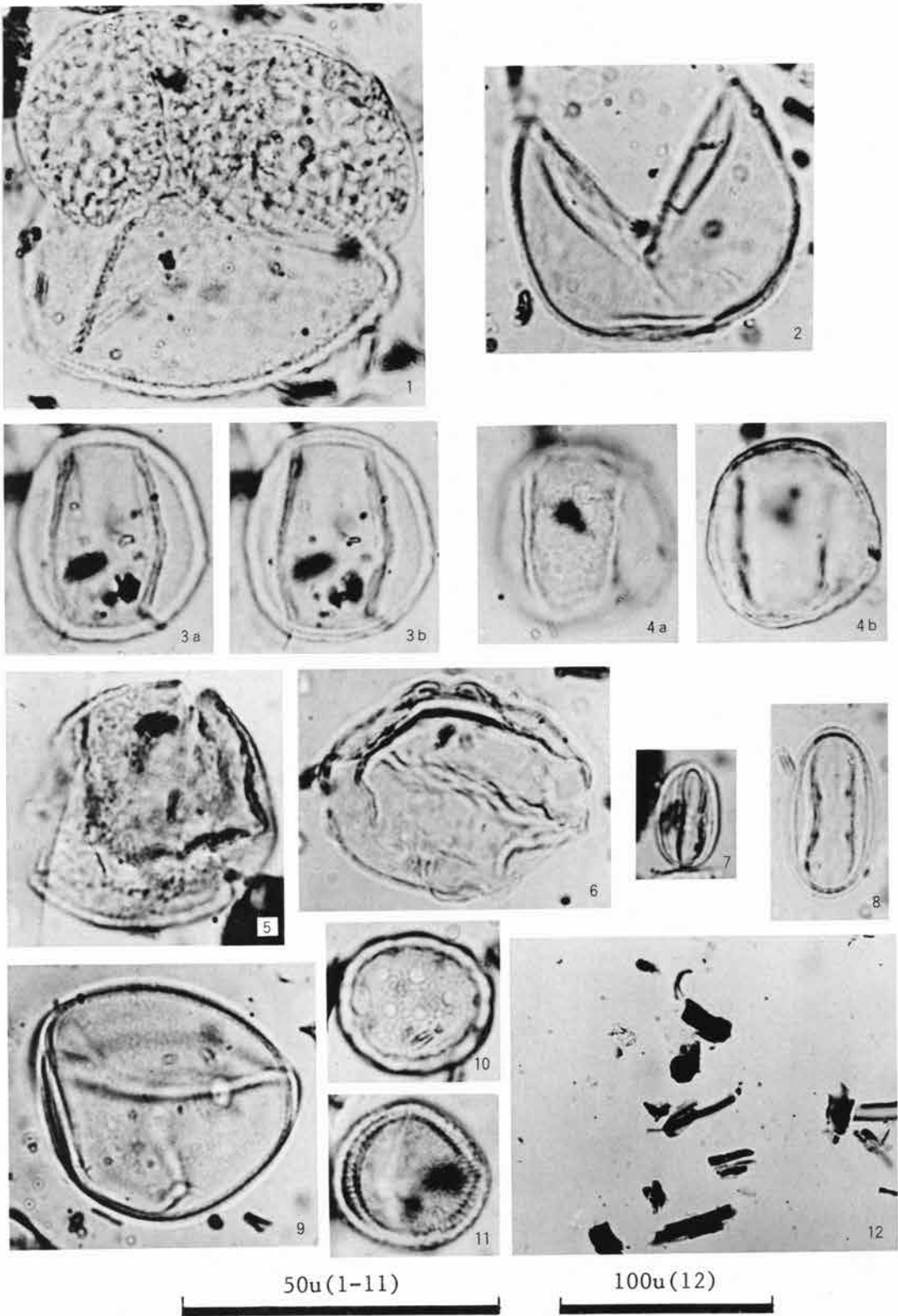


(2) S K 8701下層遺物出土状況 (西から)



出土遺物

1・2:1/3.8, 8・11:1/0.6, 9:1/2.5, 10:1/2.1, 石庖丁:1/1



花粉顕微鏡写真

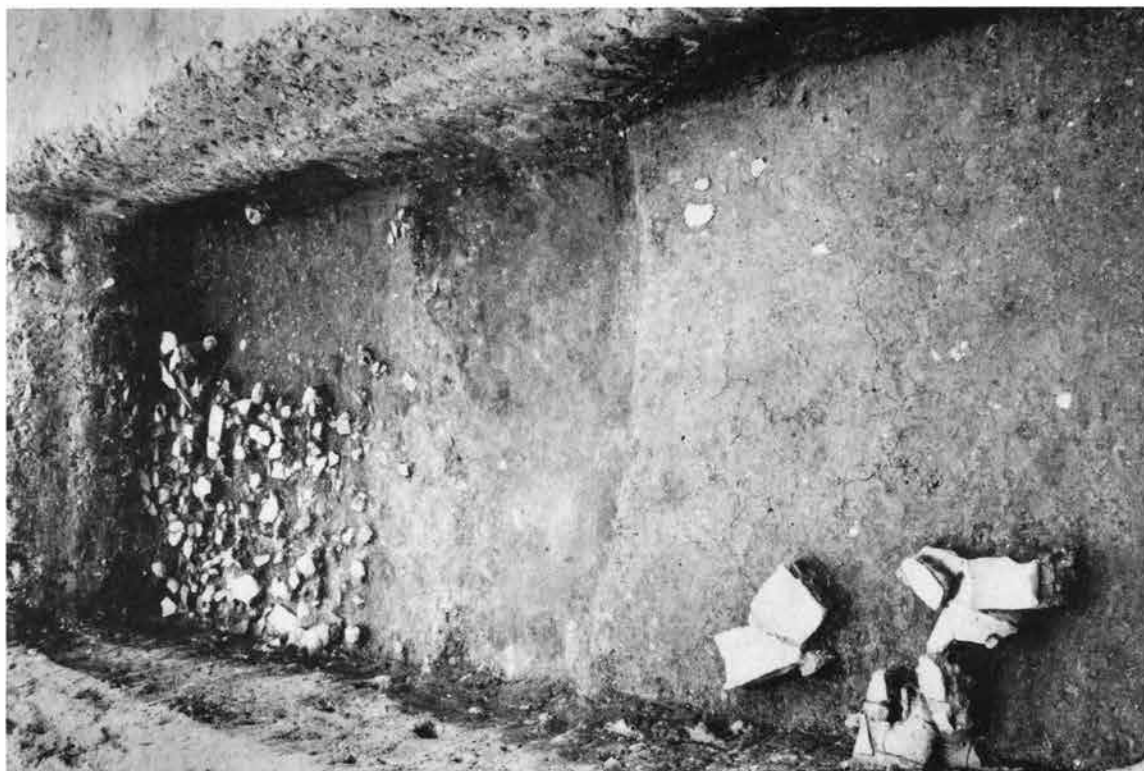
1. マツ属(4), 2. スギ属(1), 3a・b. アカガシ亜属(4), 4a・b. アカガシ亜属(1),
 5. コナラ亜属(1), 6. ニレ属—ケヤキ属(1), 7. クリ属(2), 8. セリ属(1),
 9. イネ属(1), 10. アカザ科(4), 11. ヨモギ属(2), 12. 状況写真(3), ()内は試料番号



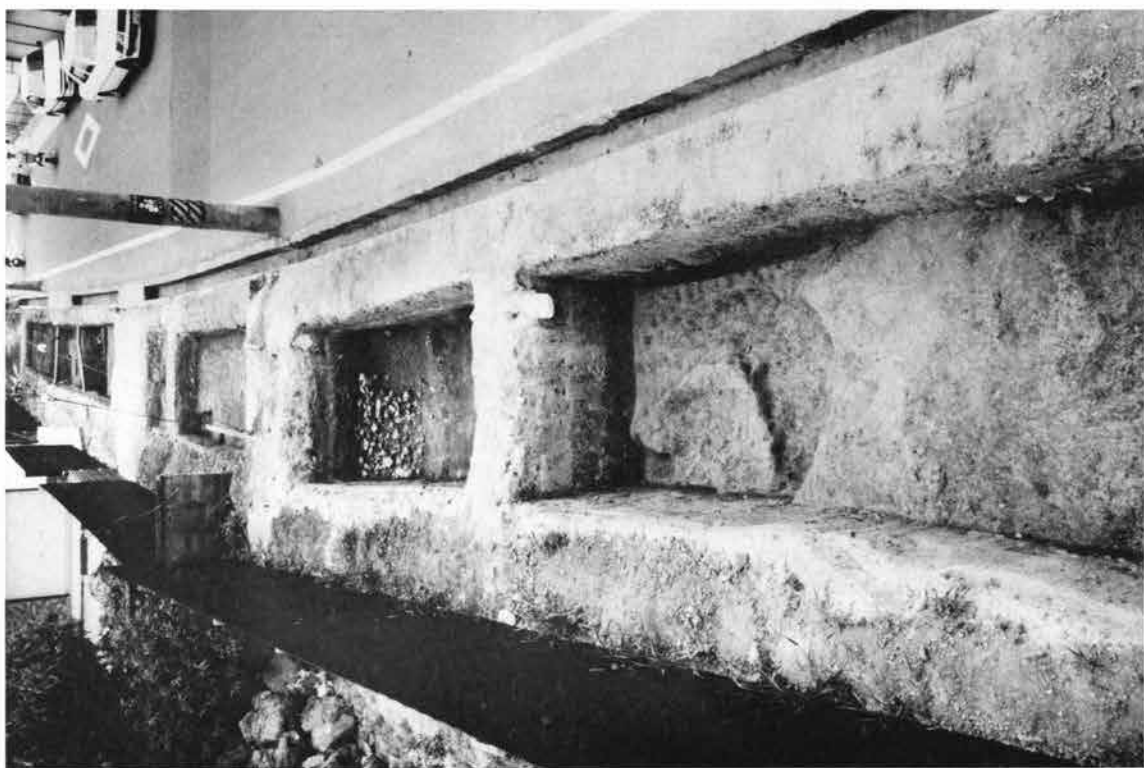
(1) 調査地全景 (西から)



(2) 南側壁断面 上：グラウンド排水路
下：素掘溝 (S D01)



(2) II トレンチ S D 01 と埴輪出土状況 (西から)



(1) 調査地全景 (西方から)



(1) Vトレンチ全景 (東から)



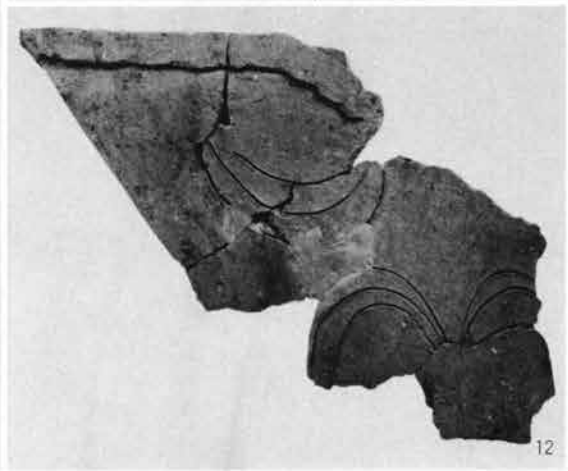
(2) VトレンチSD02と埴輪出土状況 (西から)



1



3



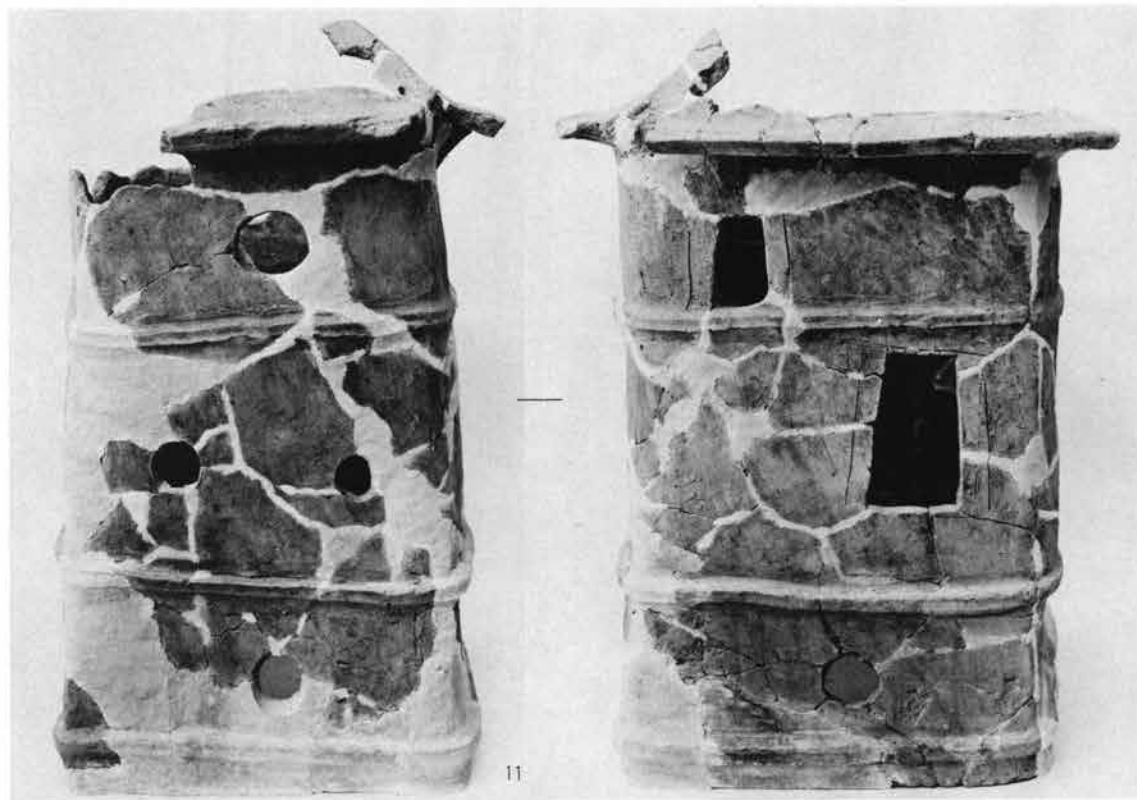
12



2



22





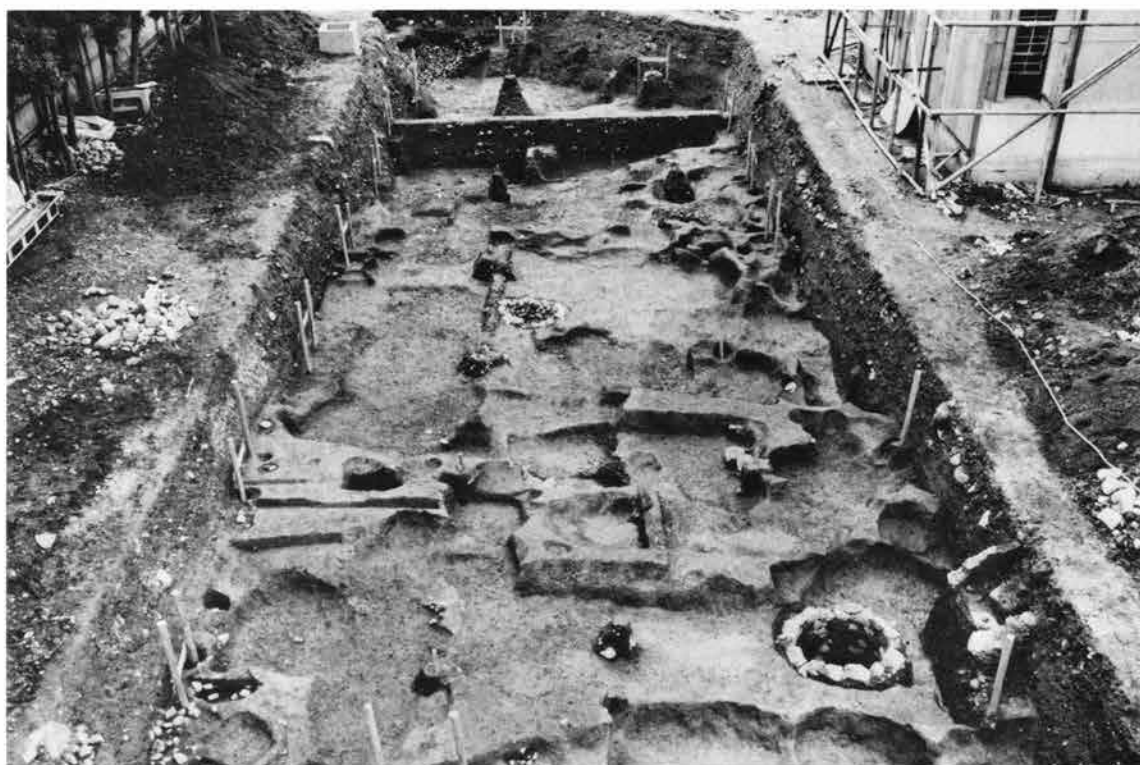
(1) 第2トレンチ調査前風景 (西から)



(2) 第1トレンチ遺構検出状況 (南から)



(1) 第2トレンチ遺構検出状況(西から)



(2) 第3トレンチ遺構検出状況(西から)



(1) 第4トレンチ遺構検出状況(南から)



(2) 第4トレンチ発掘状況(南東から)



(1) S D35検出状況 (南から)



(2) S K169検出状況 (南から)



(1) S E 45下層検出状況（北から）



(2) S E 45曲物検出状況（北から）



(1) 第2トレンチ最終面検出状況(西から)



(2) 第2トレンチ西南部検出状況(東から)



(1) S X 835検出状況（西から）



(2) S X 835遺物出土状況（西から）



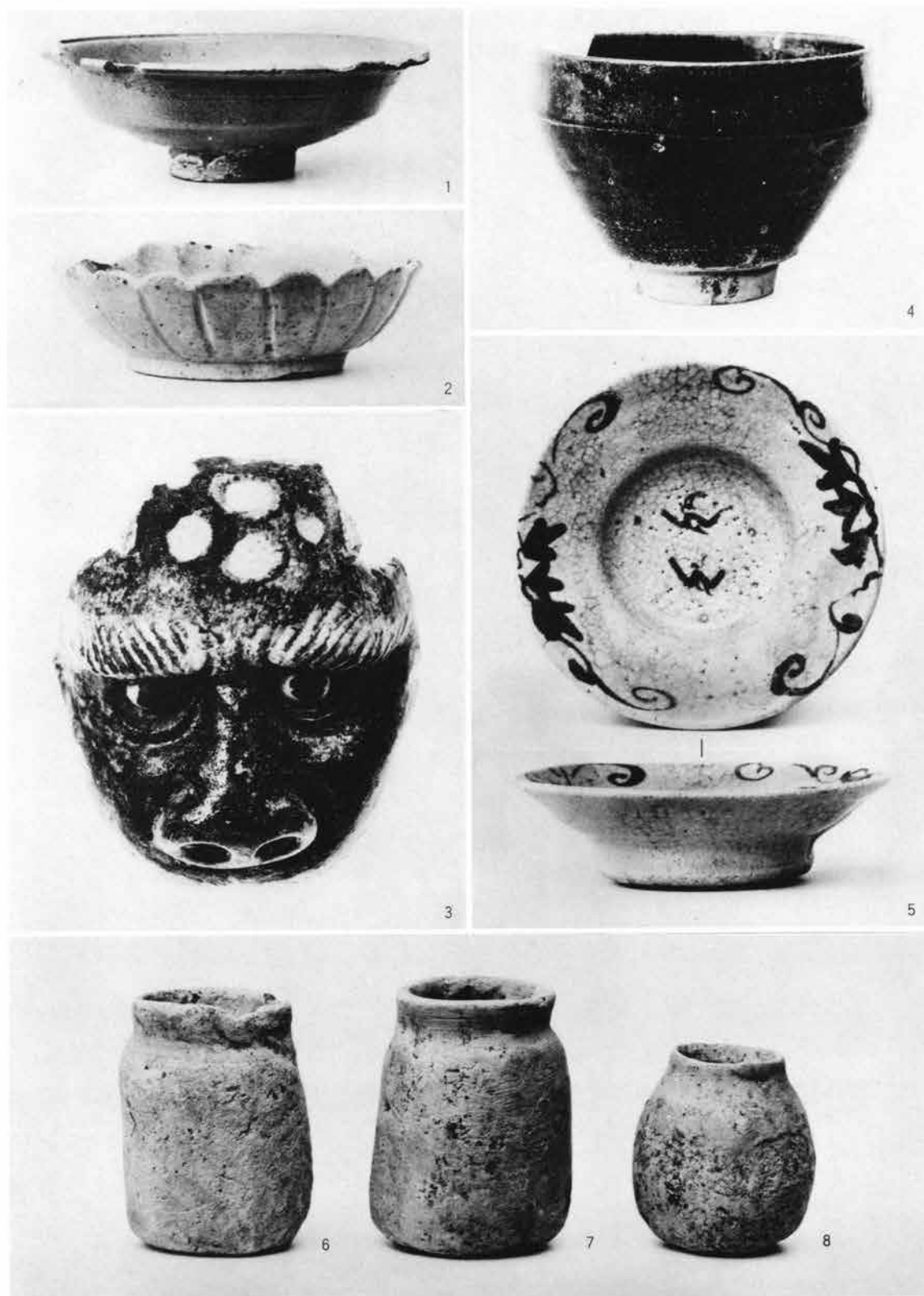
(1) S K 456検出状況 (南から)



(2) S K 503検出状況 (南から)



出土遺物(1) 1. S K168須惠器壺, 2. S E45緑釉陶器碗, 3. S E45軒丸瓦,
4. S K300唐津壺, 5. S K02美濃・瀬戸鬘壺, 6. 包含層金箔軒平瓦



出土遺物(2) 1. S K 300唐津皿, 2. S K 475志野菊皿, 3. S K 502鬼面, 4. S E 95美濃・瀬戸天目茶碗,
5. S K 303志野皿, 6. S K 502焼塩壺, 7. S E 81焼塩壺, 8. 包含層焼塩壺

京都府遺跡調査概報 第27冊

昭和63年3月25日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
☎ (075)933-3877

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
☎ (075)441-3155 (代)